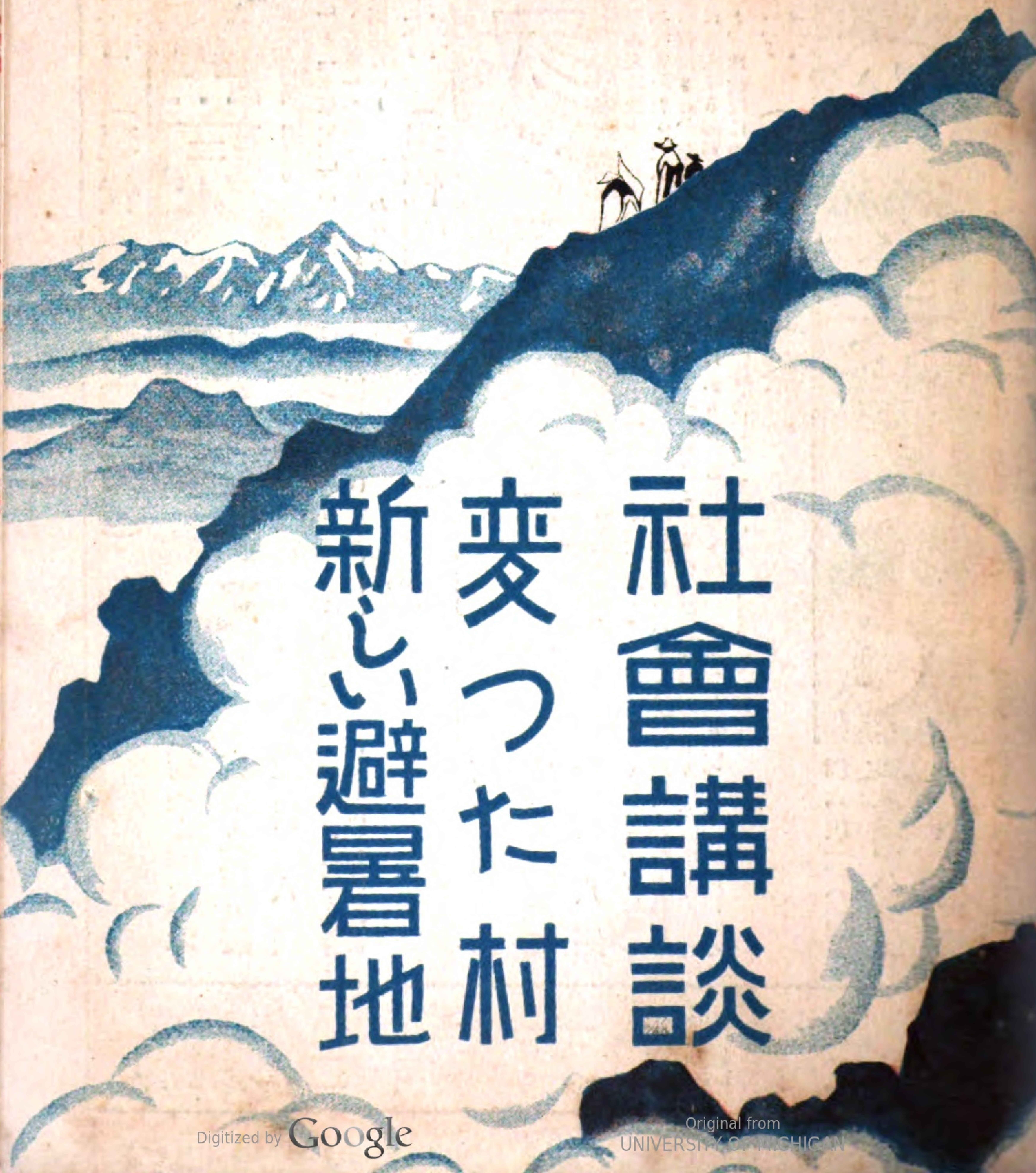
# 改造

## 夏期臨時號



◆秋田雨雀著（現代劇叢書第一編）

## 戯曲 國境の夜

最近の創作戯曲「國境の夜」と「水車小屋」の二篇に初期の創作で、今まで自分の手に入らなかつた「盲兒の幻想と自分のたつた一つの「喜劇胯落王と火事」を添へたものである。この最後の喜劇は作者の自分が校正してゐて吹出したほどだから、よつぽど可笑しいものに相違ないと思つてゐる。……………著者

菊半截美本　定價九拾五錢　送料八錢

◆長與善郎著（現代劇叢書第二編）

## 戯曲 畫家とその弟子

自分は此作を再び世に出す事を足助氏が思ひ立つてくれた事を今では大に喜ぶ者である。且ついやく乍ら自分で校正を見る事を餘儀なくされた事を幸であつたと思ふ者である。なぜなら足助氏が出版を思ひ立つてくれたおかげで此葬られむとしてゐた想ひ出深き愛作を世に復活させ、更に思ひきつた修正を加へた事によつて全前とは別物のやうな生れ變つた新面目に於て此作を自分の全集中に加入する事が出來るやうになつたからである。全く拾ひ物であつたと思つてゐるなほ舊作を後から直す事についての感想と、此改版についての詳しい所感を序文に加へておいた。……………著者

菊半截美本　定價九拾五錢　送料八錢

◆山村暮鳥著（恩地孝氏裝）

## 詩集 梢の巣にて

現實悲痛の谿底で、自分はこれらの詩をかいた。これらの一字一句はすべてどろどろの血みどろの中からでてきた。人間寄生の赤裸々なる！　こゝまでくるには實に一朝一夕のことではなかつた。……………著者

四六版二六四頁　定價壹圓八拾錢　送料拾錢

東京牛込神樂町二　叢文閣　振替東京四二八八九


東洋の製品にして世界的レコードを作れる
サンエス萬年筆を
東京市　細沼株式會社　栗咲町



# 改造夏期臨時號目次



## 變つた村



## 新らしい避暑地



大近松の時代浄瑠璃傑作選集出づ!!

最新刊

# 近松傑作時代浄瑠璃集成

(小林榮子女史校訂)

近松逝いて既に二百餘年世に其の天才を讃嘆する者益々多きを加ふるは偶然にあらず就中其の時代浄瑠璃は趣向の雄大なる描寫の鮮麗なる文章の雅健なる後世作者の到底企て及ばざる所なり。

今其中に於て殊に傑作と稱すべきものを精選し用語には一々適當なる漢字を宛て故事には一々正確なる考證を加へ曩に世話浄瑠璃の校訂に費したるに數倍するの精力を傾けて本書を成せり。

苟くも近松の眞面目を知らんとする人は必ず一本を手にせざるべからず。

内容目次

出世景清　吉野都女楠　百日曾我　日本振袖始

百合若大臣野守鏡　信州川中島合戰　平家女護島　釋迦如來誕生會

嫗山姥　曾我會稽山　國姓爺合戰　本朝三國誌

雪女五枚羽子板　最明寺殿百人上﨟　雙生隅田川　傾城酒呑童子

室町千疊敷　傾城反魂香　孕常盤　關八州繫馬

四六版上製 美本全壹冊 箱入壹千三百頁

正價金五圓五拾錢 送料廿四錢

東京市神田表神保町七番地 大同館 振替貯金東京八七貳番

中村古峽著●變態心理の研究　六版　貳圓五拾錢 送料十二錢

里見岸雄著●人間としての日蓮聖人　三版　正價金貳圓 送料十二錢

稻毛詛風著●思想の力　再版　貳圓八拾錢 送料十二錢

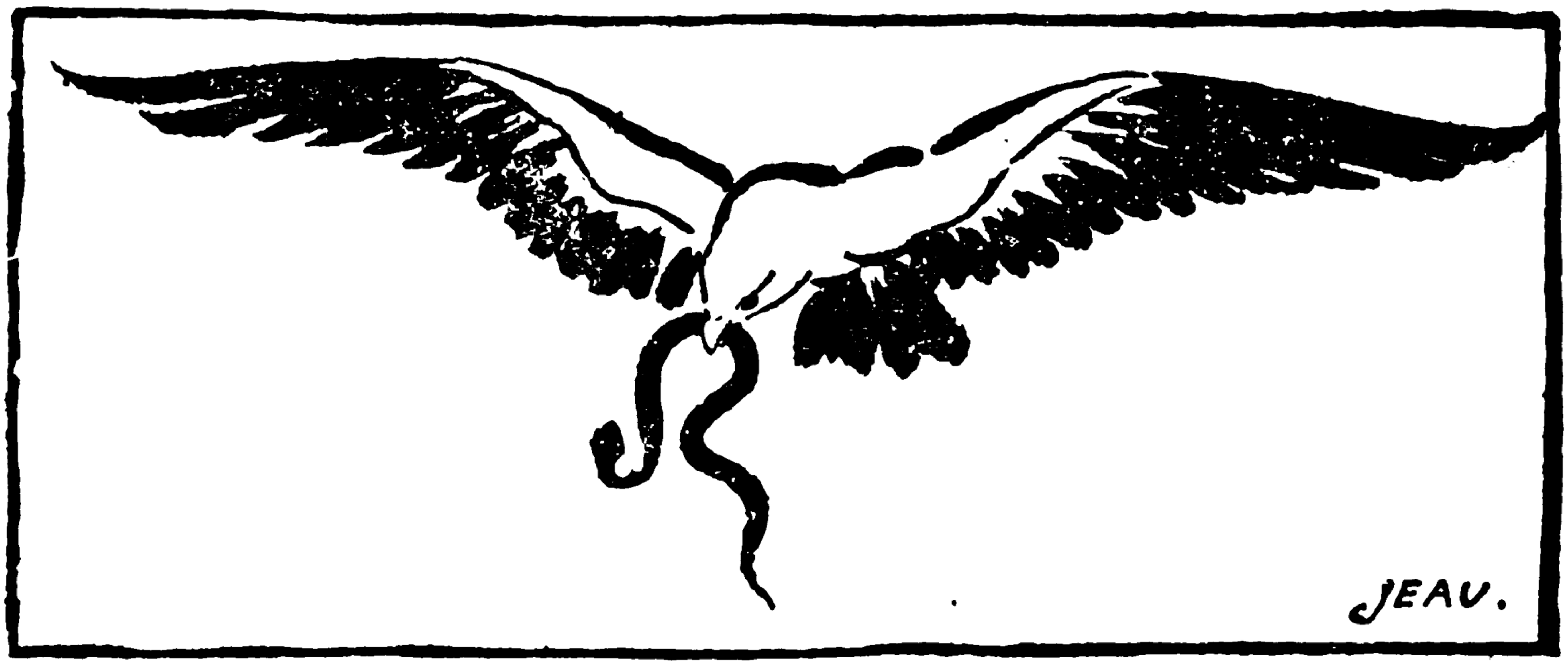
本間久雄著●現代思潮及文學　再版　貳圓參拾錢 送料十二錢

鈴木周作譯●ペルリ提督日本遠征記　五版　正價金貳圓 送料十二錢

鈴木善太郎●小說暗示　新刊　貳圓五拾錢 送料十二錢

今井政吉著●露西亞文明記　三版　貳圓五拾錢 送料十二錢

高森良人著●滿鮮支那旅行印象　新刊　壹圓五十錢 送料十二錢




## ((改造夏期增刊號))

# 「佛法僧鳥」を聴いて

大深林の奥へ——大雪山の頂きへ——これが眞夏の憧憬である。

或る夏の夜のことである、予は高野五千尺の峯頂で、此山での——佛教の山としての——名鳥であり、靈鳥と稱せらるる「佛法僧鳥」の聲を耳にしたことがある、ちやうど臥待の月が大森林の樹梢に利鎌のやうに冷く光り、さしもに廣き境域にすこしの風もなく、何一つの聲もない、このとき金鈴のやうに錆のない啼聲が地上に投げられた、けだかい聲であつた、玉音さらに濁聲を交へない、全く地上の音符にはない天上の麗聲であつた。——その時の美を慕ふ我心の囁き——高雅へと歸る我が血潮——敬虔なる心の芽生え——植物性によつて淨化されたる一鳥の心も聲も自然そのままなる——その夜は前後にない嚴肅な感じを味はつた、全く當時をふりかへれば一切の俗念が悉く拭ゐ去られるやうである。

俗閙を離れて大深林へ——穢汚なる動物性の巷から解放されて植物性へ——ダラシない街から威嚴ある大雪山へ——これが人間の淸めらるべき容易なる道順であり、趣味ある理想生活であり、生命の永遠に保持さるべき最大醫料である。眞に下等なる動物慾は植物性の交錯によりて玉淨化さるるものである。

人間の誰にも均しく開かれつゝあるこの自然の仙寶を無産階級の人々にも均しく味はせることが天地の心であり、我等の使命である。（S）


阿寒湖より
雌阿寒岳
を望む
白穂

## ◆◆◆變つた村◆◆◆



◆　◆　◆

# 所謂「私共の理想郷」

法學博士　吉野作造



○好いことをやつて悪ざまにいわれることには慣れて居るが、下らないことをやつて結構なことをやつて居るように云れるのは、今度がはじめてである。伊豆の畑毛に私の發起で理想鄕を拓くと云ふ、クスグツタイ風說は卽ち之れである。尤も全然嘘ではない、理想鄕と云ふほどのものになるか、ならぬか、兎に角一つ變つた、氣持のいゝ遊び場を造ろうとして、一生懸命になつて居ることは、事實である。

○先づ、畑毛の地理に就いて語る。東京から汽車に乘つて西の方へ三四時間、三島驛で駿豆鐵道に乘換へ、二つ目の大場驛でおりて、更に馬車若くは人力車で二十分ばかり左へ入つて、畑毛溫泉がある、熱海線が開通になると、隧道を出てすぐ停車場が建つと云ふ話だが、さうなると其處から十五町の距離になるだろうと思はる。だから數多い伊豆の溫泉の中で、此處が一番東京に近い。西北に富士が見えるが、此の靈山の眺めとして、おそらく畑毛ほどの景色はなからう。而已ならず、背には老松參差たる石山を控え、右手には箱根二子山、左には韮山を控えて、遠近それぞれ快活な氣分の眺めに富んで居る。賴朝時代の名所舊蹟が附近に散在して居ることは云ふまでもない。地形は大體に於て南に開け、三方或は遠く或は近く、山に圍まれて居るので、冬の暖いことは格別だ。斯う云ふ點から云つても、此の土地ほどいゝ條件の備つた處は、稀れだと自信して居る。

○此地に溫泉宿が五六軒ある。言傳へによれば、七百年このかたの古い溫泉場ださうだ。湯は透明で非常に綺麗であるが、何分微溫で夏分でもウツカリすると風をひきさうだ。元來が溫まるかちの湯だと云ふことであるが、それであまり微湯なので、ゝと云ふ間違つた言傳があつたので、不潔な客が多いだろうな之れが久しく顧みられなかつた原因である。それに皮膚病にど云ふ想像も傳つたのだろう。事實客はかなり多いが、その割に一般に知られない。吾々の仲間の一人たる木下醫學博士の鑑定によれば、皮膚病に特効のあると云ふ性質は毛頭ないとの

ことだ。兎に角、從來は温泉場として余り認められて居らず、又現在の温泉場は小山の影で富士の景色をさえぎつた處にあるので、一寸行つただけでは、全體の風景がいゝと云ふことはわからぬ、こんな處から不思議に此の土地は、世間の人から見殘されてあつたのである。

○それが計らずも私達が行つて色々研究することになつて、湯も熱いのが出ると云ふ確信を得た、それに就ひては片山理學士平林工學博士の詳細なる研究を煩はした。そこで現今已に出來上つたのが二本ある、何れも立派な温泉で、然も分量は極めて豐富である、目下第三本目を掘つて居るが、吾々の團體の發展に連れて、更にも少し掘るかも知れない。

○私共の、此の土地に、着眼したのは一昨年の暮れであつたが　始めはほんの數名の人と、本を讀みに行く處を造ると云ふに過ぎなかつたのだから、何も隱す譯ではないがコツソリやつて居た、それがだん／＼人の知るところとなり、理想郷を造るなどゝ云ひふらされ、理想郷と言へば直ちに武者小路君などの新らしい村が聯想され、又對照され如何なる理想で此の村を經營するかと云ふ質問を受けるやうになつた。期くして二三度新聞に書かれたこと等もある、そのうちに吾々の仲間はだん／＼ふえて、此頃では可成り大きな村になつた。「國本」と云ふ雜誌の六月號には可成り詳細な紹介があつたので、世間の注目をひくようになつた。「國本」の紹介は、部分的に誤りもあるが、大體に於てよく書いて下つたことを感謝する。斯ふして、兎に角、世間の問題となつた以上は、本來何も內證にすべき事柄でもないから、進んで吾々の方から計劃を明らかにした方が適當であり、且つ同樣な計劃をなさる方々の參考にもなるかと思ひ雜誌「改造」の請ふまゝに玆に一文を草することになつた。

○先に陳べたる如く、始めの起りは、極く規模は小さかつたのである實は、友人の大村和吉郎氏が、私の日常生活が余りにせわしさうなのを心配されて、何處か靜かな保養場を造つてやらうと云ふ厚意から起つた話である、同君の郷里大場は、畑毛の入口であるから、自然畑毛のことは同君はよく知つて居たのである、富士のよく見える畑地の賣物がある、故老の話によると、そを掘ると湯が出ると云ふから、買つて別莊をたてないかと云ふ相談であつた。單獨で買ふ力はないが、二三の友人を誘つてだん／＼見に行くと云ふことになつたのが、話のはじめだ。折角の、友人の厚意に對して、實は初め乘氣にならず二三ケ月グズ／＼して過した。少し眞面目に考え出したのは三月頃からである。四月には數名の友人を誘つて實地檢分に行つたが、其の時友人は既に吾々の着眼して居る畑地の外に、この方面の高峯の

一帶が實に絶勝の地だと云ふことを教えてくれた。そこでそれを買ふには少し仲間をつくる必要があるので、段々に規模を大にする計劃を進めた。

○其際はからずも、河合武雄君との交渉が始まつた。「國本」には、河合武雄君と僕等との交渉が、大村君の奥さんによつて出來たと書いてあるが、あれは全然誤まりである、河合君は兼々別莊地を探して居たので、吾々の計劃を私の舊學友眞山青果君から聞いて、仲間に入れてくれと云ふ話が起つた。俳優としての河合君の立場のことは、吾々玆に論ずる限りではないが、個人としては誠に話のわかつた人で、吾々の別莊經營の理想と云ひませうか、又、抱負とでも云ひませうか、それを非常によく了解して與れたので、私共は悦んで同君を友人として迎ゆることにしたのである。

○そのうちに、別莊を持つには番人がいるとか、番人をたゞおくより何か仕事をさした方がよいとか、又折角別莊が開けても在來のよりは、少し體裁(テイサイ)のいゝ宿屋も必要だと云ふ處から、だんだん話が進んで、河合君の親戚に多少さうした經驗のあるものが居ると云ふので、その人に上品な氣持の好い旅館をやらせようと云ふことになつたのである。之れが、河合君が旅館を經營すると云ふ話のもとである。河合君の旅館經營の結果が、入來の旅館の營業を壓迫するといふ非難があるが、之れは在來の車屋サン連の生業を奪ふおそれがあるから、汽車や電車の開通に反對するのと同じ論法だろうと思ふ。私共の考えでは、それ〴〵の計劃が、愈々實現して、あの狹い土地に百軒足らずの別莊でも出來れば、宿屋が今の倍あつても足りなかろうと思ふ。

○斯くして、段々規模が大きくなり、吾々の仲間に加はる數も增えた。さうなると吾々は普通の別莊地に有り勝ちな弊風の起らない樣にと云ふ處から、色々の考えを廻らすやうになつた。そこで一つ理想的のものをつくろう、それには第一人を選ばなければならない、又吾々の造つて居る別莊の近所に異分子が入つては困ると云ふ處から、其邊の別莊地として適當な全地域を買占めようと云ふ計劃を立てた。併し買占めるには金がない、素寒貧の吾々のやる仕事であから、まとまつた金を整えて先づ以つて地面を買占ると云ふことは出來ぬ、されぱと云つて、只だ金を出す人なら誰れでも歡迎すると云ふ譯にはいかぬ、現に金持で加入を申込まれた方に、此方から辭退した人も少なくはない、斯く一方では人を選擇して居るものであるから、それが金の調達に困る、此の際吾々の仕事を此の方面で大いに助けたのは、河合武雄君と、木下正中博士、今村繁三君である。此間志

立鐵次郎氏の直接間接の援助も忘るゝことは出來ない。

○之等諸君の厚意によつて得た金を基金にし、大略吾々の着眼した地面全體の買收を着々完成した、色々の非難と惡評を甘じて受け乍ら、一年以上も專ら此の事に當つたのは大村君である。大村君の意を諒としてその持地を提供してくれた村民諸君の非常の厚意も、又私共の大いに感謝する處である。地面は一且皆な私が買取つたことにしてある。仲間になつた諸君が大金を私に預けられ、長い間全部の土地所有名義を私にさしておかれた、その信用に對しても感激せずには居られない、昨今段々それぞれ所有者名義に書換えつつあるが、未だ大部分は私の名義になつて居る。全部買占め終る爲めに、別莊團に關係のない數名の友人から、多額の負債もした、只だ一片の證文に對して、數萬の金を立替えて呉れた隱れた數名の友人の厚意も、又此の仕事の成就の上に、非常な貢獻をして居るのである。

○此の別莊地は、單に風景のよいばかりでなく、溫泉があると云ふのが一つの欠くべからざる要素になつて居る、吾々は土地の買收に着手すると同時に、溫泉の掘鑿(サク)に從事した。始めて着手したのは去年の三月で、之が爲めに、大村君は萬余の金を徒費せられたことだらうと思ふ、去年の秋更に方針をかへてやつたのがうまく當つて、現在二本の溫泉を有するに至つたのである、之から掘る分についても深く確心する處があるので、溫泉の問題は先づ解決されたものと見てよい。其處で去年の暮、今年の初から、愈々確實なる溫泉地として公表することが出來たのである、之れと同時に高井治衞、德川興平の兩君が、吾々の仲間に加入され、且つ非常な熱心を以つて吾々の仕事を助けられるので、昨今は事が誠に順潮に進んで居る。

○全體の地面は約二萬坪もある、此處に別莊を持うふと云ふ仲間は、約五十人ある、はじめは所有名義は私で、專ら經營の衝に當るものは大村君であつたが、――尤もその影に主となつて助けてくれる人は澤山あつた、――愈々五十人も仲間が增えたと云ふことになれば、皆の考えをよくまとめて、氣持のいゝ別莊を造りたいと云ふ考えなのである、皆と共に計劃したいと云ふ當初からの考えであつたから、加入者の申込に對しても可成り嚴重な撰擇をした、斯くして各々の意見を聞いた結果、色々細(コマ)い點に就いての希望はあるが、要するに全體共同の力で、別莊地を經營しようと云ふことになつた。

○其處で只今、ほぼ纏つて居る點は、此處に別莊地を持つ人、又之れから持うと云ふ人を總て網羅して、一つの社團法人を造ると云ふことである。此の法人が協力して道路を造り、下水、水道の設備をなし、又溫泉の配給をもやらうと云ふのである、

溫泉の掘鑿には可成り金がかゝつたが、出來たものは又大した財產である、團員で使用して余りあれば他に資ることも出來る、之等の利益は、皆な團員全體のものにしようと云ふのだ。凡ての財產は此の社團法人のものであり、又此の社團法人が、將來電燈も經營したり、或は小病院も造つたり、又倶樂部や庭球場その他遊園地をも造る考へである。差し當り共同浴場は目下建築中だ、追ては之れにレストランを附設し、二三の寢室をつけ加え、吾々が單身で行く時は、此處で寢食することが出來る樣にしようと云ふ考えだ。

○しかし、之等の仕事には可成り大金がかゝり、僅かに凡ての人が出資をすると云ふことも出來ない、當分數名の有志が全體の利益の爲めに之等の經營に當つて居る。溫泉については、十名ばかりの有志から成る溫泉掘鑿組合が之れをやつて居り、道路其の他の經營に就ては、之れも十數名の有志よりなる別莊團組合がその衝に當つて居る、斯ふして之等の組合が、早晩全體を網羅する法人の出來上ると共に自から解散して、一切を之れに引繼ぐことになつて居る。

○別莊地をどう經營するかと云ふことに就ては、色々議論がある、建物の樣式につき、めいめいの宅地の區劃につき、又交通機關のことや、生活品供給の方法について色々な注文もある、皆通の別莊にありがちな奢侈淫卑の風を嚴禁すること、快活な上品な氣分を滿たさしむること、全體が公園である樣な趣きを生せしむること、等種々の案がある、私が發起人の一人だと云ふ處から、プロレタリア的のケチな別莊だらうと想像されては訣りである。私は、私自身は貧乏人だが、仲間には金持が多いので、世間から見たら「國本」記者が評されたように、道樂半分の平民主義になるだろう私の平民主義は、今日實際の世の中での最低の生活まで、凡ての人の生活を下げると云ふのではなく、凡そ之れからの人間は、人間らしい生活としては此の位の程度であつて欲しいと云ふ處に、標準を置かふと云ふのだ。無用の贅澤は斷じて許されないが、溫泉場に別莊を持つて氣持よく一日を過さうと云ふことは、少なくも吾々の理想する將來の社會に於て、凡ての人に許さるべき最低の生活だらうと思はれる。今日の社會から見ては閑人の贅澤の樣に見えるだらう。が、吾々は一つ畑毛に行つて人間らしい生活をして見ようと云ふのである、此の點に於いて吾々の仲間になつて居る人々は皆な同じ感想を持つ。

○吾々の別莊地域は二つの村に跨つて居る、即ち函南村と韮山村とである、字でいえば函南村の畑毛と韮山村の奈古屋とに跨つて居るのである、別莊地の大半は奈古屋にある。溫泉は奈

古屋にもある、しかし畑の方が主である、が從來畑毛溫泉として知られて居るから、私共の掘つた方は畑毛新溫泉と云つて居る、新と云ふ字をつけたのは、從來の樣に微溫い湯でないと云ふことを表示するためである、別莊地の大部分は、奈古屋の方にある處から、吾々の組合は特に韮山別莊團と稱することにして居る。現在の畑毛溫泉は、在來の湯では營業を榮えしめて行くことが困難であらう、吾々は何等か便宜の方法を設けて、之等の人々の將來の計劃をも、助けて行く考へを持つてをる。

○全體の總面積約二萬坪のうち、一萬二三千坪は已に賣約濟みとなり、殘りの地面は之れを別莊團組合に引繼ぎ、別莊團組合は之れを時價に賣却してその利益を、道路共の他の費用の一部に當てるつもりだ、道路は幹線を四間幅に、支線を二間幅とし、當分の間は重い車は入れないことにしようと申合せて居る。之等のことは最近やつときまつたので、別莊建築は之れからのことだ、今建てつゝあるのは、河合君の親戚の人が、別莊團援助の下に經營せんとする旅館と、共同浴場丈だ、共に七月の半ば過ぎには落成するだらう。秋にはかなり別莊も出來る筈である。

○仲間のうちには、いろ／＼の專門家が居る、めい／＼分擔して計劃を立てる考へである、衛生上の事には木下正中博士と其令弟木下藤作博士之に當り、建築のことは佐藤成一博士、機械のことについては畠山一淸學士、溫泉のことに就ては前に擧げた平林博士片山理學士が骨折られつゝある、實際の色々の經營の事務は、木下正中博士、高井治平、德田與平兩氏と、私とが取扱つて居るが、實地につひては最も多く働ひて居るのは大村君である。

○最後に一言したいのは、土地の賣買によつて生ずる利益金の處分問題である、湯が出て、場所がよいので、土地の値はドン／＼上つて行く、買つた値段はさう高くはない。その間生ずる之等の利益は、別莊團全體の利益に歸するのである、其の以前の利益金は表向き名義上の所有者たる私の處得に歸する。之等は過去の一切の損失及び賣地經營者の此の仕事の爲めに要した實費、隱れたる出資者に對する謝禮等を拂つて尚ほ余りあるものは、一部を當初からの關係者に分配し、他の一部は何等かの方法で公共の事業に使用したいのだ、金錢上の問題に就ひては、最近組合に引繼くまでは凡ての責任を私一人で背負つて居る。

○右の樣な次第で、大體の輪廓はきまつて居るけれども、愈々どんなものが出來上るかは今の處はつきり明言しがたい。只だ

めい〳〵皆な氣持のいゝ上等な、快活な保養場を造ろふと云ふ點には、一致して居るのであるから、多少贅澤の非難は免れまいが、一寸變つた一つの村が出來たことは疑を入れる余地がない、私共の抱負としては此處一につの模範的のものをつくり、一つには之れまでの別莊地にありふれた弊風を革正し、又一つには之れから新らたにつくる別莊地に一つの雛形を與えようと云ふことを、ひそかに考えて居るのである。之れが爲めには、物質的にもいろ〳〵新らしい設備を充分に利用するつもりであるが精神的にも、大いに緊張した氣分で眞面目に研究し相談し會つて行かふと考えて居る、

〇要するに道樂半分の仕事と見ゆるであらう、けれどもやつて居る吾々は至つて眞面目で、至つたて眞劍である。少しも遊蕩氣分を持つて居るものゝないことを明に斷言することが出來るのである。





# 哲人村としての信州神川

土田杏村

## 1、序記

夏になつた。人はそろ〳〵夏期の旅行やら避暑の事やらを考へて動き出すだらう。私にさうした要求が無いでは無い。自分の健康を顧慮すれば、人一倍私は其の必要を感じて居る時だ。併したゞ無意義に旅行し、避暑して其れが何の愉快であらう。都會文明の墮落に沈み切つて居る人達は、かうした機會に田舍へ動いて行つて、田舍の健全な、又謙遜な、地方主義個性主義の空氣の洗禮を受けて來るがよい。そして我々現代人の痼疾となつた中央集權主義官僚主義の病氣の中から逃れ出るがよい。單なる避暑は自分に取つて全く無意義の事だ。さうした閑暇があるなら、私は一日でもよいから、私の愛する新しい村の青年の處で、お互ひに其の後の仕事の出來ばえでも語り合ひたいものだ。

私が今紹介しようとする長野縣小縣郡神川村大字國分は、今更ら私が紹介しないでもよい位に社會に有名になつて居る。といふのは、洋畫家山本鼎氏の熱心に主張し、又實行して居られる農民美術と自由畫と、何れも現代文明の批判として意味深い運動は、實に此の小さい一つの村を中心にして起り出したものだからである。昨年春の事であつた。私は當時著しく自分の健康を害し、讀書も何もかもすつかり禁ぜられて了つて、明石の海岸に轉住し、病蓐中の人となつて居た。或る日私のところへ山越脩藏といふ未知の青年から手紙が參り、其れによると普通選擧運動の爲めに私に郡内の數個所で演説をさせようと思ふから、即刻出て來ないかといふ事である。其の郵便の出所を見る

と小縣郡神川村とある。私はどうしても此れは何處かで聞いた村に相違無いと思つたが、どうしても其れを思ひ出せなかつた。此の時は今言つた樣な事情から、私はとても選擧運動になど行く事は出來なかつたが、其の秋の事、再び同氏から手紙が來て、一週間許り村の青年の爲に哲學の講義をしないかといふ勸誘である。村の青年が哲學を聞く。此れにも私は大いに驚かされた。併し其の頃は私も京都へ歸つて居たし、かう熱心に勸められるとお了ひにはどうも斷り切れない自分の性格から、とう／＼承諾する事にし、北越線廻りで上田へ向け出發する事になつた。驛へ着くと神川村の青年會を率ゐて居られる小學校長さんの外に、金井正、山越脩藏の二君が待つて居てくれた。神川村の事を語る時に此の二君の名を忘れてはならない。村はすべての新らしい施設は兩君の手によつて築き上げられたのである。兩君共に村での資産家の息子さんであるが、金井君は父君がなくなつてから、今では一家の主人であり、年輩も山越君よりはずつと進んで居る。此の二君とも哲學に就て非常に熱心の研究者であつて、金井君の熱心さとなると、長野縣内何處でも評判ものである。其のライブラリイは、自分だけで獨り讀みして居るのは勿體無いからと言ふので、讀破したものはそつくり村の小學校へ持ち出されて居るが、（山越君もさうして居る。）其の分量は實に堂々たるものである。以前に自費出版せられた心身相關に關する哲學論文など見上げた見識を示して居られる。政界へでも出て居たなら、今頃乾度縣會議員や代議士になつて居るに相違無い、近郷の人望を博して居るけれども、何處までも新らしい精神的の途を進んで居るのは賴もしい。山越君は金井君に兄事し、仕事は何でも兩君共に提携して遣り、其の交情は傍の見る目も美しい。やはり此の兩君が揃はなければ仕事は彼れ程に進んで行かないのである。

かうして私は始めて神川村を知つた。其の後今年の春も講演に行き、なほ此の秋も行く事になつて居るが、何時行つても實に氣持ちのよい村だ。先づ村の大略の事を書くならば、其の位置は信越線の上田驛と大屋驛との丁度中間ほどの處に當る。大屋驛は實は神川村の中に屬するのゝさうであるけれども、農民美術の施設のある大字國分は、何方の驛から行つても驛からは

一里許りある。汽車は丁度此の國分の高塚の下を通り、下には千曲川の流れがある。私は講義の無い時間には此の千曲川の川端へ獨りで下りて行つて、詩を考へたりして居た。私の敬愛して止まぬ島崎藤村氏の小品にもある通り、すばらしく自然の美しい處である。

神川村は全部で十部落から成立し、可成りに大きい村である。各區からは一名或は二名の村會議員を選出して村の自治機關を構成するが、此れは頭の古い連中で何の經綸も無い。村の改造はすべて青年達の手に爲されるのである。人口三千五百餘。(此の中國分區は戶數五四戶、人口二八三)此の近傍は長野縣でも蠶卵紙の本場であつて、金井、山越二君ともに家では熱心に養蠶をやり、今では兩君合同で蠶卵紙の合名會社を組織して居る。

## 2、農民美術

農民美術とはどんなものかといふに、第二回製作品展覽會に際しての報告書を見ると、次の様に書いてある。

此處に、彩畫した菓子鉢、若くは彫刻を施した本箱があるとします、農民によつて、木材から一定の刳り物や指物にされた其物は農民手工品でありまして、吾々はそれらの個物を指して素材と申して居ります。處で其素材を受取つてそれに適應した圖案を作り、更に描いたり彫つたりして裝飾化されたものが即ち農民美術なのであります。

神川村の近傍は、前申した如き養蠶地であるから、四月から九月にかけては非常の繁忙さを呈する。併し其の後の時期は所謂農閑時であつて、從來はたゞ無意味に費され、又は空費されて居た。此の農閑時を利用して「趣味と利得の無理なく結びつく工藝美術品の製作に充てしめ、漸次日本全國の農民諸君の手中に、彼の有名な Peasant art in Russia よりも質、量、共に優れた產業美術の一大種族を拓殖しよう」と言ふのが、抑も農民美術の建業の目的なのである。

此の事業の計畫を始めたのは言ふまでもなく山本鼎氏であつて、其れには片上伸氏も與る處が多かつた。而して始終山本氏を助けて現在の如き作品を製作し出すまでに成らせたのは、敎師側では山崎省三、村山桂次、(槐多氏の弟)杉村鼎介、柴田頑子の四君、青年側では金井、山越の二君などの犧牲的努力と(全

と小縣郡神川村とある。私はどうしても此れは何處かで聞いた村に相違無いと思つたが、どうしても其れを思ひ出せなかつた。此の時は今言つた樣な事情から、私はとても選擧運動になど行く事は出來なかつたが、其の秋の事、再び同氏から手紙が來て、一週間許り村の青年の爲に哲學の講義をしないかといふ勸誘である。村の青年が哲學を聞く。此れにも私は大いに驚かされた。併し其の頃は私も京都へ歸つて居たし、かう熱心に勸められるとお了ひにはどうも斷り切れない自分の性格から、とう〳〵承諾する事にし、北越線廻りで上田へ向け出發する事になつた。驛へ着くと神川村の青年會を率ゐて居られる小學校長さんの外に、金井正、山越脩藏の二君が待つて居てくれた。神川村の事を語る時に此の二君の名を忘れてはならない。實はすべての新らしい施設は兩君の手によつて築き上げられたのである。兩君共に村での資產家の息子さんであるが、金井君は父君がなくなつてから、今では一家の主人であり、年齢も山越君よりはずつと進んで居る。此の二君とも哲學に就て非常に熱心の研究者であつて、金井君の熱心さとなると、長野縣内何處でも評判ものである。其のライブラリイは、自分だけで獨り讀みして居るのは勿體無いからと言ふので、讀破したものはそつくり村の小學校へ持ち出されて居るが、(山越君もさうして居る。)其の分量は實に堂々たるものである。以前に自費出版せられた心身相關に關する哲學論文など見上げた見識を示して居られる。政界へでも出て居たなら、今頃乾度縣會議員や代議士になつて居るに相違無い、近郷の人望を博して居るけれども、何處までも新らしい精神的の途を進んで居るのは賴もしい。山越君は金井君に兄事し、仕事は何でも兩君共に提携して遣り、其の交情は傍の見る目も美しい。やはり此の兩君が揃はなければ仕事は彼れ程に進んで行かないのである。

かうして私は始めて神川村を知つた。其の後今年の春も講演に行き、なほ此の秋も行く事になつて居るが、何時行つても實に氣持ちのよい村だ。先づ村の大略の事を書くならば、其の位置は信越線の上田驛と大屋驛との丁度中間ほどの處に當る。大屋驛は實は神川村の中に屬するのゝさうであるけれども、農民美術の施設のある大字國分は、何方の驛から行つても驛からは

一里許りある。汽車は丁度此の國分の高臺の下を通り、下には千曲川の流れがある。私は講義の無い時間には此の千曲川の川端へ獨りで下りて行つて、詩を考へたりして居た。私の敬愛して止まぬ島崎藤村氏の小品にもある通り、すばらしく自然の美しい處である。

神川村は全部で十部落から成立し、可成りに大きい村である。各區からは一名或は二名の村會議員を選出して村の自治機關を構成するが、此れは頭の古い連中で何の經綸も無い。村の改造はすべて靑年達の手に爲されるのである。人口三千五百餘。（此の中國分區は戸數五四戸、人口二八三）此の近傍は長野縣でも蠶卵紙の本場であつて、金井、山越二君ともに家では熱心に養蠶をやり、今では兩君合同で蠶卵紙の合名會社を組織して居る。

## 2、農民美術

農民美術とはどんなものかといふに、第二回製作品展覽會に際しての報告書を見ると、次の樣に書いてある。

此處に、彩畫した菓子鉢、若くは彫刻を施した本箱があるとします、農民によつて、木材から一定の創り物や指物にされた其物は農民手工品でありまして、吾々はそれらの創物を指して資材と申して居ります。此處で其の資材を受取つてそれに適應した圖案を作り、更に描いたり彫つたりして裝飾化されたものが即ち農民美術なのであります。

神川村の近傍は、前申した如き養蠶地であるから、四月から九月にかけては非常の繁忙さを呈する。併し其の後の時期は所謂農閑時であつて、從來はたゞ無意味に費され、又は空費されて居た。此の農閑時を利用して「趣味と利得の無理なく結びつく工藝美術品の製作に充てしめ、漸次日本全國の農民諸君の手中に、彼の有名な Peasant art in Russia よりも質、量、共に優れた產業美術の一大種族を拓殖しよう」と言ふのが、抑も農民美術の建業の目的なのである。

此の事業の計畫を始めたのは言ふまでもなく山本鼎氏であつて、其れには片上伸氏も與る處が多かつた。而して始終山本氏を助けて現在の如き作品を製作し出すまでに成らせたのは、教師側では山崎省三、村山桂次、（槐多氏の弟）杉村鼎介、柴田貞子の四君、靑年側では金井・山越の

く此の言葉が山崎君等以下の諸氏に中つて居ると私は信ずる）練習所生の素朴なる熱心とが協力しての結果であると言はねばならない。

最初此の計畫が立てられて、露西亞の農民美術の標本を農民に見せた時には、誰れもかれも其の技巧の巧みさに驚て、とても此んなものは製作する事が出來ないと言ひ合つたさうである。然るに我々すべての人間の中に、伸ばせば何程でも伸びる無限の能力が潜んで居るといふのが山本氏の信念であるが、果して其の信念は練習所の作品の上に表現せられた。木つぱ人形の刀法を見たものなどは、今は却つて其の器用さの前途に一種の危險をさへも感ずるであらう。農民自身も今ではかうした立派な作品が自分の手に出來るといふ事の神秘に驚異を感じて居るのである。

愈々農民美術の練習所を開くといふ決心がついたのは大正八年の十一月十八日頃の事であつた。十月二五日には愈々開所の式が開かれ、郡役所、村役場、學校などの職員が參列し山本氏から練習生へ彫刻刀の授與などをやつた。此の時の練習生は男子部七名女子部十三名であつて、翌九年三月三十一日まで、正味百日許りの練習をやり、木皿、木鉢、角盆、煙草箱などいふものを作つたが、特に注目の價値あつたのは、白樺卷、木片人形といふ此地の地方色を持つて獨創的に生み出された二種の藝術品であつた。工作品は全部で一四四三點あり、此れを東京の三越へ持出し即賣會を開き約八割を賣つて金額五百餘圓に上つた。此の第一年度の練習所經費は總額四千五百圓に達し、全部今井君が犧牲的に負擔した。

練習所の第二年度は九年十二月五日開所、やはり十年三月三十一日終業、工作品合計一九四〇點、練習所生は男子部七名、女子部十一名であつた。此れは長野、東京、大阪の三個所で一般に展覽せられた。日本農民美術練習所の建築も愈々近々に建設せられるといふ事であつて、此の事業は我國の農村文化に將來は非常によい模範を示してくれる事であらうと信ずるのである。

### 3、兒童自由畫

兒童自由畫の趣旨はもうすつかり知れ亘つて居るから此處に

書くまい。併し我國での第一回の兒童自由畫展覽會はやはり此の神川村の神川小學校で開催せられた事を記して置かねばならぬ。此の計畫を進めたものは、やはり山本鼎氏金井山越の兩君であつて、大正九年四月廿七八兩日、前記三名岡崎校長、岡村郡視學、組合學校七校長の發起の下に盛大に開催せられたのである。當日は東京からは片上伸、岸邊福雄兩氏報知新聞記者谷好夫君などが出席して講演をせられたりした、

同年七月には有志協議の下に「日本兒童自由畫協會」が創立せられた。第二回展覽會は南信濃の龍丘小學校で開催せられ、龍丘小學校は爾來此の運動の最も熱心な鬪士になつた。

## 4、自由大學

神川村での經營の事を書いて居ると際限が無い。與へられた紙數がもう盡きさうだからあとはずつと端折つて書く事にする。

十年二月には小縣哲學會が創立せられた。此れは丁度私が同地へ講義に行つて居た時である。九年秋の講義は國分の國分寺で四日間開講せられたが、其の續講は十年二月上田女學校でやはり四日間開講せられた。長野縣は人も知る如く、形而上的要求の非常に旺盛な處である。上田市の小學校の教職員などの熱心さとなると、とてもお話にならぬ猛烈なものだ。此の二月の講義に集まつた教職員農村青年（遠方から一日がかりで汽車で來るものさへある）蠶絲專門の學生などで小縣哲學會が組織せられた。英語の研究會や哲學の談話會を開いて居る。後には蠶絲專門學校内にも別に哲學研究會が成立した。非常の熱心さといはねばならない。

金井山越兩君は更ら此研究會を延長して、大學教育の一般化を目的とした自由大學を創設しようと計畫中である。農閑期六箇月許りの間に一講座一週間位の五六講座を開講し、主として文化哲學的及文化科學的研究をやらうといふのださうである。

演說樣式の改良といふ事も大事であるが、私は倘怪地方講演の樣式も大いに改良せられなければならぬと思ふ。其の爲に此んな事を考へて居る。講義を大學式にベラ〳〵しやべるのでは何の役にも立たない。豫め研究する書物を一二種定め置き、其れを講習員は長い間研究して置いて、さて講習の日に其れの要

點を話すとか、其れの相互研究會を開くとかする。又講習員が平素讀んで居て疑問になつて居る點を講習前に講師へ書き送り置き、講習の時に其れの解答を話す。かうした新法を此の秋にはやつて、講習員の實力をつける事に骨を折つて行きたいと思つて居る。

### 5、靑年會

神川靑年會は大正二年三月に創立せられた。各區が單位を爲す聯合會である。文庫の經營と講演會開催とに骨を折つて居るが、其の購入する書物の名前を見ると、近來此等の靑年が他の村の靑年と精神内容上どれだけの相違を來さしめて居るか、一目瞭然たるものがある。

### 6、國分農事組合

經濟的社會問題の解決に多大の暗示を與へるのは國分農事組合の組織である。此の組合はまだ十分完全に理想地に達しては居ないけれども、組合員諸君の熱心により、此の數年中に立派な成績を擧げるに相違無いものだと思つて居る。

組合員は山越荒太郎君金井・山越兩君其他すべて十一名の靑年である。此の地方は前述の如き養蠶地であるから、各戸の全力は養蠶業に傾倒せらせられて了ひ、其他の農業は自ら輕視せられる樣になる。此れは非常に不利益な事であるから、農民が組合を組織し生產消費の全般の仕事を分擔し、すべての產業に均一の力を用ひ、勞働協力の意義を體驗すると同時に、從來よりも多くの收益を擧げようといふのである。其の成績がよいので諸方の組合から合併を申込まれるけれども、もつと自組合の組織が完備し、好成績を擧げるまでは合併をしない事にして居るさうである。

組合の仕事は生產係と消費係とに二分せられる。生產係は生產に關する一切の仕事、例へば共同苗代の經營管理、勞力の共同生產品共同賣却等の事を爲し、消費係は消費に關する一切の仕事、例へば種子類の共同購入、肥料、藥品、農具、其他一切の日用品の共同購入等の事を爲す。例へば最近の寄合での決議といふものを見ると、一、稻作肥料の入用高調べ・二、共同消毒の入川高調べ。三、養蠶組合の設立。四、共同苗圃の設置。五、耕地面積。勞力に關して地圖の作製。六、脫穀器の購入決

定。など〻ある。先般の決議により私は佐渡牛の購入の交渉を依頼せられたりした事があつた。生産に傭人を使用するので無く、すべてを組合員として生産者の自治支配により生産をするといふ方向に進んで居るのである。

以上私は神川村の施設の一班を紹介したが、其れの含む文化的意義は大いなるものだ。此れを擴大すれば何れも直ちに社會改造の方法になつて居るもの許りである。其等の事も述べたかつたのであるが、今其の餘裕は無い。最後に私は此村の農民が一層よい方向に進んで行く事と、全國の農村が此種の新らしい村を模して其の地方主義個性主義を發揮せられる事とを望んで已まない。





# 伊豆大島の桃源郷

有島生馬

昨今私の住んでゐる極樂寺の海岸から大島は眞正面にあたつてゐる。季節にもよるが、先づ三日に一度位の割で、水天髣の髴間に、三原山の噴火口を中心とする外輪山、愛宕、三峯、二子らしい山波がよく見える。

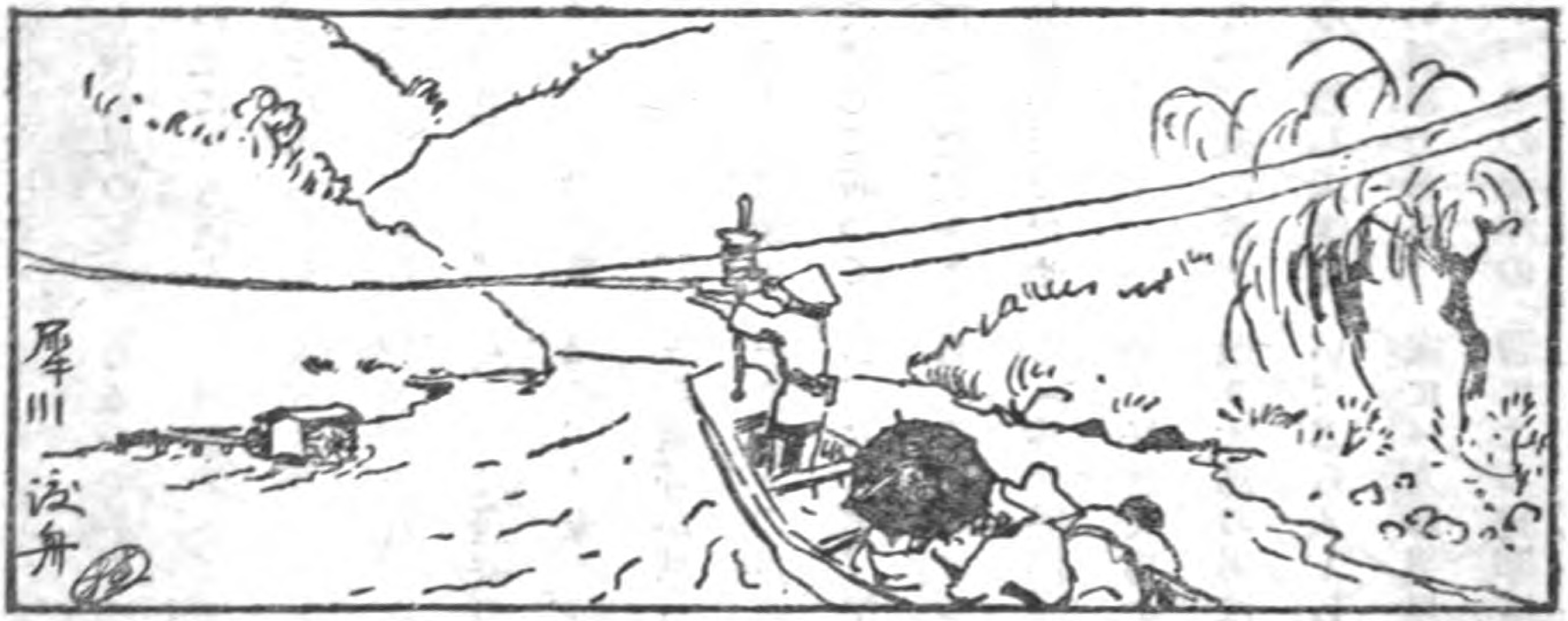
海上僅か五十浬位といふから、此近傍の漁士達は發動船に乘つて八九時間もあれば、所謂「御神火(ごじんか)」の仙郷に行つて終ふ。眞に一睡の間である。斷るまでもないが、この御神火といふのは島人の噴火を聖化して呼んでゐる合言葉で、島に足を踏み入れると何かにつけて、古雅崇高なこの方言を、常に耳にする。吾々には「わたしや大島御神火育ち胸に煙は絶えやせぬ」の有名な大島節で久しく親しいものになつてゐるが、島人の口から此言葉を聞く時極めて懷かしい思ひがする。

大島の事情は色々な方面から、特に東京人に宣傳されてゐる。舊幕時代からそこのくさやの干物に江戸子の賞美したもの、椿炭、椿油の如きも物の質を吟味することに馴らされた通人からは珍重されてゐる。近頃ではバタアも十分食用に堪える良質のものを出すやうになつた。又一方文士畫家學生等の島へ遊ぶものが非常に多くなつたため、そこの特別な雰圍氣は誇張され五月蠅い位に傳へられてゐる。藤森君や中戸川君は小説にまで書いた。まして紀行などはどの位あるか知れない。私は一昨年の冬十日程行つて來た事がたつた一度ある切りだから、特にそれ等の上へつけ足して云ふべき何ものも持つてはゐない。

半日程前にも若い法學士の友が病養がてら島に行つてゐたが、私の泊つた事のある三原館から手紙を寄來して、

「大島は本統にいゝ處です。夕陽に對して類のない壯厳の感を抱き、鑿迫の青葉に對して去り難い愛着の念を起し、村のアンコ達の飾りも汚れも微塵もないのに對して尊敬したくなりました。勞働と健康とが今の私には限りない憧憬の的に思はれます。自分は大島に永住してもいゝとまで思ひました。……何がそんなにいゝのか自分にも結局分りませんが。」

こんな手紙を見ると大島が今更戀しくなる。同じ手紙の中に、「有島さんは後來る心算で荷物を置いて行かれたが、來られなくなつたといふ事で荷物は後に送り返しました、といふ宿の主人の話も面白いと思ひました。」といふ事なども書いてあつた。全くその通り、大島といふ處はそういふ處らしい。一度歸つてみると、思ひ出しながら再び出かけるのは仲々面倒になる。そこが離れ小島だ。その容易に絕緣されやすい處に吾々の感じ得る或る無形の特色と價値とが可成り多く潜んでゐるのだらう。



大島の話は度々人から聞き、度々人の書いたもので見た。然し何んと云つても最初に然も最も深くその興味を私に印象させたのは和田君に外ならなかつた。(之は個人的關係から許り云ふのではなく、大島の紹介者としては誰も同君の功績を認めねばなるまい。)「三原山」を畫いて白馬賞を得、「南風」を畫いて文展を驚かした三造君は、巴里に來ても絕えず大島の美を說いてゐた。實際和田君の識つてゐた二十年も前の大島は遙かに今日より興味あるものに相違なかつたらう。世界の都の巴里の街も、君にとつては渺たる相模洋の椿の木蔭の寂かさには及ぶべくもないやうに見えた。「早く日本に歸つて大島へ行きたい

な」とは屢々君の漏らす嘆聲であつた。斗りでなく、少しサンティマンタルにさえなつてさう云つてゐた。もし後世界の紀念像でも建てる場合にはその位置を乳ヶ崎の斷崖の上にでも選んだらどうだらう。「乳ヶ崎沖まで見送りませうか、それから先をば神だのみ」さう云つて老若男女の群は涙を流しつゝ數里の崖上を走り、和田君の歸船を見送つたといふのがこの乳ヶ崎だ。そこは島の北端、海を距てて富嶽と相對し、潮流の最も急な風早燈臺の建つ畔りだ。

何んでも歸國すると直ぐ君は大島へ行つたが、そこには最早昔の面影は跡形もなくなつてゐたので、非常に失望して弱つて來たといふやうに記憶してゐる。之は勿論島の俗化した故もあらう、然し和田君のエキゾティックな幻覺が幾分衰へてゐたせいもないことはなからう。

大島の自然は寧ろ單調で、貧弱の感を免かれない。殊に淡水の缺乏と火山灰の地層がその感を深くさせてゐる。然し夫等を補ふて餘りあるものは、そこの比ふべきもののない氣象である。多でも四五十度、夏でも平均九十度には達しない。この海洋の漏らす恩惠が様々なことに深く影響し、特殊な雰圍氣を作つてゐるのである。植物にも、人間にも、人事にも。一例を云へば「あしたば」「たがや」などいふ青々した、いかにも甘さうな牧草が一年中繁茂する、ために大多數の島民は牛を飼ふ。それがために内地で見なれない様々な構圖が作られる。或る時は農家の裏庭に、或る時は山腹の野原に、或る時は搾乳場に、又或る時は暗い夜に、この静かな目を以つた家畜と村人との組合が見られる。ゆるやかな鳴聲も至る所で聞く。一日二三回以上の良乳を出す。(飲用としては殆ど無代價の有様であるが、バタア、煉乳原料、乳餅、カゼイン等が製せられてゐるから。)それによつて婦女子は樂々と獨立した生計を營む事が出來る(其他耕作、代木、運搬、有ゆる勞働に従つてゐるが。)又勝手に好きな男をも牛同様に飼つて置くことが出來る(御承知の通り大島の男は海上の仕事以外には殆ど何んにも手を出さない。ぶら／＼して女に喰はせて貰つてゐる。であるから昔は一家に一人の男以外は育てなかつたといふ事である。現今でも舊習による犯罪は全く跡を絶たないでゐるといふ事だ。大島式盧

兒制限法として敢て咎むべきものでないと思ふが、法律の統一主義は奈何ともし難い。又貞操觀念も內地人などとは違つて遙かに自由であり、文明的だといふ事である。從つて離婚などは重大事ではないらしい。嘗つて基督教の傳道者等が姦淫の罪惡なる事を喧傳したために、忽ち人氣を失つたといふ話を聞いた事がある。）

牛の影響はまだある。吾々は純良な牛乳が飮めると同時に、甘い仔牛の肉を十分に供給される。その上東京のチヤリイ社からのパンに新鮮なバタアを添へて食ふことが出來る。先づ食物の有樣からいふと旅客は歐洲の田舍にゐるやうな心持がする。序に云つて置くが、現在この島は東京府に屬し、築地署の管轄の下にあるとかいふ事である。新聞も鎌倉大磯、熱海邊とは違つて市內版が屆く。




私にとつて一番興味の中心になるものは矢張り島民そのものであつた。言語、風俗、建築、習慣、生活、產業、社會組織、道德、宗教、皆な一種の特色を備へてゐるやうであるから、仔細に觀察したらそれ／＼一寸面白い點があるやうである。（どうせ大した事ではないが。）然し一々そんな事を云つてゐる閑がない。島民の體質と容貌、心狀と氣稟、これ等には一番驚かされた。體質は優良、容貌は端麗、心狀は健全、安定。氣稟は快活敢爲、勞働を愛し、無道德であるけれど反道德ではない。こんな抽象的な言葉を並べたのでは何んにも傳へる事が出來ないが、餘白が、ないから仕方がない。兎も角彼等位樂園の住人に近い人間は他に澤山なからう。そうしてかゝる住民を持つてゐる事、それが大島の仙鄉である最大な理由である。もし何年かの後にこの

特殊な島民が徒らに文明化して終ひ、文化生活化して終ひ、平凡化して、科學と資本主義の下に拘束され、退化して終つたならば、大島の自然や氣象の特色だけで、いつまでも今日のやうなエキゾティックな匂ひを吾々に保つてゐようとは思はれない。

大島がかく伊豆、相模、安房の近い沿海に位しながら近年迄全く内地の文化と沒交渉で、特殊な個人、特殊な社會を作つて來た事は世界に於ける一奇觀と云ふことが出來やう。（之は一々實例を擧げて云はないからよく讀者に合點が行くまいが。）何處の國の何處にこんな不思議な現象を見られやう。（先づ伊太利のサルヂニャ島などがやゝ似てゐるやうだが。）その程度が單に交通が不便な島であつたといふ丈けでは、とても說明し切れないほど異つてゐるからである。私にはどうも原因がはつきり分らないやうな氣がしてゐた。處が島に行つた時、ある古老から次の様な話を聞いて略ぼその原因が明かになつた様に思へた。

其は舊幕時代に甚だ妙な一つの掟が敷かれてゐたといふのである。（この命令は幕府側から云へば島民に對する特殊な恩惠的な保護など云ふよりも、一種の皮肉な政策に過ぎなかつたのであらうが。）其はたとへ難破船、漂流者等が寄つて來ても、もし其が本土の人である以上は一物をも與へず無慘にも直ちに追拂はねばならぬといふ程である。但し利島、新島等所謂伊豆列島の住民丈は例外として。炭水の供給が許されてゐたのである斯様な有様であつたから交通、貿易、移住等は絶對に嚴禁されてゐた譯である。この驚くべき慘酷な鎖國主義の掟のあつたお蔭だといふ事實で、初めてこの生活の原始的なのも、島民が一種固有な發達を遂げたのも稍明かであらう。其れともう一つ、前にも云つた生兒の制限が主要な原因であつたに違ひない。

處が近頃では生兒制限が法律の手前、以前ほどは行はれ難く、又内地人の製造場や、會社なども出來、從つて移民も殖え、年一割以上の人口增加である。此有様では數年ならずして忽ち生存競爭は激甚になり、朴吶な島民は敗北者となり、その幸福は全く内地人のために蹂躪され盡して終ふに極つてゐる。其上東京府では白痴院や療養所などを設立したとか、するとか云ふ話だから、この桃源境の前途は知るべきのみである。誠に氣の毒千萬な狀態である。彼等は要するに行く／＼内地人の犧

牲にされる外はない。

一夜各村長郵便局長など云ふ所謂島での有力者の會合が私のゐた隣室で催された事があつた。その人達の酒を飲んで騒ぐ無邪氣さの可愛らしいのに引替へ、その主張したり決議したりしてゐることは實に空恐ろしい事のみであつた。例へば一日も早く電話を通じさせねばならぬとか、乗合自動車を作らねばならぬとか、いふ類の事で、要するに資本主義侵略の前哨である。又村には化粧品とか、文房具とかいふ内地製の粗雜な贅澤品を賣る新らしい店がぽつ〳〵出來かけてゐたが、皆な繁昌してゐた。アンコ等が祖先傳來の椿油を捨てゝ、えたいの知れない豚の油か何か香料入のものを用ひ、折角の長い美くしい髪を庇髪に結ふ時期が來るのも間もない事であらう。

然し全くこれと同樣な內容をもつた愚を吾々は東京の眞中銀座通りで行つてゐるのである。歐洲からの新歸朝者或は外人などの目にはつきりこの熱狂に近い輕擧盲動の何んであるかが見える。然しそれにはいつとなく忘れられるだけの欲望や要求が伴はれてゐるので、誰一人どうすることも出來ない。所謂大勢だと思つて諦める外ない。アンコが何等の價値もない化粧品で身を飾つて、半日かゝつて歩いた道を自動車で二三十分で飛ばして、それで幸福を感じてゐる間に、次第に周圍は彼女等を壓迫して來るやうになる。それは明瞭過ぎた結果である。今更ら大島許りをどうするといふ譯には行かぬが、目前にこの悲劇を見ると彼等のために一掬の涙なくして、内地人及び文明の横暴を憎み咒はない譯には行かなくなる。

大島は、かく火山の上で夢みてゐる樂園だ。あの內地人と人種を異にしてゐるかと思はれる程善良で、質朴で、優美で、端麗な島民の將來は果たしてどうなる事であらうか。大島の島司を初め教育者、有力者も、徒らに表面的文化の形式や、物質的な民福の增進のみを思はないで、もつと本質的な個人の幸福と滿足とを謀つて、一種特別な自治的、平等的、協産的、無宗教的、無道德的な舊制を保守し、大いに内地人及び内地の資本主義を排斥して、永へにわが桃源境たらしめたいと思はないものか。既に然しもう時期が遲い樣である。文化の假面を被る奢侈の悪趣味、及び椿油、薪炭、牛乳の買占は根深く全島に行渡つて今や島民の致命傷にならんとしてゐる。寒心に堪えぬ次第だ。

(十年六月七日)

# 私の見た新しき村

中村亮平

□

一九一八年、葦切の鳴く六月の或る日、手賀沼の岸我孫子の根戸で、日本地圖や、參謀本部の地圖をひろげて、東京から一日で行ける所とか、日光の奥とか信州のある高原とか、日向の霧島山麓がいゝとか、土地を物色したのは古い記憶となつた。

兎も角それが實現せられて、今は日向の一角に、生活を地上におろしてゐる。

宮崎縣の中央、西の山中によつて米良の莊がある、熊本縣の五家の莊に背後してゐる山奥で、そこに源を發し東に流れて日向灘に入る小丸川が流れてゐる。その中流に當つて、一大U字形の土地がある。全く別天地の如うな感じのする所で、獨立した如うなまとまりのいゝ土地である、そこが新しき村である。兒湯郡木城村字城（じやう）と云ふ。

地形が三方川に圍まれてゐるので、まるで島の如うに思はれる。で、何處から行くにもきつと川を渡つて行かなければならない、何時も水量が多くて、すごい様な深い藍を湛へて底を見ることが出來ない。殊に渡し場のある所は水が澱んでゐて全く湖水ときり思はれない、少しも川らしい感じがない。そして魚が澤山ゐる。ことに秋になると實に澤山の鮎がとれる、土地の人はそれを捕つて鰹節代りにする、鰻や鯉の大きいのがゐるには驚く。冬になるとよく鴛鴦や鴨が飛んで來ては水につかる、實に靜かな自然に富んだところである。

尾鈴山の餘波の峠を越えて、城を見下ろせばすぐ下に一境が見える。本當に村らしい感じがして、全く違つた氣持がする、

新しい白い屋根、赤い道、ことにヂクザク形の道が、上の丘から下の川邊まで導かれてゐるので。

そして背後の雜木林がステキなタツチを表はしてゐるので、かくべつの深みを添へてゐる、その深みの山を鹿遊山（かなすみ）と云はれてゐる。その昔は鹿でも住んだらしく思はれる。

雜木林の大部は楠や、樫や、椎や、タブ等で、常に綠の繁みを保つてゐる、春の芽ふきはスバラシイもので實にゆたかな自然をあらはす、本土の中部以北に生れた私達には殊更にうれしいものとして印象される。秋が春來た如うな氣がする。その熱烈な嫩芽には實におどろかされて仕舞ふ。併し秋は燃える如うな色彩を見ることが出來ない。その代り豐富な果實が提供される、栗の多いと云つたらない、ことに大きいので嬉しくさせられる仕事の休み、「おやつ」頃からその繁みに入ると、二、三升位の栗はわけなく拾ふことが出來る。その他、柿とか梨とか萄子（あけび）とかゞ總て野生の果實が多い。それから少し人工を加へると自由に椎茸を作ることが出來る。土地の人は多くの椎茸を栽培して生計の大部の資としてゐる。



麥　【】

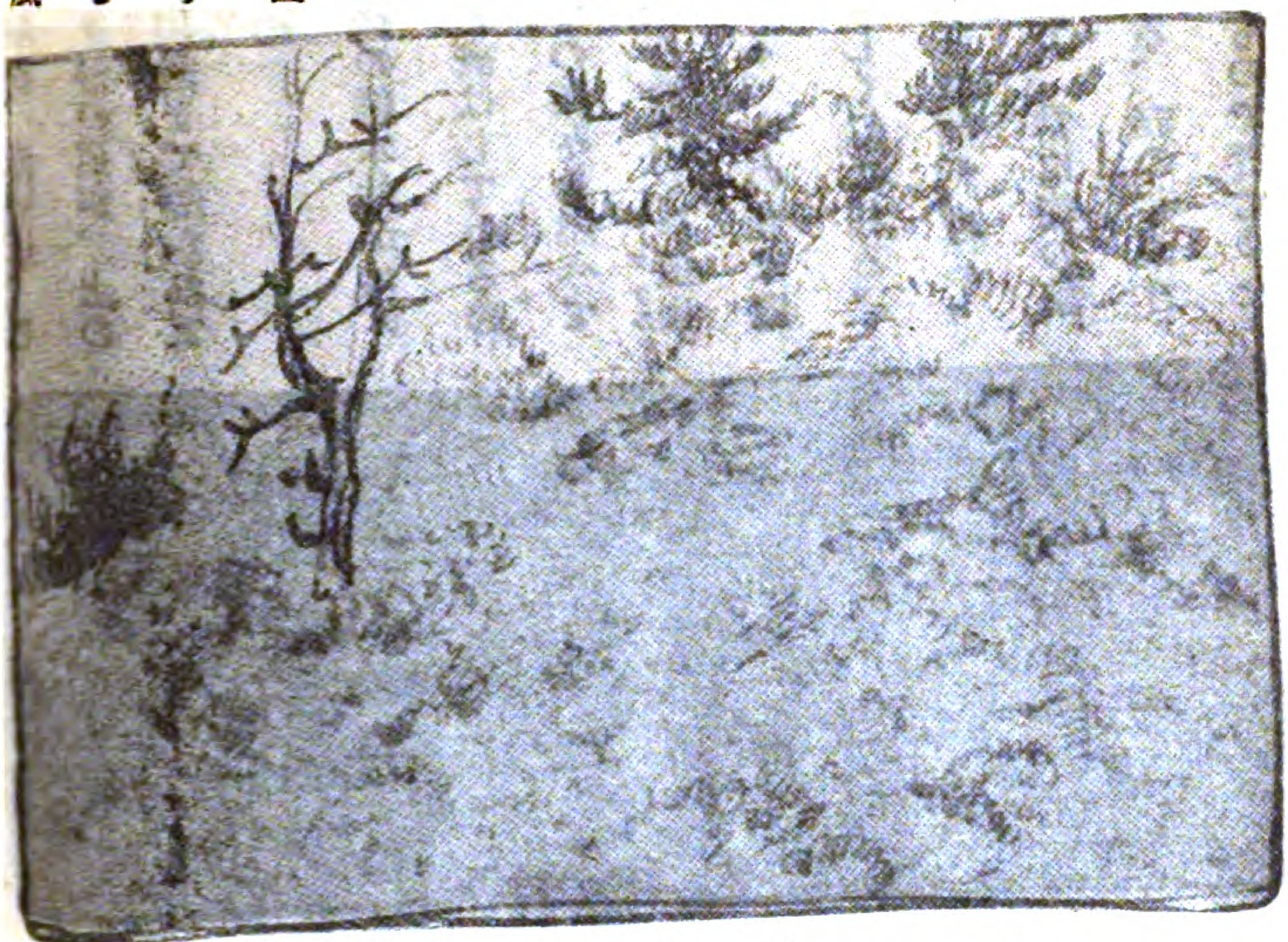
氣候は實に善いので暮すには本當にいゝ所である。たゞ雨量の多いことは一つの欠點でである。併し冬の永い地方に比較すれば、夏と春秋ときりないと言つてもいゝ位の地方だから、自然の中に生きるには持つてこいの所である。

此地を城と云ふのは無意味ではないのである。昔城があり、近くは西南戰爭當時この附近で戰つたらしい。で、村の土地に上の丘から下の段に通じる所に城門の跡と傳へられてゐるものが殘つてゐる。

こゝから西の山奥へ入つた所に『椎の木』といふ所があつて、

何でも平家の落人か何かの隠れたのであるとか云はれてゐる。兎も角地勢から見てもそうした人達の住み込んだらしい事がハッキリする所である。

村の對岸の部落を石河内と云つて、二三十戸の土着の人が住んでゐる、總ての生活は殆んど舊法を固守してゐるといふ風



山の岩村

で、文化をよそに見て實に平氣に暮してゐる。米と甘藷とを穫つたり、椎茸を作つたり、鮎を捕つたり、冬になると部落中總出で野猪狩をして例の燒酎に前後を忘れて、實にのん氣に暮してゐる。

村の所有土地は七町歩程に過ぎない。その中の一町歩余は官有地を借地してゐるのだ、大部分は土地の人の所有だつたのを買ひ入れたのである。

□

大正七年の秋九月武者氏は我孫子を去つた。そしてその月の下旬に本郷の帝大基督教青年會館で最初の演説をした。それから濱松でやり、福井を廻つて信州路に入つた、長野で第三回の演説會を開いて、いよ〳〵九州へ向つた、

私達は木曾路を通つて名古屋で木村藏太氏と一緒になつて京都に入つた。私達三人は京都の諸兄や大阪の兄弟の助けによつて三條の京都基督教青年會館で、自分達の視つめる道を宣べ傳へた。それから大阪、神戸の何れも基督教青年會館で盛んな演説を開いて西に向つた。神戸では酷く反對するものがあつて、



ロダン岩

壇上に立つた一人はとう〳〵中止しなければならなくさせられた。併しそれだけ私達の勇氣が出て、そのあとを受けて、その道を傳へた。

いよ〳〵本土を離れて九州の地を踏んだよろこびは實に大したものであつた。福岡で倉田百三氏に會つたり、その他二三の人に會つて引き返して豐後路から日向に入つた。

福岡では集りをするつもりはなかつたのに、そこの兄弟がすでに準備をしておいたので又しても演説をしなければならなかつた、否よろこんで仕た。この時は全く三人きりだので隨分緊張して三時間を三人でシヤベツた。

日向路に入つては延岡に一泊して直ぐ南へ向つた、霧島山麓がいゝと云ふので十月の中旬に小林町に足をとゞめた。それから土地を探しにかゝつた。十余日の後次第に中央に移つて今の土地に打つかつた。その間に同志も一人ふえ二人來して、いよいよ十一月の十四日に決定することになつた。その日は丁度ロダンの誕生日に當るので一同は實によろこんだ。そして村の土地の河岸にある大きな岩にその日を紀念すべく、ロダン岩と名

何でも平家の落人か何かの隠れたのであるとか云はれてゐる。兎も角地勢から見てもそうした人達の住み込んだらしい事がハツキりする所である。

村の對岸の部落を石河内と云つて、二三十戸の土着の人が住んでゐる、總ての生活は殆んど舊法を固守してゐるといふ風



山の岩村

で、文化をよそに見て實に平氣に暮してゐる。米と甘藷とを穫つたり、椎茸を作つたり、鮎を捕つたり、冬になると部落中總出で野猪狩をして例の燒酎に前後を忘れて、實にのん氣に暮してゐる。

村の所有土地は七町歩程に過ぎない。その中の一町歩余は官有地を借地してゐるのだ、大部分は土地の人の所有だつたのを買ひ入れたのである。

□

大正七年の秋九月武者氏は我孫子を去つた。そしてその月の下旬に本郷の帝大基督教青年會館で最初の演說をした。それから濱松でやり、福井を廻つて信州路に入つた、長野で第三回の演說會を開いて、いよ／＼九州へ向つた、

私達は木曾路を通つて名古屋で木村藏太氏と一緒になつて京都に入つた。私達三人は京都の諸兄や大阪の兄弟の助けによつて三條の京都基督教青年會館で、自分達の視つめる道を宣べ傳へた。それから大阪、神戸の何れも基督教青年會館で盛んな演說を開いて西に向つた。神戸では酷く反對するものがあつて、



ロダン岩

壇上に立つた一人はとう〱中止しなければならなくさせられた。併しそれだけ私達の勇氣が出て、そのあとを受けて、その道を傳へた。

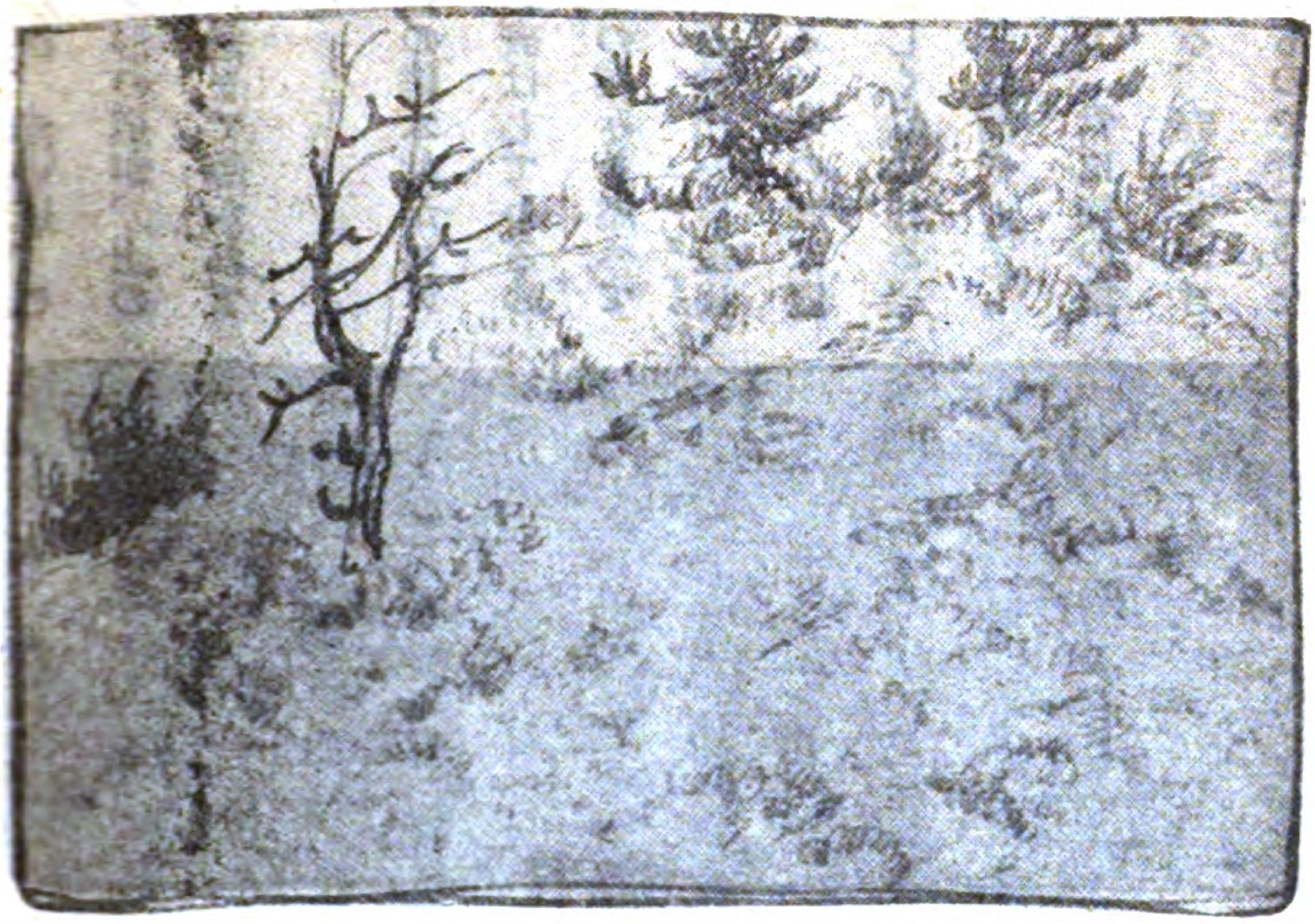
いよ〱本土を離れて九州の地を踏んだよろこびは實に大したものであつた。福岡で倉田百三氏に會つたり、その他二三の人に會つて引き返して豐後路から日向に入つた。

福岡では集りをするつもりはなかつたのに、そこの兄弟がすでに準備をしておいたので又しても演説をしなければならなかつた、否よろこんで仕た。この時は全く三人きりだので隨分緊張して三時間を三人でシャベツた。

日向路に入つては延岡に一泊して直ぐ南へ向つた、霧島山麓がいゝと云ふので十月の中旬に小林町に足をとゞめた。それから土地を探しにかゝつた。十余日の後次第に中央に移つて今の土地に打つかつた。その間に同志も一人ふえ二人來して、いよいよ十一月の十四日に決定することになつた。その日は丁度ロダンの誕生日に當るので一同は實によろこんだ。そして村の土地の河岸にある大きな岩にその日を紀念すべく、ロダン岩と名

何でも平家の落人か何かの隱れたのであるとか云はれてゐる。兎も角地勢から見てもそうした人達の住み込んだらしい事がハツキリする所である。

村の對岸の部落を石河内と云つて、二三十戸の土着の人が住んでゐる、總ての生活は殆んど舊法を固守してゐるといふ風



山の岩村

で、文化をよそに見て實に平氣に暮してゐる。米と甘藷とを秘つたり、椎茸を作つたり、鮎を捕つたり、冬になると部落中總出で野猪狩をして例の燒酎に前後を忘れて、實にのん氣に暮してゐる。

村の所有土地は七町歩程に過ぎない。その中の一町歩余は官有地を借地してゐるのだ、大部分は土地の人の所有だつたのを買ひ入れたのである。

□

大正七年の秋九月武者氏は我孫子を去つた。そしてその月の下旬に本郷の帝大基督教青年會館で最初の演說をした。それから濱松でやり、福井を廻つて信州路に入つた、長野で第三回の演說會を開いて、いよ〳〵九州へ向つた。

私達は木曾路を通つて名古屋で木村藏太氏と一緒になつて京都に入つた。私達三人は京都の諸兄や大阪の兄弟の助けによつて三條の京都基督教青年會館で、自分達の視つめる道を宣べ傳へた。それから大阪、神戸の何れも基督教青年會館で盛んな演說を開いて西に向つた。神戸では酷く反對するものがあつて、



ロダン岩

壇上に立つた一人はとう〳〵中止しなければならなくさせられた。併しそれだけ私達の勇氣が出て、そのあとを受けて、その道を傳へた。

いよ〳〵本土を離れて九州の地を踏んだよろこびは實に大したものであつた。福岡で倉田百三氏に會つたり、その他二三の人に會つて引き返して豐後路から日向に入つた。

福岡では集りをするつもりはなかつたのに、そこの兄弟がすでに準備をしておいたので又しても演説をしなければならなかつた、否よろこんで仕た。この時は全く三人きりだので隨分緊張して三時間を三人でシヤベツた。

日向路に入つては延岡に一泊して直ぐ南へ向つた、霧島山麓がいゝと云ふので十月の中旬に小林町に足をとゞめた。それから土地を探しにかゝつた。十余日の後次第に中央に移つて今の土地に打つかつた。その間に同志も一人ふえ二人來して、いよいよ十一月の十四日に決定することになつた。その日は丁度ロダンの誕生日に當るので一同は實によろこんだ。そして村の土地の河岸にある大きな岩にその日を紀念すべく、ロダン岩と名

づけた。實に立派ないゝ氣持のする岩である。

□

當時本部を東京におき、支部が全國の各地にあつたので、幾度か電報を打つて土地の決定されたのを喜び合つた。

村では、實に眞劍になつて勞働に服した。村の精神そのまゝの、互に愛し合つた喜び、分け合つた苦しみ、この地上では見られない純粹の生き方によつて共に伴に生活を續けた。

先づ家を建てなければならないのでそれにかゝり、一方又土地を生かさなければならないのでその方にもかゝり、自然に各自が得意の向きに進んで勞働に從つて、一心に働いた。ムキに働いたので誰でも一度は必ず病氣にかゝつた。併し互に助け合つてその苦しみに堪えた。町からは六里も離れてゐるので、日常品の準備等にも實に骨を折つた。冬にさしかゝつたので日は短かいし、隨分の苦しみがあつた。兄弟の一人が町へ出た夜は、きつと當番は起きてゐて夜食の冷えきらない樣に注意してゐた。疲勞が酷いので多くの兄弟は寢について仕まつても平氣で起きて待つてゐた。而かも村の土地に家が出來上らないので翌年の五月頃まで、對岸の石河内にある家を借りてそこに韜居してゐたので隨分不自由の生活であつた。露天に風呂をたてゝ入つた。入るに先後の氣持悪るさもなく本當にうるはしく生活を續けた。

何しろ對岸に起き臥しして、村に渡つて仕事をするのだから隨分酷く無駄な骨折もしなければならなかつた。それに渡し場も不完全だつたので、一度一度に大きな聲で呼んでは、村から下りて來て舟を渡して貰はなければならなかつた。殊にこたえたのはその日の當番であつた、二十幾人からの晝食と食器と湯なぞまで運ばなければならなかつたので。それから『お八ツ』には大抵甘藷をするので、それも大きなざるに入れて持つて行かなければならなかつた。それよりもちやんと時間に間に合ふやうにして、出來そこないの無い樣にしなければならないので、その點も隨分氣苦勞であつた。しかしそうした苦勞の事は尙進んでやる樣な傾向にさへなつてゐた。私なぞは三十を越してゐたのでその役だけは免じて貰つた。

仕事は時によつて色々別種の事があるけれども、炊事當番の

外に、建築掛り、畑掛り、薪掛り、家畜掛り、そんな掛りがある。その他會計をするとか、色々の官署との交渉とか、それから水路を作るとか、道路を作るとか、郵便を出すとか、寄附して來るものを注意するとか、實に色んなことをしなければならない。お茶の製造の時期にはお茶も作らなければならない。一寸のひまもない位だ。

併し月に三回五の日には休みとした。休みには畫をかく者も、散歩する者も、文藝論で大氣焔を上げてゐるものやオルガンやヴァイオリンをいぢくつてゐる者や、釣りをする者、舟に遊んでゐる者、實に種々樣々の行動をしてその日を樂しく過した。



上の城の畑の一部

今では日曜毎に休む事になつてゐる。だから休みの日が增したわけだ。夏になると晝休みの時間を永くとる。そして水泳なぞに自慢のヌキ手を切る者もある。

年に四日のお祭りがある。村の紀念日の十一月十四日のロダンの誕生日、十二月二十五日のクリスマス、四月八日のお釋迦樣の日、八月二十八日のトルストイの日、それらの日には少しは御馳走もしたり、集りをして樂しい日をおくる、テーブルスピーチもある、よく劇なぞもやつた。或る時はチエホフの『ドツク』をやつた。それから武者氏の作『新浦島の夢』『二十八才の耶蘇』もやつた。武者氏が耶蘇をした。可なりの出來ばえであつた。それからよく蓄音機をやる。殆んど寄附で、いゝレコードがあるので、一日の勞働もきれいに洗ひ流されて仕舞ふ。これは唯一の救ひであつた。

村では外に社會的の慰安は今では何もないので。

病氣の人がある。その時には實に丁寧に見舞ふことになつてゐた。當時霧島溫泉に入湯した者、福岡病院に入院した人、朝鮮に轉地した人等もあつた。私なぞもつい過勞の爲め肋膜炎を再發して仕舞つて、一家青島（あをしま）へ轉地した事もあつた。共にその苦しみを分つことになつてゐた。今は病人に對してはちがふらしい。

口

村に住んでゐる者には色々の人がある。主に學生が多いけれど始めの人達はそうでもなかつた。純百姓の人、會社員、教員、牧師の家にゐた人、電車の車庫にゐた人、宗教學生そんな人であつた。併し今はそれ等の人で殘つてゐる人は三人ばかりに過ぎない、全部は變つて仕まつた。

初めの頃は官權は隨分きびしくて、出る人入る人のある度にその筋から色々の調査があつた、たまには憲兵隊からも私服位でやつて來た、そして別にそう大して調べるでもなかつた。人員や動靜を調べて去つた。

最初は村に入るとちやんと手紙をしたものだ。要項を刷つたも が來てゐてそれに記入して出さなければならなかつた。先づ、氏名年月日から始まつて、別名、族稱、住所、原籍、學歴、職業、家族、兵役、宗教、崇拜人物、前科、入來の日、村に入る動機、等である。それに記入したものが亦ふるつてゐる。ことに宗教といふところに、眞宗大谷派もあれば、「なし」と書いてあるのに「有」と書いてあるのもある、「天理教と書いたらどうか」とからかふ者もあつた。やつぱり基督教が多いの ある。崇拜人物がまた面白い、孔子、スピーザ、ダーウヰン、リンカーン、保羅、釋迦、ヤソ、ミケランゼロ、ドストエフスキー、ダンテ、ミレエ、ブレーク、ムンク、ルドン、ゴツホ、等出て來る、一切の宗教家を崇拜す、とか、乃木將軍とかいふ人もある。多くの人を連ねてその終りに『何數多あり』とつけ加してある人もある。

併し當局では兵役、前科、村に入る動機なぞを余分知りたいのであらう。

村に入る動機についても隨分色々の者があるので一寸注意をひくであらう。

□

村では初め多くの家畜を飼つた。馬、牛、山羊、鶏、兎、家鴨、犬、豚等、併しいよ〳〵豚が大きくなつた時に問題となつた。それは家畜掛りによつて提出された、豚は全く食ふきりに飼はれてゐないのに、村でこれを飼ふことは堪えられないといふのであつた。随分永いことそんな事を言つてゐたが、とう〳〵一頭は牛と換へ、一頭は他の兄弟によつて殺され食つて仕まつた、その後飼はずにゐたが今でも飼はないらしい。

□

村の生活費はわりにかけずにすんだ、三十幾人で毎月生活費だけは四百圓内外でやつてゐた、併し臨時費といふが中々か〻つた。それは、先づ建築費が主なもので、その他道路とか、水路とか、舟とか、旅行費が中々多くいつた。村に入る人、出る人に出してやつたので。病人それにも随分支拂を要したので、これも臨時費の大きいものであつた。つまり生活費以外のものは皆臨時費として費消した。月によると一千圓を越した事もあつた、大體五百圓位から七、八百圓ですんだ。

それらの收入は、先づ二種會員の寄附とそれから武者氏の印税、原稿料、その他の收入であて〻ゐた。併しどうしても不足した月があつたので、志賀氏から借りた事もあつた、東京の曠野社からは毎月随分送金するので可なりの助となつた。で、村では何とかして早く自活しなければならないことになつてゐる、自活出來るのは何年後であるか。



上の城から下への道

病氣の人がある。その時には實に丁寧に見舞ふことになつてゐた。當時霧島溫泉に入湯した者、福岡病院に入院した人、朝鮮に轉地した人等もあつた。私なぞもつい過勞の爲め肋膜炎を再發して仕舞つて、一家青島へ轉地した事もあつた。共にその苦しみを分つことになつてゐた。今は病人に對してはちがふらしい。

口

村に住んでゐる者には色々の人がある。主に學生が多いけれど始めの人達はそうでもなかつた。純百姓の人、會社員、敎員、牧師の家にゐた人、電車の車庫にゐた人、宗敎學生そんな人であつた。併し今はそれ等の人で殘つてゐる人は三人ばかりに過ぎない、全部は變つて仕まつた。

初めの頃は官權は隨分きびしくて、出る人入る人のある度にその筋から色々の調査があつた、たまには憲兵隊からも私服位でやつて來た、そして別にそう大して調べるでもなかつた。人員や動靜を調べて去つた。

最初は村に入るとちやんと手續をしたものだ。要項を刷つたも　が來てゐてそれに記入して出さなければならなかつた。先づ、氏名年月日から始まつて、別名、族稱、住所、原籍、學歷、職業、家族、兵役、宗敎、崇拜人物、前科、入來の日、村に入る動機、等である。それに記入したものが亦ふるつてゐる。ことに宗敎といふところに、眞宗大谷派もあれば、「なし」と書いてあるのに「有」と書いてあるのもある、「天理敎と書いたらどうか」とからかふ者もあつた。やつぱり基督敎が多いのである。崇拜人物がまた面白い、孔子、スピーザ、ダーウヰン、リンカーン、保羅、釋迦、ヤソ、ミケランゼロ、ドストエフスキー、ダンテ、ミレエ、ブレーク、ムンク、ルドン、ゴツホ、等出て來る、一切の宗敎家を崇拜す、とか、乃木將軍とかいふ人もある。多くの人を連ねてその終りに『尙數多あり』とつけ足してある人もある。

併し當局では兵役、前科、村に入る動機なぞを余分知りたいのであらう。

村に入る動機についても隨分色々の考があるので一寸注意をひくであらう。

□

村では初め多くの家畜を飼つた。馬、牛、山羊、鶏、兎、家鴨、犬、豚等、併しいよ〳〵豚が大きくなつた時に問題となつた。それは家畜掛りによつて提出された、豚は全く食ふきりに飼はれてゐないのに、村でこれを飼ふことは堪えられないといふのであつた。隨分永いことそんな事を言つてゐたが、とう〳〵一頭は牛と換へ、一頭は他の兄弟によつて殺され食つて仕まつた、その後飼はずにゐたが今でも飼はないらしい。

□

村の生活費はわりにかけずにすんだ、三十幾人で毎月生活費だけは四百圓内外でやつてゐた、併し臨時費といふが中々かゝつた。それは、先づ建築費が主なもので、その他道路とか、水路とか、舟とか、旅行費が中々多くいつた。村に入る人、出る人に出してやつたので。病人それにも隨分支拂を要したので、これも臨時費の大きいものであつた。つまり生活費以外のものは皆臨時費として費消した。月によると一千圓を越した事もあつた、大體五百圓位から七、八百圓ですんだ。



上の城から下への道

それらの收入は、先づ二種會員の寄附とそれから武者氏の印税、原稿料、その他の收入であてゝゐた。併しどうしても不足した月があつたので、志賀氏から借りた事もあつた、東京の曠野社からは毎月隨分送金するので可なりの助となつた。で、村では何とかして早く自活しなければならないことになつてゐる、自活出來るのは何年後であるか。

□

村で常にその道の宣傳につとめてゐる、宮崎縣でも數ケ所で演說會を開いた、近く又熊本で演說會をした事を聞いた。武者氏が上京される度にその途中でよく開いた事もあつた。

それで全國には中々會員が多い、隨分な人數であらう、支部の數だけでも東京の印刷所まで數へて二十六ケ所もある。實に大きな勢である。

□

村に入つた人、出た人、それは隨分なもので初めにも書いたが、最初の人で今殘つてゐるものは二三指を屈するに止まつてゐる、兎も角隨分出入りが多い、これには村を本當に知らなかつたものが多いだらうと思ふが、外にも原因はある事はあると思ふ。而し私はその事に立ち入つて言ひたくはない。次手に言はなければならない氣がして來た、自分はより自由なより罪惡を感じない生活を續けたい。そして、自分の常に要求してゐる生活により深く入りたい。その意味で村の精神をより深く地上におろしたい。み旨（ところ）のまゝに生きたい。

□

一年中を通じて來訪者が中々多い、學生もあれば、あらゆる職業を通じて。宗教家もあれば若い人に老人に實に多くの人が集る。本當に考へてゐる人に、そうもないらしい人に、種々な人によつて訪問される。

よく學生が夏期休暇の幾日かをさいて、お手傳をして行く人もある。

支那の人で三人程たづねた、何れも熱心な新しい生活の熱愛者であつた。

□

村から約三里程離れた所に、第二の村を作つた、去年の四月そこに移り住んだが、事情があつて又第一の村に歸つて皆と一緖に力を合せることになつた。

兒湯郡川南村壹根といふ所がそれである。

□

今でもハツキリ印象されるのは、最初に私達の見つめる道について、演說をした時であつた。實に總ての人の心は純粹であつた恐ろしい位。それから第二種會員の集りにのぞんだ時であつた。多くの村の熱愛者に接した時であつた。

この事を考へるととてもたまらなくなる。

□

以上のこと。或る面をお傳へして筆を擱く。

（一九二一、六、五、）



# 貧民窟の夏

賀川豊彦

△

夏はどうするかと仰しやるのですか？　夏は相變らず貧民窟ですよ。どんなにして送るかと云はれるのですか？　呑氣にして送るのですよ。どうせ避暑旅行する柄ぢやありませんしね。まア、そんな時には野狐禪の眞似でもして、心頭冷かなれば夏猶寒し位のことを云ふて居りましようかね。

△

夏は矢張り暑いですからね、僕だつて……七月十日頃から先は、貧民窟ではもう筆も採れませぬ、それこそ屋根が低くて蒸し暑くて、頭がジン〱して來て、目くらみが來て、すぐ疲勞が強くなりましてね、そこに寢轉ぶのですよ。

それで例年、私は私の誕生日の頃から筆を取らぬことにして居るのです、貧民窟に居る間は——。

それには、私に一ついやな聯想もあるのです。大正三年でした私が『貧民心理の研究』を春の二月から長屋で書き續けて居ましたが、七月十二日に稿が了りますと、サアがつかりしましてね、それから大抵の場合暑氣に敗け無い私もその夏は暑氣に敗けましてね、その後疲勞が激しくなつて、風呂からの歸りに道の上で卒倒したようなことがありました。『基督傳論爭史』を書き了へたのも春からかゝつて七月十日頃でしたが、私の誕生日が來るともう貧民窟は暑くて駄目なのです。それで稿を終へたくなつて、早く終了させたのはさせたのでした。そんな風で七月十日か十二日頃になるともう貧民窟は暑くてとてもやり切れなくなるのです。

△

然しもう貧民窟生活も慣れて來ますと、呑氣なものです。夏は心氣一變する爲めに、いつも讀書の內容まで換へます哲學ものが自然科學ものに變り、歷史もの、旅行記自然紀行、山水美論などを讀んで一人で旅行した積で居るのです。

旅行せねば、旅行した氣になれぬ人は氣の毒なものです。私などは、旅行記を讀めば旅行した積りになつて一人で悅に這入れるのですから簡便なものです。だつて、旅行したくても、金は無いし、時は無いし、そんなに呑氣に人のようにブラ〱やつて居られしませんからね。

△

夏は貧民窟の子供に取つては大事な時なのです。いつもであれば子供等は學校に行つ




て、貧民窟に居る時間が比較的少ないのですが、夏は休暇の爲めに朝から晩まで穢ない長屋や路次に居て、十一ヶ月かゝつて作り上げた學校教育を僅か一ヶ月の中に攪き壞して了ふのです。それで、貧民窟の子供の爲めには夏は是非とも一緒に居てあげて、お友達になつてあげなければならないのです。

△

その爲めには一緒に一日の山遊び、河遊び海岸の遊び、感化避暑と云つて、一週間位私のお友達の家に子供を預つて貰ふ運動をして色々と用事があります。今年は六甲山の麓に天幕を張つてみんなと遊びに行かうと云つて居ます。そして三日交代位にして貧民窟の子供を二三百人收容したいと思つて居ります。それには、私の友達が澤山援助してくれたので、仕事に少しも骨が折れませぬ。

△

こんなことをしない時は晝寢したり呑氣なことを書いたり、おしやべりしたり、將棊をさしたり色々と面白い遊びをして夏を送ります。呑氣に居ると、貧民窟の夏は少しも暑くはありませぬ。

殊に事務所と敎會と治療所と食堂と寄宿舍とを一緒にした二階に十八疊の敷ける今の家に晝の間出て居ると摩耶山の方から冷しい風が吹いて來て、避暑なんかする必要は少しもありませぬ。

△

たゞ困るのは晩です。晩長屋に歸つて二疊の室に這入ると、晝の間燒け付いた屋根のほとぼりが室一杯になつて居て、とても辛棒出來ない程です。

結婚した當時にはあまり妻が可哀相でしたから散髮屋がよくして居るように幌を天井からつりさげて大きな團扇代りにしたのでしたがそれも効果がありませんでした。

然しそれより一番困るのは、何を云ふても南京虫です。

△

南京虫に打勝つことが出來る人なら貧民窟に辛抱は出來ます。

毎晩五十匹、六十匹と大豆粒ほどの大きさのある南京虫が床の周圍に押し寄せてくると大抵のものは一週間位で神經衰弱にかゝつて了ひます。

私は最始の年などは殆ど、之では發狂しはしないかと自分乍に心配したほどでした。その年には大阪の四貫島で工女が一人、南京虫の爲めに自殺したと云ふことを新聞で讀んだほどでした。

私は毎年南京虫に嚙まれるのがあまりに苦しいので、とうとう南京虫よけの『卅』と云ふものをイエス團の信者に敎へられて作りました。それは白布を以つて作り細い麻糸でそれをチンと張るようにしてあるもので四角を柱につるのです。幸にも私の室は二疊ですからよく吊れます。吊つたところを見ると、蓋の無い箱の中に這入つて寢るようなものです。然しそれはたゞの箱のような形のものでは無くて、南京虫が眞直に登つて來な

△

然しもう貧民窟生活も慣れて來ますと、呑氣なものです。夏は心氣一變する爲めに、いつも讀書の內容まで換へます哲學ものが自然科學ものに變り、歷史もの、旅行記自然紀行、山水美論などを讀んで一人で旅行した積で居るのです。

旅行せねば、旅行した氣になれぬ人は氣の毒なものです。私などは、旅行記を讀めば旅行した積りになつて一人で悅に這入れるのですから簡便なものです。だつて、旅行したくても、金は無いし、時は無いし、そんなに呑氣に人のやうにブラ〱やつて居られしませんからね。

△

夏は貧民窟の子供に取つては大事な時なのです。いつもであれば子供等は學校に行つ




て、貧民窟に居る時間が比較的少ないのですが、夏は休暇の爲めに朝から晩まで穢ない長屋や路次に居て、十一ケ月かゝつて作り上げた學校敎育を僅か一ケ月の中に擲き壞して了ふのです。それで、貧民窟の子供の爲めには夏は是非とも一緒に居てあげて、お友達になつてあげなければならないのです。

△

その爲めには一緒に一日の山遊び、河遊び海岸の遊び、感化避暑と云つて、一週間位私のお友達の家に子供を預つて貰ふ運動をして色々と用事があります。今年は六甲山の麓に天幕を張つてみんなと遊びに行かうと云つて居ます。そして三日交代位にして貧民窟の子供を二三百人收容したいと思つて居ります。それには、私の友達が澤山援助してくれたので、仕事に少しも骨が折れませせぬ。

△

こんなことをしない時は晝寢したり呑氣なことを書いたり、おしやべりしたり、將棊をさしたり色々と面白い遊びをして夏を送ります。呑氣に居ると、貧民窟の夏は少しも暑くはありませぬ。

殊に事務所と教會と治療所と食堂と寄宿舍とを一緒にした二階に十八疊の敷ける今の家に晝の間出て居ると摩耶山の方から冷しい風が吹いて來て、避暑なんかする必要は少しもありませぬ。

△

たゞ困るのは晩です。晩長屋に歸つて二疊の室に這入ると、晝の間燒け付いた屋根のほとぼりが室一杯になつて居て、とても辛棒出來ない程です。

結婚した當時にはあまり妻が可哀相でしたから散髮屋がよくして居るように襖を天井からつりさげて大きな團扇代りにしたのでしたがそれも効果がありませんでした。

然しそれより一番困るのは、何を云ふても南京虫です。

△

南京虫に打勝つことが出來る人なら貧民窟に辛抱は出來ます。

每晩五十匹、六十匹と大豆粒ほどの大きさのある南京虫が床の周圍に押し寄せてくると大抵のものは一週間位で神經衰弱にかゝつて了ひます。

私は最始の年などは殆ど、之では發狂しはしないかと自分手に心配したほどでした。その年には大阪の四貫島で工女が一人、南京虫の爲めに自殺したと云ふことを新聞で讀んだほどでした。

私は每年南京虫に嚙まれるのがあまりに苦しいので、とうとう南京虫よけの『卅』と云ふものをイエス團の信者に教へられて作りました。それは白布を以つて作り細い麻糸でそれをチンと張るようにしてあるもので四角を柱につるのです。幸にも私の室は二疊ですからよく吊れます。吊つたところを見ると、蓋の無い箱の中に這入つて寢るようなものです。然しそれはたゞの箱のような形のものでは無くて、南京虫が眞直に登つて來な

いやうにへりが四五寸垂れて居るのです。南京虫はその垂れて居るへりをよく廻らないので、箱の中にはよう這入つて來ないのです。明治四十五年から私はそれを使用し初めましたが、それからは貧民窟の南京虫が怖くなくなりました。

然し蚊が居ります。それで箱の上に蚊帳を吊ります。つまり上と下とに吊るものがあつて重箱の中に寢るのです。たゞさへ暑いのに、二疊敷の重箱の中に這入つて寢る苦しさは一方ではありませぬ。

然し十二時過ぎると涼しくなりますからそれでも夜徹し苦しむよりましです。私達は先づそれで南京虫の禍より脫れて居るのですが近處の人こそお氣の毒です。近處の人は西洋式に寢臺を拵へ、その寢臺の四つの支柱は一々水の這入つた茶碗の中に立つようにして、南京虫が水に溺死するように工夫したり、或者は下水板の上に寢たり、或者は表の土の上に蓆を敷いて寢て居ります。

△

南京虫が苦しいものですから子供は決して早くは寢ません。夏に限つて不良少年が群をなして暗い所に集合して野宿するのです。親もそれをよう咎め無いのです。これから段々取り返しのつかぬ不良少年になるものも隨分あります。それでそんな場合に親切に子供を監督して不良少年にならない前に親元に寢さすように私達は努力します。

△

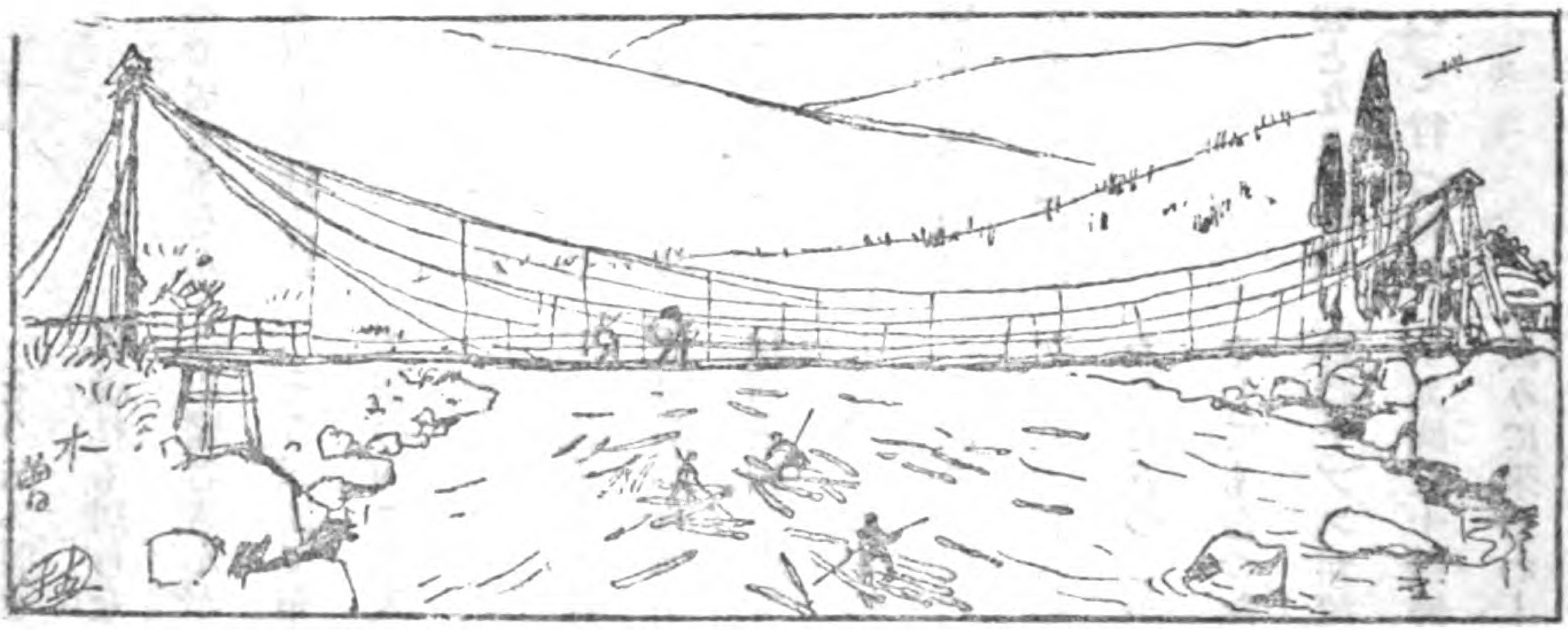
私は將棊をさゝないのですが——下手なものですから——夏だけは馬島ドクトルや教會の青年達と一緒に將棊をさします。先づ勝つたことはそうありません。それでも夏は心理的避暑法として將棊をやるのも善いことです。神戸の店では店員が夏の夕、表に床几を取り出して將棊盤を取り出してやつて居ります。私はよくそれを立ちのぞきをします。呑氣で善いものです。私が立つて居ると、三人四人と人が立ち、五人十人、十五人と人が立ち、將棊の勝負の爲めに、冷かな社會に何とも云へぬ親睦が出來るものです。

△

夜遊もよくします。長くはしませんが、それでも時によ

ると、一時間以上することもあります。それは夜暑くて睡らないし、朝が早いものですから、晝の暑い時に眠つて夏の暑いのを忘れるのです私は元來あせりの方でしたが貧民窟に來て無理をすると、すぐ坐礁するので、決して無理をせず、呑氣にやつて居ります。呑氣になると、夏は涼しくなります。それでも勞働組合、消費組合、各種の講演、教會、日曜學校、無料診療所等の經營の仕事だけで充分夏の暑さを忘れる程の忙しさがあります。

去年の夏は支那に行きましたが、毎年夏になると日本アルプスに行きたいとか、岐阜の名和昂虫研究所に行つて「まつかれは」虫の研究をしたいとか考へて居ても、いつでも貧民窟の用事などに凡てが潰れて多分望み通りに日本アルプス山の横斷も縱斷も出來なくて一生濟むことかも知れませぬ。そんな時にはラスキンの近世畫家の第四卷でも引張り出して來て、ほんとのアルプスの山岳美論を地圖と引き較べて樂しんで居る位で辛棒して置きます。



△

訪問客が多いものですから、事務所の二階では晝寢が出來ないので、土間の上に武内君と僕とが板を張つて食堂代用にしてある、小さい一間に二間の板間に這入つて午睡をするのです。それは小さいベンチの上に――まるで芝居の『タイス』の中に出てでも來るかと思はれるような窮屈な方法で横になるのです。然し南京虫は居らぬし、蚤は居らなし、ベンチの上の午睡は誠に天下泰平なものです。

△

あんまり暑ければ電車に乗つて市内を驅け

[illegible]。走つて居る間は返に仲涼しいものです。

△

神戸は山は近いし、海は近いし、貧民窟に住んで居てもそんなに困ることは無いのです。たゞ呑氣になれねと暑くて仕方がありませぬ。

又二圓七十錢で古手屋から買ふて來た大きな肘掛椅子にそれより高い白い布片を張つて、疲れたらその中にずぼッと這入つて、午睡の一段、夕方かけては子供等と繩飛び、鬼ごッこ、隠れんぼ、角力——貧民窟の夏も呑氣になれるものには苦しいものではありませぬ。

貧しい人々も、夏だけは呑氣で着物はいら無いし、家の中で寢なくて善いし、仕事は比較的多くあるし、夏があまり暑くなくて傳染病が流行しなければ存外呑氣です。

△

然し傳染病が流行すると貧民窟の夏は恐怖の巷となります。

「巡査がお醫者さんと一緒にそつちの長屋に廻つて行つたぞ!」

そう云ふ聲をきくとみんなのものが大通りに出て、家の中には誰れも居らなくなるのです。

『お醫者さんが尻から何やら注射して廻つて居るんやとさ』

そう云ふて布れ廻るものがあると、みんなそれを、こわがつて家の内に這入ら無いのです。

赤痢、コレラ、チブスは長屋の次から次へと傳染して行く。

私の家も去年は三人のチブス患者を出しました。私の家のものは裏隣から傳染して來たのだが、それと前後して私の近所で事務所と相並んで居る長屋の九軒の中五軒までがチブス患者を出して、その中の一人は倒れて了つたのでした。

それまで私の家には水道が無かつたのでしたが——貧民窟六ケ町八千百人に水道の活栓は……私が八釜敷く云ふまでは……たつた五つしか無かつたものです。それを私は最近更に五個殖やしてもらつたので現今は十個になつて居りますが、まだ五個の時チブスが流行したものですから、私はすぐ私の家の表に二十九圓五十錢拂つて共同栓をつけました。サア汲みに來るわ!来るわ! 夏の眞盛には百八十軒からのものがそれを汲み

に來ました。私はその事情を話して水道料を割引して貰ひましたが、それでも三月目に支拂ふた水道料金が隨分澤山に昇つたことがありました。

私は赤痢も、コレラも少しもこわくはありません。然しチプスには一寸と恐ろしい樣な氣がします。それは何時とはなしにやつて來るものですから、うつかりして居るとみなやられて居るのです。去年私の宅に三人から患者を出したのはその爲めでした。

然し不思議にも私だけはやられません。大正七年から私のうちから五人のチブス患者を出しましたが、みなそれは預つた人々で私と妻はどんなわけか大丈夫なのです。然し五人からの患者を三年に渡つて出すとチブスは私達には禁物です。

△

それで傳染病さへなければ、貧民窟の夏は存外呑氣です。

（大正一〇・六・八）





# 新らしき村についての對話

武者小路實篤

A。君は新しき村に行つたさうだね

B。行つた。

A。どんな處だ。

B。山のなかの、すりばちの底のやうな處だ。三方川にかこまれて半島のやうな處だ。川美しいことは賞めてもいゝ。

A。汽車は何處でおりるのだ。

B。高鍋だ。

A。其處からどの位いあるのだ。

B。五里だ。

A。馬車でもゆくのかい。

B。二里あまりある高城と云ふ處までは馬車がある。それからあと三里近くは歩くのだ。

A。道はわるいかい。

B。荷馬車が通る道だからさうわるくない。しかし峠で自轉車では少し無理だ。新しき村の人も自轉車は高城においてゐる。

A。何人位いゐるのだ。

B。三十五六人ださうだ。

A。女は

B。皆で十一人ださうだ。その内三人は子供で、細君は五人ださうだ。

A。不意に行つてもとめてもらへるのか。

B。室がないので駄目だつた。近くに粗末な宿がある。しかし村の人が一寸用があつて外出した時行つた人でとめてもらへ

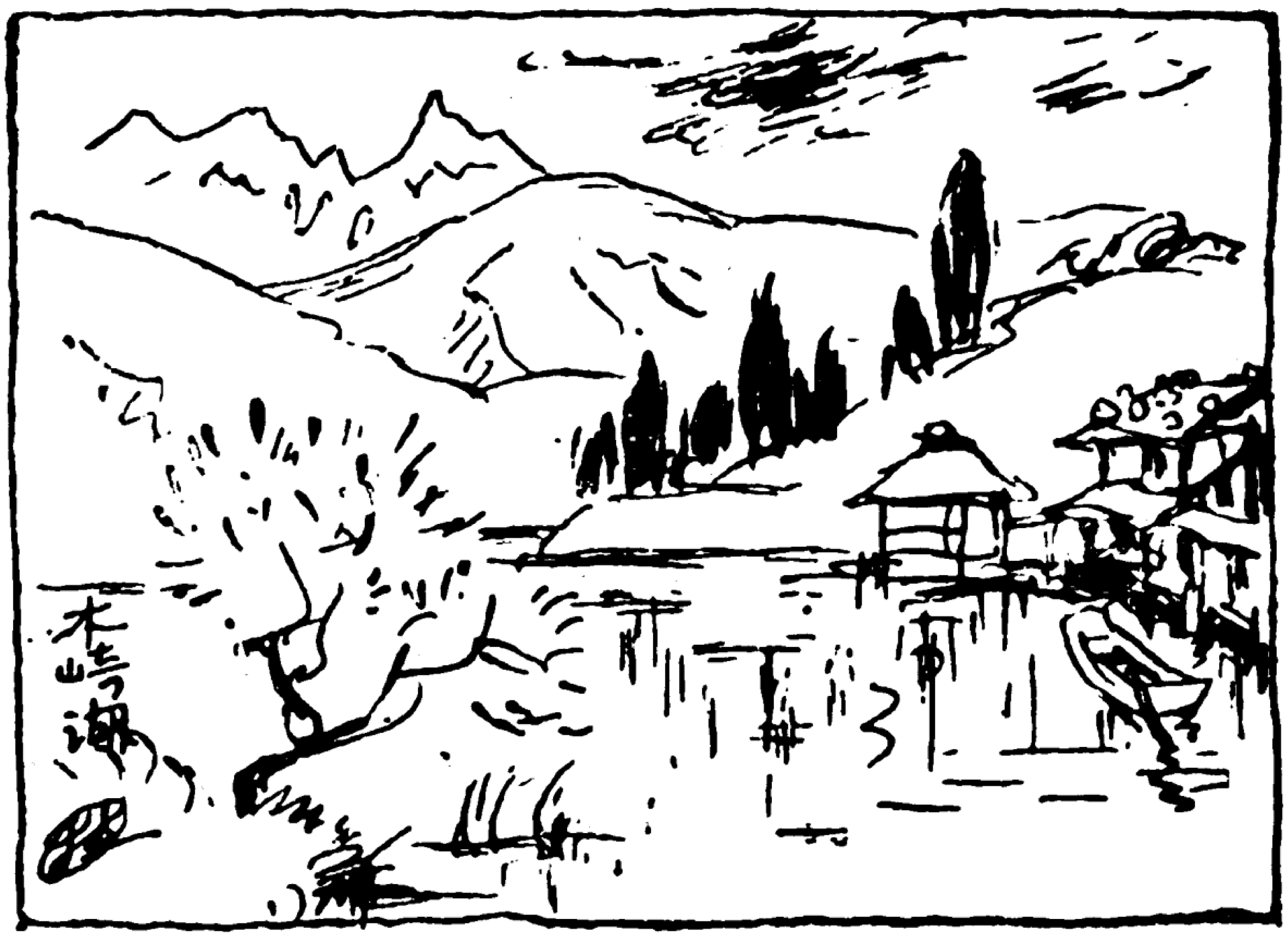
た人もある。しかし今の處だめだらう。

A。村の仕事は有望だと思つたか。

B。さうだね。はつ切りしたことは云へない。まだ自活も出來てゐないし。住居も粗末だ。萬事まだあまりに未成品だ。しかし段々よくなつてゐるやうだ。皆の働いてゐるのは自由さうで見てゐると氣持がいゝ。しかし仕事の結果がどの位いあがつてゐるかは、一寸見た位いではわからない。

A。君は村へ住みたいとは思はなかつたか。

B。今の處、村に住むのは、妻子のある人間には一つの冒險だ。醫者は高城までゆかなければないのだから、急病人は困る、薬も氷も、滋養分も、五里はなれた所へゆかなければない。氷は宮崎までゆかなければないさうだ。學校もまだ出



來てゐない。食ひものも勞働するものゝ食ひものとしては少しひどすぎる。身體が丈夫な時はそれもいゝだらうが、病氣の時は見ぢめだと思ふ。

A。土地の人なんかどうしてゐるのだ

B。醫者をよびにゆく時分は大概手おくれになるさうだ。それに滅多に來てくれないさうだ。馬をもつて三日三里の道をかよつて、向ふへ行つて泣いても來てもらへなかつた話を聞いた。相應の家でさへさうだ。尤も醫者が事實、足りないのだから仕方がない。

A。醫者が出來て、いろ〳〵の設備が出來たら住む氣があるかい。

B。さうだね。あれで本當の町らしいものが出來たら、そして食ふ方の心配が本當になく、あゝ連中が考へてゐる通りに行つたら、住んで見るのも面白いね。實際、皆が親しくして、氣樂にくらし

てゐたら氣持がいゝだらうと思ふ、働いても見たが、あの連中と働くなら、働くのは氣持のいゝものだと思つたよ。尤も一日働いたらくたびれるだらうがね、何んだつて働くのは樂ではないだらうが、あの連中となら、働くのは當然な氣持で、平氣で、誰にも働くのを不思議に思はれずにすむから、氣樂に働ける。

A。あの世界には命令はないと云ふのは本當か。

B。それはないね。命令する資格のある人間も、命令されなければならない人間もゐない。何か働くことをさがしてやつてゐる。そして必要な仕事は有志の人がやつてゐる。中々よく働くには感心する。身體のわるい人は懐手をしてぶら／＼歩いてゐるが誰もなんとも思つてはゐない。

A。君はあの生活が一番、正しいと思ふか。

B。あの生活で、萬事がうまくゆけば、あの生活が正しいと云ふことには反對する必要はないと思ふ。實際、衣食住の問題を義務勞働で解決して、天命を全ふするのに金のいらない世界が出來れば、僕はそれに反對する理由は見出さない。そして義務勞働と云ふものも、他人に命令されずに果せられゝばそれにこしたことはないと思ふ。たゞ義務勞働の實質がまだ村ではうまくいつてゐるとは云へない。また村の人は本當に新しき村らしい義務勞働を會得してゐない。換言するとまだ新しき村の一人前の勞働者になり切つてゐる人は少ない。と云ふ方が本當だらう。まだ新しき村らしい勞働の仕方を會得してゐない。よく働く人はある。義務勞働は八時間であるが、よく働く人はあるが、それは今の百姓の人達の勞働の仕方以上に進んだ仕方ではない。文明の利器も利用されてはゐない。第一利用法をまだ心得てゐない。それから農業の智識も工業の智識も進んでゐない。たゞ協力の生活の心得だけは段々のみこんで來たらしいが、それも今の處いく分か呑氣な處がある。それだけにがつ／＼しないで、氣持はいゝ處があるが、規律がよく、時間が價値多く生かされてゐるとはゆかない。しかし僕等の信ずる處ではそれも段々會得しつゝあるさうだ。しかしその點はまだ自分には信じられない。

A。それで、さう云ふ生活をすれば人類が救へると思つてゐる

のか、今の勞働問題がそれで解決が出來ると思つてゐるのか。

B・彼等の考へによると、全世界が新しき村のやうな生活をする迄は、合理的な世界が來たとは云へないと思つてゐるのだ。彼等の考へだとともかく一段でも、二段でもその土地を本當に有益に、生かすことを知つた人があつて、その通り生かせば、今迄の生かし方よりずつと利益が上がると云ふことがわかれば、默つてゐても、その人の土地の生かし方を段々眞似しだす人が出來て、ついにはその方法が全世界にひろまる、ひろまる方が自然で、ひろまらない方が不自然だと云ふのだ。一人の人がどんな片田舍で發明したものでも、それが人類に役立つ發明ならば、全世界にそれがひろまると云ふのだ。だから彼等は、人類はこう云ふ風に生活するのが一番合理的で、一番幸福で、一番進歩的であると云ふ生活を發見して、それを實行することが出來れば、必ずその生活は全世界にひろまると云ふのだ。一個の人間はかく生るのが本當である。そして人間はかく協力するのが本當であると云ふことを、本當に知り、その通り生れば、それは世界的にならない方がむづかしいと云ふのだ。

A・本當にさう信じてゐるのか。

B・さう信じ切つて居ない人もあるだらうが、さう信じてゐる人も一人以上はゐる。更に村の生活が今の世に出來る一番正しい生活だと思つてゐる人は多い。少くもこの村でのみ、勞働は神聖であり、義務を果すことが出來ることは事實だと思つてゐるであらう。其處では働くことは資本家の爲ではなく、又金の爲でも、利己心や、慾のためでもない。兄弟姉妹の爲に又自己の爲、村の爲になすべきことをなすのに他ならないのだから。人間と人間との關係においては之より正しいことは出來ないのだ。之は誰でもが認めなければならないと思ふ。たゞ現在の新しき村に自分たちがあきたりない處があれば、それは、まだ新しき村の人間が、まだ新しき村の生活に入る力のないことだ。まだ衣食住の問題が解決されてゐない。勞働の方法が幼稚である。生活の仕方も幼稚である。個性を生かす方法がまだ具つてゐない。病人の手あてがゆきと

てゐたら氣持がいゝだらうと思ふ、働いても見たが、あの連中と働くなら、働くのは氣持のいゝものだと思つたよ。尤も一日働いたらくたびれるだらうがね、何んだつて働くのは樂ではないだらうが、あの連中となら、働くのは當然な氣持で、平氣で、誰にも働くのを不思議に思はれずにすむから、氣樂に働ける。

A。あの世界には命令はないと云ふのは本當か。

B。それはないね。命令する資格のある人間も、命令されなければならない人間もゐない。何か働くことをさがしてやつてゐる。そして必要な仕事は有志の人がやつてゐる。中々よく働くには感心する。身體のわるい人は懐手をしてぶら〳〵歩いてゐるが誰もなんとも思つてはゐない。

A。君はあの生活が一番、正しいと思ふか。

B。あの生活で、萬事がうまくゆけば、あの生活が正しいと云ふことには反對する必要はないと思ふ。實際、衣食住の問題を義務勞働で解決して、天命を全ふするのに金のいらない世界が出來れば、僕はそれに反對する理由は見出さない。そして義務勞働と云ふものも、他人に命令されずに果せられゝばそれにこしたことはないと思ふ。たゞ義務勞働の實質がまだ村ではうまくいつてゐるとは云へない。また村の人は本當に新しき村らしい義務勞働を會得してゐない。換言するとまだ新しき村の一人前の勞働者になり切つてゐる人は少ない。と云ふ方が本當だらう。まだ新しき村らしい勞働の仕方を會得してゐない。よく働く人はある。義務勞働は八時間であるが、よく働く人はあるが、それは今の百姓の人達の勞働の仕方以上に進んだ仕方ではない。文明の利器も利用されてはゐない。第一利用法をまだ心得てゐない。それから農業の智識も工業の智識も進んでゐない。たゞ協力の生活の心得だけは段々のみこんで來たらしいが、それも今の處いく分か呑氣な處がある。それだけにがつ〳〵しないで、氣持はいゝ處があるが、規律がよく、時間が價値多く生かされてゐるとはゆかない。しかし彼等の信ずる處ではそれも段々會得しつゝあるさうだ。しかしその點はまだ自分には信じられない。

A。それで、さう云ふ生活をすれば人類が救へると思つてゐる

のか、今の勞働問題がそれで解決が出來ると思つてゐるのか。

B。彼等の考へによると、全世界が新しき村のやうな生活をする迄は、合理的な世界が來たとは云へないと思つてゐるのだ。彼等の考へだとともかく一段でも、二段でもその土地を本當に有益に、生かすことを知つた人があつて、その通り生かせば、今迄の生かし方よりずつと利益が上がると云ふことがわかれば、默つてゐても、その人の土地の生かし方を段々眞似しだす人が出來て、ついにはその方法が全世界にひろまる、ひろまる方が自然で、ひろまらない方が不自然だと云ふのだ。一人の人がどんな片田舍で發明したものでも、それが人類に役立つ發明ならば、全世界にそれがひろまると云ふのだ。だから彼等は、人類はこう云ふ風に生活するのが一番合理的で、一番幸福で、一番進歩的であると云ふ生活を發見して、それを實行することが出來れば、必ずその生活は全世界にひろまると云ふのだ。一個の人間はかく生るのが本當である。そして人間はかく協力するのが本當であると云ふことを、本當に知り、その通り生れば、それは世界的にならない方がむづかしいと云ふのだ。

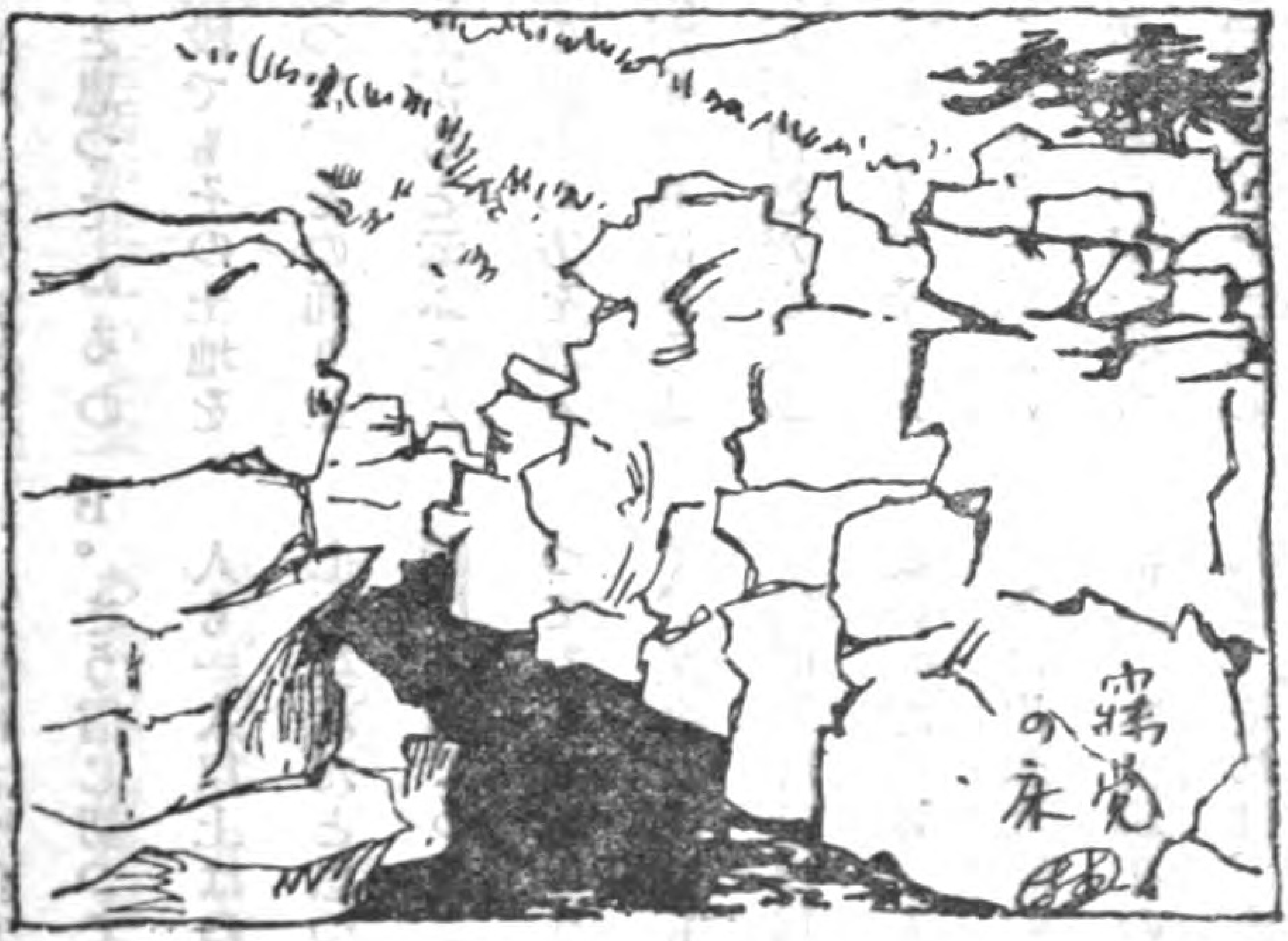
A。本當にさう信じてゐるのか。

B。さう信じ切つて居ない人もあるだらうが、さう信じてゐる人も一人以上はゐる。更に村の生活が今の世に出來る一番正しい生活だと思つてゐる人は多い。少くもこの村でのみ、勞働は神聖であり、義務を果すことが出來ることは事實だと思つてゐるであらう。其處では働くことは資本家の爲ではなく、又金の爲でも、利己心や、慾のためでもない。兄弟姉妹の爲に又自己の爲、村の爲になすべきことをなすのに他ならないのだから。人間と人間との關係においては之より正しいことは出來ないのだ。之は誰でもが認めなければならないと思ふ。たゞ現在の新しき村に自分たちがあきたりない處があれば、それは、まだ新しき村の人間が、まだ新しき村の生活に入る力のないことだ。まだ衣食住の問題が解決されてゐない。勞働の方法が幼稚である。生活の仕方も幼稚である。個性を生かす方法がまだ具つてゐない。病人の手あてがゆきと

どかない。そして村に入れる人間に制限がありすぎる。

A。しかしあの連中は自分達で理想的な世界がつくれると思つてゐるのだらう。

B。自分達だけで出來るとは思つてはゐないらしい。さう云ふ實際的な方面ではあらゆる人から教はれることは教はつて、そして自分達の實力と日常生活で生かせるだけ生かし、その上、段々加はつてゆく力でだん／＼新しき村を新しき村らしくしたく思つてゐるらしい。何處まで出來るかは當人達も知らないらしい。たゞ出來るだけ目的に向つてつとめながらあとは天命に待つつもりらしい。龍になければ雲をよぶとか、齒醫者には齒のわるい人があつまるが、正しい社會には正しい人が集ると彼等は信じてゐる。彼等の仕事は一方、正しい生活、獨立した人間の生る道を知らすことになると共に、その生活を協力して築いてゆき、築きながら、研究し、傳道もし、教も乞はうと云ふのだ。自分は外見には失望したが、内に動いてゐる精神は賛成してゐる。彼等の信じるやうに、結果は早くくるか、おそく來るか知れない。しかし彼等の仕事は、生長する可能性はもつてゐる。いろ／＼の人の力さへ加はれば、たしかに面白いものが出來ると云ふことを信じる一人だ。自分は新しき村の仕事が、何處まで成長するか知らないが、正しい人間の生活を本當に知らうとするものにはあゝ云ふ生活を自ら始めて見るのも面白いと思つてゐる。



A。君は新しき村の會員だつたね。

B。ああ。

A。それなら僕は聞くけど、あの仲間は宗教的な運動をしやう、

と思つてゐるのか、經濟的の運動をしやうと思つてゐるのか。

B。兩方だと思ふ。正しい生活をすることは神も人もよしと見る生活でなければならない、之以上正しい生活の仕方はない。神に愛される生活の仕方はないと云ふのが彼等の信仰なのだ。しかし一方、新しき村は衣食住の問題、壽命の問題を解決しやうと云ふ點で經濟問題と一致してゐる。厭制と、命令を嫌つてゐる點以外では、その問題の解決については、社會主義の理想、世界同胞主義の理想とちがいはないであらう。たゞその解決を眞理の力と、自己の内心の要求の力で與へやうと思つてゐるので、他人を強制せず、他人に強制されず又政府の力をかりずに個人の自由意志でやらうと云ふのだ。

A。つまり獨善主義なのだね。

B。先づ自己から生かさう。自己を人類の意志に叶ふやうに生かさうと云ふのだ。自己を正しく生かし、他人も正しく生かす、道を歩く主義が獨善主義ならさうも云へやう。しかし他人に支配されず、その他の影響をうけず、正しく自己を生かせる唯一の道を歩くのに他に道がないと彼等、僕達と云つてもいゝ、は思つてゐる、他人が改心しなければとか、他人をやつけなければとか、何十萬の人の努力がなければとか、云ふ口實は彼等には許されないのだ。自分を正しく生かさうと思へるものは生かせる、ことを個人が知ることが出來るのはよろこびではないだらうか。元より道はいろ〳〵あるだらう。しかしつまりは虫のいゝ人間がなくなつて、個人のなすべき隣人への義務を果し、その上に自己に托された自我を生かしぬく人がうへることによつて、人類は健全に生きられるのだ。制度をなほして個人をなほさうと云ふのも、個人を生かして制度を自づとかへやうと云ふのも、つまりは同じである。そしてたしかさから云つたら、どつちがたしかと君は思ふね。少くも個人によつてはね。大なる荒野をたがやすには、それをたがやす人間が必要だ。その人間がよろこんで働かうが、いや〳〵働くものを一人でもふやすことを無意味とは思ふまい。正しい國を來させる爲には、正しき生活を愛す

ゐるものが必要だ。正しき生活を愛することを知らないものは、正しい國を、不正な國に變へる力のあることを我々は心配していゝと思ふ。新しき村のやうなゆき方をするものを嫌つて、口だけで偉さうなことを云つて、道樂したり、のらくらしたり、不秩序な生活に傲りを感じたりしてゐる人間を、僕は正しい國の來ることも本心から望でゐる人間とは思へない。

A。君は資本家に飼はれた道德家のやうなことを云ふね。

B。さう君は本當に思ふかね。正しい生活、誰をか働く、義務勞働を自ら進んでする生活、そして自分の財産を捨ることを目的としてゐる生活をしやうとする事は資本家讃美になるかね。人間に正しく生きろと云ふものは資本家の飼ひ犬かね。

A。しかし暴力に反對するのだらう。これはつまり資本家の暴力を是認することになる。

B。さうかね。妙だね。暴力を是認しないことは兩方を是認しないことになるにしても、一方を是認したことにはならないだらう。

A。しかし事實君達の考へ通りだと。資本制度をつぶす力はない。

B。さうかね。しかし正しく生る人間が一人でもふへ、そして正しく人間が生活する方法を研究されることは無意味ではあるまい。

A。僕は彼等が資本制度を、少くもブルジョアを、プロレタリアートよりも愛してゐることを知つてゐる。

B。彼等はかう云ふだらうよ。人類の意志を尊敬し、すべての人に同じく正しく生ることを望み、そして正しき國のくることをのぞむものゝ味方だと。そして人間はすべて愛すと。

A。さうだ、貴族も金持も愛すると。

B。新しき村の生活には、貴族も金持も勞働者もない。人間としての價値だけ切りないことは僕は今の村で既に認める。この點だけは反對は出來ない。

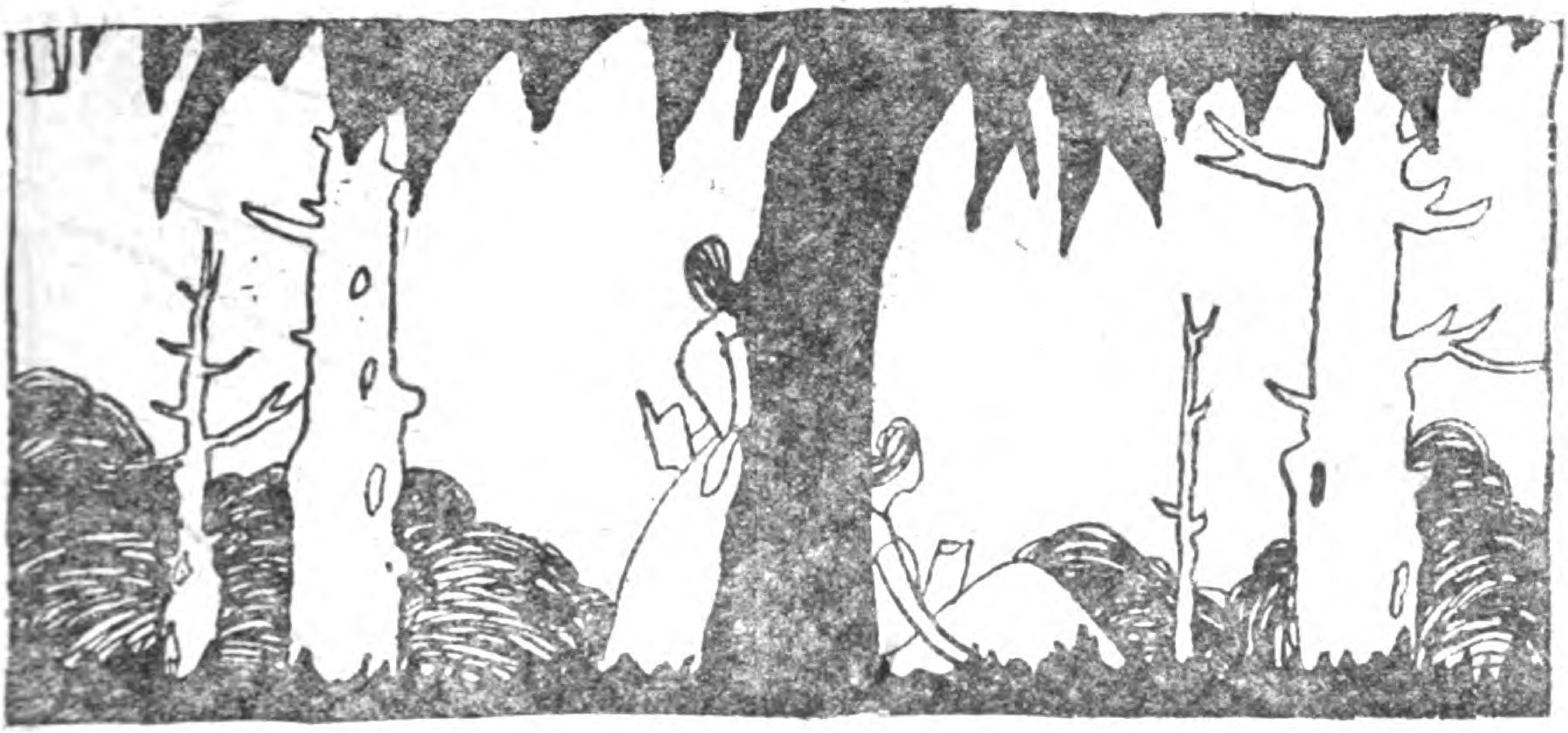
A。今に尾を出すだらうよ。

B。僕は今に眞價を發揮してくれると思つてゐる。

A。よし、それなら賭をしやう。

B。してもいゝ。まけるとは思へないから。（一一、六、四）


草山の風
百穂生



# 變った避暑地



# 日月潭に遊ぶの記

佐藤春夫

去年一夏を臺灣で暮した私は、九月の二十五日ごろであつたらう――手帳を見れば直ぐわかるが、面倒だからいい加減でよからう――兎に角、その頃に日月潭に遊んだ。九月の末と言つても臺灣だから初秋と思つてはいけない。山地ならば兎も角も、平地ではこの頃もやはり眞夏なのだ。阿里山へ登らうと思つたのに、その十日ほど前に、全臺灣を荒して一過した大暴風雨で、登山の鐵道は全く通じなくなつてゐた。徒歩ででもと思つたがそれは至難の事だといふので斷念した。さうして日月潭はどうだらうと案じながら、二八水といふ停車場へ下りた。朝の十時ごろだつた。誰も道づれはなかつた。

二八水から某砂糖會社の私線鐵道がある。それに乘つたところが、案の定、濁水溪が氾濫して川に沿うた線路が洗はれて仕舞つたとのことで二十町ばかり歩かされて、また汽車を乘り繼いだ。汽車のなかで乘り合した一人の人が話しかけて、私を內地から來た人だらう、日月潭へ行くのだらう――さう言ひ當てて、いろいろ道順などを敎へてくれた。今日中に日月潭の水社まで行き着けるものと考へてゐたのに、途中で一泊しなければいけないとのことである。何とかといふ停車場――手帳を見なければ忘れてゐる――へ下りて、ここから日月潭を貯水池にする有名な臺灣電力會社の汽車――內地のトロである、臺灣ではそれで人間を運ぶ――で集々街まで行くのである。今日はそこで一泊しなければなるまいといふ。

私は故あつて――民政長官下村宏氏は歌人である、それ故我々文人を過分に遇してくれたのに因る――この地方では、これ

故、私はその電力會社の客分として案内して貰へることになつてゐた。小さな汽車が、その或る小さな停車場へ着くと、一人の若い紳士が私を待つてゐてくれた。それから籐の腰掛けに日覆のある特別仕立の臺車を用意してくれた。途中で向ふから來る臺車が私の臺車を呼び留めて、またもうひとり中年の紳士が、この人も私を出迎へに來てくれたのであつた。こんなに丁重に扱はれては擽たい氣がしてならないが、氣取らずに言ふとさういやな氣持ちでもない。

その夜は、汽車のなかで聞いたとほり集々街に泊ることになつた。――集々に着いたのは午後の二時ごろなのだが、これからさきは例の暴風雨で臺車の線路がさんざんにこわされてゐる。どうせこれから歩いて行つても日のうちに日月潭の水社までは行き着けはしないし、ここで泊るより仕方がないからである。宿は何れ田舍宿であつたが、うしろに川が見下されて涼しいので何よりであつた。

その夜は例のひる間私を迎へに來てくれた年とつた方の紳士が、大きな圖面をもつて訪ねてくれて電力會社の工事事業の大要を話してくれたりした。それから明日の行程のために駕を用意してくれたといふのである。三里か四里たらずなら歩くといふのに無理に用意してくれたのである。何でも、ここから水社へ出るには新舊二つの道があるが、新道の方が平坦な代りには一里何町とか遠い。駕かきは坂は急でも古い道を行きたいといふが我慢をしてくれるかと言ふ。勿論どつちだつて都合のいい方がいいのである。床を延べさせて疲れた體を横にしたが、何ごころなく隣室の高話を聞くと、愕いたことには、生蕃が蜂起して霧社の日本人は全滅したといふ噂である。霧社といふのは、日月潭の見物を終つてからの私の行く先きなのである。是非蕃界をも見て置きたし、新高といふ高山へも行きたいのが、その地方の蕃界の都合であり、また新高山への登り口である霧社が果して噂のほとりなら、さきに阿里山の森林を見そこねた私の旅行はここにまた一つ大障害を生じたことになる、

次の日の朝は、早朝に出立した。私に用意してくれたのは所謂椅子駕といふ駕だそうである。背はば足の無い背中と肘かけ

ばかりの籐椅子の兩わきに棒を通して、その二つの棒さきを前後から二人の苦力がかつぐので、乘つた人の足をささへる爲めにと一本の細い木片が繩でぶらぶらと吊り下げられてある。その木片に私は窮屈な足を踏ばつて支へた。それから肘かけに兩肘をかけて、日覆がないから洋傘を開けた。この椅子はどうもあまり愉快な乘り心地ではない。但し、この椅子轎でなければ、普通の輿といふ奴では、急な坂は登れないのだといふ事であつた。あまり轎などに乘る人がないと見えて、集々の町を出る間に皆が氣をつけて私を見た。二人の轎かきの苦力ともう一人、彼等の一人が疲れた時に代る苦力と、それに昨日から私を案内してくれる中年の紳士――この會社のこの工事區域の監督だそうだが――と、別に皆の辨當とお茶とを持つた若い工夫が一人。私はこんな大勢のお供に從かれて、大分得意であつたとお思ひなさい。一行は濁水溪を流れの岸に沿うた道によつて遡つて行つた。ところどころ先日の增水によつて崖くづれがしてゐる。そんな崖くづれの一つを下りて川原へ出たが、若い工夫は間接に私に注意してくれるつもりで監督に言つた。

「ここからは新高山が見えますよ。」

彼の指す方を見ると、向ふの川岸の山と山との間から又二つの山が見えて、再びその二つの山と山との間から少し凹んで女夫のやうに並んだ二つの峯があつた。「そこから見て高く見える方のが、本當は低いのです。低い方のが主峯なのです。阿里山からだとよく見えます。阿里山から見るのとは隨分違つて見えるなあ」――若い工夫は最後の方をひとりごとのやうに言ひ濁した。この工夫はまだ二十ぐらゐだらう。監督の方は台灣へ來て半年ぐらゐにしかならないとかで、無論、阿里山は知らないさうだ。途中で第何區事務所といふところで轎を下りて休むと、そこには水社にある事務所の監督がわざわざ迎へに來てくれてゐた。やはり中年を過ぎた人であるこれからさきはこの人が案内してくれるといふ。

私の轎はそろそろ坂道にかかつた。この坂道は登一里半ぐらゐあるさうだ。さうしてところどころ可なり急で、坂道のために作られた椅子轎でも閉口する場所がある。しかし何時の間にかこの轎に乘る呼吸のみ込めて來た。水社から來てくれた監

督は話のすきな人らしかつた。「化及蠻貊」といふ字を刻んだ石を見て來たか、それは殘念をした。私がゐたら數へて上げたのに。いや、新高の見える川原まで來ないところの路ばたにあるので、巨きな石です——幅が一丈ぐらゐ高さが五尺ぐらゐでせう。光緒十三年に建てたのだとあります。そのころまではあの傍まで蕃地だつたのでせう。溫柔な口調でこの人はたへず何か言ひかけてくれる。この邊の道はやはり蕃人が出沒した時代に出來た道なので、わざと高いところ高いところと道をつけてあります。え、蕃人の狙擊にそなへたのです。だから坂は急になるし、展望が利くやうにです。新道でも展望のないところは通らないのでこんな道が出來たのです。こんな事も教へてくれる。この人は台灣にもう二十年以上もゐると言つた、それに所謂趣味の人と見えて名蹟のことやら山川のことやら或は道ばたの草木のことやらさまざまなことをよく答へてくれた。我々の今登る山は土地公鞍嶺といふ山であつた。海拔二千五百尺だと言ふ。鞍部には土地公廟といふ小さな廟がある。我々はこの廟のそばの木かげで辨當をとつたが、時計を見るときつちり十二時だつた。今、手もとにある台灣名勝舊蹟誌を開いて見ると「土地公鞍嶺眺望」と題して「南投街集々の南約三里十一丁の所にあり。乾隆の初年小徑始めて開き未だ山名あらざりしが、道光十五年、鞍上に土地公廟を建て、始めて土地公鞍嶺と名く。光緒八年、吳光亮此の險を剷り、大道を開き、埔里社に通ず云々」とある。さうして光緒十三年には殆んどすつかりこの地方の蕃害は無くなつたものであらうか。言ひなほせば蕃人達は乾隆から光緒までの百二十五年ほどの間に、ぼつぼつ支那人のためにこのあたりを逐はれたのである。

霧社の蕃人のことを辨當を食べながら訊ねたら、何でも霧社の奧の方で蕃情が不穩だといふことであるが、霧社の日本人が皆殺されたなどといふことは無からう。しかし今、霧社や新高へ行けるかどうかは、埔里社まで行つて見なければわからないと言ふことであつた。

道は下り坂になつて日月潭は想像したよりも近かつた。だんだんとあたりの具合が低く水に近い氣持になつてやがて水の一隅が見え出したのは二時ごろであつた。第一瞥に見たのは所謂

月潭の方であつた。水が赤茶けて濃く濁つてゐる――水のなかに何か苗でも一面に茲つてゐるのであらう。その赤い水の上に蓮のやうな葉や菱などが、この間の増水で混雑した形で浮いてゐた。水に沿うて廻る木かげの道は初秋のやうに涼しかつた。

日月潭の水は青かつた――が、しかし日月潭は、私の勝手にした空想とはよほど趣が違ふ。私は臺灣名勝舊蹟誌の「驚くべし海抜二千五百尺の山上周圍四里に餘れる大湖あり。水深平均一丈五尺、常に紺碧を作して池底、蛟龍の潜むかと疑はる」といふ文字にだまされて、何となく雄大な清澄境地を考へてゐたのであつた。しかし、私の目にうつる日月潭は周圍四里に餘る山上の大湖ではなく、ただ馬鹿に大きな沼である。ここは噴火口のあとでもなく、どうして出來た窪地なのだか不明だと地質學者は言ふさうである。湖齢はたしかにもう一萬五千以年上に達してゐて、もう頽齢に近い。今から二千年もたてば自然と凋死するだらう、とも言はれてゐるさうな。それ等のことは素より我々の知るところではない。ただ見る、ところどころに、その上に家を構へた竹筏があつて、八疊敷いや十二疊敷もあらうかと思ふ大きな四つ手網がその竹筏から水にしたされてゐる。昨ま[illegible]に文人髭めいた漁夫が家の中から現はれて、一本の網を手にとるとそれは巧みにテコの理屈でこしらへた仕掛でその大きな網を輕々と水のなかから引き上げてゐる。別に獲物もなかつたと見えて、またのつそりと靜に水のなかへ網を下した。竹筏のぐるりには蘆荻が疎らに生えてゐる。私の目の前の世界は、大きく、さうして何となく佗しい景色である。が、日本人の謂ゆる佗しさ、俳句のやうな佗しさとは何となく自づと違ふ。氣のせいかやはり雄大なところのあるへんた佗しさだ。私は無學でいい例は知らないが、何だか杜甫あたりの詩情の或るものにはこんな佗しさがありはしないか。沈着なそれでゐてどうにも爲し難い憂鬱を發散するやうな美しさ。高貴な人が平然としてうらぶれてゐるやうな佗しさ。父祖傳來の大きな吾が家の軒端が傾いてゐるやうなうす汚さ。なつかしさ。この深い山と淺く蒼茫とした水との自然、そのなかにある人間の營み、そんなものから私は前に述べたやうな幻影を呼び起すことが出來た。それが私にはなかたかたに厭ではなかつた。さうしてこれらの自然がやがて

電力會社の工事によってここ數年のうちに面目を一新するであらうことが――たとひその時にどんな新らしい別の美しさを生ずるにしても、やはり今日の自然でないであらう事が私の感傷癖をそそるのである。……こんなことを思ひながら、小さな木の橋、水社橋といふのを渡った。少し丘になったところを登つて行くと、私の駕は下ろされた。

宿の二階から見ると――樓に登って欄に寄るといひ度いところだが――大山連嶺が眞正面に突立ってその足もとに、日の光を浮べた水が凝乎としてゐる。古人の所謂水社八景なるものの「山水洪秀」は一目で見わたすことが出來る。この洪秀のなかにある一味の幽暗を表はさうとでもするかのやうに、雲の影が、山の中腹から水の面へ忍びやかに下りて來て、水の面を包まうとしてゐる。どこか後の方で潺湲と水の流れる音がしてゐる。この宿は、水社で唯一の宿屋であるが、なかなかいゝ場所を擇んで建てゝある。聞けば、數年前、臺灣勸業共進會のあつた時、この景色を紹介しやうとお客をここへ招待するために總督府で建てた建物が、今はそのまゝ宿屋になってゐるのださうだ。成程、急拵への必要上、手を省いたやうなところにカテージ風な雅致があっていい。

一風呂浴びて出てくると、女中が一枚の名刺を差し出して、お目にかかりたいと言ふ。やはり電力會社の人で、名刺によると工學士で技師である。年のころ四十五ぐらいに見える瀟洒な紳士で、上品な靜かなさうしていゝしやれた口を利く人である。兩三日前に仕事を視察に來て、明日は集々の方へ行くのだと言った。話題として電力會社の事業のことを手輕く話し出して、あの水社橋のある水尾溪を工事してそこから水をきって落す計劃や、この水の落差は――（精しい數字を私は忘れたが）水力電氣の場としては世界で十三位ぐらゐに相當する高さであることや、水源地は山の向ふの東の方の蕃界にあってそこから水を引くのに水道として延長六十町ぐらゐのトンネルを今工事中であるとや、この工事と同じやうな適例がスイツルのどこかにあることなどを話してくれる。「いづれ精しい事は夜分にでも、」と言つてもし疲れてさへゐなければ化蕃の蕃社を見に行かないかと

誘つてくれた。この蕃社は潭の向ふの岸にあるので船で二十分位だといふ。酒を土産に持つて行つて彼等の歌や舞踏でも見やう。こゝへ來る人はこれを見ることが一つの習慣になつてゐる。「彼等は水社の藝者です」としやれだか何だか解らない說明をする。

同行は技師と今日集々の方まで私を出迎へてくれたあの監督と、それに電力會社の運輸を引受けてゐるといふ二八水の或る運送屋の主人と、それに私。宿の浴衣がけで歸りに、水の上の夕方は寒いかも知れないと誰かが注意をしてくれた。宿の女中が麥酒やその肴などを用意してついて來た。宿で使つてゐる臺灣人が兩手にひつさげて來た大きな酒德利二つは蕃人達への土產である。

舟は水社橋のそばの蘆のなかに浮いてゐた。西の方に大きな雲が表はれてゐて、それ故、水の上には日が射してゐない。この潭上の水は一たい泥深いので、しかし水そのものの深さは極く淺くつて、最深一丈八尺、平均水深は一丈かそこらだらうといふ。水の上に來て見るとこの水は一さう汚く、幽愁の色を帶びてゐた。舟べりから水に手を漬けて見ると生温かつた。よい水の上を會社の若い工夫が竿を挿し、やがて改めてろを漕ぐ。わざとゆつくりと舟をやる。宿の女中が風呂敷包みを解いて重箱のなかから肴を用意し出した。鷄の飴煮などが出て來る。

「おかみもつれて來ればよかつたな。さうすればばあいまゝい三味線でも引かせたのに」

麥酒のコップを取りながら技師がいふ。

「でも、ふたりとも出ては來られませんわ。」

「然うとも。ばあさんが出て來れば君では臺所の采配が振れないね。……私だつてさう嫌つたものぢやないとお言ひよ」

輸送屋の主人がこんなことを言ふ。女中はこれには何も答へないで、唯妙に淋しさうに目を伏せて笑つた。この表情が旅愁を持つた私の心へほんのちよいと觸れた。この女といふのは年は二十二（三にはまだなるまい）ばかりで、色の少し蒼白い優しさうな解でその代りに顏には一面にそばかすがある。少し面長で、ちやんとした顏立ちだ。全體に汀に垂れて咲いてゐる花のやうに切なげないぢらしい表情をもつて、こんな山の中の宿

屋の女中にしては品位もある。とぎれとぎれに少しせき込んで口を利く癖があつて、その人に與へる感じには頼りなげな寄りすがるやうな調子がある。額の上の半分が自分の好きな或る人に心持似てゐる。

「御覧なさい。あれが」と監督が私に言ひかけた「あの大きな楠の木のある嶋が浮島なのです。珠仔山と言ひましてね。八景の一つなので。蕃社はちやうどあの裏のところを這入つたところにあります。珠仔山のこちらに背の高いとび出た者がありますね。あれが石印です。石の印材に形が似てゐるからでせう。蕃社もあの岩の近所だから石印と呼んでゐますが。」

舟は、例の大きな四つ手網のある竹筏の前を二つほど行き過ぎて、今、湖心に浮んでゐる。

臺灣名勝舊蹟誌は記して言ふ。

――相傳ふ、水社化蕃は今を去る百三十餘年前、嘉義大埔の蕃人四十餘名、嘗て大山に獵し、一頭の白鹿を追蹤して西北に走り、水社大山に至りて蹤跡を失し、彷徨三日、偶々此の大湖を發見し、以て天興の樂土と爲し、一旦歸社して酋長に情報し、一部は直に此に移住を決行せるなりと。蕃社また神秘的に碎な傳ふ。今より二百年前、水社湖の東北南に巨大なる茄苳樹一夕にして發生し、周圍二丈餘、根は十二尺の水底に蟠り、梢は二十尺の大空に擴がりしかば、蕃人は神木と稱して刀斧を加へず。この神木の精、蕃婦の胎に宿り、一男生る。生れながらにして身長九尺に餘り、膂力鈎を曲ぐるに足り、顋頷多髯にして、狀貌魁偉なり。衆推して蕃王となす。時の臺灣巡撫、縣丞を遣はして眞否を探り、尋で兵を派して附近に屯在し、先づ神木を伐採せんとせしも刀鋸立たず。巡撫大に異とし、一日茶菓を供へて上天に謝し、且つ神助を祈りしに其夜夢に「茄苳の大木は、天地日月の精靈を享け、一夕、湖中に生ぜしも實は既に千年の劫を經たるものなれば漫に兵を用ひ、斧鉞を加ふるも何の効かあらん。唯針を樹皮に刺して黑犬の血を塗るは、大木の忌む所なれば、斯くて後、鋸をもつて斷つべし」との託宣あり。乃ち靈夢の如くせしに果して驗あり。木忽ちにして倒ると共に、蕃王は湖に投じて死せりと。」云々。

この荒唐無稽な傳說をどこまで打興ずるかは人人の自由として、今から約二百年の昔、淸の雍正年間に、この日月潭一帶の地にあつた水沙漣蕃社の骨宗(クツフォン)と呼ぶ勇敢な大頭目が淸の統治に對して頑强な對抗を試みて擊殺されたことは歷史上の事實であるといふ。しかしそれは昔のことで今、このあたりの地は蕃界に隣してはゐるけれども、既に王土のうちである。白鹿を逐ふてここに移住した化蕃はわれわれ——この風光を訪ねる者の座興を助けて土産の酒を樂しむのである。

さうして我々の舟が珠仔山の傍をまわつて舟の艫先(へさき)がその蕃人の小村落を指した時に、我々の舟の櫓の音をでも聞きつけたのであらうか、一人の小柄な老人が石でつみ上げた胸壁の後に立つて我々の方を眺めてゐた。我々の舟が折から獨木舟を一艘つないであつた岸につくと、彼は岸へ下りて來て、腰を低くして丁寧にお辭儀をした。この岸といふのは、山峽の狹い平地が水に接してゐるところで、なだらかな坂のやうに傾斜をして、汀の長さは半町とはないであらう。即ち彼等はこの汀を間口にして奥へ行くほど狹まつた山かげの土地に住んでゐるのである。

出迎に出て來たのは近づいて見ると六十ばかりの白髮の老人で、彼の頭は短く散髮してゐる。彼等は生蕃ではなく、ここは蕃地ではないから、この老人は頭目では無く區長なのである。さうして我々のやうな客が屢々あるから彼は我々の用向きを知つてゐる、それ故、目早く土産の酒のある二つの大德利を偷み見た。それから我々をば石の胸壁のある彼の庭の方へつれて行きながら、自分は小屋のなかへ這入つて行つた。

老區長の命令があつたと見えて、四五人の女が出て來た。二三人の小供が物珍らしさうに小屋から出て我々を見つめる。女達は手に手に七八尺もある長い棒をもつてゐる。それは杵である。老區長は木綿縞の西洋風のシャツを着てゐたが、女たちは蕃衣を着てゐる。老區長は自分でいろいろの腰かけ、竹で出來たのやら木で出來たのやらを持ち出して我々に勸める。舟を漕いで來た若い工夫が何か老區長に言ひかけると、彼も何か答へた。言葉は解らないが何でも蕃語ではなく臺灣語——即ち厦門地方の支那方言——を使つたらしい。

「皆は未だ畑から歸つて來ないさうです。今迎へにやるといふ

のです」若い工夫は今の問答を説明する。成程、お子供たちは、家のうしろから驅けて出て行つた。

杵を持つた女たちは、十三四ぐらゐのや十六七の娘も雜つてゐて、その庭さきに埋めてあつた二尺四方ほどの方形の石のまわりを取圍んで立つた。彼女たちはそれほど大きくない聲で歌を口ずさみながら、手に持つた杵で石の面を搗く。杵は徑八寸ぐらゐもある太いのやら三寸ぐらゐのものやら、もう少し太いのやら、それぞれの太さが一定してゐない。それ故、それが石の上で反響するひゞきが鋭いものや鈍いものやさまざまの音で、それの入り雜るひびきのうちに高低自らの調子が出來る。これが木と石の發する音かと疑はれるほど金屬的な快い音を出す。「ここで聞いたのではそれ程でもありませんが、水の上で、あの山のところを廻るあたりから聞くと何とも言へない氣持がありますよ」と技師が言ふ。「ほんとうに、あすこで聞くのが第一ですね」と監督が言ふ。杵を搗き下す女たちは、時々足を横に石の方を蹴り込むやうな眞似をする。この動作は、この一種原始の音樂とも言ふべきこの杵搗きの本來である本當に彼女たちが臼の上で粟や米や稷などを搗く時に、こぼれ落ちた穀類を足で拾ひ込む眞似に相違ない。

「近ごろでは杵に合せて、七つ八つからいろはを覺えなんて歌ひ出すから參りますよ」と運輸屋の主人が言ふ。

そのうちに畑で働いてゐた男女が三三五五あちらこちらから歸つて來た。娘の子の多いところだ。「今は正月だから(――蕃地では粟の取り入れ月が正月になつてゐる)毎晩、芝居があるのだ。今日は折角のお客だから、どうせ夜する芝居を少し早目に今から始めやう」と言つたさうである。芝居、芝居といつてはゐるがたゞ手をつないで踊ることです」と若い工夫が説明をした。二十ぐらゐとも見える背の高い立派な若者が、にこにこしながら工夫に何か言ひかけて置いて小屋へ走つて行く。「皆で祭の着物を着てくる。その方がいゝ。待つてゐてくれ」と言つたのださうだ。果して、皆がそれぞれに赤い盛裝をして來た。男は陣羽織のやうな形の上衣を、女は腰には裙をつけて、胴にはやつと乳の上までしかない短衣を着てゐる。男のには袖はないが、女のには狹い長い洋服のやうな袖がついてゐる。これは

支那で男の着る馬掛といふものに似てゐる。これは短いから裙と胴衣との間から栗色の膚が隙いて見える。輸送屋の主人が、傍に來た十五ぐらゐの頭には赤い毛絲の房の飾りをした少女の胴衣をまつくて背中の膚をのぞいて見たら、その少女は少し嬌羞を帶びたやうな顔をして笑つて行つて仕舞つた。さつき、祭の着物を着て來ると言つた若者は、いそいそと出て來たが、蕃衣の下にシャツを着込んで、家柄の者と見えて胸に、勲章のやうに丸い貝がらをつけてゐる。

彼等は、やがて少し低くなつた廣場――これは特に彼等の所謂芝居の舞臺として用意されてゐる場所であらう――に集つて、七八人で手を繋いで、圓くなつて歩き出した。盛裝の出來上つたものが追々と、來て仲間に加はつた。やがて若い男女が二十人ばかり大きな環になつた。環に加はらない人人も澤山ゐて彼らは或は立ち或はしやがんで見物してゐる。環はくるくると廻る。廻る環のなかで時々、皆がそれぞれに手を放して身を翻すやうなこともある。幼稚園の幼童たちの遊戯のやうに單純である。一度、休んでゐた例の杵搗きはまた初まつてゐる。杵を搗く者も踊るものも歌つてゐる。歌は御詠歌に稍似た調子を帶びてゐて、モノトナスであれである。一人の勢力者のやうな男が、踊つてゐる者たちの傍へ盃を持つて行つて各彼等に飲せてゐる。彼等は自分自身が飲む前にちよつと盃中の酒のなかに指をしたして、その滴を天の方と地の方とへ投げるやうな手つきをし、それからその指で自分自身の額を指して、さてその盃を飲み乾す。この事を大へん素早くやる。中には自分は飲まずに、列から離れて行つて用意の酒甕のなかへ替へに行く者もある。老區長は悦んでしきりに飲んでゐた。

「去年ぐらゐまでゐた別嬪は近ごろ見えないやうだな」と技師が言ふ。

「あれは、この間どこかの[illegible]人のところへ嫁入りしたさうです。」と監督が言ふ。

「もう一人いい顔のがゐるのだが、未だ畑から歸らないと見えますね」と運送屋の主人がいふ。さうして重ねて、宿の女中を振り返りながら「ね、あれやなかなか別嬪だね。」

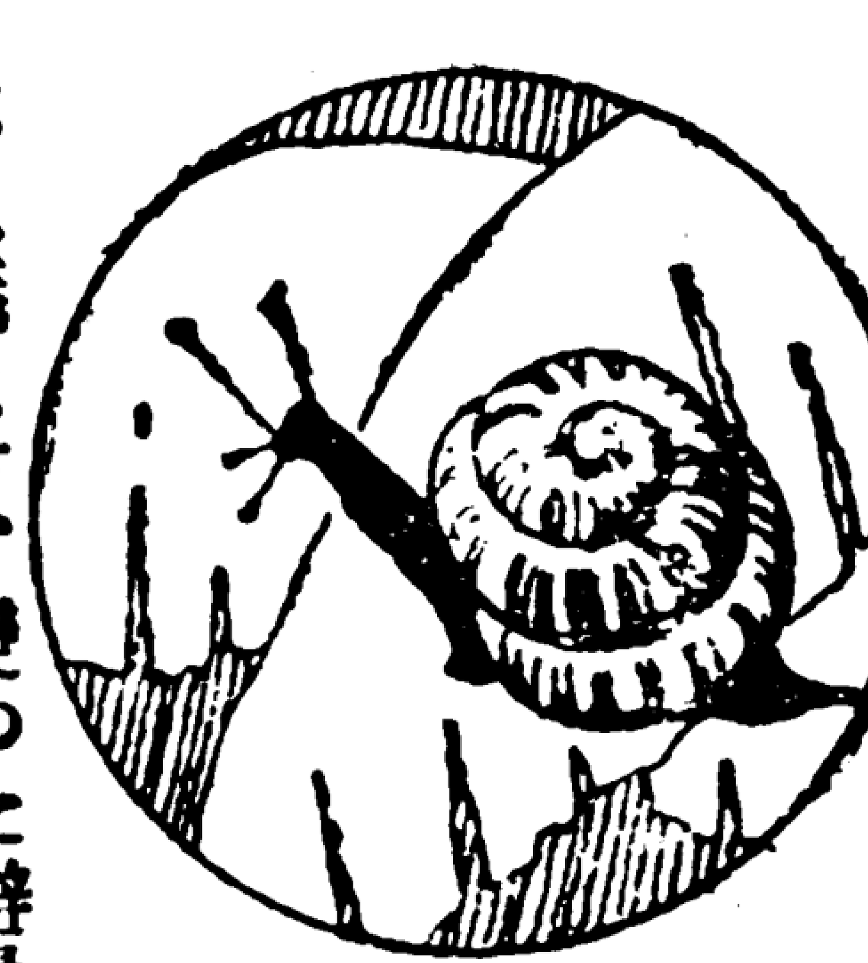
容子、何時の間にやら怪しく暗くなつて、膚寒いやうな風が

來た。夕立が來さうだと言ふので、男ばかりでする劇しい踊りは見のこして歸らうと、舟に乘つた。彼等は氣を利したものか、その特別な、男ばかりが手を繋ぎ合つて旋風のやうに廻つて見せるのを、私は舟に乘りうつりながら見た。

重い空の下に日が暮れかゝつてほのかに暗くなつた水の上を、飛ぶやうに歸つて來る小舟がある。何れどこかの岸の畑へ出てゐた番人の獨木舟である。我々の舟が岸を遠くなつて珠仔山の影にかくれるまで。あの杵の音が聞かれた。その音は、水と空とにこもつて響いて、砧の音に似たさびしさを持つてゐる。活氣のない日の暮れの水の景色は、蕃家の杵聲によつて景色そのものが藍の葉のやうにふるへて、私の心は哀切を高められた。ふと遠くで電が頻りに光つて、果して夕立が來るのであらう。晩秋のやうに冷たい風がかすかに水を辷る。四つ手網を上げてゐる竹筏の人に、我々の舟から誰かが何かを言ひかけると、向ふの人も問へた。「鯉がとれてゐるか」「鯉は無い。鮒なら大きいのがある」といふ問答らしかつた。

再び水社橋のところへ舟が歸つて來た時には、日はとつぷりと暮れて仕舞つて、潭水の上にはところどころ、竹筏に住む漁人の灯が長い影をあざやかに水の上に引いてゐた。

いゝ按排に雨は未だ落ちて來ない。宿にかへつてしばらくすると、劇しい大粒の雨が來て、やがてしめやかな秋雨のやうな雨になつた。雨が晴れると、七日か八日の月が僅の間東の岸高い山を照した。水はこちらの山の影になつて月光を浮べなかつた。



# 金沼銀沼の靈地

小杉未醒

不思議な村、變つた避暑地、日本のうちにはモハヤ餘り不思議も變つたも無くなつてしまつた、柳田氏などが一番面白い事を知つて居らるゝだらうと思ふ。小生などの少ない經歴に依つて見れば、不思議な村と聞いて、行つて見れば、矢張り麥畑茶畑電信柱、普通の寒村に過ぎない。何處其處の山奥の村は、平家の落武者の開いた村、だと云ふ事ヶ善く聞くが、それを一々ホンの事に受くる時には、平家の落武者が日本中の山奥に分れた事になるであらう。併し傳説必ずしも全く嘘ばかりではなく、沒落の一族が、相率ひて山の奥に籠つた事は首肯れる。沒落の一族は平家以前にも、平家以後にもあつたらう。それらが悉く平家の落武者、と云ふ事にもなつたのであらう。是も其平家の云々と云はれて居る、栃木縣鹽谷郡の、絹川の水源地に栗山村と云ふがある、二十年前に少年時代の小生が行つた時には、男は獵と樵とのみで、女が畠に働き、田なければ、米なく、粟ばかりの飯などを喰ひ、里へ出て鹽鮭を買へば、再びそれを鹽に漬けて貯ひ、味噌は、豆と鹽とのみの玉味噌、乾棚に吊して燻らして、庖丁で削つて味噌汁を作り、山の雪の模様で、狼に追はれた鹿の群が現はれると、法螺を吹いて人を集め、或時は一時に鹿ばかりを三百頭も、火繩銃などで占めたと云ふ事もあつた。酒は濁り酒、お目出度い時は會津の直し、鹿の刺身や、鹿の腦髓の燒きたてなどを味つた覺えがある。富士見峠と云ふ處に小屋があつて、其處まで山の材木や割木を運んで置く。日光の町からは又日用の物貨を運んで行つて、何人の立會ひもなしに、好き程の物と物とを交換して來る。先方の居る時もあらうが、居ない時もあらう、それで何の苦情もなく、つまり相互の良心で損得なき交換が行はれる。かゝる不思議な村も、二三年前に行つた時には、絹川の下流に水電などが出來、材木も高く賣れ、金も入れば米も入り奢侈品も入り、火繩銃も二連無鶏頭となり、どうやら並の山村となつてしまつた様子である。チットも無理のない話ではあるが、汽車汽船の出來た爲に、世界が

狹くなり、神秘が消し飛んでしまつた。と歎く小生共からは、何となくあきたらず思はるゝ。それでも一番奥の三軒家の小部落に川股温泉と云ふがあつて、其處で三四泊して來たが、眞夏の盛りの雜木の木立ちが直ちに山頂より屋後に接し、畠の芋や黍が、縁側まで茂り溢れ、家の周りに草木、と云ふよりは、草木の僅かの隙に家らしいものがある。と云ふ程の茅屋の中に、蓬髮銅膚の老女が、大肌拔きで石臼を廻して居た。それを見た時には、昔の通りの栗山が此處に漸く殘つて居たと思つた、自身の着けて居た汗に汚れた背廣さへも、甚だその環境に相應しからず感じた程であつた。全く此のやうな山奥の住民は、カッフェとキネマの東京住居者などから見たら、何等の樂しみがあれば其の生を草木の間に托して居るか、と疑はるゝであらう。

避暑地として此の川股温泉なども惡くはない。此の温泉から足の達者なもので日歸りの行程の處に、絹川の水源なる金沼銀沼の勝地が在る。勝地と云ふよりは靈地、好い景色と云ふよりは、不思議な仙境、小生は未だ斯の如きチヤーミングな、清淨な神の造れる庭の如きものを他に見た事がない。地は六千尺の高さ、山頂の平地廣さは、半里程一面の毛氈苔、様々色々の草花四五十の大小の淺い沼、忽ち、日照り山輝き忽ち、雲湧き霧捲き起る、自然宗の求道者は正にかゝる處で大自然の啓示にも接するであらうか。しかし金沼銀沼に毎日通へるものでもなし、身に病あつて深く温泉の効驗に賴るものではない限り、川股も長く留るわけには行くまい。多くの人は、山へ行つて山に遊ばず、宿の中から出た蓄音器の前に半日を暮す。カッフェとキネマの延長を山村水廓に望むものであるから、結句箱根と伊香保とが求も人を留め易い事にならう。伊香保を越して榛名神社の下の一部落は、昔神社の盛りの頃の宿屋共が今も尙存して居る。此處で大根と芋と凉風の間に一夏を過したなら、大分讀書の捗も行かうかと思ふ。信州の飯田は汽車路を遙かに離れた、落付いた小都會である。以前木曾谷へ夏休みに行く人があつた。汽車が通つてから次第に靜閑の趣を失つた。それを詫びしがる人に此の飯田附近の天龍谷をすゝめたい。信越線柏原驛から十余丁、野尻湖の岸にも、北國街道の一村がある、宿屋もある。妙高山は日本有數の名山、裾野には二つ三つの温泉場もある。スキーの名處ではあるが、小生は避暑にも好い處と思つて居る。



# 羊蹄山と半月湖

水島爾保布

去年は一夏ほとんど北海道をうろつき暮らした。どこへ行く汽車も大ていは満員で長い立往生を忍ばねばならぬ場合が多かつた。（私の旅行はいつでも三等だ。）大沼公園、それから定山(ぢやうさん)溪(けい)登別(のぼりべつ)などの溫泉場は、どの宿屋もゴツタかへすばかり混雜してゐた。一人旅の私は至るところで、懇願してやつと宿泊を許して貰ふといふやうな有樣だつた。

それやこれやで、同地の誇りとしてゐる諸所には餘り好感情を持つ事は出來なかつた。却つて汽車の窓などから瞥見して過ぎた部分部分に、非常にいゝ印象なり記憶なりが殘つてゐる。その斷片をつなぎ合せて圖卷を作つて見たいやうな氣には時々なる。

夕暮れの津輕海峽で連絡船の周圍を跳躍して走つてゐた海豚の群も珍らしかつた。函館灣内に電飾の如く充滿してゐた烏賊捕船の漁火も美しかつた。

石狩平野は雪中馬橇を驅つた時の壯快な記憶にも增して、夏に爽快な感じがした。札幌大通り（幅一町）の花壇の鮮麗さも忘れない。至るところに牛馬の放牧場があり、至るところに燕麥の丘とその一面の黃色を劃したタモの密林帶があつた。瀧川ではてうど七夕祭りの夜で、少女達が手に手にタモの小枝や篠竹に色紙で張つた燈籠をつるしたのを提げて、唄ひながら町を群れ歩いてゐた。

石狩膽振の國境の茫漠たる荒野の眞中に、たゞ一本建つてゐつた白い榜示杭、それから、犬蓼と茶褚色の穗を靡けた草と、女郎花と、それらの密生した沼地を隔て、白樺の疎林を裾にめぐらして、Elfeの如く飛翔する狹霧の中に隱見する怪奇な樽前岳の山容、石狩十勝の國境の雄大さ、これなどは大陸的といつても決して間違ひはなささうだ。それからもう一つ國境では石狩天鹽の國境も宏壯な眺めだつた。

それから又大深林の燒け跡――眞黑に焦げた大木が、高い山の頂からその中腹を廻り屋根を渡り裾野を傳はつて更に他の丘へと這つてゐた。鮮麗過る程青々した下草と、それとの對照がいはん方もなく凄壯な感じだつた。

根室のある沼で小舟を操つてゐたアイヌのメノコ、小雨に烟る緑樹の蔭と、薄濁つた水の光の中にそれが何かの物語めいて見え又一種暗示じみても見えた。

支笏湖、洞爺湖あたりの寂寥さには神秘的な、そして心持のいゝ感じだ。いゝ馬といゝ犬とを連れていろ／＼の食糧を用意して半月程もテント生活をしたらばとそんな事を考へた。考へたが考へた丈で直歸つて來て了つたが、羊蹄岳と、その中腹の半月湖では前後五日ばかりを過した。そこなどは變つた避暑地としては先申し分のないところだらうと、私はおもふ。

羊蹄は北海道を知つてゐる人は先刻御存知だらうが、一名を蝦夷富士といふ通り富士山を小さくしたやうな恰好の山で、七千二百尺ほどあるさうだ。（各所に何富士かに富士と呼んで富士に似た山は隨分あるが、この羊蹄山位ゐ酷似したものは殆ど見當らない。寧ろその圓錐形狀の正確なことと權衡のとれてゐる點で、本ものの富士より勝れてゐる。）

傳說によると蝦夷地開闢の時海底から突出して凝り固つたものださうだ。そこへ男女の神五色の雲にのつて降臨して、乘つて來た黑い雲を海へ投げ入れて巖とした。それから黃色いのを巖の間々へ埋めて土に、白いのを海へ投じて魚類に、青いのを草木に、赤いのを金銀珠玉の類に、それ／＼變化させた。するとそこへ雌雄の鵲が飛んで來て二柱の神に子孫繁榮の方法を敎へた。といふことである。アイヌ語では鵲の事をカムイチカプといふさうだ。神樣に人間の道を敎へたといふところにその烏の神聖と敬虔とが係つてゐるのださうだ。

こんな傳說はとにかくにその山を廻るタモの大深林の原生のまゝの姿で密生繁茂した壯麗さは、何と形容しやうもない。半月湖といふのは、その密林に包圍されて、美しさ靜かさの透徹したやうな湖水だ。

午前の一時頃登山の青年達に交つて、懷中電燈やら提灯やら石油松明やらで路を求めながら、まるで地底のやうな樹陰を潜りつゞけ、人丈よりも高い大虎杖や傘ほどの蕗の密生した間を分けつゞけた果、漸く白々あけの冷えきつた空とそこに散亂する水晶のやうな星影を仰いだ時の清爽さは思ひ出す丈でも胸が廣くなるやうだ。苔のやうに地殼へこびりついた葉の硬い灌木の叢を縫つて、幽にしみるやうな空氣の流れにひたりながら、やゝ頂き近くまで來ると茶店があつた。薄暗い箱ランプの下で

年寄り夫婦が番茶を煎じてくれた。茶つけの塩ものにコケ桃の鹽漬けにしたのを駄菓子にそへて出した。店には金富士といふレッテルのサイダーそれから札幌ビールの瓶などもならべてあつた。

茶店の家根を越して向ふの山の背から谷へかけて、殘雪が仄暗い中に薄いコバルト色をぼかして幽に光つてゐた。

山頂の日の出の壯觀はどこも同じだが、眞朱の烟の中から、火焔のやうになつて上つて來る大日輪の眞下に、靡き平いだ一面の大深林の莊嚴な眺めは内地のどこの山でも見られない。やがてして空の茜は紫に、紫は藍に、明るく晴れ上つて行くのにつれて樹林は漸徐に影から姿を、形から色を整へて來る。碧の梢を果てもなく連ねて、遠く雲霧の間へと浪のやうになだれて行くさまは、樹海といふ言葉の如何に適切だかを語つてゐる。——その樹海のある隙間々々に光る燕麥の丘、それからあちこちに散點する牛の放牧場、馬の放牧場、奇峭な遠山＝有珠岳、駒ケ岳などの凡ての山その物が盡く大陸的だ。

半月湖へはこの歸りに立寄つた。一日は舟を浮べて遊びくらし次の日は鮒を釣りながら終日湖岸のあちこちをうろついて過して了つた。三日目は雨だつたので朝から書きものをして、四日目の午後雨の晴れ間を見て倶知安の町まで歸つた。

本當に夏であることを忘れてゐた。日中タオル浴衣では少し冷え冷えするのでシャツを着た位だ。夜は布團を被ぶつて臥た。四圍からは底しれず密生した林が犇々と押し迫つて、その背暗い影が絶えず湖上を壓した。水は瑠璃をのべたやうに清らかに澄徹して偶々小さな魚の跳ねる音にも幻覺を起させるやうな靜かさだ。その湖の沈默に對してポツ然と浮木の赤い一點を凝視してゐると、いつか自分迄が淒じさに同化したやうになつて了ふ。二十日もこんなところで過したら屹度骨の髓まで綺麗な人間になつて了ふだらうなどと想つた。

倶知安の町には東京からの郵便を待つて三日ばかり滯在した。毎日毎日羊蹄山を見、そこに變幻去來する白雲を見て暮らした。支那人が白雲を見て樂しむ心持ちも幾分か理解されたやうな氣がした。

たゞ少し困つたのはどこへ行つても食物の惡いことだつた。今度行くときにはテントと罐詰を用意して半月湖畔と限らず、北海道のあちこちを足の向く儘旅行して見たいとも思つてゐる。

近頃では日本アルプスも少し鼻についたし、踏破だの縱走だのいふことも何だか兒戲に類するやうに考へられてならない。餘り山はないが、北海道の山々はどこへ登つても面白い。のみ

ならず變つた旅行、變つた避暑地——そんな處を求める人は、是非一度北海道をテント旅行なりテント生活なりを試みることだ。

大して不思議といふでもないかは知れないが、數年前に大和の十津川を拔けて熊野へ出たことがある。その時、その十津川の上野地といふところに泊つて、宿屋の主人からきいたのに、十津川といふのは全村五十二部落に分れ南北十三里東西七里に亘る日本第一の大村で、村民は何れも平家の落武者の後裔ださうだ。昔はその盡くが郷士として名字帶刀を許され今では何れも士族ださうだ。家の營みは何をしてゐようと槍一筋に大小、劍術の道具を備へてないものはなく、男と生たものは子供の時から竹刀をもつて打つたり突いたりの稽古勵んでゐるのださうだ。風習として一寸の遠出にも必ず腰に一本横へる。これは特に十津川村民だけに公許されたものださうだ。さういはれゝばその日も途中で、九寸五分程の脇差を横たへて蝙蝠傘をさした或人に行あつた。名義は山刀といふのだらう、その拵へは絲卷乃至赤木東黑漆若しくは栗皮朱など中々數寄も凝らしてあればいかめしくもあつた。そしてもう一つ妙に思つたのはその村の人々、宿屋の主人までが、みんな髯を蓄へて頗る威厳を作つてゐる事だつた。

この十津川に明治二十二年とかに大水害があつて、田無瀬たんてところは全村一軒殘らず押し流されて了つた。その災害を被つた各所の部落民を盡く北海道へ移住させ、土地を與へて開墾させた。瀧川町の近くの新十津川村といふのがそれだ。十津川米といつて同道有數の良米の產地である。その新十津川村へは行つて見なかつたが、帶刀の方は兎に角、髯だけは依然として保存されてゐる事だらうと思ふ。

それから北海道のアイヌ部落のうちで訪問に便利なのは室蘭線の白老といふ驛の近くに散在する部落だ。そこにはアイヌの子弟丈を收容する特殊小學校がある。そこの先生の話に、アイヌ婦人の口の端にする黥は配偶のあるなしに拘らず婚期が來れば誰でもさうするものださうで、つまり發毛の公示なのださうだ。蠻風だなどと一概にいひはするものの、永くアイヌ等と一しよに生活してゐると、自然彼等の黥といふものに對する觀念なり又その粉飾的價値なりが解つて來る。殊に十六七位ゐの少女が、チョイと鼻の下を黑くしたさまなどは一種媚惑的な美しさがある。——といふ事だ。

年寄り夫婦が番茶を煎じてくれた。柴つけの蓋ものにコケ桃の鹽漬けにしたのを駄菓子にそへて出した。店には金富士といふレツテルのサイダーそれから札幌ビールの瓶などもならべてあつた。

茶店の家根を越して向ふの山の背から谷へかけて、殘雪が仄暗い中に薄いコバルト色をぼかして幽に光つてゐた。

山頂の日の出の壯觀はどこも同じだが、眞朱の烟の中から、火焔のやうになつて上つて來る大日輪の眞下に、靡き平いだ一面の大深林の莊嚴な眺めは内地のどこの山でも見られない。やがてして空の茜は紫に、紫は藍に、明るく晴れ上つて行くのにつれて樹林は漸徐に影から姿を、形から色を整へて來る。碧の梢を果てもなく連ねて、遠く雲霧の間へと浪のやうになだれて行くさまは、樹海といふ言葉の如何に適切だかを語つてゐる。――その樹海のある隙間々々に光る燕麥の丘、それからあちこちに散點する牛の放牧場、馬の放牧場、奇峭な遠山＝有珠岳、駒ヶ岳などの凡ての山その物が盡く大陸的だ。

半月湖へはこの歸りに立寄つた。一日は舟を浮べて遊びくらし次の日は鮒を釣りながら終日湖岸のあちこちをうろついて過して了つた。三日目は雨だつたので朝から書きものをして、四日目の午後雨の晴れ間を見て倶知安の町まで歸つた。

本當に夏であることを忘れてゐた。日中タオル浴衣では少し冷え冷えするのでシャツを着た位だ。夜に布團をかぶつて臥た。四圍からは樹底しれず密生した林が犇々と押し迫つて、その青暗い影が絶えず湖上を壓した。水は碧瑠璃をのべたやうに淸らかに澄徹して偶々小さな魚の跳ねる音にも幻覺を起させるやうな靜かさだ。その湖の緘默に對してポツ然と浮木の赤い一點を凝視してゐると、いつか自分迄が凄じさに同化したやうになつて了ふ。二十日もこんなところで過したら屹度骨の髓まで綺麗な人間になつて了ふだらうなどと想つた。

倶知安の町には東京からの爲替を待つて三日ばかり滯在した。毎日毎日羊蹄山を見、そこに變幻去來する白雲を見て暮らした。支那人が白雲を見て樂しむ心持ちも幾分か理解されたやうな氣がした。

たゞ少し困つたのはどこへ行つても食物の惡いことだつた。今度行くときにはテントと罐詰を用意して半月湖畔と限らず、北海道のあちこちを足の向く儘旅行して見たいとも思つてゐる。

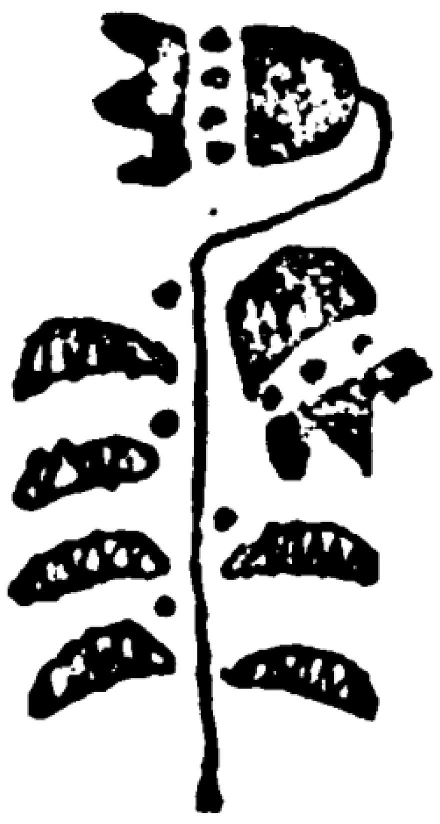
近頃では日本アルプスも少し鼻についたし、踏破だの縱走だのいふことも何だか兒戲に類するやうに考へられてならない。餘り山はないが、北海道の山々はどこへ登つても面白い。のみ

ならず變つた旅行、變つた避暑地——そんな處を求める人は、是非一度北海道をテント旅行なりテント生活なりを試みることだ。

大して不思議といふでもないかは知れないが、數年前に大和の十津川を拔けて熊野へ出たことがある。その時、その十津川の上野地といふところに泊つて、宿屋の主人からきいたのに、十津川といふのは全村五十二部落に分れ南北十三里東西七里に亘る日本第一の大村で、村民は何れも平家の落武者の後裔ださうだ。昔はその盡くが郷士として名字帶刀を許され今では何れも士族ださうだ。家の營みは何をしてゐようと槍一筋に大小、劍術の道具を備へてないものはなく、男と生たものは子供の時から竹刀(しない)をもつて打つたり突いたりの稽古勵んでゐるのださうだ。風習として一寸の遠出にも必ず腰に一本横へる。これは特に十津川村民だけに公許されたものださうだ。さういはれゝばその日も途中で、九寸五分程の脇差を横たへて蝙蝠傘をさした或人に行あつた。名義は山刀といふのだらう、その拵へは絲卷乃至赤木柬黑漆若しくは栗皮朱など中々數寄も凝らしてあれば厳(いか)めしくもあつた。そしてもう一つ妙に思つたのはその村の人々、宿屋の主人煙草屋荒物屋の主人までが、みんな髯を蓄へて頗る威嚴を作つてゐる事だつた。

この十津川に明治二十二年とかに大水害があつて、田無瀬なんてところは全村一軒殘らず押し流されて了つた。その災害を被つた各所の部落民を盡く北海道へ移住させ、土地を與へて開墾させた。瀧川町の近くの新十津川村といふのがそれだ。十津川米といつて同道有數の良米の産地である。その新十津川村へは行つて見なかつたが、帶刀の方は兎に角、髯だけは依然として保存されてゐる事だらうと思ふ。

それから北海道のアイヌ部落のうちで訪問に便利なのは室蘭線の白老といふ驛の近くに散在する部落だ。そこにはアイヌの子弟丈を收容する特殊小學校がある。そこの先生の話に、アイヌ婦人の口の端にする黥(いれずみ)は配偶のあるなしに拘らず婚期が來れば誰でもさうするものださうで、つまり發毛の公示なのださうだ。蠻風だなどと一概にいひはするものの、永くアイヌ等と一しよに生活してゐると、自然彼等の黥(いれずみ)といふものに對する觀念なり又その粉飾的價値なりが解つて來る。殊に十六七位ゐの少女が、チョイと鼻の下を黑くしたさまなどは一種媚惑的な美しさがある。——といふ事だ。



# 東山から熱鹽

近藤浩一路

會津は再遊である。今度は中村鶴心堂主人と二人連れだ。前には夜行を選んだがそれでは途中の風景に浸りながら行く譯に行かぬので特に朝の九時上野發に乘り込む。これなれば丁度東山へ夜になつて到着するので都合がよい。赤甕會の連中と行つた時は晝日中着いたので折角の東山も乾燥しきつたものに感じてしまひ第壹印象を臺無しにしてしまつたので今度はたしかにこれを恢復することの出來ると信ずる。鶴心堂主人は東京に生れて京都に修業に行つてゐた人なのでまづ〳〵純粹の都育ちでしかもこれまで殆んど旅に出たことがなかつたといふので、都を離れて行くといふことが非常にもの恐ろしく思はれるといふことから吾等と同行を敢行した次第だ。僕たちのやうな旅行好から見ると何だいい年をして、心細い事をいふやつだと思はれるのだが、よく考へて見ると都育ちのものにはかくあるべき筈のものかもしれない私は上野廣小路で有名な永藤のあんぱんを一袋買つて乘り込むと鶴心堂は大きな風呂敷の中からバナヽ、枇杷なぞを開放する、これを兩人ぱくつき乍ら雨中の苗代など興多く眺めて行く。

六時間の後郡山驛で乘換へ岩越線の聊貧弱な二等室の中から高玉温泉や猪苗代湖など鶴心堂の爲に車窓から指摘しつゝ夕方の七時に漸く會津若松へ到着する。生憎雨が盛んに降り出して來た。同車した他の客がどうも自動車へ乘るらしい氣配なので若し先じなかつたら、次ぎの自動車（それとても二十分程待てば引返して來るのだが）まで待たせられるに違ひないと只默々のうちに無暗に鶴心堂をせかせ第一番にプラットホームを出る

と果して驛前に待つてゐた東山行の自動車はたゞの一臺、私たちのすぐ後から來た件の連中は次ぎまで取殘される氣の毒な運命に逢着してしまつた。買切一臺三圓、自動車は雨をついて實に全速力で走つた。東京のより田舍の自動車の方が目茶に早く走らせる。二十分もかゝらぬうちに暗の中に狹まつて行く溪間の路を走るかと見るうちに橋を渡つて向瀧溫泉旅館の明るい玄關に横づけされる。中は意外にも非常に混雜してゐる樣子。表二階の中央の室に案内されたが先客の慘澹たる殘骸がまだ片付けずにそのまゝになつてゐるので、急に掃除に着手するやら大騷ぎ、其片付くまで廊下で立往生はあまり感心しなかつた。其間も各室々から絃歌が湧き上つて來る。丸で女郎屋へでも揚つたやうな感じだ。騷々しい。

漸く片付いて落ちつき場所を得たはよいが、十五疊のだゞ廣い中に、床の間といつても間に合せの持運びの出來る例の簡便床の間が軸物なしで言譯ばかりに置いてあり旅館といふより料理屋へ來てちよいと一杯といふ時の感じしか起らない。前に來た時泊つた新瀧旅館に比べると雜風景この上もなしだ。それであたりが騷々しいといふ譯なので、これなら直接喜多方へ行けばよかつたと後悔せざるを得なくなつた。實は汽車の疲勞の殘つてゐる間にすぐ多くの人に面接する煩を避け、一先づ此處で旅疲を休めて然る後悠々と喜多方情調に接しやうと考へたからだつたのでこの有樣では全然當が外れてしまつたといふもの。迚もゆるりと靜かに寛ぐ事は出來さうもない。東山といふ處はまあづこういつた處なのだ。と諦めて何はともあれ一浴しに行くと以前とまつた新瀧の湯殿とは余程趣が違ひ落着があつてよいと思つた。全體東山の溫泉はたゞ自然のまゝに湧き出す溫泉といふだけで何等効驗のないのは世間の定評だが、旅に溫泉ほどいゝものはない。その湯上りの上氣した頬を滴るやうな雨中の翠微に對し乍ら欄に凭る心地つたらない。何分にもあまりに周圍が陽氣過ぎる。何かといふと苦情ばかり云つてゐるうちに隣室の川つきの坐敷が定つたといふのでそれへ席を移すことになると不滿の中にも聊か蘇生の氣味がした。成程此處なれば雨の音も河の音もはつきり聞えてたしかに心の澄むのを覺える。しかも河鹿の聲が頻りに聞えて來る。始めて來た鶴心堂は非

雜錄

# 東山から熱鹽

近藤浩一路

會津は再遊である。今度は中村鶴心堂主人と二人連れだ。前には夜行を選んだがそれでは途中の風景に浸りながら行く譯に行かぬので特に朝の九時上野發に乘り込む。これなれば丁度東山へ夜になつて到着するので都合がよい。赤甕會の連中と行つた時は晝日中着いたので折角の東山も乾燥しきつたものに感じてしまひ第壹印象を臺無しにしてしまつたので今度はたしかにこれを恢復することの出來ると信ずる。鶴心堂主人は東京に生れて京都に修業に行つてゐた人なのでまづ〳〵純粹の都育ちでしかもこれまで殆んど旅に出たことがなかつたといふので、都を離れて行くといふことが非常にもの恐ろしく思はれるといふことから吾等と同行を敢行した次第だ。僕たちのやうな旅行好から見ると何だいい年をして、心細い事をいふやつだと思はれるのだが、よく考へて見ると都育ちのものにはかくあるべき筈のものかもしれない私は上野廣小路で有名な永藤のあんぱんを一袋買つて乘り込むと鶴心堂は大きな風呂敷の中からバナヽ枇杷なぞを開放する、これを兩人ぱくつき乍ら雨中の苗代など與多く眺めて行く。

六時間の後郡山驛で乘換へ岩越線の聊貧弱な二等室の中から高玉温泉や猪苗代湖など鶴心堂の爲に車窓から指摘しつゝ夕方の七時に漸く會津若松へ到着する。生憎雨が盛んに降り出して來た。同車した他の客がどうも自動車へ乘るらしい氣配なので若し先じなかつたら、次ぎの自動車（それとても二十分程待てば引返して來るのだが）まで待たせられるに違ひないと只默々のうちに無暗に鶴心堂をせかせ第一番にプラツトホームを出る

と果して驛前に待つてゐた東山行の自動車はたゞの一臺、私たちのすぐ後から來た件の連中は次ぎまで取殘される氣の毒な運命に逢着してしまつた。買切一臺三圓、自動車は雨をついて實に全速力で走つた。東京のより田舍の自動車の方が目茶に早く走らせる。二十分もかゝらぬうちに暗の中に狹まつて行く溪間の路を走るかと見るうちに橋を渡つて向瀧溫泉旅舘の明るい玄關に横づけされる。中は意外にも非常に混雜してゐる樣子。表二階の中央の室に案内されたが先客の慘澹たる殘骸がまだ片付けずにそのまゝになつてゐるので、急に掃除に着手するやら大騷ぎ、其片付くまで廊下で立往生はあまり感心しなかつた。其間も各室々から絃歌が湧き上つて來る。丸で女郎屋へでも揚つたやうな感じだ。騷々しい。

漸く片付いて落ちつき場所を得たはよいが、十五疊のだゞ廣い中に、床の間といつても間に合せの持運びの出來る例の簡便床の間が軸物なしで言譯ばかりに置いてあり旅館といふより料理屋へ來てちよいと一杯といふ時の感じしか起らない。前に來た時泊つた新瀧旅館に比べると雜風景この上もなしだ。それであたりが騷々しいといふ譯なので、これなら直接喜多方へ行けばよかつたと後悔せざるを得なくなつた。實は汽車の疲勞の殘つてゐる間にすぐ多くの人に面接する煩を避け、一先づ此處で旅疲を休めて然る後悠々と喜多方情調に接しやうと考へたからだつたのでこの有様では全然當が外れてしまつたといふもの迚もゆるりと靜かに寛ぐ事は出來さうもない。東山といふ處はまあづこういつた處なのだ。と諦めて何はともあれ一浴しに行くと以前とまつた新瀧の湯殿とは余程趣が違ひ落着があつてよいと思つた。全體東山の溫泉はたゞ自然のまゝに湧き出す溫泉といふだけで何等効驗のないのは世間の定評だが、旅に溫泉ほどいゝものはない。その湯上りの上氣した頰を滴るやうな雨山の翠黛に對し乍ら欄に凭る心地つたらない。何分にもあまりに周圍が陽氣過ぎる。何かといふと苦情ばかり云つてゐるうちに隣室の川つきの坐敷が定つたといふのでそれへ席を移すことになると不滿の中にも聊か蘇生の氣味がした。成程此處なれば雨の音も河の音もはつきり聞えてたしかに心の澄むのを覺える。しかも河鹿の聲が頻りに聞えて來る。始めて來た鶴心堂は非常

に旅の快味を覺えたらしく「たまりませんね」と長つ首をひねつて見せるのであつた。私も急に愉快になつた。そこへ今度出て來たのは十三四になる桃割に結つた女の子、點々と口を噦して木像の人形がばね仕掛で動くやうに茶器や膳部を運んで來る。此女の子が卽ち東山情調の特種のものだとはさる人の東山紀行で讀んだ事があるが、さてはこれだなと思ふと一層彼女の一擧一動が注意をひく。

「おまへは何といふ名だね」聞き乍らも迚も滿足な解答は得られまいと大呑込みに呑み込んでかゝつた處、何ぞしらん今[illegible]言をつゞけてゐた彼女は「花！」と立派に明瞭に返事をして吳れたのには面鶻を食つたほどに驚かされる。こいつ迂潤な眞似は出來ないと直ちに態度を愼重に代えてそろ〱質問を試みて行くと彼女は今云つた寸法で沈默のうちにどし〱返事だけは明確に片付けて行くのだつた。彼女は今は給仕女であるが仍ては三味線とつて客席に侍する藝妓になる運命におかれてゐるのでつまりSの卯なんだ。東山へ來てこうした



女の子の出現を見たときはつきり其客は少々甘く見られた譯になるのださうだ。といふのは最初客が來ると變手古な至極つまらない女中が出て來て散財する客か否かを探知し若し甘さうな客と見るとこれらの少女を出して一種の遊蕩氣分を徐々に煽り上げるといふ仕組になつてゐることは其東山紀行に出てゐたと思ふ。實際東山は靜かにねむるには水の音があまりに近すぎる。

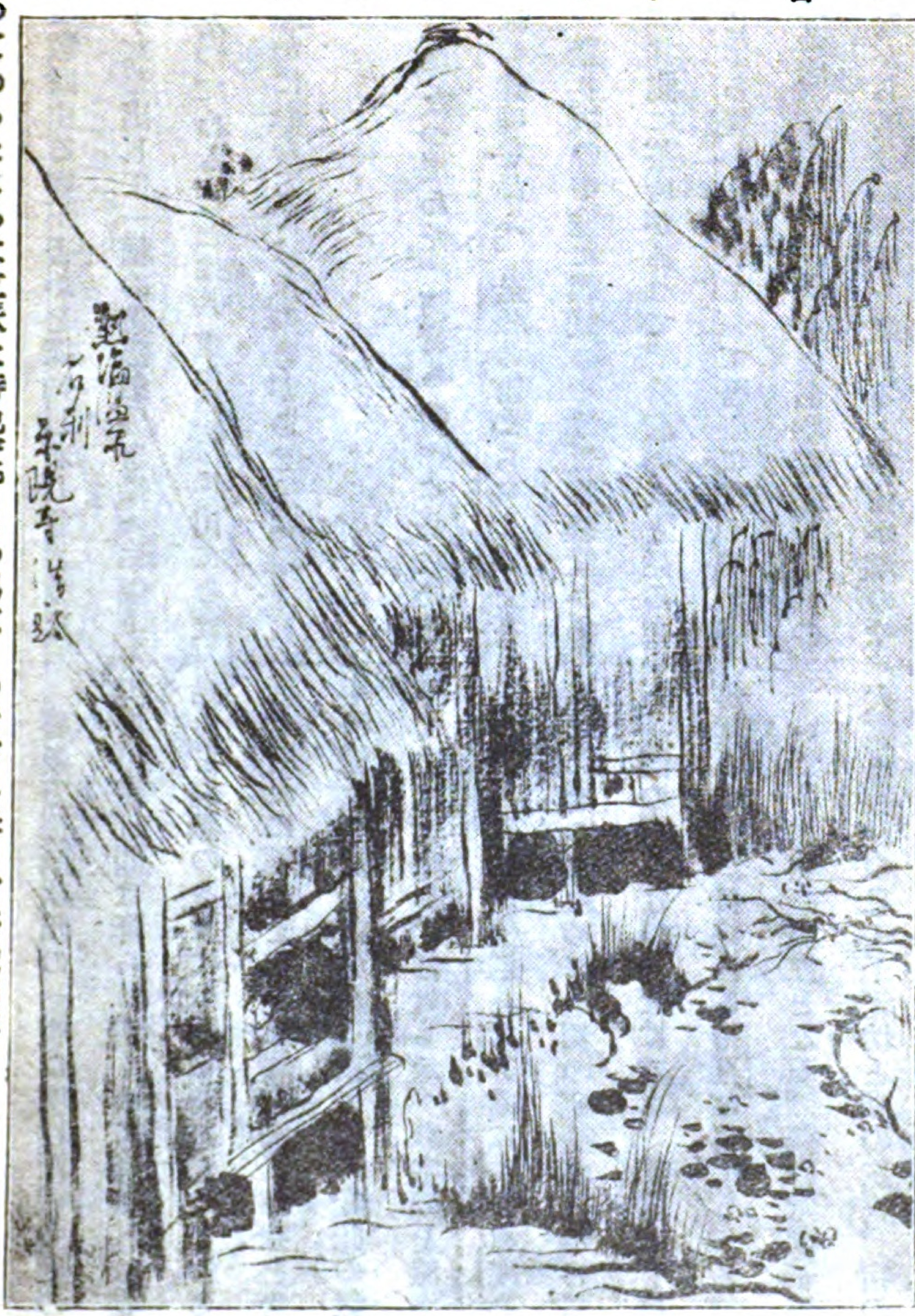
翌朝は意外にも天氣になつてゐた。河音も清々と身にせまる。來た序でに白虎隊の義魂を弔ふ。若松の町からちよいと折れるとすぐであつた。登り坂の中途に螺螄のやうな螺螄堂がある。特異な建築物だ、其側に茶店があつて、參詣の人と見ると老婆が線香に火を點じ乍ら後からついて來て吾等に代つて墓碑に手向けて吳れる。此茶店の名物は豆腐、好な名物だが見晴しの四阿でこいつを食べながら若松の城趾を眺めると旅情が潮のやうに湧いて來る。喜多方町は若松驛から一時間もかゝらなかつた。熱鹽溫泉は此處から鐵路から脇道へ二里はいつて行かなくてはならない。今度の旅は東山よりこの熱鹽が目的で喜多方の次ぎの驛山都の田代氏も此喜多方から同勢打揃つて、私を案內して吳れる約束になつてゐる。

喜多方笹屋旅館の一夜は明けた、今度の旅はもう梅雨に入つて旅中幾日間は降られずくめに降られる覺悟で來たのであるが殆んど偶然のやうに今朝は晴れきつてゐる。雲の輝き、青空の光。それに地上を吹く風は爽快な涼味を含んでゐるので全く最も清澄な初夏の氣分だ。東京で一度此の氣分を味ひ今又此處に來て之れを味ふ。何とも云へぬ幸福を感ずる。殊に東山の一夜と昨夕喜撰庵の優遇とで非常につかれてゐた奴をぐつすり寢込んでしまつたために一切の疲勞が拭ひさられてしまつたのだから身體の輕くなつただけでも、素敵だ。庭の芍藥と名はしらぬが紫の草花が目覺めるやうに目にうつる。

いよ／＼熱鹽出立となる。鶴心堂は笹屋に居殘り同行は田代大盡と笹屋の息子千光坊と私の三人。宿の前から馬車に乘る。形は一寸會津式で他所のとは違つた處があるエン太郎ともガタ馬車ともいふ奴さ。乘合は四十恰好の女と其子供が二人にもう一人の男の客であつた。後から千光坊などとは知り合ひの男と

更に一人の學生とが割り込んで來たが滿員の爲學生だけは踏臺につかつて窓の縁につかまり熱鹽まで立往生は氣の毒に思つた。

一町程行くと色々な荷物を持つた田舍紳士が一人馬丁臺へ乘かつて來る。車中はこれで馬鹿に賑やかなものになつた。馬丁は初太郎といつて田代大盡が大觀の作右衛門に似た顏をしてゐると感じた、成程そんな顏をしてゐる但し目の縁がただれたやうに紅くなつてゐ、ところは立派な特色だ。この馬車といふ奴が素敵もなく暢氣な野情を帶びた愉快なものである。



人間の運搬ばかりでなく途中の村々の荷物運搬御用を兼ねてこさる。だから路草を食ふ事夥しく一町行つては荷物を下ろし一町行つては荷物を預り馬脚はどろして捗らない。殊に蹄鐵工場で馬脚の修繕をやらせる間ぼんやり待たせられたのは閉口した。しかしこんな遲が熱鹽道の愉快ないかにも暢氣(のんびり)した感を與へる特色かもしれない。いつまで待たせられるか見當もつかぬのに狹苦しい馬車の中に閉籠つてゐても局がないといふので下へ降り、蹄鐵師がフイゴをプー〱やつたり眞紅に燃えた鐵の蹄を馬の足にあてがふとき爪が妙な臭ひをしてチユーツ

と燒きつく處などをさも大事件のやうに見てゐる間、眞晝の村の靜かさの中を燕が低く飛びかわす、蝶々が紛れて來る。川端に菖蒲が紫の目を見張つてゐる、名物の桐の色の香りが何處ともなく流れてくる。といふ風で初夏の引締められるやうな氣分のうちにいかにも春のやうな餘裕が求めずして四周に搖曳してゐる處などほんとに忘れられぬ情趣を覺えずには居られない。

熱鹽までは二里半といふに普通馬車は往き二時間歸り一時間の期定、それからして可成閑漫なのに吾等の此の初太郎馬車は殊に二時間半を要したのは事實であつた。途中あちこちで路草を喰ふ許りか走るべき平地の大通でさへ何人の步行と大差のない遲々たるものであるから驚く。學生は時々馬車を下りて近道を靜々と步み尚且向ふで馬車の來るのを待つてゐるといふ風だから大抵想像がつこう。たゞ途上平坦な路も流石に會津桐の名產だけに桐の花の芳香と其花の群青のやうな紫色のその中を行く旅情だけはどうしても此熱鹽道でなくては味はれぬものと云ひたい。熱鹽へ着いたのは丁度眞晝である。生憎の事にはこの四月十七日に全町悉く火災の爲め烏有に歸し、殆んど恢復の見込なしと新聞で聞いてゐたし無論其燒跡の慘たる有様を想像して覺悟はして來たのであつたが成程只一軒入口の溫泉宿が燒け殘つただけ其他は只土藏を殘してゐるばかり、こう見た光景はいかにも淋しさうに其當時の慘狀を想像させるものがあるが、それは只無理に想像させる丈で實際燒け出された土地の人々には誠に相濟まぬ言草だが、溫泉といふものがあるために燒跡の悲慘は不思議に打消されて、いかにも長閑な原始時代の野の生活を感ぜしめるものがあつた。

しかし今の場合泊るべき家とては其入口の災厄を免れた一軒の旅館の外は全く客を迎えるどころの騷ぎではなかつた。こんな時に來る客は餘程間拔けたものでなくてはならない。幸ひ吾等一行は千光坊の親戚が此處で矢張笹屋といつて第一位の旅館を營んでゐたのが不幸にして燒け出されてしまつたが、その土藏だけは頗る完全に殘つてゐた爲、そこに泊めて貰ふ事に見當がついてゐたから間拔の仲間入をせずに濟むといふもの、兎も角も笹屋の燒跡を弔ふ笹屋は丁度町の突當りの崖に沿ふて幾棟かを段々に重ねた建物だつたらしい。土藏だけがチョコナンと

繁る若葉の山裾に瓦に焼かれたと見えて菰を一面に被つて案山子の頬冠のやうになつてゐる外景は頗に慘めだが内へ入ると實に堂々たる座敷、此處の名刹示現寺は燒跡から石段を上るとすぐだ。亭々と樹つた老杉に暗くとりかこまれてゐる。鐘樓を兼ねた山門の形は特種な面白いもの、奥深く庫裡へ入ると、天井から駕籠が二挺下つてゐていかにも古寺の感を起させるものがあつた。若い僧侶が出て來る。これが住職らしい。よく〳〵見ると今さつき、野天湯（溫泉）の中に浸つてゐる、若衆はこの住持さんだつたのだ。住持は實物を一々說明して吳れる、開祖の黎の杖、木履、其他数品いづれも古色を帯びて所謂有難いものばかりであつた。しかしこのありがたいものよりも寺そのものが吾等にはより以上に親みを深からしめた。實に荒廢してゐる。宏大な建物は五百年前の昔からその儘殘つて來たもので少しも修繕の跡の見えない處、庭の池の水草蔓るまゝの有様などほんとうにうれしいもの、碧梧桐氏も此寺へ來て示現寺荒廢して云々と一句やられたといふが實際その荒れ果てた處が氣に入つた。それで又此寺に住むこの若い住持さんがなか〳〵の變りもの、昨年私の友人の畫家が此寺に室をかりて



夏中籠つたことがあるが、其友人の話によると實物を見に來る入湯客のうちの美しい人と見るとすかさず、まだあちらに立派な寶物があるといつて友人の室へ案内して友人を喜ばしたり、なか／＼悪戯をやつたりする。何しろ法道を說く和尚さんからしてこんな風だから此の溫泉場の情調の悠暢で可成浮世離れのしてゐたことが想像される。これも實際に就て見ることは出來なかつたが此處には觀音參りといつて近鄕近在のお百姓だち男女のものが團隊で入り込む季節があり隨分其時は狹い少さな小山のほら穴のやうな此溫泉場はわれ返るやうな騷ぎを現出するさうだ。觀音參りといふ名稱だけ聞いても餘程變つてゐると思はれるが內容を聞くと寧ろ驚くほどの話の種がある。唄は忘れたが玄女節と云つて此連中につきものの音調の不可思議な唄があつて、隣合はせに泊つた知らぬ同志が此唄をうたひ此唄の音律をかり胸のうちのほどを唄ひかわす風習があり又湯槽の周圍を舞踊場と心得、裸體の女許りが唄ひ乍ら一晩中踊りまわるといふ。可成原始的なものらしい。

笹屋の土藏へ戻つて浴衣に着換へ溫泉に一浴を試みる。昨日までは板が張つて立派に天井も出來てゐたのだがそれは借りものだつたとかで其貸主から剝ぎとられてしまひ丸太の三角形の屋根柱だけは殘つてゐるが上は全く靑天井。湯につかると山風が首から上を掠めるので上氣した頰のあたりは何とも云へぬ輕快な氣を覺える。雨の日には皆傘をさして這入つたさうだが其珍妙な光景は一寸でもよいから見たいやうな氣もする。此際だから食ひ物なんか贅澤は云はれないが却つてすぐ裏の山からとつて來たといふ蕨、蕗、椎茸の類は流石に山の溫泉の難有味を推賞させずにはおかれない。常日なら肴屋も每日かつぎ込むが燒失後は商賣にならぬと見切つて一人もやつて來ないさうだ。それで食物は當分矢張り原始時代に歸つて前述のやうな山の名物ばかりで滿足しなくてはならなかつた。但し晩飯の時の鰊の天麩羅は實に振つた御馳走だと思つた。忘れてゐたが燒跡の便所は實に珍妙なもの、周圍は腰の邊だけグルリと葭簀張で入口は莚を一枚ぶら下げてあるだけ、實に御粗末を極めたものだ。中でしやがむと外はすつかり見え、馬が通る、人が行く、野天湯の裸體男女がすぐ目の先にちらつく、景色は馬鹿によいがいつ

そ氣まりが惡い位だ。

示現寺の入相の鐘を聞いて暫らく經つてから日の暮れてしまつたのに氣づく、外はもう眞暗になつてゐる野天の溫泉は電燈の乏しい光りの中に村の人々を迎へて賑はつてゐる。私は後から來た川上氏を連立つて建前振舞で賑はつてるのを見物に出かける。此の村では一軒の家に何でも振舞事があると其家では凡てを村の人々に一任する習慣になつてゐるさうだ。此の建前もさういつたやり方かもしれぬ中々の大振舞だ。屋臺骨の中の土の上に莚や板を敷いて、大工をはじめ村の人々でのめや唄への大騷ぎだ。面白さに氣をとられてると振舞主の娘が川上氏を發見してそれと親[illegible]に知らしたものだから忽ち出て來て川上氏を無理に内へ引き入れる、私も卷添を食つて、この振舞の渦卷の中へ引き込まれてしまふ。這入つたが最後なか〳〵退却不可能といふ事になる。大きな朱塗の盃や茶碗に酒を溢れる程注いで、惡く強ゆるので實に閉口した。しかし此土地でどうかして例の玄女節を聞かうと思つてゐた。その玄女節を偶然唄ひ出した。すると川上氏まで音頭をとりはじめいよ〳〵簡單には此處を拔け出すことが出來なくなつたが玄女節を聞いて何だか思ひを遂げた樣な氣がした。あくる日は又初太郎馬車で喜多方へ長閑な氣持で戻る。

この紀行は昨年の六月上旬から歸つて來てたゞ無暗にかきつゞけておいた一種の日記に過ぎず、殊に熱鹽の如きは燒失したばかりの處へ出會したのであるから其土地の眞のそして普遍的の情調を知る事の出來なかつたことを今更遺憾に思ふ。其後笹屋の主人からの手紙によると熱鹽も復活したらしいが今度は町の場所を替えて、兩岸草深い河を見晴らす、小高みの處へ移轉したので昔日の感は全く消失してしまつた事になるが觀音參りも玄女節も相變らず賑ふには相違なく、機を見てもう一度行つて見たいと思つてゐる。あたりの風景は山もあり河もあるが頗る平凡を極めてゐるが、あまり目や頭を刺激しない平凡を極めてゐる處が此處の特長であり、又私の此頃憧憬する場處なのである。つまり、野といふ感じの強い處、重ねて云ふが喜多方から此の熱鹽へ通する道中が馬鹿によい。



# 信州星野溫泉

與謝野晶子

信州の星野溫泉へ此夏は是非行つて御覽なさいと山本畫伯が勧めて下すつたのは、去年の四月の櫻の花の散りかかる頃のことであつた。私等と山本さんとは何處でそんな話をしたかと云ふと、書き物をするために攝津の武庫溫泉へ行く私等と、丹後へ少年の自由畫に就ての講演に行かれる山本さんとが偶然に乘り合せた汽車の中でのことであつた。落葉松の林の道を馬車に乘つて行くこと、其處の溫泉宿の若い女主人のこと、私達には大久保氏が別莊を貸してくれるであらうと云ふこと、是等のことを山上の朝夕の雲の行きかひなどを既に心に描きながら私は次々に聞いて居た。

東京へ歸つてからも私は落葉松の山に包まれた星野溫泉を時々想像して見ることを忘れなかつた。けれども地理書や名所案內記にはもとより、山本さんの外には誰からもまだ名を聞いたことの無い星野溫泉とはどんな字で書き現す所とも知らなかつた。或は保科であるのかも知れないと思つたこともあつた。

私等がいよいよ星野溫泉へ出掛けることになつたのは八月も末に近い日であつた。丁度紀州の西村さんが二人の子を伴れて東京へ遊びに來た時だつたので、其人達を誘つて立つ日の前日に、山本さんを京橋の鴻の巣へ來て頂いていろいろのお話を伺ふ會合をした。日中に其處へ着かぬやうに、涼しい夕方前に着くやうにと汽車の時間までも選んで下すつた山本さんの、人間及び自然に對する好意に私達は深く動かされた。鴻巣山人も同行したいと云ふ望みだつたので一行に加へ、私達と西村氏親子三人とその親戚のふか子さんが先發になつて午前十一時頃の汽

車で上野を立つた。

碓氷の彼方は豫期した以上に秋だつた。

二十六都の北の洞門をくぐれば草に秋風ぞ吹く

沓掛の驛の前に支那めいた極めて小い馬車が私等を待つて居た。皆かなりな量の荷物を持つて居るので、馬車を二臺寄越して置いて欲しいと賴んであつたのであるが、それは私等の想像が大ざつぱな間違ひで、淺間の山蔭の小い星野溫泉に、客を運ぶ車が二臺も備へて置かれる筈はないのである。黑煤けた沓掛の町へ白い條を引いたやうに小い川が長々と流れて來て居た。荷物は一時驛へ預けたために私等七人と出迎へてくれた明星樓の女主人のやつと乘ることの出來た小形な車は、殆ど不釣合なくらゐの逞しい栗毛の信州駒に由つて引いて行かれた。落葉松の林の前の道は山の氣に濕つて、薄物を着た人達は黃昏の淋しさをしみじみ感じた。冬の日に氷の作られる棚のやうな建物の前を過ぎて、水の音のいよいよ烈しくなつて來たのを覺えた頃、女主人は私等の泊る別莊の灯が見えると山の上の方を指して敎へてくれた。黃昏の光の中にもその家の甍が仄かに見えて、高い所にあるために社のやうにも思はれ、また灯が點つて居めに其山全體が祭壇のやうにも思はれた。池が有つて、西洋花の澤山植つて居る廣場の向うに明星樓があつた。浴室の横から山へ五十間程上つた所に山莊はあつた。その門と半町程離れて向ひ合つたのが山本さんの畫室である。私達のために山花を挿けて畫室の棟續きの座敷へ行つておいでになつた大久保氏を私等は直ちに訪ねて行つた。初秋の冷かさが白く塗られた幾つもの部屋に滿ちて居るやうな快い家である。裏の窓からは淺間山の煙が横に靡くのが見えた。千が瀧の方から來る流で、遠く深い溪を傳つて居る水は此處まで音が聞えない、唯だ油のやうに見えるのであつた。

私等の居る山莊の縁側からは西南に甲武信嶽が見える。その下に離山があつて落葉松の梢が目の下の溪にまで續いて居る。左の縁側からは畫室の裏に遠く見えた川が一回りして白々と流れて來るのが眺められた。

しらじらと雲と水との起き出づる淺間の山の朝の澄かな

溫泉は熱度が低いために山の爺やが暗い内から起きて落葉松

の枯枝を焚いて湯加減を作つて居た。

水色の空も來りてひたるなり淺間の山の明星の湯に

悲しけれ北の信濃の山あひの明星の湯にわがあることも

山莊から溫泉へ通ふ路の中程に淸水が湧いて居て、私等は其處で口を漱いでは草枕の旅人らしい氣持を朝々味つた。

波よりもあまた重ることにより信濃の山は悲しかりけれ

私達は山の馬車で輕井澤へ行くことを思ひ立つて、千が瀧の沖野夫人をも誘ひ、離山の麓を傳つて行つた。支那の四川省にでもありさうな馬車に乘り零れた私達を迎へた輕井澤ホテルのボオイは目を圓くして居た。訪れて夕方にお別れして歸る時に有嶋生馬先生が二町程も送つて下すつたのであるが、私達の乘つた小い馬車の動き出した刹那は悲しかつた。四川省では無くて其時は胡地へ引かれて行くやうな氣がしたのである。星野溫泉へ歸ると河崎女史と伊上さんが着いて居られた。

私等は或時は明星樓の階上の部屋とか、其處の裏の川に近い別莊とかで食事をしたのであるが、大方は輕井澤の材料で鴻巣山人に出つて調理される草枕式の物を食べて居た。厨の流しのあたりは誰が摘んで持つて來るともない高原の花で埋まつて居た。小田卷草、虎の尾、藤袴の薄紫、桔梗の藍、われもかうと萩の紅、撫子をとこへしの淡紅、萱草と女郞花の黃、是等が人々に由つて或は唐紙に或は板に寫される日が續いた。

手ずさびにわれもかうなど玩ぶ人も混れる山莊の客

日の沈む方も見えずて暮れ行けば心淋しき山莊の客

山莊は朝も夕に續くごと淋しき霧の立ち迷ふかな

或日の朝早く高木さんがお着きになつた。

或日にまた件の人々は輕井澤行きを思ひ立つた。けれども、もう馬車で乘り廻ることだけは諦めて居た。私は東京から持つて來た仕事をしながら西村さんの子供達を遊ばせて居た、澤山集めて來た山苺に砂糖を掛けて一所に食べたりなどして。

水の音烈しくなりて日の暮るる山のなりはし秋のならはし

大空の星に混りて鳴く如し高き方にて鳴けるこほろぎ

他の人々より先に歸つた高木さんは明朝の未明から淺間へ登山すると云つて宿の人に用意をさせておいでになつた

# 八丈嶋の思ひ出

黒田重太郎

三等室の蠶棚の狭さと蒸苦しさに閉口して、儘よ眠つた一晩の事と、其所の床板の中央にしつらはれた、二間四方もあらうかと思はれる艙口（ハッチ）の蓋の上へ、毛布を敷て寝そべりながら、私達は船で運び出された夕食にも手をつけずに、横濱を出るとき買つたバナナを囓つて、まぢ／＼と夜の明け離れるのを待つてゐた。そして漸つと白々とした曉の光りがさし込むで來るのに力を得て、私は顔を洗ひに甲板へ出た。

四斗桶に清水を滿たしたのが据えてあつて、それを圍んで船員や三等客が頭をつき合せながら口を漱いでゐた。あたりは一面に濡れて痰や、齒磨粉のまぢつた赤い唾が吐き散してあつた。

私はそこ／＼にして其所を離れて、欄干に凭れて行手をながめた。冷たいあけ方の風が、汗に粘つた肌をすい／＼と撫でゝ過ぎる。ずつと向ふの、鉛色の光を帯びた水平線の上に、うつすら浮んでゐる尖々しい形をした、黒ずんだ嶋山の影が見られた。

――それが八丈嶋であつた。

京都あたりの、なるいカアブをした山の姿を見つけてゐる眼には、その形は一入ソヴアジユに見へたのである。『嶋も通はぬ』と唄はれて、伊豆七嶋の中でも一番にはなれてゐるだけに、幕府時代當時の爲政者に取つて、最も危險だと目されてゐた思想家達が流されたと聞いてゐるその嶋へ來たのだ。私は又少年時代に聞かされた『弓張月』の話や、芝居で見た嶋の爲朝のセーンを思ひ出して、おのづと傳奇的な空想を描き出してゐた。

その時、私の肩を叩いて、

『八丈でお降りですか？』と尋ねる人があつた。

「えゝ」と首肯くと、
「あなたはどちらの方です」とまた尋ねた。
「京都です」と答へると、
「へえゝ、京都から態々こんな所へ……御商用ですか？」とよく物を聞きたがる人と見える。
「いゝえ、たゞ遊びに」
　その人は呆れてもう尋ねなかつた。昨日の夕方船へ乗り込んだ時、私が手にしてゐたバナナを見て、船でたべるつもりとは知らないで、『態々そんなものを買ひ込んで行く人もないもんだ』と笑つた四十近い男である。夏休みを利用して、東京へ講習にでも行つて來たかと思はれる、小笠原嶋歸りの學校の先生らしい言葉つきと、身裝であつた。

×

　船は三ツ根の沖で止まつた。鋸歯を並べたやうな、黝黒な膚をした巖山の頂には、荒い潮風に吹き撓められて、枝も幹も曲りくねり、紙片をクシヤ〳〵に揉んでくつゝけた様な葉のかたまりをつけた樹が生えてゐた。巖山の根が海中へ落ちこんだ所には、白い浪の泡が一丈程も飛んでゐた。巖山の蔭になつた所に五六軒の焦茶色をした藁葺屋根が並んでゐた。いら〳〵と照りつけた海岸の砂地の上を、赤銅色を人間が走り出したと思ふと、間もなく艀を漕ぎ出すのが見えた。
　それが船の胴腹へ横づけにされると、荷物と一所に吐き出される様に其所へ降りたのは私達三人と、他に嶋の人らしい、これも赤銅色の顔をした漁師風の男や、女たちであつた。艀が漕ぎ戻される間、その人達や船頭が話しあふ言葉はまるで私達に分らなかつた。濱には人がたかつてゐた。そして船から降りた人たちと親しさうに話しあふのであつた。それらの間へ、荷物と一所に抛り出された私達は暫らく途方に暮れた。何所を何う行けばいゝのか、何所に何と云ふ宿屋があるのか、此様子では聞いても解りさうになし、勿論當ずつ方に行けさうもなかつた。私はふつと淋しくなつて沖を見た。其所には今まで乗つて來た船が、黒い煤烟を横ざまになびけ乍ら横はつてゐる。海は眩しく光つてゐた。波打際には大勢小兒が遊んでゐた。中にはカノオと云つて、黒く塗つた細長い小舟の、兩側にコの字形の木材

で張り出しをした。まるで南洋の土人が用ゐてゐるのとそつくりなのに乘つて、岸近い所を漕ぎ廻つてゐるのもある。灰色の砂地の上に莚をいくつもひろげて、干鰯の臭ひがぷんと鼻を衝いた。高い崕には何と云ふのか知らないが、長い、葦の様な草むらがざわざわ風に搖れてゐた。牡蠣殼の一面に附着した巖黝線の松林。くずれかゝつた漁家……すべては餘りに荒々しかつた。色彩に乏しかつた。私は何故こんな所へ來たのだらうと思つた。

×

そうしてゐる中に一行中のK君が、丁度濱へ來合せてゐた、此邊には珍らしく白の夏服を着て、麥藁帽子を冠つた若い人──あとで村役場の人とわかつた──に話しかけられて、宿の所も教へて貰つた。

『八丈ホテルと云ふのがありますが、それよりは三平さん所へいらつしやい。料理屋をしてゐるのですが、なに宿もしてくれますよ。氣樂な家だからまあ行つて御覽なさい』と云ふのであつた。

その人は親切に、そのあたりに來てゐた村の爺さんを呼んで、私たちの荷物を搬ぶ樣に命じた。爺さんは丁度曳いてゐた犢（こうし）──此邊では物を運搬するのに大抵犢を使つてゐる──へ行李や鞄をつけた。そして私達は坂道を上つて、白い埃りの立つ道を半道ばかりも歩いて行つた。

爺いさんは道々私たちに話しかけた。それは聽く可く明晰な東京言葉──標準語と云つて、此嶋の小學校でも課してゐるものである──であつた。まるで演說でもしてゐる樣な口調で話しかけるのであつた。砂糖黍や、唐茄子の畑の間をしばらく行くと、右手に木造の小學校があつた。爺いさんは大聲で云つた。

『これは豫算一萬圓で此頃村で建てた學校であります』先づこんな口調である。

それはよかつたが、所謂『三平さんの家』が近づくに從つて、

『旦那、あなた方は都の方だから、此所等の男よりはきれいぢや。遇平さん所には別嬪のかみさんがあるで、うまくやらつしやい』

これまで、例の几帳面な、演說口調の、切口上でやるのだか

ら、吹き出さずには居られなかつた。
村へ來た。どの家も椿の木立で圍まれて、道と、家と家との境界は石垣で仕切つてあつた。地面は一面の黑い火山灰である。三平さんの家へ着くなり、かみさんに水を汲んで貰つて、汗を拭いたり、頭を洗はうと思つて、思はず手にしたシャボンを地びたへ取り落すと、一面に黑い砂がついて、とつても〱取り切れなかつた。

×

村をあるいて、一番はじめに氣がついたのは、暑い時分でもあつたらうが、女達が皆裸かになつて、腰卷――それも紺がすりの――一ツで、穀物を臼でついてゐる風俗であつた。椿油の廣告の長い髮の毛を引ずつてゐる女の畫を見て、あれは嘘だと思つたが、實際あれ程でなくもずゐ分髮の長い女を見うけた。
此島は水に乏しい所なので、方々へ長い樋を渡して、雨水を受け、それをどの家にも備へつけてある大きな水桶へ導いてある。水桶には青々と苔が蒸してゐる。しあはせな事には度々驟雨がして、その水桶に水があふれ出すと、桶のへりを傳つてちよろちよろ小溝へ流れ出す。椿の葉蔭を洩れた丸い日かげがちらちらその上に躍つてゐるところ、私達は折々髮だき女が椿を水に浸して梳き上げ、またはその髮を洗つてゐるのを見た。
三平さんの家には風呂がなかつた。料理屋と云つても、普通の百姓家の、台所を合せて高々三間しかなく、その一間を私達が借りて額を突き合せて寢てゐると、襖一重隔てゝ時々飲みに來る村の若い衆の、わいせつな唄も聞かうと云ふ所だもの、それも無理はなかつた。で、私たちはよく風呂を借りに、隣りの家まで行つた。風呂は無果花の葉蔭の、茅葺きの堀立小屋にあつた。隣りが牛小屋で、うつかりしてゐると、屑の所から涎だらけの獸の頭が覗くのである。
風呂に續いて、私たちを弱らせたのは便所であつた。何の事はない、大きな野壺と云つた恰好で、さし渡し一間もあらうかと思はれる穴を地面へ堀り下げた上へ、板を二枚渡して、其一枚一枚を踏へて用を足さうと云ふのである。二枚の板を除いた前後左右は全く凭るべきものがない故、なれない中は余程中心をうまく取らぬと、轉び落ちて、ひどい目にあはないとは限ら

ない。況んや板がぴよぴよであるに於てをやである。屋根は、これも野壺と同じく、茅を揃へて入口から奥へ、後下りにしつらへてあるのみだ。雨の日には傘をもつて入らねばならない。夜は提灯を持つて用を足さねばならない。他に一物の蔽ふものもない所とて、其前を往き來する人にあさましい姿を見られるのはありがちの事である。よくあの邊の女たちがあれで耻かしく思はない事と思ふ。

×

三平さんの所へ泊つて、二三日經つたと思つた頃、ある朝かみさんが私たちの部屋へ來て、如何にも云ひにくさうに、金を何がしか借してくれないかと云つた。それはおたちになる時、宿料からさし引いて貰へばよいとの事であつた。後で拂つても、前に取つて貰つても同じ事なので、私たちは云ふだけの金をさし出した。そして一所に外へ出て、村をあるきまわつて、お晝になつたので歸つた。

するとまたおかみさんがやつて來て、今度はさも恐縮した風で、

『まことに今朝は濟みませんでした』と云ふ。

さう恐縮がられる譯もないので、いゝえどうしましてとか、何とか返事してゐると、も一度『本當に濟みませんでした』と繰り返して置いて、實は今朝村の駐在所から、あなた方の事に就て取調べる事があるから、とりあへず主人に來いと云つて來たのです。斯う云つては何ですが、私たちはまだあなた方がどんなお方だか、委しくは知りませんので、失禮だがどんな事になるかもしれないと思つて、宿料だけは頂戴してをかないと思ひましたので、あゝした事を申上げまして。惡く思はないで下さいと云つた。

『へゝえ、で、どうなつたんです』とたづねると、かみさんは答へて、ところが主人が行つて見ますと、村の者の中でどう間違へたか、あなた方が女連れの駈おち者だと、駐在所まで密告したものがあるのです。で、巡査がお前とこの客は女連れだらうと云ふので、まるで話がちがふものですから、よく話しあつて見るとはじめて間違ひだつたと知れた譯なのですと云つた。これには私たちも驚いた。それは三人の中でやさ男は居ないでも

ない。併し女に見違へられる程でもないのにと云つたら大笑いになつた。

『でも此邊の巡査は呑氣ですねえ。そんなら何も御主人を呼び出さないで、自分で來て見たらすぐ知れる事ぢやありませんか』と云ふと、

『えゝ／＼呑氣ですとも。此嶋では滅多に泥棒なんぞも居ないので、巡査は毎日魚釣りをして暮して居ます。制服を着てあるいてゐたのも見た事はありません』との話しであつた。

よく聞けばそれも無理がなかつた。高々周圍が何里と云ふ嶋では、物を盜つた所で山へでも逃げ込まねば隱れる所がなかつた。逃げた所で食物がなければ里へ戻らねばならない。船に乘つて逃げるにも四方は荒海である。うつかり逃げ出して、このあたりを渦卷き流れてゐる潮流にでも引つかゝらうものなら、それこそ何處まで押し流されるやら知れたものでない。そんな危險を冒してまで人のものを盜らうとするものがないのはあたり前だ。道理で、晝も夜もあけ放しで、金入も時計もほうり出してあつても、何も事が起らない筈だと思つた。

×

そんな事から私たちは、三平さん所のかみさんや主人とも親しくなつた。主人の三平さんは相當に教育もあるらしく、そして男盛りの年配なのだが、どうしたものか何もせずにのらくらして暮してゐる。時にかみさんに怒罵られて漁に行く位が落だ。

三平さんは暇があると、私たちに向つて、嶋に傳はつてゐる流人たちの話をして聞かせた。ずつと昔しの爲朝の傳說や、降つては浮田秀家の事や、維新前までの嶋の樣子を面白く話した。その大部分は忘れたが、今になつても頭に殘つてゐるのは、此嶋に流されたのは、前云つた如く、幕府に取つて危險思想家と目せられた人が大部分であつて、其等の人達は皆進んだ教養を有ち、嶋人の子弟を集めて薰陶した。中にも京都上賀茂の神官で、何とか云ふ勤王家であつた人は其功績も著しかつたと云ふ。其ために其れらの人々の感化を受けて、かゝる僻陬の地に似ず、いまでも教育の程度は比較的に高いと云ふ事である。また方言を説明するために、三平さんはこんな唄があると教へてくれた。

『ぽつくり、うんなびいて、そでひつつかみやあて、おみやど

けわす此あめに『（譯して『下駄を隱して、袖引止めて、お前何所行く此雨に』）

×

する中に、私たちは此土地にも飽いて來た。飽いたからと云つてすぐ歸る事は出來ない。何しろ横濱から出る郵船の船が一度――それも小笠原嶋往航の途中に寄るだけで、歸りは寄港しない――と、東京灣汽船會社の定期船がたしかに月二三度往復するばかりで、定期と云つても暴風でも續けば、その間だけ延びるのである。行きたい時に行け、歸りたい時に歸れないと云ふ事は、つくづく私たちをして嶋流しの感を深くさせた。そろそろ私達の顏につまらなさうな色が浮んで來たのを見ると、三平さんは親切に一層嶋を一周して來てはどうですとすゝめて、自ら案内に立つた。あたりの景色を探ぐり乍ら物の一日半もかゝれば人の行ける所だけはぐるりと廻つて來られるのである。

私たちは朝早く三平さんの家を出て、道々寫生などをし乍ら私たちのゐた村とは反對の側の大賀郷を經て其夜は樫立の三平さんの知人の家で泊めて貰つた。そして大に歡待された。そのあくる朝である。其家で朝食をしたゝめてゐると、郵便脚夫が來て其所の主人に、

『郵便物は九時までに出して下さい。××丸は正午に出帆するんですから』と告げて行つた。

『出帆』と聞くと私たちの胸は躍いた。よく聞き訊すと、一昨日あたりから三つ根の沖に止まつてゐる東京灣汽船の××丸が東京へ向けて出ると云ふ事なのである。誰れが云ひ出したともなしに、私たちは嶋まわりを止して、今日の船で歸らうではないかと相談一決した。樫立から私たちの泊つてゐた村まで、急いで行けば三時間で行ける程の道のりであつた。その時は朝の八時頃であつた。歸るとなれば矢も楯も堪らずなつて、殘り惜しさうに引き止められるのを厚く謝して、其所の主人に椿の花咲く頃の再游を期した上、三平さんを促して飛ぶ樣に宿まで歸りついた。そしてあたふたと纏めて、豫定通り××丸に乘り込んで、あくる朝東京へ着いた。私はそれ以來此嶋を見ない。もう十年程にもなるがいまだに再游の約を果たせる機會が到來しない。そしてその機會が何時來る事やら、毎日慌しい朝夕を迎へ

送つてゐる今の身の上では、それも判然しない。でも私は何時か椿の咲く頃に渡らうと云つた、其希望を棄てないでゐる。

□

京都では、その昔伊豆の嶋流しに定められた人達は、高瀬舟に乗せられて、あのせまい堀割りを淀川まで下るのであつた。別れを惜しむ人たちは涙を袖に包むで、舟のあとを追ひ乍ら伏見まで行つて、其所で鬻いでゐる泥人形を求めて、遠く行く人の道の伴侶ともしたまへと、舟に入れてやつた。それで伏見人形には美しい姉さんもあれば、爺、媼、小供、犬、猫の形まであるのだと、ある年老つた人から聞かされた事がある。その眞僞は知らないけれども其話は不思議な詩趣と色彩とを添へて、折々私の想像に上る。そして、その度に思ひ出すのはあの椿の嶋である。その爲に、最初ソオヴァジュに見え、親しみ難かつたその印象も何處か modifier されて、恐らく實際よりはいまの私の頭にある方がずつと美しいものになつてゐるのではなかつたかと思つたりする。

（一九二二、五、一）

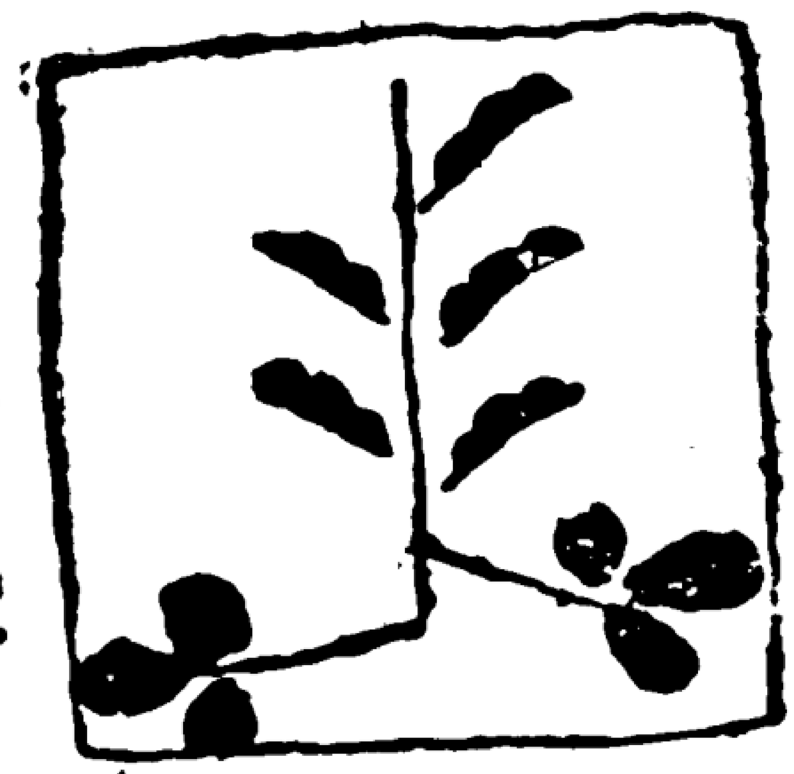
中山　啓

○

浪を見てをれば岩は川上へのぼる如し
わが立てる岩危くゆるる

○

屏風岩を離るれば水は忽に立ち騒ぎ
岩かみ岩のゆるる早瀬とかはる



# 島原紀行の中から

大泉黒石

## 断章の一

私がまだ故郷の長崎にゐる頃であつたが、近いうちに中學を出て東京へ上ると云ふ話をある西洋人にしたところが、その西洋人が俄かに眉を潜めて、こんな景色のいゝ人氣の諄朴な半島から東京のやうな殺風景な處へ行つてお前さん辛抱が出來るかい、用が濟んだらさつさと戻つて來ることだと云つた。勿論東京がどう云ふ風に殺風景なのか知らないから、私は只さうですか、それでは成る可く早く戻つて來ませうと答へたことを今日時々思ひ出して、その時分住み馴れた長崎のすべてのものにあまり親しみ過ぎたゝめにそれほどの興趣を覺えなかつたことを馬鹿々々しく思ふことがある。自分の生れた場所をほめたところで決して見つともなくないことだと思ふから、逢ふ人毎に國の自慢をすることにきめてゐる。長崎といふ昔ながらの古風な町は西南に港がひらけてゐるだけであとは山なのである。その山は左ほど高くないが、登りにくい山なのである。私はその山に登るのがその頃たつた一つの樂みであつたと云ふのは、空が晴れてゐさへすれば、島原や天草や五島などが霞の中に遠くうすく見えるからであつた。それは殆んど水平線に近い景色であつて、すぐ私の足もとには、港口の小さい島々が恐ろしきまでにくつきりと海原から突出して眺められた。白い波がしらが曲折のゆたかな濱に沿ふて、一里も二里も三里も四里も糸のやうにうねりうねつて行くのがことに美しかつた。そうした大きな凸凹の烈しいパノラマは、とても關東や關西のやうな平盤土地では見られないと思つてゐるが、その頃その山々に一人立つては殆んど毎日のやうに島原天草曾遊の空想に耽つてゐたことが、實際に現はれたとき私はどんなに歡んだことであつたか。

## 断章の二

私がはじめて島原に遊んだのはその頃のことであつた。長崎の街を南へ歩きつくしたところに、小さい斷崖があつて、その斷崖の中腹を垂直に截つた跡に茶店がある。そこから一條の街

り路を一里あまりだら〳〵と下れば小さい港になる。その港は寂しい漁師の町ではあつたが潮の色や、山の姿がことに變つてゐたゝめに、西洋人が別莊をつくつたり、大きなホテルが出來たりして、その入江の鼻にあつた汐見崎の觀音寺に月々町から詣づる善男善女の足も繁くなつたのである。そこから私は始めて小さい三百噸ばかりの汽船で島原へ渡つたのである。それは一等も二等もない田舍々々した船で、恐ろしい千々岩灘を拔けるまではひどく搖れた。船の上から島原の突端が判然見えて、そしてその岬を歩いてゐる素裸の男や女の形が目に映る時分に、大きな岩の洞門が波の間から突つ立つてゐることも解つたりなどして、ロノ津港に入つた。ロノ津からは目の前に天草が見えた。こゝから、天草へ行けば嘸近いだらうなどゝ思つたこともあつたが、そこからは船の便がなかつた。たゞ島原半島と天草の島との間の、所謂天草灘に無數の漁舟が波に浮いたり消えたりしてるだけであつた、私が乘つてゐた船は島原の港行だつたので、ロノ津で二三人の客を上げたり下ろしたりして了ふと、すぐ有明海へ向つた、そして一時間ばかり立つと私は布津と云ふ村で船を棄てた。そこは島原亂の古戰場だつた。そしてその村に庄屋をつとめてゐた人の子孫で原と云ふ中學時代一人の友人が波止場まで私を迎ひに來てゐた。

その頃は今のやうに肥前の諫早驛から港まで汽車が通じてゐなかつたやうだつたから、歩るくのが面倒な人は皆この船で行つたものである。今は九州鐵道と島原の鐵道とが連絡して、その線路を日本で始めて通じた東京横濱間の汽罐車が走つてゐるから、一寸妙な感じがする。二度三度目に出掛けた時、私はこの因緣づきの汽車に乘つた。

## 斷章の三

切支丹が禁ぜられて、島原に内亂が起つた共跡は何處にも見ることが出來なくなつたと思つた私は、この村で一夜を明して、翌日人力車で島原港へ出掛けた時に、當時の切支丹宗徒が立ち籠つて徳川勢を散々に惱ました島原城の石垣や堀のあとや、その頃基督を祠つてゐた神社の殘趾を發見して歡びに絕へなかつた。『鍋島信濃守殿父子其勢一萬餘人、立花左近將監殿父子其勢一萬餘人、引續き板倉内膳正殿其勢三千餘人、有馬家の方々一萬餘人、寺澤松倉兩侯同勢も共中に打ちまぢり柄竹束を用意して鬨聲をあげて押し寄せたり』と云ふ昔の記錄に切支丹宗徒包圍軍が屯したところには瓦ぶきや藁屋根が鱗のやうに簇がつて、『山上は白雲のたなびくが如く必死を究めし諸浪人の勇士を始め一の揆民二萬餘人寄手來らば一戰なさんと待ちかけたり』とあるその農民が到頭屠られて投げ込まれた堀の中には、

雜草にまじつて白蓮が處に花をつけてゐた。初夏には斷雲が多い。ことにこうした海と山に挾まれた窪地の空には白い雲が絶えず飛んでゐて、その雲が城下の海に映るところは恐ろしくも美しいものであつた。城あとからはさだかに見えないけれども濱つきに出て見ると、港ぐちの松島がぼんやり見えるし、私が泊つた宿の座敷の直ぐ前にも松島の一つが紺青の水に浮いて見えた。「あの松島は全體でいくつありますか」

「そうでしけなあ。八十八あるちいましがな」宿屋の娘にもよく解らぬらしかつた。

「船頭が居りましけん。舟でも出して見まつしよか」

「此宿に傭ひの舟子がゐるのですか」

「そうでしたい」

ところがその日波が少し荒くて何となく氣味が惡いし、海にはあき〳〵してゐた私は、それに及ばぬと云つて斷つたが、大低の客はこゝに四五日泊つて松島をめぐるのだと云つた。」舟は結構だが、この邊に不知火が見えますか？」

「いゝえ。」

「出ないのですか」

「どうでしか知りませんばい。妾は一ぺんも見たことがありませつけんどな、夜妾たちが潮につかると、水の底から銀のやうな玉が百も千もぷか〳〵浮き上つて來て、お了ひにや肌一ぱいにくつつきますばい。」

宿と云へば、一條か二條しかない通りの、この濱つきに石垣を築いて、ずらりと列んでゐる。その客間は大低こうした海を見下ろす處に構へてあるから、涼しい潮風が海面からまともに吹きつけて來た。そして、食べるものと云へば、この海で漁つた魚が多かつた。前を眺めるのは雨の日の他は大低熊本あたりの陸地を見るためで、後ろは、直ぐゆるやかた綠色の勾配から險しい温泉嶽を見るためであつたと思ふ。

## 斷章の四

何遍遊びに來ても最初の印象ほど強いものはないと見えて、どうしても初め一目見た風物が目さきにちらついて、どつちかと云ふとそれがなつかしくもある。私は港町からまた俥で布津の村へ戻つた。その夜私と友人とは、彼の家の二階で枕を列べて寐たが。夜半に目が醒めて蚊帳の中から外を覗くと、戸が締めてなかつた。海に面してゐる高欄にかさ〳〵と音がするのを見れば、天井から這ひ下る蟹がゐたのであつた。蚊帳には青白い田の虫が一ぱいたかつてゐた。私はまたさわ〳〵と騒ぐ波の音を聞き乍らとろ〳〵と眠りに落ちた。翌る日友人は「どうだい。これから温泉嶽へ登つて見ないか。またいつ來えたか[illegible]らた

いし、この邊の海岸よりはずつと氣持ちがいゝよ」と云つた。その朝であつた私とこの原と云ふ男とは竹杖を拵へて尻をからげて二日の豫定で溫泉嶽へ登つたのであつた。長崎にゐると夏になれば、料理店や停車場やそのほかに人の集る處だと、私は屹度溫泉嶽の廣告を見たものだつた。溫泉嶽と云ふよりも、その山の西麓に拓かれてゐる小濱と云ふ溫泉町へ街の人や旅人を誘ひ出す廣告を見たものであつた。こゝに私の死んだ叔母が死ぬ少し前にこの小さい湯の町に湯治に行つて居つたことから、一度は出掛けたいところだと思つてゐたのであつた。その小濱の町と云ふのは今私達が登りかけた山路とは裏表に當つてゐた。小濱には西洋向きのホテルやカフエーなどもあるが、この有明海濱に沿ふた村々には、まくわ瓜をひさぐ小店の他に何にもないので、私達は海拔三千尺の高山に登り切るまでは、何一つ食べることも飲むことも出來なかつた。ことに小濱から登れば、籠があつた。西洋人や都會から集まる女達は大低このパランキンに乘つて登るから左ほど骨が折れず、途中で休む必要もないのであつたが、布津の村からは、そんな便利なものもなかつたから、私達はその雨と霧とに包まれた山や谷蔭をとぼ〳〵歩るくうちにも、蝮に襲はれる用心をし乍ら、何遍腰を休めたか知れなかつたが、登り登りに、一帶の小松原があつたり、夏鶯のさへづりを聞いたりして足をなぐさめてゐた。溫泉町に近づくにつれて、山肌は赤土と粘土に化つて、町の入口に來た時には、黃昏空とすれ〳〵に眞紅な山躑躅の林に出會した、溫泉町は全體の人家を數へたところで百戶あるかしらと思はれるほどの小さい部落であつたが、町圍んでゐる壁のやうな丘の足元から、物凄い勢ひで噴き上つてゐる眞つ黑い熱湯圓柱の轟きが、今にも飛びかゝつて來さうな場所にこうして噛りついてゐるやうな家々が全部木賃宿だと知つたときには、流石に面白く思はれた。町を貫いて一筋のどろどろした路があつた。その兩側に家が列んでゐた。その一番端に西洋館が水色ペンキに塗られて白々と見えた。それは私達が小濱屋と云つた木賃宿に落ちついてから知つたのであるが、西洋館のホテルには長崎から遊びに來てゐる外國人が殆んど空間もないほど一杯に逗留してゐた。そして、こゝから十七八丁も登つた山嶺から切り出して來る天然の氷を小錢を出して買つたり、海岸からこゝまで賣りに來る魚の手から鯖や鰯を買ふが頗る奇異に見えるのであつた。私は友にこう尋ねた。

「僕等もやつぱり自炊しなければならないのかね」

「實際はそうなんだが、こつちで魚野菜を買つてやれば、宿の女中が煮てくれることになつてゐるのだ」

その晩、それはまだ私達の足の疲れが癒へないうちに、熱湯をさまして導いた錢湯へ出掛けて、歸りに出會つた魚屋から鯖を五六匹買つた。宿の女中が膳を片づける頃から、ひどく冷え込んで來た。私達は浴衣の上から借り物のどてらを着込んだ。

「今夜はゆつくり寢て、明日この邊一帶を歩いて見やうぢやないか」

「それがいゝ。だが、朝晩は氣つけたまへ。時によると、氷のやうな雨が降つたり、霜が降つたりするから」

女中は私達の貧しさうな姿を見て、

「あの、夜具は十錢にしませうか。二十錢にしませうか」

と云つた。そして私が不愉快な顏をしてゐると、友人はかう說明した。それは、この町の宿は皆木賃だから碌な夜具はないのだ。五十錢の蒲團を貸せと云つてもないのだ。どんな金持ちでも此溫泉場だけは抱辛をしなければならぬし、何も彼も貧乏人を標準として作つてゐるのだから、平等だと。それでも、溫泉があるのと、空氣がいゝのと、馬鹿に安いのと、暑さを知らずに夏が過せるので、どの宿も家族を携へて來る都會の客で滿員なんだと。その客と云ふのは、この半島の百姓達や商人や、長崎の街の人達に限られてゐるやうであつた。その人達がこの部落の端に建られてゐる洗湯にぞろぞろと出掛ける。五錢の湯と十錢の湯と二つあつた。私は日光の湯元にも行つたことが、その邊の空氣とよく似てゐると思つた。たゞ日光の方はいくらかお貴族的であつて、この町の湯がずつと平民的な氣持ちのすることが大きな違ひであつた。そこで、地獄の湯をこして饂飩粉に混でて拵へた輪形の駄菓子を賣つてゐた。その側に硫黃臭ひ湯の花や湯の花せんべいを列べてゐる小店もあつた。ひやひやする灰色の霧の中から、時々は地震かとも思はれるほどの地ひびきを立てゝ噴出する大地獄小地獄の湯の音が聽えた。私の宿は叫喚地獄に近かつたゝめに、その夜は幾度もこうした響に驚かされたのであつた。夕方少しも氣づかなかつた路面が、翌朝見ると、一面に黃味を帶びた綠錆でも吹いたやうに光つてゐて、今にも湯氣を吹き出しさうにぶくぶくと動いてゐる足元を平氣で町の人々は往つたり來たりしてゐた。そのなかには、山頂の洞穴から一夜をすごして小濱の方へ下つて行く氷豆腐賣もあつた。洞穴の中で豆腐を凍らせるのが彼等の仕事であつた。これから一通り此邊を見物するつもりで、私達は脫ぎ棄てゝ置いた草鞋を又穿いた。



# 縮撮山水

岡本一平

房州波太仁衛門島といふ島がある。岩礁ほどの、小さい島である。此島を一軒の家で持つて居る。先祖が頼朝公から、住まふのを許されたと云ふ由緒のある家柄に、相應はしい石で見付の様に拵えた門、黒光りする程拭きこんだ柱や縁側の奥座が敷古風だ。前の渚には、生洲があつて何時でも鯛が飼つてある。陸地との交通は川程の渡船によるのだが、そこは、難所と見えてオイそれと船頭が船を出して呉れる日は月の中何日もない。

□

この太洋中の孤島に似たる島へ行つて、懐つかしく思つたのは、岩の上の貝殻の多い砂を耕して畑が出來て居ることである。其處には藤豆の花や茄子の花が咲いて居た。石塀の中には芭蕉が一株青かつた。

島の家の人は庭の池の金魚を自慢そうに示した、

□

房州小湊誕生寺前より船を出して鯛の浦見物に行く。場所に着く。船頭が柄杓で海水を海面へ汲では注ぎかける。それから持つて行つた鰯の子を投り込んでやる。そこへ浮き上つて來た鯛は黒い頭が禿げて穢なくなつて居る年老いた鯛であつた。

□

上總おせんころがしを車に乗つて通ると車屋が崖下の海水を透かして海底を覗かせる。其處には昔、人の住んだ跡があると云ふ。あれが柱の跡で、此方のが竈の跡など、細かく説明する。成程そう云つた、跡がある。嘘か眞當か、よりよく頭を働かせ様とすると、旅の興味は、無くなる。

□

房州館山灣で稻光のする翌る朝は烏賊が、渚に打ち上つて居て、幾等でも拾えると云ふ話を、土地の人はする。此方が行つた時には、一度も稻光の夜に、遇はないから、拾つた例がない。

□

房州布良は美術學生が盛んに行く處だ。其處の宿屋では、座敷を穢されるので畫學生を入れる部屋は一つの間に定めてある。其部屋へ入つて見ると長押や襖に繪具の滓が接着いて居る。

□

房州金谷の宿より二里より近い港へ行く街道筋に、黃金井戸と云ふのがある。二三間深い洞穴に、水が溜つて居る。菜の花が咲く時分と云ふから、夏は見えないが、その時分にこの水溜りが黃金色に、光を放つ。昔の人は遠方の菜の花が寫つたものとし、奇蹟として居たが、實は珍らしき、光藻だそうな。前の理髮店へ棚の締を開けて呉れる樣賴みに行くと講談本を枕にして、午睡して居た。おやぢが不精不精鍵を持つて出て來た。寢惚け眼に不機嫌と來て居るから鍵が仲々穴に嵌まらない。前の街道筋には、この近在から港から船で横濱へ渡つて自分の乳を、賣りながら、お産をしに行く、牛の産婦が、飼主に勞はられながら、時々通る。同じ房總線の靑塚から、一里余の所に、念佛池と云ふのがある。錢を投げ込んで合掌して、至心に念佛を唱えると、池底の砂が、四五寸ムク〳〵と持ち上がる。池底の砂へ水が湧き出す具合で、斯く砂を持ち上げるのだ。だから念のため、お賽錢も上げず、合掌もせず、念佛も唱えず、默つて見て居ても、池底の砂は矢張り、ムク〳〵持ち上がる。

奇蹟好きの旅人は、これにて馬鹿馬鹿しく思ひ、又物足らぬ樣にも思ひ、踵を返して、社の外へ出る。たしか、その社は辨財天が、祀つてあるとか聞いた。

□

山陰道伯耆國美保ケ關海中に突出し左右に岬を控えた名所である。神社がある。惠美須樣を祭神として居る。此處の惠美須樣は、傳說があつて、鷄を非常にお嫌ひだ。土地の者に誓はれて云ふにはどうか鷄だけはこの美保ケ關へ入れて呉れるな、左すれば何の成業をしてなりとも、衣食の事に事は缺かゝせない

だらう。美保ヶ關の住民は、その位の不自由さを忍ぶ位で、生活を保證されるなら、この方が割がいゝと、今でもこの掟を守つて居る。鷄を喰はないだけで、生活を保證されるなら、階級闘爭も、富の分配も、何も必要はせぬ。逼迫した國民は、須らく、此處の惠美須樣を總理大臣に、推戴すべきである。

その代り卵が必要な客の慾望があると、家鴨の卵を出して來る。船で遊びに來る所らしい。旅館兼料理屋が海沿ひに軒を並べて居る。宿屋の裏庭の戸を開けて波の寄せる石垣の上に出る。其處で小さな海老を餌に付けて、投り込むと、酒の肴のぎすけ位の大きさの、小鯛が釣れる。海老で鯛を釣ると云ふ諺は、眞當だ。右手の岬の峯に在るのが、有名なる關の五本松である。「關の五本松一本切りや四本あとは切られぬ夫婦松」と云ふ歌を港では唱ふ

晴れた日は伯耆大山を眞向きに眺める。生烏賊とも鯣ともつかぬ程度の濕度を帶びた生干の烏賊が此處では美味い。

□

安來節のお糸が出た安來は軒を連ねた漁師町だ。安來千軒名の出た所社日櫻に十神山。」

すぐ前に全部松に蔽はれて、綠の饅頭の樣な山が海と云ふよりは湖水に近い澱と潔さとを持つて居る水に影を浸して居る。これが歌の十神山である。全く水際迄、松の木は、水あるを知らず顏に、生え下つて居る。

□

山陰道松江市は、繪卷物の中に、描かれたる都市。繪卷物を操つて行つて、一つの葢の、大きな塊がある。その塊の中には、商家あり、京都風の好を見せた衣裳風俗、飾窓を有する呉服店や、陶器所の店あり。種物屋あり。玩具屋あり。生魚商の店には鰻の箱に噴水を垂らしてある。骨董商がある。宿屋がある。官衙がある。これ等の變つた生活は皆、之不昧公の御城下と云ふ、錆びた水盤の中に潤ふて居る。行人も共に潤ふ。

繪卷物を更に操る。其處にも一つの葢の塊がある。塊の中には新築の銀行、玩具屋、理髮店、金物商時計商、等の樣々な生活がこれ又之不昧公の御城下と云ふ、水盤の中に潤つて居る。行人も共に潤つて居る。この塊と彼の塊と離れんとする關係を

風雅なる一つの橋で繋ないで居る。松江大橋である。橋下の水は直ちに大洋の如き、宍道湖である。空莫なる水面に、觀者の眼を飽かせまいとして、程好き位置に蜆取りの船が居る。土地の人が歌に唱つて愛する、嫁ケ島も、蜆船の近かくに在る。鳥居が立つて居る。

舊家老の邸を造作仕直した、旗亭で飯を喰ふと、鯉の糸作りと云ふのを持つて來る。身をそうめんの樣に細長く切つてそれに茹でた子の粒が南京玉の樣に細かく振つてある。自傳の妙酒と云ふのにつけて、喰ふ。綠樹を越して其處は宍道湖だ。町の中を右往左往する。行き當れば其處は何處でも宍道湖の水である。

安來節の中で出雲訛のみを集めて作つた歌を副えて說く。

雨のひるふに（降る日に）竹やび（竹藪）こえて來て見りや掛
太がたからぶき（姉）あだんちやどげしよか（わたしやどうしよか）このちやつちや（この兒貴は）腹がたち（たつ）

□

夏目漱石先生の著の「坊ちやん」遺跡を探ぐりに、松山から道後へ行つたことがある。高濱へ汽船で着いて、一休した後船を雇つて、釣をしながら、坊ちやんの中に在る、赤シャツが、ターナー島と名付けた島を、物色する。高濱の海には、島が二つある。九十九島と云ふのと、青島と云ふのとである。九十九島と云ふ方は、肩甲骨の樣な骨立つた岩波に洗はれて根元に通した穴等があいて居る。島の頂に松の樹が湖風に節くれ立つて居る。青島の方は鬱蒼として草や木が繁茂して居る。何方も余り大きくない。漱石先生の想を構えたターナー島は、マドンナと假稱する女を、あの松の樹の下に立てたらと云ふ、說明があるから、松の生えて居る、九十九島の方かも知れない。糸を下すとベラが一番釣れる。間に混つて鯵が釣れる。五月蝿な程釣れる。餌についたのも構はず、打つちやらかして置いて、船中に寢轉び、河一つ距てた程の、こゞ島の景色を眺める。美しい紫色の中に、眼を見据えて居ると山の背を、開墾した跡や、人家の屯して居るのが見出される。人家からは煙を吐く樣だが消ぐ全體の紫色に呑まれて仕舞ふから捕捉する迄に行かぬ。波も靜かだし長閑ないゝ遊行地だ。

□

道後温泉へ行く鐵道は二つの會社を憲政會と政友會とで作つて競爭して居る。直ぐ隣り合せにステーシヨンを並べて驛夫が鈴を振つて客を呼び合つて居るのは笑止だ。

温泉は共同湯になつて居て、洒落た立派な建物だ。湯錢に差別が付いて居る。上等の湯札を買ふと、三階へ上つて床間に懸軸がかゝつて花が生けてある室で、更衣させられる。それにうちものゝお菓子にお茶を持つて來る。普通の湯は何も待遇はない。着物を脱いですぐ石疊を降りて行つて浴槽へ浸かる。緩い湯だ。大きな湯の出口を圍つた壓えがある。一寸橋の擬寶珠を肥らせた樣な、或は茶釜を縱に細くした樣な形である。その周圍へ萬葉假名でこゝの温泉に因んだ歌が書き込んである。何とか云つた命が何とか云つた命を抱えて居る表徴圖等も彫つてある。湯の口からの湯は熱いので皆な浴びたがるが順番でないと不可ない。それで屋守の樣に浴槽の板に取付いて目白押に番を進めて行く。悠長なものだ。

□

中禪寺から出發する。湖岸を縫つて馬車は行く。空家の別荘が澤山ある。建てる時の思ひ立ちは至極よかつたのだらうが何程景色がよくても不便には辛棒出來ぬと云ふ眞理を見せた。西洋人だけは流石に偉い平氣で住んで居る。岸に近い水にポッカリ水死人が浮いて居る。この邊では發見しても屆け出る迄には非常な手數が要るので大概打擲つて置くそうだ。すると水死人は何日でも氣の向いた方へ漂ひ流れる故に馬車の御者が、「この土左衞門は一昨日は何處其處に居ただ」と馴染の樣なことを云ふ。

湯本の湖水に出る。湖水に出崎や島があつて、湖面は、變り形の瓢の樣に、處々くびれて居る。硫黄の香が鼻を撲つ。湯の村に這入る。外人の泊るホテルが一軒、濕氣を避ける二重硝子の設備がしてある。邦人の上客が泊る宿屋が、三四軒ある。食膳には湖水でとれる養殖した鱒の子を鹽燒にしたり、フライにしたりして持つて出る。茲の宿は、よく慶應の幼稚舎生徒が、夏期修學に來る相で、宿のかみさんが、その腕白さを、我子の樣にして、自慢氣に話すと生徒等は、退屈すると、先生の手と

り足とりして、座敷中を、さげ廻るそうだ。軒を並べて、昔本の案内記にある樣な、木賃宿が並んでる。田舍から、本當の湯治療養の目的を持つて來る客に部屋貸しをする樣になつて居る。其處を通つて、野へ出はづれの處はどこもかしこも、硫黃(いわう)の氣にむされて、木も石も青白くなつて居る。悽慘(せいさん)の趣きを極めて居る。地獄の河原は、こんな所であらう。玆が元湯のあるところ。その周圍に、小屋が建つて居て、何の湯、何の湯といふ名のついた湯場がある。表格子から覗くと、薄暗い湯槽のなかに、病みほほけた老婦が、神妙に浸つて居る。本當に、身動き一つせず侵つて居る。えぐり取つた樣な、ほら穴のあいて居る鎖骨と肩胛骨との間のくぼみに、それでもかすかな息があるのか、滑らかな湯が、こころもち、そそぎ入りそそぎ出る。隨つて、湯の面に倒映する山や林の綠も、こころもち動搖(どうえう)する。

食後、座敷に寢轉んで居ると、階下へ異人の子が來て、畫をかいて吳れとせがむ。降りて行つて寫生してやる。すると今度は、材木の上へ乘つたところを寫生して吳れといふ。また今度は、檻のなかに這入つて居る豚を寫生して吳れといふ。その子のおふくろが予に氣の毒相に、もふ澤山だろうと子供をたしなめる。異人の母親も、母親らしいところはおんなしだ。そのうち、青眼玉の腕白は池の中へ徒渉(とせう)をはじめて、出て來た時には足を切つて居た。おふくろは、腕白を、見守り乍ら、毛糸の靴下を編んで居る。船で湖へ出て見る。青い透きとほつた湖水へ、溫泉が流れこむ處だけ白く分明になつて居る。幽邃(いうすゐ)な山ばなしの魔の國の樣な、出埼がある。出埼に船を着けると、樹立の間から、人を神秘の恍惚(くわうこつ)に吸ひよせる靈氣にふれる。霧が、思ひのままに、山に這ひ、渚に這ひ、森林の奥に這つて居る。時々岸に近い方で、水面に躍ねる音のするのは、税を出して、釣ることを許された鱒釣りが、鱒の子を釣り上げるのであつた。磨(と)ぐがごとく滑かな湖面に、風が渡ると、極めて小さいさざ波がたつ。その部分には關係なく他の平滑な湖面は飽までも澄む。

□

足尾から日光へ拔ける道は荒い石粒の山や丘許りだ。風が來ると石が向ふ脛や顔へ當つて痛い陽の色もつれない烈しさに照

る。下を向きながら、二歩に一滴、三歩に一滴落つる汗を見守りつゝ、トボ〳〵と行くと人生味と云つた様な味ひが湧く。

□

足尾へ更に山奥から材木を切り出す索道がある。峯と峯とに支柱を立て鐵の網を曳く。材木をぶら下げ電力の力で鐵索を從き材木を送る。工夫の中でこの索道の材木に乘つて燒酎を呑みながら白雲の上、谷の上を越して、足尾の町へ遊びに來るのがある。稀に谷へ落ちる粗相もあるから命懸の風流だ。山の石楠樹が咲く頃が一番美事だそうだ。

□

和歌の浦は紀三井寺の多い石段を登つて其處から一瞥すると要領を得る。

外海の波が打寄せて内海の波と鬩ぎ合ふ所に洲が出來て居る。其へ持つて行つて外海から寄せる波が所謂片男波だ。洲の根元の所に小さな島がある。景色を引き締めて觀海閣や九輪の塔が建つて居る。淨瑠璃の文句にある下り松はこの島の外側に在るが今は殆んど枯れた。

鹽釜明神は鍾の多い石の洞の中に祀つてある。潮風に錆びた御扉が洞口に懸つて居る。そこの蠟燭の燃えさしを安產の御守になると云ふて戴いて歸る。

土佐派の繪にある様な雅かな玉津島明神だ。

權現の社は數の多い石段を登つて廣前に出る。保護建造物として屋根を除くの他木の蓋をしてある。

和歌の浦とは非常に不調和な亞米利加のデパートメントストアの様な建物が遠くに見ゆる。これは新和歌浦の新設備だ。新和歌浦は、全々、現代人を刺戟して遊ばせ様とする興業的な京み場だ。兩側に惡どく並べたてた土產物や繪葉書を賣る店。宿屋は玄關に大鏡の衝立を置いた様な小成金式の好みだ。兩側から女共が聲を爭つて呼び立てる。

一個所身投の流行る場所があるので、身投げ留めの番人を巡回させてるそうだ。

□

濱名湖の干潮に干潟に船を打掷らかしてダツ網の船頭と海老とる船頭と獲物を示し合つてそれから晝飯を始めた。



# 夏知らぬ三境

高須梅渓

## 隠れた外房州の奇勝

私は割合に夏まけしない方である。あの烈しい太陽の光りを浴びるのが、むしろ、好きである。それで、避暑と云つたやうなことは餘り考へて見たことがない。けれども夏季になると、一週間位の豫定で、海邊や、山間を旅することがある。左様した時の印象その他について、二つ三つ記したい。

私が先づ人が知らぬ好適の避暑地だと思ふところは、外房州の海岸である。其の中でも、勝浦から小湊へゆく途中に於ける『おせんころがし』と云ふ有名な難處の邊が、殊に宜いと思つた。此は一方は削つたやうな岩石の山、一方は太平洋の波を控へて居て、古い家が、二つ三つ宛、點在して居る。全く人里離れたところだ。

此の春から、小湊へ行くには、別に平坦な新道が出來たけれども、それ迄は、此を徒歩してゆくか、或は馬車に乘つてゆくかしなければならなかつた。馬車が一度、顛覆すると海の中へころがり落つるよりほかはないのである。曾ておせんと云ふ女按摩が、こゝから轉り落ちて死んだところから、『おせんころがし』と云はれるやうになつたと聞いて居る。またある男が、自轉車で、此處を通つた時、誤つて海へ墜ちて、直ぐ呼吸が、絶えたと云ふ話もある。

私は、曾て小湊から勝浦へ出る時に此處を通つたことがあつたが、數町の間、誰ひとり人の影を見なかつた。而して太平洋からくる烈風が、直ぐに一方の小山にぶつゝかつて、強く私を

吹き飛ばさうとするので半町ばかり風の力の儘に急走させられたことがあつた。それで土地の人は、たとひ、馬車に乗つても此處へくると、數町の間、馬車を捨てゝ徒歩するものゝ方が多かつた。

中には、馬車の中で、小聲で念佛を唱へながら、無事通過し得るよう、祈る老人さへ見受けた。單に、斯うした話だけしても、夏日、肌を寒うするやうなところである。從つて『おせんころがし』を難場として恐怖するものが多いけれども、此處を避暑地として目ざして來るものは殆ど絶無である。唯私の友人G氏が一夏を此處に送つたと云ふ位に過ぎない。だが、避暑地としては、却てこんなところが妙だと思はれる。

勿論、宿屋などは無い。素人の家を借りねばならぬ。而してそれ等の家は、奇怪な形をした巌石の上に立てられてあつて、直ぐ下には、山のやうな怒濤が高い叫びをあげて吼えてゐる。家の窓からは、太平洋の青い色が無際限に見えて、颯と吹いてくる風の強さに面を向けることが出來ないほどだ。斯うした境地であるから、殆ど暑さ知らずだ。朝晩、遠く人界から離れて居て、海風と海波とに親むのみである。

朝早く床を離れて、太平洋から出る日の光りが、波を射て、やがて八方に金線を投げるのを見る時、或は夜に入つて、圓い月が、空にかゝつて、月光の下に波の狂ふのを見る時、頓に心氣の爽かになるのを感ずるのである。

『おせんころがし』の近くに、興津と云ふところがある。此は須磨、舞子に似たところで、波の色が青く光つて、穏かである。此處も私は夏の舟遊などするに適して居ると思つた。けれども『おせんころがし』のやうな奇勝を見ることが出來ない。其の代りに、清海樓とか云ふ宿屋で、相應にうまい料理を喰べることが出來る。また東京から、此處までくる客が比較的に少い爲めに、成金風が絶體に吹かないだけでも涼しい。

けれども『おせんころがし』附近の素人屋で、シンプル、ライフを送つて、終日、家族のものと怒濤を見ながら、閑話したり、机によつて、冥想しながら、ペンを走らせたりすることが、一段の興味があるだらうと思はれる。

友人G君は、妻君と子供二人、すべて四人で、村長の家を借

りて、『おせんころがし』の附近で、夏の暑さを避けて居たが、眞に自然の眞趣に味到するには、斯うした大無名の避暑地を見出すに限ると誇つて居た。酒屋へ三里、豆腐屋へ五里と云つたやうな不便はあるが、新鮮な魚を味ふだけの便宜はあるから、ウヰスキー、くさやの干物、つくだ煮、鑵詰の類さへあれば、必ずしも、不便を嘆息するに及ばぬわけだ。

## 夏の姉ケ崎

私は昨年の秋から、千葉縣の姉ケ崎といふところに居る。姉ケ崎は、矢張、避暑地の一つだが、殆ど東京の人に知られて居ない。東京から、約二時間ばかりで行けるところではあるが、私自身も、昨年秋まで此處を知らなかつた。ある夏、友人から姉ケ崎へ遊びに行かないかと云はれた時、私は、それに對して、大原や、一宮をあげて、姉ケ崎の邊鄙と不便とを想像して、それに反對したことがあつた。

ところが、昨年秋、神經衰弱に惱んで、轉地して、暫く靜養する必要があつた時、私は勝山や、北條へ出かけた歸途、不圖姉ケ崎に立ちよつて見た。そこには、別莊風の新築した家が四五軒ばかり立てられてあつたので、其の一軒を借りることにした。それ以來、私は初夏まで、姉ケ崎に居た。勿論、此の盛夏も、そこで生活するつもりで居る。

此處は、『おせんころがし』ほどの奇拔な避暑地ではない。まだ北條、木更津ほどの繁華と便利もない。けれども余り人に知られて居ない丈に、何處か田舍の味が深い。眠つて了つて居るやうな町も、東京を見た眼には興味がある。

私の家は、畑に面して立てられてある。其の畑は、五町四方ぐらゐの廣さを以て、眼の前に展開されて居る。滿目唯『青』だ。鮮かな『青』の世界、『綠』の世界だ。それ等の畑を隔てゝ、藍碧の東京灣が、靜かに控へて居る。

波の荒い日は、東京灣が混濁して、青黑く見える。波の穩かな日は、白帆を張つた船がいくつともなく、沖の方に現はれて、悠々と動いて行く。而してガラス窓をとほして、軟かい風が、快く吹き入つてくる。朝の太陽がのぼる頃の海の色も宜いが、私は寧ろ夕日が靜かに西の空を染める頃の海の色が好き

だ。日は、極めて落着き拂つた女人のやうに、沈んで行く。

私の家の前には、小さい噴井があつて、其の水がたまつて、池を形造つて居る。池には青い藻が出來て、大小の鯉が七八尾、始終泳いで居る。私は筆硯勞働に倦むと、池邊へ出て、ぢつと鯉の動靜を見ることがある。鯉は、世事人事の外に超然として、其の小さい、自由の共和國を樂んで居るやうに見える。時には、潑溂と水の上に跳ね返つて鰭と水沫を四邊に飛ばすことがある。それが、何となく、私に夏の涼味に調和したことを思はせる。

私は毎日、午餐前に、海岸を散歩したり、廣い街道へ出て見たりするが、其の中で、一番、私の氣に入つて居るのは、城山公園である。そこは、もと城のあつた跡だ。それが小さな公園になつて居るのである。附近には、二三の別莊がある。

此の公園の頂上にのぼると、綠樹の下から東京灣を一望の下に眺めることが出來るので、眼界が急に豁大となる。屈曲しながら、延長して居る沙濱が白く見えて、すべての田畑は、はつきりした、正しい線で巧みに區劃された花圃のやうに見える。眠りこけて、古び切つたやうな町が、青葉若葉の間に出沒して、陽光を浴びて居るために、美化された觀がある。左樣した景趣の前にひろがつて居る海は、藍色に輝いて、一大淵水のやうに靜波を湛えて、柔かに囁くやうに、岸を洗つて居る。明麗、溫雅と云つたやうな風趣が、そこに流れて居るのを感ずる。

城山を下つて、山の中腹から、右へ通じた道をゆくと、そこは、高地になつて居て、畑には、麥が青々とのびて居る。それが無限に續いて居ると思つてゆくと、突然、丘の上へ出て、そこから、また海の一斷面が見える。四邊は、沈默の化身であるかのやうに靜かだ。爽かな、冷い空氣が、肺腑に沁み通るやうに流れてくるのを感ずる。

私は、大抵斯うした順序で、散歩することが多い。此に居ての樂しみの一つは、朝早く、生きた魚介や、蟹の類を持つてくるのを買つて、直ぐに料理して、午餐の食卓に味ふことだ。私は朝起るのが早い方だから、肴屋のくるのを、いつも樂みにして待つのである。

姉ケ崎に於ける夏は、平凡と云へば平凡だが、割合に東京の

人が來ないので、のんびりと夏を忘れることが出來る、質素な夏季生活を送らうとする人々には、宜いだらうと思つて居る。

## 秩父赤壁

私が東京附近に於ける避暑地の一として、最も好きなのは、秩父赤壁(せきへき)の名がある長瀞の景致である。勿論旅行好きの人たちは、恐らく、長瀞を知らぬものはあるまい。だが、其の割合に東京から行く客が少いのは、秩父鐵道にがたがた揺られるのを好まないためか、或は交通が稍不便なためか。何れにしても、長瀞は宜いところだ。

夏になると、私が何よりも先づ思ふのは、水の美しさと涼しさとである。それには、海も宜い、川も宜い、けれども海にも川にも飽きた眼には、瀞溪の美に心をひかれる。紀州熊野に於ける瀞八町は、天下の奇景として、誰れも嘆美しないものはない。恐らく、瀞溪美の代表であらう。だが左様した風趣を東京附近に求めるとしたら、長瀞を擧げるよりほかはない。瀞八丁の縮圖がそこに展べられて居るのである。

私は、ある眞夏に長瀞に出かけて見たことがあつた。秩父鐵道の汽車は、古びて居て、蠅が絶え間なく、車窓のうちを飛び廻つて、何となく、塵の匂ひさへもしたが、途中の景致は、思つたよりも、遙かに優れて居た。綠樹の間にほの見える荒川の激湍、灰色の岩石、眉の間に迫る秩父の山翠、左様したものが一つになつて、幽邃な、涼しい感じを與へる。

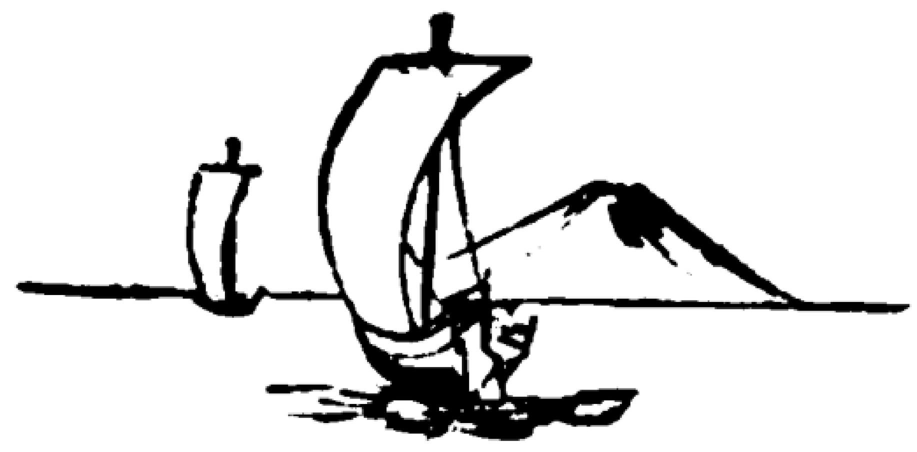
寶登山驛で、温泉の烟が、ゆるやかに立ちのぼつて居るのを見て下車すると、左方に長瀞の水を見ることが出來た。

私は先づ寶登山神社へ參詣してから、長瀞館と云ふ小綺麗な宿で午餐を食べた。此の家から、長瀞の一部が手に取るやうに眺められた。一瞥すると、それは山間の川と云つたやうなものだ。普通にそれは瀞溪と稱されてちつと淀みながら、渦を卷いて流れて居る。其の水の色は眞靑で可なりに底知れぬ沼のやうに深い。其の水をはさんで、兩岸に怪奇な灰色の巖石が高く突立つて、水の中にも、いろいろの形した岩が突出したり、屹立したり、横臥したりして居た。其中の比較的大な岩の上に瀟洒とした小亭があつた。そこで秋の月を眺めるのだと聞いた。

私は、午餐をすませてから、舟を傭うて、對岸へ渡つて見た。絶壁から細い瀧が蛇のやうに迂曲して流れて居るところがあつた。青葉が陽光のために白く見えて、水の上に影をひたして居るところもあつた。舟は寂靜な溪の上をすべるやうにして、對岸に着いた。舟中から躍り出て、岩の上に跳びあがると、そこには名工が細工したやうな岩が、いくつも續いて居た。雨水が溜つた岩もあつた。尖つて起つことの出來ない岩もあつた。だが單にそれ丈で、矢張眺の中心となるのは瀞溪の水である。

私が再び舟に乗つて、元の岸へ戻らうとし時、一艘の舟を浮べて、此の瀞溪を下らうとする白衣白帽の人たちがあつた。其うちの一人は寄居に別荘を持つて居た松本幸四郎であつた。

其の夜、私は長瀞館で一泊しないで、其の附近の心安い家で涼しい一夜を靜かに寢た。蚊の多いのには困つたけれども、詩田を前に控へ、更らに長瀞の出水が、遙かに展開されて居ることを思ふと、爽かな氣分になつた。夜の明け方は、少し寒い位涼しかつた。翌くる朝、顏を洗つて、また長瀞の岩の上に起つた私は、ぢつと眞青な水を見下し乍ら、もう半日、此に居ようと思つた。



# 屈茶路湖と阿寒湖

中戸川吉三

「兄弟とピストル泥棒」と云ふ私の小説は、作品としてもいろ〳〵な意味で好きな作であるが、(作家にとつてさう云ふ作は極くわずかなものだ)あの小説の題材に使つた、兄と二人の實際の旅行も、私には非常になつかしい記憶が殘つてゐる。

もう十二三年も前の昔になる。私は中學の一年生の時だつた兄も今の私より二つ三つ年の若い頃のことだつた。夏休に、北海道の釧路へ父を訪ねて一と夏送つたが、歸京の日近づいてから、急に思ひついて、釧路の奥の山を十日ばかり歩いてみることにした。阿寒にしやうか、屈茶路にしやうかと一寸迷つたのであつたが、どう云ふ都合だつたか屈茶路の方を撰んだのだ。どつちもあの地方では有名な湖水で、釧路の町からは二十里以上ある、——丁度、北見の國と釧路の國との境のあたりを走つてゐる山脈に沿つてあるのだけれど、行く道はまるで違ふ。非常に交通不便なところなのだ。私の小説は、その屈茶路行の旅行で途中に起つた事件を描くのが目的だつたから、遠野とか、塘路とか、標茶とか云ふ途中の村落のことしか、背景に使はれてゐないが、實際の旅行の目的は、屈茶路の湖水だつたのである。

往復に日をとられすぎて、屈茶路湖畔には二日ばかりしかゐなかつた。今はどうなつてゐるか、——恐らく昔と變りもあるまいと思ふが、——宿屋と云ふものはなかつた。湖畔から四里ばかり手前の、弟子屈と云ふ村には一寸した温泉宿がある。湖畔では掘立小屋のやうな驛亭に泊めて貰つてゐたやうに思ふ。

兄と私とが何等金もうけの目的でもあるのでなく、旅行すると云ふことだけの目的で、そんな不便な山の中へ來たことを不思議がられたやうに思ふ。附近に牧場でもあるとか、木材に關係した商人とか人夫との外は、故意々々遊びに行く者はゐないのだ。

　湖水は非常に美しい。美しいと云ふよりは凄いと云つた方が好からう。水の奇麗さは、湖畔の住民が、湖水の水を飲料水にしてゐることでも解るだらうと思ふ。湖水の底は見える限り固い石の盤で、あまり深い底まで透いてみえるので恐ろしくなる

私は兄とアイヌの乗る、丸木船で湖水に遊んだが、凄くて泳いでみる氣にはなれなかつた。周圍は十八里あつて、中に島もあつたやうに思ふが、驛亭(エキテイ)の親父にいろ〳〵おどかされてゐたから、島へは行かなかつた。ウツカリ風が出て、無人島に幾日もとり殘されたりしては堪らないからだ。溫泉は、湖畔至るところに湧いてゐる。湧き出る溫泉と、湖水の流れの一と條とが合して、はいるのに丁度好い、天然の浴湯が幾つも出來てゐる。兄と私とはどんなに喜んで天然の浴場を享樂したか解らない。

　釧路川は、源をその屈茶路湖に持つてゐるのだ。十四里をうね〳〵流れて、釧路の町を横斷した末海に注いでゐるのだ。釧路地方の鮭は、卵を生みつけに、屈茶路湖までのぼるのだ。釧路の町では、はゞ二丁以上もある釧路川だが、屈茶路附近では三間の底の淺いちよろちよろ流れだから、附近に住んでゐる郎が、のぼつて來る鮭を平手でひつぱたいてとる位な藝當は、さう難しいとは思へない。やりさうなことだと思ふ。もつとも捕つた鮭を、笹の葉にさしてかついで來る繪は、少々信用なりかねるけれども……。

　阿寒の湖水までは、山越しすると、屈茶路から四里か五里しかないさうだ。併しとても山越しはアイヌの他出來ないさうだ。釧路から別な道で行かなければならない。

　阿寒は、屈茶路に較べるとかなり有名だ。不幸にしてついまだ私は行かずにゐる。屈茶路へは歩いて行く他、途中まで川舟を利用するか驛亭(エキテイ)の馬で行くより方法がないが、阿寒の方は途中まで汽車がある。製材會社の關係でよほど開けてゐるやうだ最近は夏、兵隊が天幕生活をするために出かけたり、釧路の町

で團體を組織して出かけたりするやうだが、避暑のための旅行と云ふ呑氣な氣持より、探險氣分の勝つた旅行だらうと思ふ。湖水は屈茶路より少さいが、湖畔の風景は屈茶路以上素張らしいさうだ。雄阿寒、雌阿寒と云ふ有名な山がある。湖畔に一歩園と云ふ五千町歩からある牧場がある。

私は旅行好きで、それに職業の關係で、原稿をかくためにもよく田舍へ行つたりするから、一年の三分の一位は旅で暮してゐる。北海道へも、年に一度位はきつと用が出來て出かけることになる。が、此頃は無精になつて、歩く旅行をしない。交通の不便な場所や食ひものゝよくないところを、さけるやうな旅ばかりしてゐる。そのため、機會がありながら阿寒にさへも行かずにゐる。兄は、十年前と變らない有樣で、相變らず山岳熱が盛んで、よく役所の仲間などと寫眞器を持つて山へ出かける私の無精と物ぐさを嘲けるのであるが、口では、高いところへ登つたりするのは、九段坂でも閉口だ、などとは云つてゐるものの私は内心多少恥しい。

屈茶路にしても阿寒にしても、鐵道が近くひけるから、たちまち昔日の面影を失つてしまふだらう。面影を失はない、阿寒へは行かうと思つてゐる。友人たちを、――里見弴だの、久米正雄だの、田中純だの、旅先で酒と藝者のことしか知らない連中を、阿寒の山の中へ引つぱつて行く痛快な空想もしてゐる。うちの牧場の馬にのせて、食料、防備用具、などとゝのへ原始的な乘馬旅行をやつてみたいなどと思つてゐる。

屈路湖と阿寒湖とのことは、いろ〳〵ていねいに書きたいと思つてゐたが、――天下の旅行好きが、私の文章で旅行慾をそゝられるやうな、――忙しくて書けない。粗末な文章で勘忍して頂く。（十年六月）



# 飛騨平湯

富田碎花

山脈(やまなみ)の波折(なを)れのかぎり月あかく
てらして飛騨ぞ靜まりて居れ

——(舊作ノートから)——

乘鞍ケ嶽は、小島烏水氏の所謂日本北アルプス假定六線中の第一線を構成する御嶽火山帶中の、木曾の御嶽に次ぐ、山岳重疊たる飛騨での、絕大な高峰であつて標高は三、〇二六メートルを算する。その北麓に戸數二十を出でない一つの村落が、巨大な巖石にこびりついてゐる僅少な牡蠣の生活群のやうに存在してゐる。それは他ならない飛騨吉城郡上寶村の東南端に邊在してゐる平湯の部落である。

——私は岐阜驛で汽車を乘り棄てて、美濃路の關、金山などいふ町々を經て、耶馬溪に匹敵すと稱せられる中山七里の勝景を過ぎ、飛騨の高山(岐阜から約三十五里)に先づ腰を下してから、平湯へ行つたのだつた。(高山から平湯まで約九里)六月の末であつたが平湯峠の絕頂には芳烈な匂ひを放つ山櫻が眞盛りだつた、そして樹立の間やら、簇生した高い隈笹の蔭などには白い雪が殘されて固まつてゐた、この峠の絕頂は、海拔一、六八四メートルからあつて上下二里半可なり苦澁な行程だ、これは高山町から平湯を經て信州松本に出る平湯街道に當つてゐる、高山の町を出はづれて、小八賀川に沿つて五六里行くと、丹生川村の旗鉾といふ部落がある、そこから右手に當つて木曾の御嶽が、コバルトの空にその雪白の冠を着た姿をして旅人の胸を躍らせるやうに聳えてゐるのが仰げるのだつた。愈々平湯の峠越にさしかかると、そこには放牧場があつて埒柵はしてあ

るのだが、いつかそれらを飛び越した惡戯好きな馬や牛などが、自由に森林中を馳驅してゐて、旅人の姿を見たりすると、鼻を鳴らして寄つて來る、別に何をするでも無く不思議さうな顔をしてノソノソと、或ひは思ひ出したやうに活潑に歩みを運んだりする、氣の弱い人間はひどく驚愕させられるのだが、曆日を無視するに近い山中に一歩入れば、人間も獸類も同じ生物だ、さうした境界では俺れは人間様だなどいふケチな誇りは捨ててしまふがいい、そして煙草に火でも點けて、ゆつくり一つフェヤリー・テールスのなかの主人公にでもなつた氣で、さうした動物と會話を交へて見るのも面白からうではないか。

峠の頂上からは、羊腸たる山徑とでも支那風に表現され得る峻險な路を一里足らず下るとそこが平湯だ。尤もその途中からは立派な改修された道路がついてゐたけれど。

平湯の溫泉場は、平湯、下の湯及び數丁距つたところにある山伏の湯の三つから成る、溫泉には附きものの素樸な堂宇を有つた藥師如來が祭つてあつて、その境內附近から湧き出す浴槽へと樋で引てゐる、浴槽を圍んで小部落が形成されてゐるのだが、民家と云つても皆、旅舍、木賃宿である、一番大きな湯では、さすがに男女の別を浴槽に設けてはあるが、夜更けにでもなればそんな堅苦しい境界は自然撤廢、況んや下の湯や山伏の湯になれば、そんな區別などは全く無く混浴である、夜など、行きなり飛び込んで行くと、若い女がたつた一人で、暗いなかに蹲んでゐたりするのを稍々暫らく經つてから發見することなどがある、そしてそれが何らの不自然な、粉飾の心を起させないのが愉快である。盛夏八月の平均氣溫七二・九、午後二時の最高氣溫でも八十度內外だから朝夕は推して知るべしである。浴槽を出たときに、瞳がとらへる俗にタケジロと稱へる白樺森林の樹葉がまるで綠色に燃える火災のやうに陽に映える姿は實に耐らない。そして脚の下から直ちに起つてゐるその白樺の森林帶のうへにひよいと笠ケ嶽（約一萬尺）がのぞいてゐたりするのを發見したら人は恐らく驚喜の叫びを擧げるだらう。また少しく何處かの高いところを選んで登れば硫黃嶽からの不斷の噴煙に、大空を背景に自らの姿にさまざまの色彩の魔術を演じてゐるのが望見される。

槍ヶ嶽の南麓からの溪流と相合して高原川となる毛受母川の水源である平湯大瀑は溫泉を距る十八町のところにある、瀑の長さ六十丈と稱せられて實に壯觀を極めてゐる、今は殆んど廢坑狀態だが、日本に於ける人間の棲息する最高所であると云はれた平湯鑛山（海拔七千尺）に至る途中の「肱折り」の邊から顧みると、笠ヶ嶽、錫枝ヶ嶽（二、一六二メートル）燒ヶ岳（二、〇九四）穗高山（約三、〇〇〇）がそれらの雄渾な姿の望見を恣にせしめてゐる。乘鞍の頂上を眺めるには一日行程で足りる。

時として夜など、一錢二錢と浴客各自から寄進して篠竹の尖端に裸蠟燭を突き通して、藥師如來の境内やら、往來やら所嫌はず地面に刺して、それを點じて大蠟燭？と稱する一種の祭奠を執行する、そして部落中での最大の座敷（と云つても知れたものである、私の記憶にして誤りが無ければ八疊二間位のもの）に、各自に酒の入つた銚子を提げた浴客が各戶から集つて來て、破れ三味線に合はせて唄ひ拔き、踊り拔く。

――かうした夜に、若し遠くから旅人でも到着したならば、部落に足を入れるに先つて神秘な情景の現前を感得するだらう、それは地上に at random に點ぜられた無數の蠟燭の火が、人々の散じた後も點り殘つて一つのポーッとした大氣を蒸成して、立ちのぼる溫泉の湯氣に混つて蜃氣樓のやうなものを幻出するのである。

それは或る月のいい夜の出來事だつた…………

この山間の小部落の寂寞を破つて、『泥棒、泥棒！』といふ烈しい叫びが、木靈のやうに人々の耳に傳はつた、小百人ばかりの湯治客と村人とは總立ちになつて、目を擦り擦り、叫び聲のした家の方へと馳け集まるのだつた。

そこには髮を振り亂したその家――木賃宿の女房と、異樣な風態をした山奥から出て來た精悍そのもののやうな男とが懸命に格鬪の最中だつた、その戰場は往來から丸見えの薄汚れた部屋のなかだつた、この部落では家々に塀も無ければ、無論嚴重な戶閉りの必要は無いのだから…………

人々は、兎に角その男を取り押へた、そして細引で緣側の柱に遮二無二くくりつけてしまつた。

仔細を聞くと、かうである――

湯治客たちの例の徒然に持ち出して調子外れに掻き鳴らしてゐたポコポコ三味線や、それに合はせる様々な卑俗な唄にも飽いたと見えて、何時の程にか聞こえなくなつた、そして夜は、月が明るく、飽くまで靜かに更ける。

木賃宿の女房もすつかり疲れてイギたなく寢呆けてゐた。

ところが、

ところがである――ふと眼を覺ますと、枕元に雲突くやうな大男が立つてゐるのだ、少しは驚いたが、また例の○○ひだらう位に考へて、多少の惡戯心もまじつて寢た振りをし續けてゐると、行きなりその男は女房の枕の下の財布に手をかけた、さてこそ！

「泥棒、泥棒！」の叫び聲が、人々の夢を破つたのだつた。

泥棒！少しの誇張も雜へずにこの事件はこの部落初まつて以來の大事件だつたのだ。人々の評議が一決して、四里もある駐在所へと人を走らせるのだつた。想像しても見て呉れたまへ、「場所」は乘鞍ケ嶽の麓、行くところとして鼻がつかへるやうに四面を山で圍まれた海拔四千尺に近い原始的な山間の小[illegible]場である、『時』は現代、飽くまで澄んだ月光のてらしてゐる夏の一夜、『登場人物』は木賃宿の女房である女主人公（ヒロイン）と、山男のやうな竊盜未遂犯人の主人公と、外に人物多勢、それは部落民乃至遠い町からや近郷から來てゐる商人、百姓たちの多勢の男女の浴客の一群である。さらに君の舞臺面を延長して呉れたまへ、谿谷に沿つて開鑿された路を四里もある遠方の駐在所へと眞實一路に走つてゐる一人の男の姿――月は時々、黑々と塊り縺いてゐる樹の影から姿を現はすこの男のうへに、その澄み透つた光を投げてゐるのだつた。

駐在所に着いたときはもう夜が明けてゐた、ところがそこには迎へるべき人物が留守だつた、さらに彼れは三里距つた次の駐在所の所在地まで走つた。

結局、洋劍の音がガチヤガチヤと、山間の平安な溫泉場に不協和音を響かせたのは事件があつた翌日の夕方だつた、それまでの長い時間をその不幸？な竊盜未遂犯人はどうしてゐたか？

彼れは細引で高手小手に警しめられて柱に繋がれてゐたの

で、飯は握飯を人々が交互に食はせて呉れた、そして用便と云へば人々の見てゐるまへで、そのまま垂れ流しである、大の男の泥棒君はヒイヒイ泣きつづけてゐたのだつた。

彼れはかうして九里先きの所轄警察署へ、さらに九里ある監獄分監所在地へと、無論、徒歩で送られて裁判に廻はされた。

私はこの悲喜劇のやうな窃盗未遂事件を想ひ出すごとに、世にも厳粛な顔をして犯人を引き連れて行つた〇〇官と、それを重く断罪したであらう〇〇官の心理に立入つて想像を逞しくしては苦笑を禁じ得ないのである。

# ガンジスの月

町田曲江



畫材を探るべく印度に行つたのは、もう十年前のことである。そして其の時の情調は何うしても忘れることが出來ないので、一種の追憶をこゝにかいて見る。

自分が印度に行つたのは、夏の雨季上りであつた。晴れたと思ふと直ぐにスコール（驟雨）が襲ふてくる。そこへ印度特有の白牛の角に靑味勝の装飾を施し、其の角の先に鈴を懸けて、人を乘せた車や、いろ〱の車を牽いてあるくのを、熱帶植物特に多い椰子の木蔭の間から隱見出沒する光景をヴエランダの籐椅子にうたたねしながら望むとき、それは彼地に於ける云ふべからざる趣味である。その椰子の葉が月影にバサつく音、鈴の鳴る音等、總てがあつていい知れぬ快感を催さしむる。

ボンベイの西方にあるアダラ附近に行くと、此國は自己の天地と悠然と構へた美はしい孔雀鳥の群が、沙林の中を縱横に馳驅して、人に慣れ〱しく言ひよるさまは、われ〱をして神秘的に導く。宗教的の感懷に燃えしめる。此のわたりの大猿、小猿がまた汽車などには慣れたもので、その大音響を發して通過しても、平氣の平左なるが面白く、そして孔雀同樣に人間と親みをもつてゐるやうで、藝術家の目から見ればそこに面白き境地が味はれる。佛教史で名高いサンチといへるところは、高臺であつて有名なる佛跡の塔門が巍乎としてそこに宗教の心持を新たにせしめる。此の地前面展開して恰かもパノラマを見るやうで、例の椰子の葉陰から孔雀の鳴聲が盛んにきこえる。

印度政府經營のホテルに泊つた晩のことである。夜更けてボツリと天井から落ちて來るものがあつた。氣味惡さに思はず瞬

……がヒヤリとして、跳ね起きて見れば、それはヤモリであつた。續いて大きな蝙蝠が飛び出す、イヤハヤ百鬼夜行の客房、ママよと度胸をすえて强ひて眠れば、いつか夜は明けて朝の凉味に夕の苦悶は何處へやら消えて行く。

綠の丘へ――綠の川へ――そこには滴らんばかりの椰子の林に、山羊や驢馬が多く放飼されてある。其間を我が槐に似た、紅色の小さい花の咲いた樹木が點綴して、萬綠叢中紅一點のおもむきは、全く印度チエリーの美觀といひたい程である。

印度人は概して呑氣に出來てゐる。汽車の時間におくれなどすると、停車場のプラツトホームにゴロ〱寢て仕舞ふなどは、何處までも呑氣で、男は熱帶地にふさはしい白の服を着け、女はそれに赤色を配し、朝鮮人同樣被衣にて顏を蔽ひ、椰子の林からノソリ〱五色の衣を飜して頭上に物を乘せて歩いてゐる樣子は、正に一幅の好畫題である。

印度人の俗謠は、お寺の坊さんがお經を讀んでゐるやうな、悲哀なる亡國の韻を含んでゐる。シヤモジの形をした拍子木で斷し立てゝ歌ひながら。客から錢を貰つてゐる乞食も、鳥渡人の目を牽くものゝ一つである。

ガンジス河――幾多の神話を含めるガンジスの濁流に、赤裸々となつた赤銅色の土人たちが、身を濯ぎ、朝の日の出を禮拜してゐる姿は實に莊嚴の極である。土人は死すれば火葬にして其灰を河流に投げこむ。ガンジス河口の階段を下りたところで、大きな傘を立てゝ、その下で土人が休んだり雜多な物を賣つたりしてゐるありさまは、東京の夜の緣日をおもはしめる。河の岸邊で土人男女が衣すすぎするさま、自由に着物を脫いで濯ぎ、大きな石の扁平な一面に力をこめて打ちつけるのだ。洗ひ終れば自分で手に持つて乾くのを待つてゐるのを見ては思はずお臍が宙返りする。

印度人の樂器は、笛、羯鼓、喇叭、箏、篳篥、銅鑼、マンドリンなど日本の樂器に似たものが多くて、其の奏樂を聞いては何となく活氣に乏しく、そこに亡國を回想せしめ、悲哀の裡の印度人の身の上のさびしさに袖をしぼらせる。

その首都カルカツタ劇場で、彼等の演劇を覗いたが、舞臺面の背景など豫想以上に、技工を凝らしてあつたのには驚いた。

印度語の分らぬ自分――その自分には科白などはもとより啞である――それで味ふことの出來ぬ自分はただ上べりだけの觀客だ、それでも觀客をチャームする技工はすてたものでもない。

文藝上の觀察である。單にそれのみの觀察である。それでもコロンボを經てツチコリンに上陸してからは、探偵の尾行が嚴重となつた。ボンベイでは旅行免狀を調べ、武器（護身用のピストル類）を取り上げられた。同行の九里四郎君（洋畫家）は非常な感情家だ――、そう云ふことでモウ印度の探檢もイヤだ――と悲觀してしまつた。ボンベイのホテルに着くと横濱正金銀行の五十嵐君を訪ひ、同氏の厚意でホテルを引揚げ、同君の宅に厄介になることになつたが、相變らず政廳の探偵がうるさくつきまとうので、怪しき人物でないとの五十嵐君の好意的交涉のためたうとう探偵の尾行しないやうになつたのも、喜劇の一であつた。

喜劇の二は、印度の巡査が胸部腹部に紐で蝙蝠傘をくゝりつけて、ノツリノツリと歩いてゐるその姿、それはまさにチャツプリンの滑稽活動劇の領域を侵犯するものだ。

印度人が汽車に乘つて、炊事を平氣でやつて食事をしてゐるさまなど、相變らず大陸的呑氣さ加減、呆れざるを得ないが、大きな鴉が赤い口をあけて、烏と爭つてゐるところなど、好一對の神秘的なところがある。

ホテルに泊つてゐた或る夕、其處の廊下に土人が三々五々ゐて、何か口走つてゐたが、やがて天井の一端より吊り下げられたる綱を調子よく歌を歌ひながら引つ張ると、丈三尺巾六七尺位の一種の大團扇が動き出す。そうしてゆるやかに起る風は、椰子の樹をもれてくる程の涼味は無いが、雄大な感じのしないのものの一であつた。

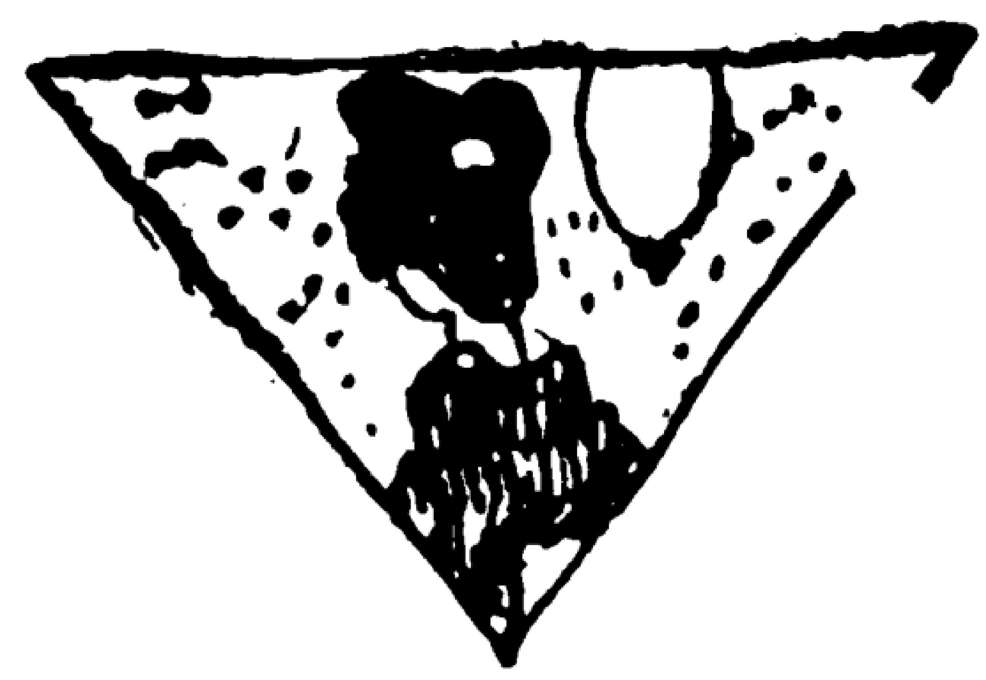
此の地方ではマホメット教が多く、會堂には種々の彫刻物がある中で、日本ならば早速風俗壞亂といふので、其の筋から撤去を命ぜられさうな如何はしいものなどがそこにも彼處にもとり散らされてをる。

ボンベイから船で行く離れ島のエレハンタケイフは、佛跡の靈地として有名な一孤島である。島に上陸した時、海面から吹き返る凉味は、今に忘れることの出來ない思ひ出である。

ブッダガヤの下方に、ボヤの町といふところがある。たそがるゝ空に輕裝して散歩してゐたら、蛙の鳴く樣な聲がするので、其聲をたよりにダン／＼尋ねて行くと、不思議や路傍樹の密生したる枝に多數の鶴が巣籠りをして、子を哺みながら鳴いてゐたのであつた。雌雄かはる／＼雛の餌をあさつて、隣枝の親鳥とつつき合ひ騷いでゐる姿のいぢらしく、且つ氣高さよ、此の鶴は日本の鶴のやうな、丹頂などとはちがつて、全身灰色がかつた毛羽が生えてそこに數十、幾百の群が屯してゐる、靜夜一管の笛をたづさへて「鶴の巣ごもり」でも吹奏したらいかに心神の爽かさを覺えることだらう。

實にも、印度の沙林や椰子の木蔭を逍遙しては、總ての心神が神秘的に引きずられて行く。





# 雲州松江

石井柏亭

一（雲州松江）一

## 雲州松江

松江へ行つたのももう九年の昔になるが、何となく懐（なつか）しい所である。汽車の通じるのが遲かつた爲に人氣が荒びて居なかつたのか知らぬ。それとも不昧公の茶道の餘響もあるか知らぬ。

それは大正二年の八月半から九月へかけてであつたと記憶する。私は其地の高等女學校の圖畫を受持つM先生に招かれて畫の講習に行つたのであつた。講習は一週間であつたが暑い最中だから隨分苦しかつた。女學校の教室で靜物寫生を課したり畫の講話をしたり、また講習生を城山へ連れて行つて野外寫生をさせたりした。城山の天守は兎も角保存されてそこに兵器などが陳列されて居た。城山一帯は公園になつて居てそこには大樹も茂り萩が枝垂れて居た。

『松江大橋流りやうと焼きやうと……』、あの大橋の袂に旅館料亭の類が並んで居るが、私の宿もそのうちの一つで岩田支店といふのであつた。湖水を瞰下す室に居たものだから朝夕の眺めがたまらなくよかつた。

嫁ケ島はつまらないが夕暮の靜な水に白潟の方の白壁と柳が倒（さかしま）に映つたりする景色は何とも云はれない。男が二人腰まで水に浸つて、さいでのやうなものを手にして相對して次第〱接近し行き、結局其さいでをくつゝけて引上げて蝦かなどを取るといゝ、、、ばい〱とか云ふ方法をも面白く眺めた。宿の下は湖水と北堀との間を往復する石油發動汽船の發着所になつて居るものだから、漁夫等の一ぱいに乘つた其船を瞰下すことも屢であつた。

其頃東京の或日本畫家との關係を謳はれて居たM子と云ふ藝

者を宿に招んで二階の欄干に凭れさせ、大橋を背景にしてテムペラで畫いたこともある。

大橋を渡つて、白潟の方の河岸に立つた、俗に三階館と呼ばれて居た、あまり奇麗でない旅館の三階から稍大きい風景畫をも畫いた。これには水上警察の小蒸汽を前景として、河岸に軒を列べる旅館から、城山と尙其うしろの北海を劃る山なみ迄を入れた。其時世話を焼いて呉れたSと云ふ丈の高い青年は呼吸器を病んで一二年前に亡くなつた。彼れは其頃から身體もよくなかつたが、ぶら／＼して出雲の特産になつて居る一種の漆畫を練習して居た。色漆で花模様などを畫いた上に黒漆をかけて後から模様を磨ぎ出すと云ふやうな方法であるが、私はあまりそれを好まなかつた。

高等女學校のM先生と此S君とそれから、末次本町の文房具店のO君と、これも白澤に住んで石版畫工を業として居たK君などが、一夕宍道湖の舟遊びに私を誘つた。それは月のいゝ晩であつた。妓の彈く三絃に合せてO君やS君は安來節やら出雲節やらを唱つた。さう云ふ返らぬ日のことが、これを書く今も馬鹿になつかしく思ひ出される。

私は本庄より今少し先の何とか云ふ處に上陸して見たが大した景色のある譯でもなかつた。海から見る汀の舟小屋に畫趣はあつても上陸しては一向面白くないのであつた。

美保關は圓い小さい灣である。私は宿の二階から雨に濡れた蒸汽の棧橋と漣に倒映のぼける青い水とを寫した。

松江は宍道湖に沿ひ大橋川を以て貫かれるばかりでなく、舊城の周圍から市の外廓へかけて堀川が多く、並藏や其他の建物のそれに沿ふところに、しつとりした水郷の氣分が漂ふ。一日市の東の郊外にある樂山と云ふ陶窯へ行つて樂山焼のいたづらをして見た。茶がかつた陶器である陶窯から淡く烟りがのぼる、其向うの青田を貫く細川に舟の滑つて行くなども亦靜かな水郷趣味たるを失はない。

安來節の安來は、どんな所であるか、汽車を降りて見ないから何とも云へない。併し今では其處に安來節のいゝ唄ひ手が居るとも限るまい。

大橋川の三階館より少し東へ寄つた所から出る汽船に乘つて、私は中の海の方に遊んだ。大根島と云ふのも私の好奇心を動かしたが、併し上陸しては見なかつた。ヴエネチアのゴンドラのやうに兩端の反上つたそりつこ舟が海の上に群るのを見るのは奇觀である。



# 西湖と太湖

成瀬無極

## 一、西湖

滬杭鐵道は四等に分れてゐる。特等に相當するものを頭等と云ふ。そして第四等を、貧民車と名づける。これは隨分思ひ切つた名稱であるが、支那人は特等でも四等でも着く時間は同じ事だといふので所謂紳士連もどんどん四等へ乘り込んで來る。で、かういふ名を附けたのだと云ふ。貧民車には長い裾の衣服を着た者は載せない事になつてゐる。それに係らず、支那人は勞働者に切符を買はせておいて窃に安い車に入り込む者があるさうである。日本の鐵道より廣軌で内部も贅澤に出來てゐる。卓を挾んで座るやうになつてゐて、茶が出る、熱湯を浸したタホルが出る。御大名のやうだ。始め吾々は仕切られた部屋にゐたが、喫煙室と食堂とを兼ねたやうな箱に移つた。番の部屋へ荷物を取りに行つたら、若い支那人の夫婦が陣取つてゐて、そのハイカラの若い夫人が英語で「エキスキユース、ミイ」と挨拶したのには少し面喰つた。一體に新らしい支那人には恐ろしく歐化したのがある。英語などは自由自在に操る。日本の新らしい婦人は到底及ばない位である。案内をしてくれるK氏は十七年も支那に住んでゐるだけあつて支那の生活には徹底的に同化してゐる。家も純支那風で、呑氣な、自由な支那の天地に親むと日本の窮屈な生活には堪へられなくなると云ふ。杭州へは五時間程で行ける。ジエスフイールドあたりから沿道の風光が繪の様に美しくなる。茫々たる沃野が續いて、その間を清流が迂曲してゐる。河畔には眼を蔽はれた水牛が一つ處をぐるぐる廻つて河水を田畑へ汲み上げてゐる。何故眼隱しをするのか

分らないが、恐らくいくら從順な獸類でも單調な旋廻運動を何時間も續けたら仕舞には癇癪を起すのではあるまいか。或は又外の牛が眼に入つては作業が澁滯するといふのかも知れない。ともかく盲目の牛がぐるぐる廻りをしてゐる有樣は、髮を切られたサムソンが臼を挽く姿が想ひ出されて悲慘であつた。デリラといふやうな妖婦の魔力に魅せられて山を拔く膂力も挫け、唯々として賤業に從事してゐるかと思へば哀れである。



杭州驛の一つ先きの停車場で下車して、河沿の猥雜な漁師街へ入つた。轎を傭ふとしたが、存外高價を吹懸けたと見えて、支那通のK氏は一笑に附して對手にしない。そこで俥二臺を命じて先づ六和塔の見物に行く。俥夫は三十位の瘦せた男と、六十以上の長髯を蓄へた、落魄した關羽と云つた老人である。自分は若い方の俥に乘つた。後の俥に支那通が乘つてゐるので、こつちも一通り分ると思つたか、しきりに「先生（シイサン）、先生（シイサン）」と云つて何か話しかけるが、勿論皆無分らぬ。それでも「うむ、うむ」と調子を合せて置いた。關羽の苦しさうな息づかひが如何にも氣毒である。往來は亂暴極まつたもので、線路でも何でも構はずに俥を入れる。

塔は十三層八角である。南支第一の稱に背かず、中々立派なものである。殊に靜寂な周圍の風光が遊子の心を樂ませる。塔守の老翁が茶を薦めた。芳香鼻を撲ち、乾いた舌に快く味はれた。日本のかうした茶店で出す煮花とは雲泥の相違がある。一服の點茶で十分に支那氣分を味得して塔へ昇る。一個所暗黒な場處があつて、老翁は龕に設けた燈

明に火を點して呉れた。塔は宋の紹興年間の建立に係ると云ふが、中頃頽廢したと覺しく、壁畫などは生々しい近代式のもので、稚拙見るに堪へない。塔上の展望は然し昔ながらの俤を止め、銭塘江を脚下に眺め、遠く杭州城を望んで頗る雄大なものである。

塔を下りてまた舊の漁師街を通つて呉山へ行く。俥上で直に火を點けやうとすると、俥夫が態々俥を止めて呉れる。頗る親切であつたが、愈々街外れに來ると、俥を止めて、外の俥夫を呼び寄せて談判を始めた。口角泡を飛ばして盛んに論議してゐる。O氏曰く、

「吾々を賣つてゐるのです。」

支那くんだりまで來て賣り物にされるとは思はなかつた。これから先き幾何と交渉するのであらうか、双方相持して中々下らない。時々吾々の方を向いて何か懇願するやうであつたが、K氏は頑として受けつけない。小半時間經つてやうやう協調が成立したと見えて、吾々は新らしい俥に乗せられて凹凸の道を走る。到るところに武裝した支那の警吏が立つてゐる。如何にも物々しい。

呉山は淺草の奥山と云つた風のところで、堂宇が連なり、抹香の匂ひと鐘の音とが靈場らしい感じを與へる。廣場に支那の兵士が調練をしてゐた。下士官のやうな男が頻りに蠻威を揮つて新兵を虐げてゐる。かういふ風景は天下到る處に充滿してゐると見える。眼腐りの女乞食が路傍に蹲まつてゐて、施物を強請する。支那通のK氏は勿論一顧も與へぬ。うつかりかういふ連中に銭を投ずると蜂の巣を衝くやうに四方八方から群をなして乞食が現はれるといふ。袂を拂つて行き過ぎる吾々を見送つて老婆達は何か口々に喚いた。O氏の説明に依ると、

「あの旦那達は金を持つてゐるのだが吝嗇で惠まないのだ」

と嘲罵してゐるのだと云ふ。かういふ時には言葉の解らないのは頗る便利である。日本から將來したといふ古鐘を見て流石に懐かしく思つた。此處から城内を通つて西湖畔のホテルを指して俥を走らす。城内は非常に殷賑で商賈が軒を連ねてゐる。

西湖が繪のやうに眼前に現はれた。然し、湖畔は茶樓や旅館

が立ち並んで餘りに俗化してゐる。並行した通りには活動寫眞の小屋などが見られた。迂廻して新々旅館といふのに投宿する。西湖畔第一のホテルで、萬事が洋風に出來てゐる。惜い事に眺望のある部屋は悉く占領せられて裏向の一室に案内せられた。幕を垂れ、莫蓙を敷いた廣い臥床がある。支那料理が運ばれた。K氏は舌鼓を打て盛んに箸を動かしたが、自分は上海で連日夜更をした祟で、熱氣があつて恐ろしき太儀である。西洋風呂も濁つてゐると聞いて試る勇氣が無く、發汗劑を服用して早くから臥床へ入つた。夜西湖に扁舟を浮べたら嘸と思はれたが、折から細雨が霏々として降り初めたので、結局蟄居することに極めた。

K氏は燕趙悲歌の士である。熱心な基督教徒で社會改造の理想を懐き、無自覺な支那人に對して甚深の同情を持てゐる。狷介人に容れらずと云つた風があつて、談論風發當る可らざるものがある。自分は氏の眞摯な態度に動かされて「東洋」の運命といふやうな事を考へさせられた。今迄の無關心な自分が恥かしくさへ思はれて來た。支那へ來て始めて「世界」といふものを朧ろながらに想像する事が出來た。日本を離れなければ日本の事は分らないと思つた。

寢苦しい一夜を明かした。汗で肌着がぐつしよりしてゐた。雨上りの清々しい夏の朝が吾々を迎へた。船を傭つて湖上へ出る。西湖は泉水の趣である。不忍池を幾個か集めたやうな感じであるが、流石に錆が着いてゐる。水は淺く濁つてゐる。白蓮紅蓮が眞盛であつた。名も知らぬ水鳥が水を潜つては遠くへひよいと頭を出した。不愛想な年寄の舟子が舟を操つた。蘇堤を望みながら蘆荻の間を擦り拔けて舟は行く。

西湖の勝は雷峰が塔を中心とする。案内記に依ると呉越王の妃黄氏が千尺十三層の塔を建てようとして財力が足らず七層の塔を建てゝ置いたのを、後に風水説に從つて五層に毀つたものだと云ふ。何だか知らないが古色蒼然として樹木鬱蒼と生へ茂り、頗る頽廢の趣を示しつゝ、しかも「時」の絶大の力に對抗して飽迄大地に根を張り、無限の天空に向つて憧れ進む偉力を發揮してゐる。血のやうな夕陽が之に映ずるとき塔影逆まに湖水に浸つて凄婉の美を現ずると云ふ。

西湖獨特の形をした石橋を幾つか潜つて吾々の舟は靄を分けて靜かに行く。先方から寺詣の田舍の善男善女を載せた船が來る。舟夫が相應酬する聲が悲調を帶びて湖上を亙る。

府岸で船を棄てゝ山轎に乘る。長い柄を通して二人で舁ぐ極めて悠長な乘り心地の好いものである。處々に石門を望みながら、青葉の簇り合つた細徑を搖られて行く「ほうほう」と云ふ轎夫の掛聲が如何にも病み疲かれたやうに空虛に響く。上天笠に近づくと路傍に蹲る乞食の數が漸々殖えて來る。中に一人險惡な人相をした四十男が往來の人の姿を見ると俄に作病して哀號する樣が可笑しくもまた恐ろし氣であつた。

三天笠は流石に規摸が廣大で、殊に上天笠は壯麗である。佛像の眼を驚かすやうなのがある。然しいづれも近代の改築に係つたもので藝術上の價値は頗る乏しい。三拜九拜を文字通りにしてゐる支那人を幾人も見た。自分は此處で神籤を引いた。上々吉であつた。




歸り途に靈隱寺の石佛や、石に刻んだ經文を見て、自分の心は一種の悲愁に塞された。十數年前に世を去つた自分の父は幼少の時から書道に志して七十餘歲の生涯を通じて斯道を生命とした。どんなに支那名家の筆蹟に憧れてゐたことであらう。その眞筆が今自分の眼の前に在る。草行の文字に親む不肖の子が圖らずも支那の地を踏み、久濶の地を見ること無しに逝いた其人の墓は既に青苔滑かである。放鶴亭の泉ゝに鯉魚を眺め龍井茶を啜りながら董其昌の額面を仰いで更にこの感を深くした。

岳飛廟の門内に跪された逆臣秦檜夫妻の鐵像は鐵鎖で繋がれ

剰さへ唾吐かれ糞尿を以て汚され、異臭紛々として面を背向けさせる。死屍に鞭打つといふ事を徹底的に實行したもので、支那人の殘忍性を具體的に示してゐる。之に反して可憐なる革命兒秋瑾女の廟が明媚なる西湖畔に千年の名妓蘇小の墓と相對してゐるのは美しい一篇の詩を讀む風情がある。

この他三潭印月、花港觀魚等西湖十景と稱するものがあるけれども、悪寒が去りやらぬ身は烈日に照されて倦怠甚だしいものがあつたので、早々に引き上げて、茶樓に時を消し、再び鐵路を走つて上海へ歸つた。明月の夜西湖に舟を浮べなくては湖上の風光を說く資格は無いのである。

## 二、太湖

蘇州に遊んで蘇州を見ず、不思議な旅であつた。日清汽船のS氏は有名な支那通であるが、まだ太湖を搜らずとあつて、自分の支那行を機會として工學士O氏、東亞攻究會のK氏、及S氏の親戚に當る外國語學校の某君を誘つて七噸ばかりのモーターボートを艤裝して運河に依つて蘇州の西三十里と稱せられる太湖に遊んだ。支那の水夫が四五名乘り込んで運轉、庖厨、の事を司り、船舶の輻湊する黃浦を船出して一夜を船中に送り、終に茫洋たる太湖に出た。太湖は東西二百里、南北二十里と稱せられ、洞庭に次ぐ大湖水で、所謂五湖と云ふのがそれだと云ふ。運河へ出ると兩岸は無涯る原野で、到る處に見られる土饅頭の上に山羊が逍遙の姿を現はしたり、河水に水牛が浸つてゐたり、また窓から支那の男女が好奇の眼を光らせて一行を見送つたり、滊笛の音に驚かされて茶樓に賭博する客が立ち上がつたり、刻々に變つて行く風物は實に應接に遑なく興趣の盡きざるものがあつた。船中で調へる簡單な食事は山海の珍味に勝り、甲板の上の放談は時の移るのを忘れしめた。

市へ着けば舟夫が上陸して魚を求めに行く。S氏は古書を繙いてしきりに太湖の東西兩洞庭山の事を調べてゐる。時々運河の水が盡きて船が河底に膠着しさうになり、或は又兩手の石崖に舷が觸れようとして纔かに通ずるやうな事もあつた。夜は蚊群の襲來に苦しめられたが、拂曉の凉味は到底筆紙に盡しがたい。また夕陽の美しさも陸路を往く人の想像外に在る。遠く虎邱を望み、寒山寺は何處と物色しつゝ頽れかゝつた蘇州の外廓を眺めつゝ吾々の船は進むのであつた。蘇州美人に接する機會を逸し、姑蘇山、孔子廟等の名蹟を割愛し、鈴を吊げた驢馬に乘る風流を味はなかつたが、邦人未踏の處と稱せられる太湖の風光に接したのは誠に望外の喜びである。

さて愈々太湖に出て見ると、見當がつかなくなつた。どれが洞庭山だか分らない。水先案内の支那人に訊ねても要領を得な

い。

「旦那方は水を見にいらしつたのだと思ひました。」といふ返事であつた。玆に於て溫厚なS氏も船長時代の威風を發揮して、水を見るなら誰が太湖くんだりまで出て來るか、

「上海之水太湖之水奚擇乎。」（シャンハイウオタ、ダーフーウオタ、オール、ザ、セエム）

英語で大喝したが、まさに虎髯逆まに竪つといふ慨があつた。然し、どうも仕方が無いので、結局諸葛孔明の俤のある老漁夫を臨時傭ひ入れて案内して貰ふ事にした。

この老人頗る泰然と構へて大に人意を強くしたが、上陸した一島が果して東洞庭であるか、西洞庭であるか、或は又他の無名の島であるか、確實な事は分らずに仕舞つた。成程洞窟はあつたが規模が小さく且つ淺い。書物にあるやうに龍宮とかまで達してゐようも無い。然し、梁山伯の根據地であつたと云はれ、現今でも海賊が出て物騒だといふこの湖上に船を乘り入れた者は極めて尠いといふのであるから、吾々の好奇心は十分に滿足せられたと云つても可い。

史實の如何よりも自分には運河の舟行が無限の興味を與へた。夏の水鄉の氣分と清新な平野の趣とを味得するには南支に遊ばなければならぬ。そして瀟灑纖巧の美と幽玄閑寂の意とを兼ねるものは西湖の水で、雄大豪宕心胸を豁き無限に憧れしめるものは太湖の水である。（完）





# 朝の庭

高濱虛子

萩の若葉の心のところに油虫がついて居る。又た其に蟻が群がつて居る。よく見ると油虫は時々痙攣を發したやうに動いて居る。蟻は其上を無造作に這ふて居る。これは結局どちらの勝に歸するのであらう。萩は一體己をどうする積りだと言つたや

うに痒さうに首筋をもたげてぢつとして居る。

其萩の下に蟻が塔を作りつゝある。梅雨が大地をぼこ〳〵と柔かくして居る、其土を山のやうに積み上げて居る。何匹とも數知れぬ蟻が其山の上を右往左往さまようて居る。五六匹の蟻が頭を突合はして何か談合してる容子であつたのが慌だした連立つて巣の中に這入る。又連立つて巣の中から出て來る。

何處やらに蠅のうなる聲が聞こえる。

庭の芝生に菌が生えて居る。毎年梅雨の頃には此菌が生える。白い小さい菌で一所に十許りもかたまつて生えて居る。又た芝生には小さい草花が生えて居る。其は斯うやつて芝生にしやがんで居ると始めて目に入るやうな小さい花である。小さい葉の尖に白い小さい花が咲いて居る。小さいと言へば芝の尖に一つ〳〵宿つて居る露は馬鹿に小さい。裳や下駄を濡らすのは此露だ。其よりも愈々小さいのは菌の傘の端に宿つてゐる露だ。傘の端がぎざ〳〵になつてゐる其一つ〳〵の尖にある露だ。

白い蝶が三匹もつれて松の樹の向に飛んで居る。

睡蓮の莟が少し縮りをゆるめてゐる。

一番電車が通る。

雨氣がすぐ近くの山の上に迫つて居る。隣の庭の松の樹をも霧が包んで居る。

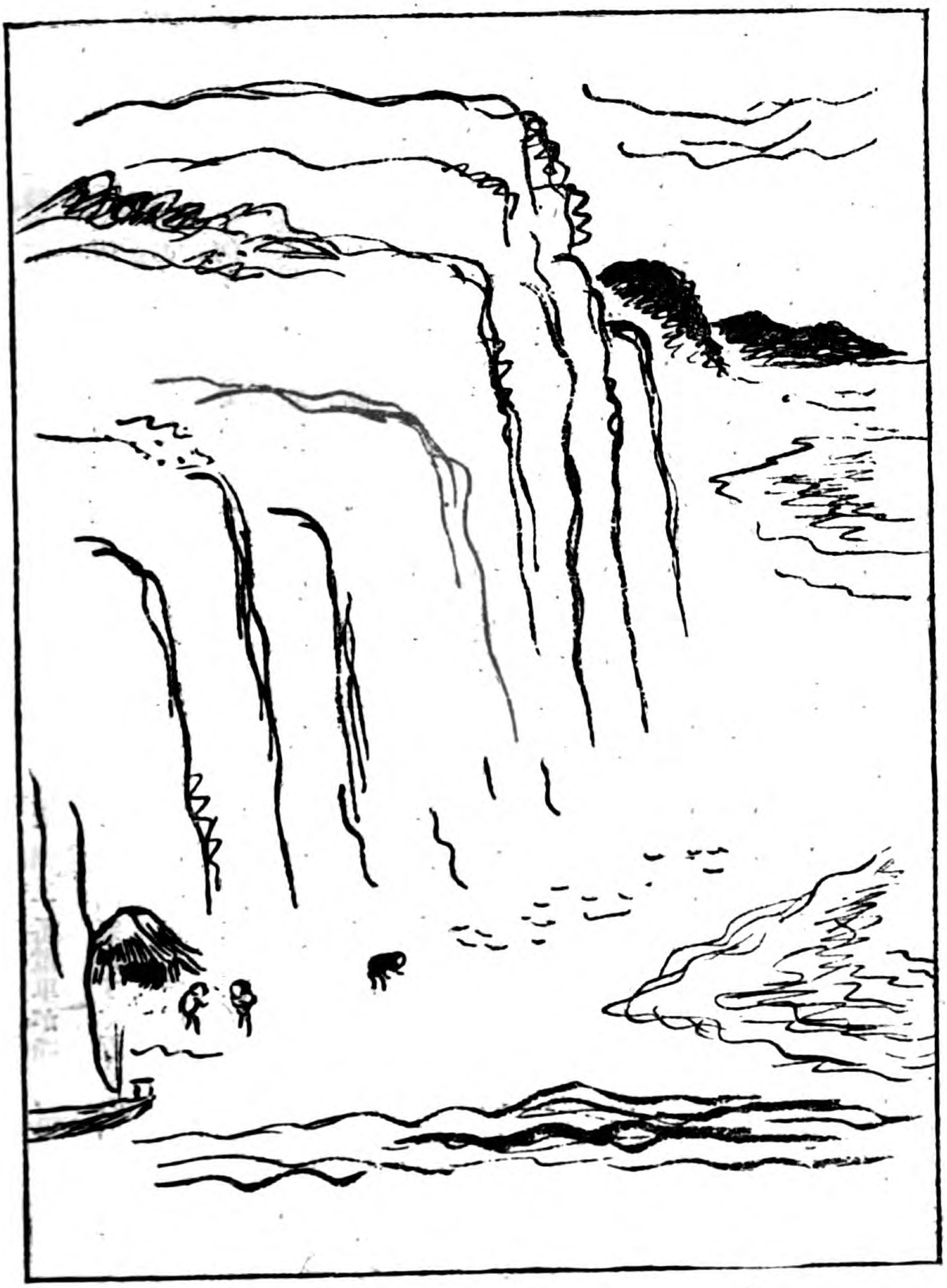
芝生に樣々の虫がゐるのに氣がつく。其中に小さいばつたが居る。これは赤ン坊のばつたであらう。私の下駄の影を恐れて逃げまどふ。他に芝にしがみついて居る一匹の蠅が目にとまる。これは今やつと生れ出た儘であらう。羽が極めて奇麗で全體が薄紫色をして居る。其に二つの黒い眼が馬鹿に大きい。

蝶が殖えた。七八匹も松の樹の間を飛んで居る。一匹は私の背中のあたりを飛ぶ。

睡蓮の莟を覗き込む。芭蕉の雫が襟元に落ちる。熱帶の病を此の雫が持つて來たやうな心持がしてぞつとする。睡蓮の莟は少し口を開けかけて居る。其中に黄色い蕋がほのめいて見える。

青梅が三つ圓らになつて居るのが目立つ。其他にもなつてゐるのであらうが青葉がくれに見えぬ。

二番電車が通る。



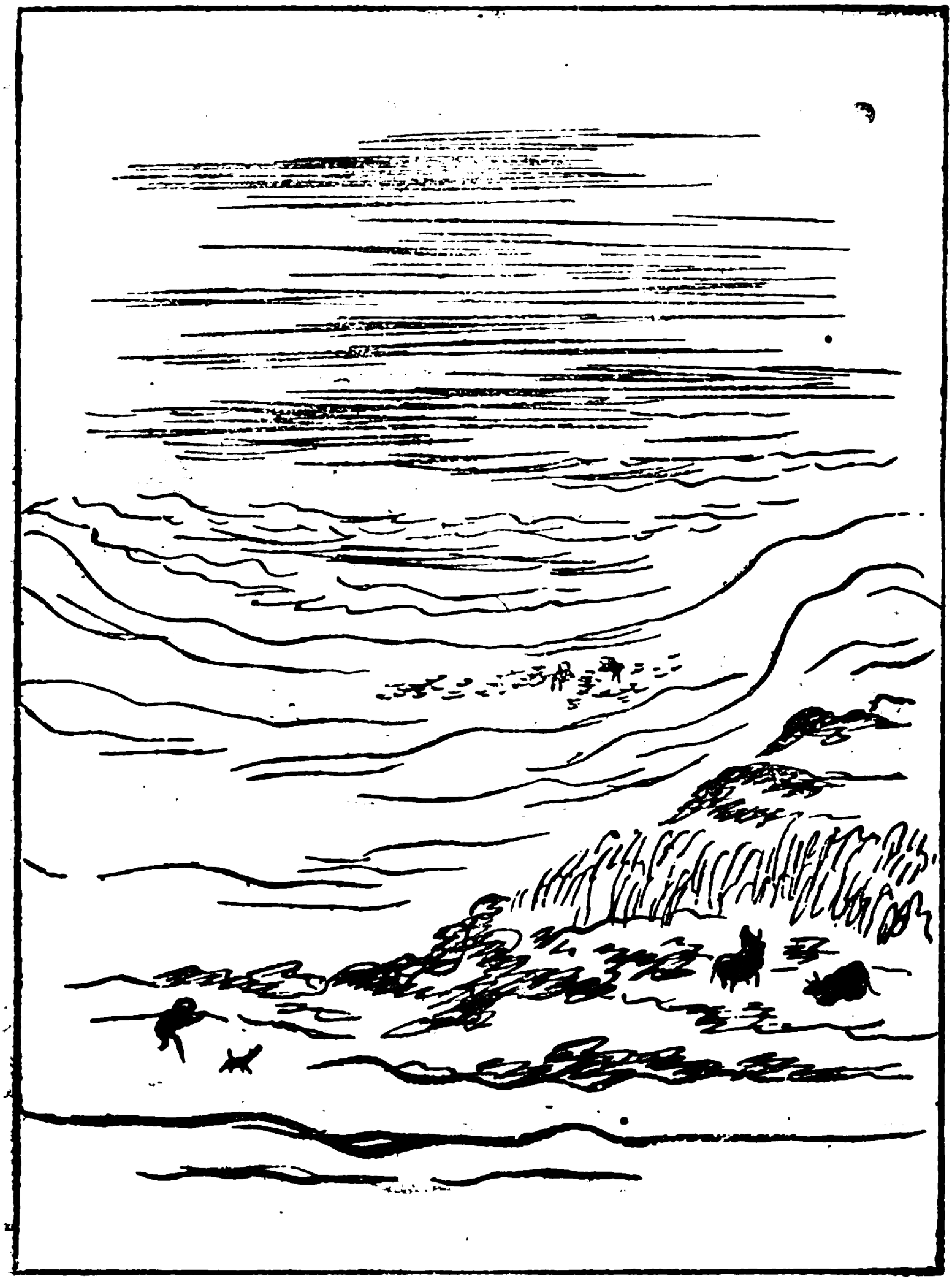
# 海景四種

森田恒友

島國日本は、到る處に海景をもつ。余は此處に異色ある曾遊海景四種を撰び出す。

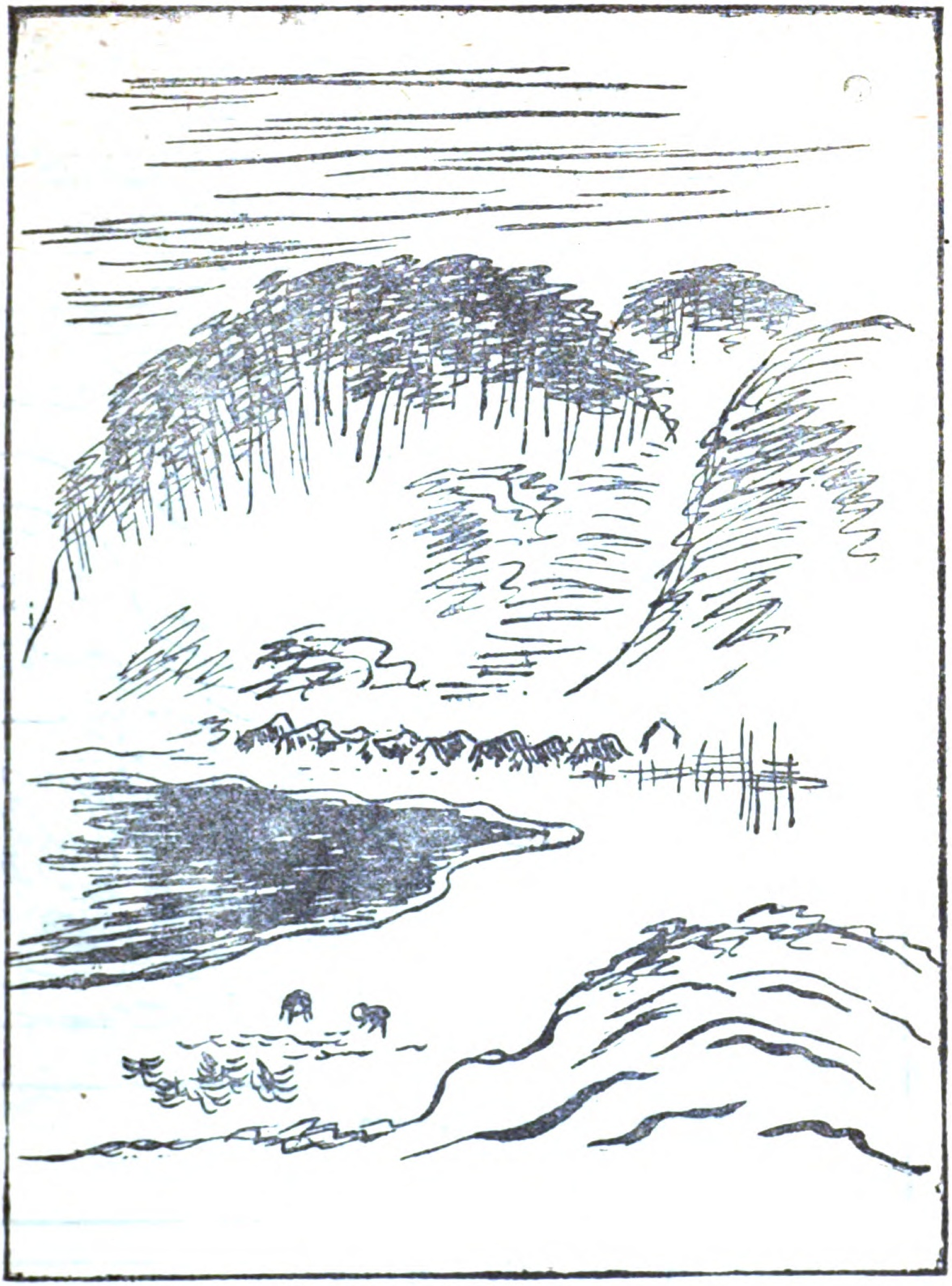
(1) **玄海岸**

玄海灘の岸は、なか〱恐ろしくして又寂しい感じを有す。彼れは時に砂丘漁村を沒し、時に赭土の懸崖の下、蒼潮を湛ふ如き景が多い。人小さくして天地大の感がある。



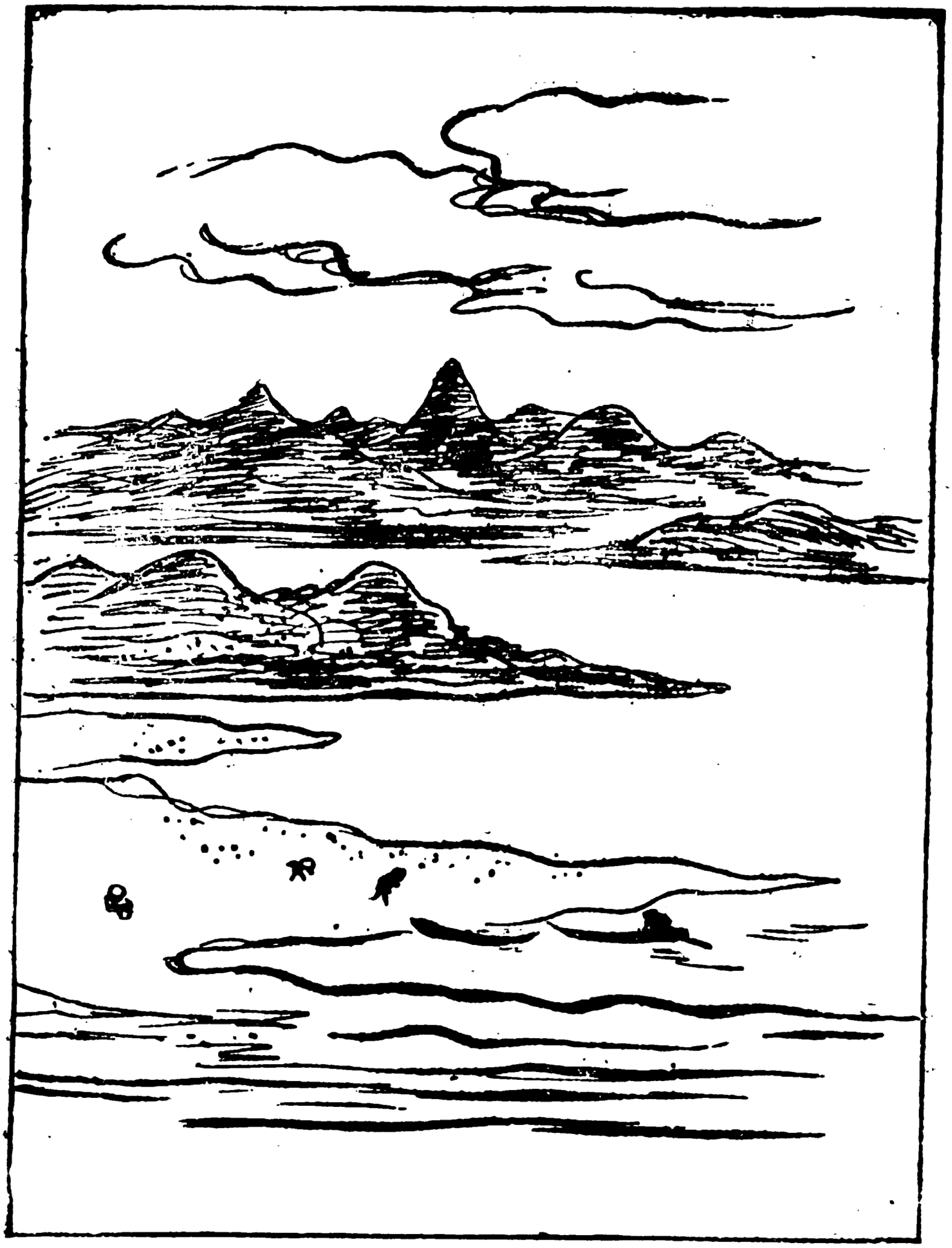
## (2) 太平洋岸。

上總房州の海は、耳慣れた名の爲めに、都人に輕んぜらる。だが恐らく壯快にして而も親しみ易き海景は彼れであらう。濱に天草(てんぐさ)を干し、薯畑に牛のうなる彼の自然を甚だ私は愛する。



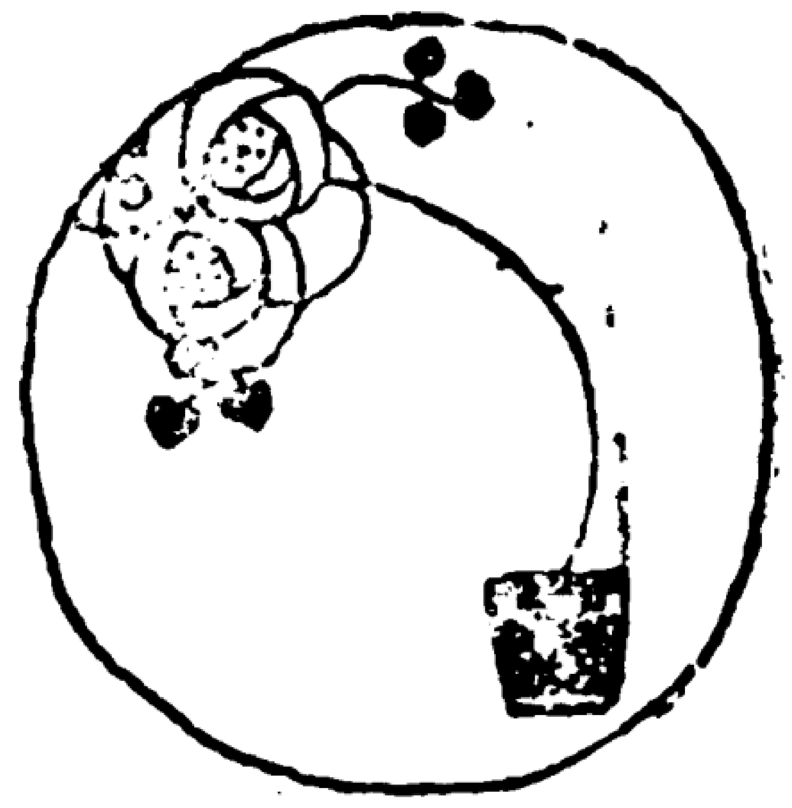
### (3) 山陰の濱

丹波、但馬の日本海岸の寂寞。山路を下れば小灣あり、椀を伏せた様な山の根の濱に碧波寂しく打ち寄する。旅人は斯ふ云ふ多數の景に會ふ。誠に旅情徒らに胸に迫る海景だ。



(4) 八代灣上

八代灣は九州の一角、一日の舟行、油の如き水上に浮ぶ天草郡島の間を行く。不可思議な、人の様な島々が明るく澄み渡る。時に濱邊に近づけば、二三の人影あり、手を拍いて船を送る。旅人自から涙ぐむ。



# ダアルジイリンの夏

鹿子木員信

## 一

それは、或る年の六月中葉過ぎの事である。印度は、カルカツタのセアルダア停車場のフラットフォルムに、親しき見送りの同胞の友に別れて、幾分風氣味の身體を、サンタハル行きの列車の質素な何の装飾もない一等室の冷い黒革のソファの上に横へたのは、午後五時過ぎであつた。

合客は大部分英人である。その半數はカアキイの軍裝した將校であつた。印度人は十人のうち一人あるかないかである。

汽車は、しつとり雨に濡れた、椰子や芭蕉、マンゴや菩提樹に青い、水田の續くベンガルの平原を北に急いだ。車窓の外に、陰雲深く天を鎖ざして、雨は、降つては止み、止むではまた降つてゐる。それもその筈、六月の中葉と云へば、丁度印度の梅雨——嚴密に言へば、印度の有名なモンスウンの雨期の始まる時なのである。

## 二

梅雨、雨期と言へば、我等温帶の居住者には、自づとしめつて冷やかさを、思はせる。陰欝ではあるけれど、却つてその爲めに、或る冷えびえしさを思はせる。併し、印度のモンスウンは、その沈欝鈍重を以て、冷氣を購はない。その齎らす所は、人體の、最も堪え難しとする濕暑である。華氏八九十度の高溫度に於て、遥かに日本の梅雨に優る濕度、雨と霧とを想像しても見よ。それが即ち印度ベンガルのモンスウン時の氣候である。暑さは中々に暑い。汗は玉を爲して流れる。併し高度の水分に飽和されてゐる空氣は、此の玉爲す汗を吸收しようともせ

ぬ。汗は我等の滿身に層を爲して、殘る。譯はない、我等は四六時中汗の肌衣を着てゐるやう、汗浸りである。慣れぬ者は、呼吸することにも懶さを感ずるほどである。

私は、自分の頭腦までが、恰かも風呂屋の窓硝子のやうに、水蒸氣に朦朧と曇るのを感じた。併かもそは頭腦の明晰を生命にも優りて愛する私の、堪へ得る所でない。そこで私は、親しき友の圍繞と、その心地よき住居とのカルカツタを後に殘して、唯だ本にのみ讀み、人傳にのみ聞いたダアルジイリン、知る人とては皆無の、未だ見も知らぬダアルジイリンに向つた。夥しき書籍の重荷を携えて、半永住の覺悟で出發した。たゞ、それがヒマラヤ前山七千呎の山上の都會であると云ふ『ヒマラヤの近さ』にあこがれて。

三

さらでだに濕暑に蒸さるゝ心は、風邪の熱に、浮かされて、幾千哩の長途の旅行に疲勞せる肉體の中を、印度の平野を走る汽車と共に、夢現と駈け廻つた。私はまどろんだ。

唯だならぬ、騷がしさに眼醒むれば、汽車は、既に、ガンガの河を渡り、一八四哩を走りて、闇を照す電燈の光のみ眩きサンタハルの乘換驛に着いて、乘客の半ばは、既にその手荷物を纏めて下りてゐるところであつた。私は、あはたゞしく身仕度して、赤帽ならぬ印度人の『赤帽』に荷物を賴んで、シリグリ行の狹軌の鐵道に乘り換へた。

『ダアルジイリンヒマラヤ鐵道』――印度の山岳鐵道の基點シリグリ驛に着いたのは、その翌朝午前六時の頃であつた。此處で私達乘客は、驛のレストウラントで輕い朝食を取つて、直ぐ、玩具の汽車のやうに小さな山岳鐵道に納まつた。

シリグリは、カルカツタより、鐵路を北に走る三二八哩、印度のガンガ平原の北に盡きんとする所、ヒマラヤ層重の連山の波濤が、遂に、南に消え去らんとする所にある。

シリグリを出て暫らくの間は、此の玩具のやうな汽車は、野性の象や虎の住み家であるテライーヒマラヤ山麓の大森林の中を走り、約七哩を走りてスウクナ驛あたりから、愈々、ダアルジイリンのある七千呎のヒマラヤ前山の尾根を目掛けて、谷を縫ひ谷を渡りて、峯より峯へ峯傳ひに、孜々として登り始め

る。

無論、此の日も、曇り、霧、谷を埋め、雲、汽車の進むにつれて往きかふ峯に徂徠して、半熱帶的密林の大木老樹の緑林は、しつとり、潤んで、あの雄大な、印度平原の鳥瞰的眺めは、その片鱗をだに、見ることが出來なかつた。私は、唯だ登るにつれて愈増さる冷氣に、落ち付かぬ惡寒の心地して、半ば霧に隱るゝ眼さきの大樹の單調な緑に見入つた。狹い一つ客車の中の、あの戰時の英國に見慣れたカアキイの軍裝の將校や、スコットランド聯隊の、あの輕快ないきな帽子に、赤房を飾つた青年將校等の姿は、私には、不思議に、虛僞と冷酷とより鍛え成した鐵鎖の冷たさと重苦しさを思はしむるのみであつた。彼等、素より語らず、私もまた語るべく餘りに誇と侮蔑――否慘ましき痛憤と悲哀を胸に抱いて、獨坐した。

その日の午後一時過ぎ、汽車は遂にその目的地、七千呎のヒマラヤ前山山上のダアルジイリン――漢譯すれば、金剛寶土に着いた。

私は、默々としてその容貌、我等と寸分違はぬネパル人の僕に案內されて、嘗て二昔も前、河口慧海師の止宿せられたことのあるラサ・キラ――名前こそ立流であるけれど、實は頹破に傾いた、たしかに、不潔の名に値する陋屋の、その陰暗な一室を借りて、之れに落ち付いた。

私のダアルジイリンの夏坐、佛教の用語に從つて、雨安居と言ひ度いところであるけれど、實は雨苦居六ケ月の生活は、かくして始まつた。

## 四

而して、それは、病ひを以て始まつた。數日の間、私は、熱に惱んで、餘り美はしからぬ寢床（ベット）の上、足らぬ勝ちの毛布にくるまつて、日の光の入らぬ暗い重苦しい室の中に展轉懊惱した。食物の世話は、辛ふじて、私の不束な、ヒンドスタニを通ふして、ネパルの下僕が、たして呉れた。單なる風邪に過ぎなかつた、私の熱は、數日のうちに下つた。併し、あの鈍重な、牢屋のやうに暗い、常に鉛のやうに重い濕氣を誘ふ室のうちの雲漬け雨浸りの、讀書生活は、尚ほ一月餘りも續いた。而してそれは獨り、雲漬け雨浸りの生活のみではない、私の周圍には、孤獨の

寂寥があつた、否、一種の社會的寒冷の空氣があつた。私は今日尙ほ、之れを深酷なる[illegible]には回想することは出來ぬ。……社會的寒[illegible]白人種が、集團として、その征服[illegible]、間的な、[illegible]してある[illegible]酷なる心である。私は、一般に、此の[illegible]之——その凡ての罪と過ちを以てして尙ほ溫かき心の缺乏、鐵の如く冷酷なる惡魔的雰圍氣を始めて印度に於て經驗した。而して特にその一小縮圖とも見る可きダアルジイリンに於て經驗した。

と云ふのは、ダアルジイリンは、世界に有名な避暑地であるばかりではない、そは盛夏四五六月の頃に於けるベンガル政府そのもの[illegible]避暑地であり、また印度駐在英兵聯隊の所在地である。そしてその小賣商の大部分は、ベンガリ、カシユミリ、マルワリ、パンジヤビ等の印度人であつて、筋肉、勞働者、苦力、人力車夫等は、殆んど全部、蒙古人種の西藏、ネパル、シツキム人である。ダアルジイリンの頭は、英人であり、その中部は印度人であり、その下部は、蒙古種の民である。

私は實にこの人種的階級——社會主義者達の言ふ社會的階級の上に、尙ほ人種的抑壓を重ねた此の恐ろしい極端に外的機械的な人種的階級制度の支配する社會に、その何れにも屬さぬ[illegible]つて行つたのである。併かも、かくの如き社會[illegible]て入ることは、やがて、かゝる社會[illegible]。私の周圍を取りまいたあの社會的の秩序の破[illegible]寒冷の空氣も無理ならぬことかも知れぬ。

## 五

その後、私は、少くもより善き、より靜かなる住ゐをと思つて、町の中心より二哩も隔る山上の一小孤莊、イヤン・グレンと云ふを一軒借り求めて、年四十ばかりのネパルの忠實な下僕と共に移り住つた。私の生活は、自由になつた。家は、山上の一軒家である。その一軒家は、私の獨占する所である。高歌低唱、思ひの儘である。私は、殆んど毎日、讀書研學の一日を終つて、孤獨の夕餉を濟ませると、天氣の好い日には、ゐながらヒマヤラ氷雪の大連山を一眸のうちに收むる硝子張りのエラン

ダに、仰いで吟味に、心の鬱を晴らした。

併し、あの永い間の孤獨の寂寥と、沈淪せる亞細亞の思に沈み行く心を引き立て、晴らしたものは、詩吟の高唱ばかりではなかつた。その最も激烈なる療治、悲哀に對する荒療治は、あの崎嶇たる山背山側の險路を馳驅して、殆んど疲るゝ所を知らぬ錢々葦毛のヒマラヤ馬に乘つて、或は、ルポン道の急阪、或は、タイガア・ヒルへの棧道、險崖絕壁の上を疾驅することであつた。爰に、私は、心ゆくばかり、私自らを味ふことが出來た。而して人間に取りて自らを味ふに優る喜びはないのである。寂寥の感は、孤獨より生れない、之は孤獨の空虛より生れる。

併かも我等人間は、元來社會的なる者である限り、私達の自我そのものが、社會的である。社會のうちに、私達は、その自我を見出し、また味ふのである。私のイヤン・ダレンは、常に最も溫かき心と、混りなき喜びを以て、その客を迎へた。無論私の孤莊の客は多くはなかつた。此の故に、さる機會のある毎に、私には、それは、祭り日であつた。私は、さる同胞の珍客と、手製の日本料理の上に、夜を徹して、且つ談じ、且つ飲んだことも一再ではなかつた。

併し、それは、餘りに稀なる祭り日であつた。私の幽かなる樂しみは、他にある。それは、讀書に疲れては、ネパル人の下僕と、私の不確かなヒンドスタンで、覺束ながらに、語ることであつた。彼と共に、町の公設市場に、食糧品の買ひ出しに行くことであつた。彼を通ふして、此のヒマラヤ南麓に巢喰ふ蒙古人種の生活の魂のうちに入つて行くことであつた。私は、到る所に、同じ喜び、同じ悲しみ同じ溫かなる人間の心の脈打つを見た。而してそは、私を抱き、慰めた。

私は、いつとは、知らず、ダアルジイリン山腹の遙かの下より響の來る、ネパル牧童の歌ふ、調子の高い、元氣な、併し、凡ての亞細亞の調があるやうに、一種の悲哀を帶びた、抑揚に富んだ歌を、極めてなつかしきものに聞くやうになつた。

# 社會講談

# パリ・コンミユンの話

堺利彦

## 一　二個月間の勞働者の天下

今から丁度五十年前、日本では明治の新政府の出來たてで、諸大名が藩籍を奉還し、武士が祿扶持を買上げられて兩刀を腰から放した頃、フランスのパリでは勞働階級が政權を握つて、二個月のあいだ勞働者の天下を出現させた。世界何千年の歴史上で、勞働階級が政權を握つたのは、それが本當の皮切りで、其の次が今度のロシヤである。『パリ・コンミユンの話』は即ち其の二個月間の勞働者の天下を物語るのである。

## 二　普佛戰爭、パリの降伏

日本の明治維新と同一の意義を有するフランス大革命は、今から百二十年ばかり前に起つた。あの大革命でフランスの封建制度が崩れてしまひ、共あとに金持の天下、資本家の天下が出現したわけだが、其あいだには色々なイキサツ、六かしい言葉を使へば迂餘曲折といふ奴があつて、ナポレオン一世の帝國が出來たり、それが又引つくりかへつて第二の共和國が出來たりしたが、一八七〇年（即ち今から五十年前）の頃には、更にナポレオン三世の帝國が出來て、盛んに領土擴張の野心を起し、とう／＼プロシヤと大戰爭をオッぱじめた。普佛戰爭といふのが即ちそれだ。

當時プロシヤはドイツ聯邦の盟主として、王樣ウヰルヘルム、宰相ビスマーク、參謀總長モルトケなどいふエラ物揃ひで、さしも英雄氣取りのナポレオンが散々に打ち負かされた。九月一日、セダンの戰ひでは、八萬四千人の兵士、五十人の將官、五千人の將校が皆な一度に降參した。そしてナポレオン三世陛下

御自身も捕虜になつた。

するとパリでは大騷ぎで、皇后ユーゼニイがイギリスに出奔し、帝政が仆れて共和制の新政府が出來た。間もなくパリはプロシヤ軍に圍まれ、内務大臣ガンベツタが風船に乘つてパリを拔けだし、地方を驅けまはつて新軍隊を編成したが、それも皆な敗北つゞきで、結局、十月の廿七日、メツツの大戰爭で十七萬三千人の兵士が、三人の大將と三千人の將校とに率ゐられたまゝ、おめおめ敵に降參した。斯くてフランスの軍隊は大部分、亡びてしまつた。

それから、プロシヤ軍は引續いてパリの包圍攻撃をやつてゐたが、翌一八七一年一月十八日、キルヘルム王は遂にパリの郊外なるヴエルサイユの王宮に於いてドイツ皇帝の位に登つた。其エライ威勢の前に、パリ政府はとう〳〵二月二十八日を以て降參し、アルサス、ローレンスの二州を割き、五百億フランの償金を拂ふといふ條件をビスマークから押しつけられ、それでヤツト講和條約が成立した。

## 三　國民兵の大活躍

所が、パリの内部の混雜は容易な事でなかつた。最初、セダンの敗報が達して帝政が仆れた時、パリ市民は此の危急の場合差當り前の議會のパリ選擧議員に『國防政府』を作らせ、首相ツロシユ、外相ジユール・フアーブル、内相ガンベツタといふ役割でやらせたが、メツツの大敗以後、政府は最早やパリを防衞する氣力を失つたのに、市民（殊に勞働階級と、中の下階級の大部分）は、猶ほ依然として飽くまで戰鬪する意氣込を保つてゐた。

其の時、パリ市民の實力は『國民兵』にあつた。國民兵といふのは、正規兵が悉く國境に出かけたので、苟くも武器を取り得る總てのパリ人を召集して編成した臨時の防衞軍で、其の大部分は勞働者であつた。然るに此の勞働者の國民兵と、紳士閥の政府との間に、反目が生じて、それが遂に勞働者に勝利を得させる動力となつた。

十月卅一日、メツツの大敗に昂奮したパリの市民は、自然に大群集を爲してオテル・ド・ヴイールを襲撃した。此オテル・ド・ヴイールと云ふのは、元來パリの市役所の事だが、同時にそれ

が中央政府の所在地である。即ち市民が政府を襲撃したのである。然らば市民の要求する所は何かと云ふに、プロシヤの侵入軍に對してパリを防衛する爲めには、此の非常の際、特別の政府を樹立する必要があると云ふのであつた。從つて或者は公安委員會を要求し、或者は革命コンミユンを要求した。公安委員會と云ふのも、革命コンミユンと云ふのも、フランス大革命の時に非常な威力を揮つた臨時政府で、つまり革命黨の特別委員會であつた。元來コンミユンとは獨立した市町村自治體の事だが、當時革命黨がパリの市役所を乘取り、遂に其まゝフランス全國の政權を握つたので、それを革命コンミユンと云つたのであつた。そして今、プロシヤ軍の侵入を眼前に控へたパリの市民は、その昔しの革命コンミユンを思ひだしたのであつた。

そこで市民の大群集がオテル・ド・ヴイールを襲撃したが、前記の國民兵は少しも政府を擁護しなかつた。そして政府員は直ちに監禁され、フルーラン、ブランキイといふ、有名な二大首領が、半日ばかり權力を握つた。然し準備のない政權把握者が市役所の内部で議論や憤慨に時間を費してゐる間に、保守派の連中は國民兵の一部を口說き落し、ブランキイだの、フルーランだのといふ、あんな亂暴者に政權を任せては大變だと、臆病な中流階級を威かし、巧みに政府員の監禁を解いた。斯くて政府は復活した。そして約束に背いてブランキイ、フルーランを捕縛した。

それからパリは敵軍の包圍の中に新年を迎へたが、一月廿日、政府はモウどうしてもパリの籠城が出來ない、從つて敵軍と講和談判を開くより外はないといふ布告をした。すると廿二日の早朝には、國民兵が監獄を破壞してフルーランを救ひだした。勞働階級は再び一揆を起してゐた。所が其日の當番には、國民兵の中の中流階級の分子がオテル・ド・ヴイールを擁護し、勞働派との間に砲戰を起し、準備の不足な勞働派は死傷と捕虜とを出だして潰えてしまつた。こんな風に、勞働派の革命的一揆が二度まで流產に終つた後、パリはいよ／＼敵軍に降伏し、廿九日には郊外の要塞にプロシヤの國旗が翻つてゐた。

そこでパリ政府は講和條約批准の爲に新に國民議會をボルドウに召集したが、其の選擧には巧妙な術策が行はれて、パ

り以外の各地方では、保守派が大多數を占めてゐた。そしてチエールといふ頑冥で老猾な政治家が行政長官に選ばれた。それから新政府は、今ではもうドイツ軍よりも國民兵が恐ろしいので、一日も早くそれを解散させる事に苦心してゐたが、さすがに輕々しくは手がつけられなかつた。そこで二月の初から三月の十八日まで、一方は武裝したパリの市民、一方は國民議會と政府其の二つの勢力が睨み合ひの姿であつた。

## 四　三月十八日の一揆

ボルドウ(日本なら大阪とでも云つたような處)に開かれた國民議會は、講和條約を批准してから、今度はパリを壓伏して保守派の天下を現出させようとたくらんだ。即ち彼等はパリを首府とする事をやめ、議會も政府もヴエルサイユに移すといふ決議をした。ヴエルサイユは昔しの王宮の所在地で、パリから五里ばかり西南の小都會である。丁度その事のパリに知れた日、即ち三月十一日、赤色共和黨(即ち平民的急進派)の機關新聞が禁止され、同時に又、フルーランとブランキイに對する死刑の宣告があつたので、パリ市民の憤慨は極度に達した。殊に國民兵の給料支拂をやめ、續いて其の武裝を解くといふ噂が傳はつたので、國民兵がいよいよ激昂した。

それから國民兵は急に評議を凝らし、各區から三人づゝの代表者を選出して、國民兵中央委員會を設置した。此の委員會について非常に面白い一つの特色があつた。即ち委員は總て其の人物の確かな事と、實際上の能力とに依つて、各區の同志から選出されたので、全く無名の人達であつた。それから中央委員會の外に局部的委員會もあつて、其の中で最も有力なモンマルトル支部などは、時として中央委員會と間違へられた程であつた。そんな風で國民兵の委員會が次第に權力を作り、當時西部歐洲全體に有力であつた『國際勞働者同盟』(即ちインタナショナル)や、其外諸種の勞働團體は後援されて、國民議會と政府とに對する』爆發の時機を待つてゐた。

チヨツトこゝでパリの内部に於ける急進派の色別をしておく必要がある。第一は、パリをどこまでもフランス全國の首腦にしたいといふ都市的愛國者。第二は、王政復活の陰謀が見えてゐるので、それに對抗して共和制を維持しようといふ共和主義

者。第三に、主として『インタナシヨナル』に屬する社會主義者。それで中流階級の人には、云ふまでもなく大體上、右の第一、第二に屬してゐたのだが、革命が進行するに從つて、社會主義的色彩が段々濃厚になり、二三週間の後には、それが全く運動全體を併呑してしまつてゐた。其の事は追々あとで分る。

扨、チエール其他の諸大臣は三月十五日、ボルドウからパリに戻つて來て、早速パリ市民の武裝解除に着手した。これは隨分市民を見くびつた話で、當時、政府は精々二萬五千人ばかりの、而もダラケきつた正規兵を持つてゐたのに、國民兵は約十萬人を算してゐるのであつた。尤も、國民兵の中で幾隊かは政府側につく見込もあつたらうが、それは殆んど物の數でなかつた。然るにチエールは大膽にも斯る無謀な事を決行しかけた。

それでチエールは先づ、モンマルトルに在る二百五十門の大砲を取り上げろといふ秘密命令を下した。そして十八日の朝の三時頃、市民のまだ寢てゐる中に、正規兵の一隊ばかりが不意を襲うて、わけもなく其の大砲を占領した。然し彼等はそれを他に運搬する準備を忘れてゐた。それでドヤクサやつてゐる中に、モンマルトルの人々が目を覺ましてビツクリした。一番先に飛びだして大砲のまはりに集まり、それを占領してゐる兵卒等に怒鳴りつけたのは、近所の婦人連だつたと云ふ事だ。程なく合圖の喇叭が響き、太鼓が鳴り、國民兵が續々と集まりだした。彼等は鐵砲の台尻を上に向けて、女や子供の群集と一緒になつて、ヒシヒシと詰め寄せた。正規兵の中にも存外國民兵と馴れあふ氣色が見えた。正規兵の大將ルコントが躍起になつて三度まで發砲を命じたが、兵卒等は應じなかつた。初め二三發、打つには打つたが、大した怪我人も出なかつた。見る見る中に群集は前進してスツカリ兵卒等と馴れあつてしまひ、大將ルコンドはフンじばられた。

これと同じような事が外の諸隊にも起つた。到る處、正規兵が市民と馴れあつた。十一時頃には總ての大砲が國民兵の手に取り返された。國民兵と正規兵とがゴツチヤになつて市中を行進した。政府はどうする事も出來なかつた。政府の下に集まつた者は、僅々數百人に過ぎなかつた。

チエールは、パリの全市が自分に反抗してゐる此の形勢を見

て、慌てまくつてオテル・ド・ヴイールの裏口から抜けだして、ヴェルサイユに逃走した。外の大臣連も段々に其の跡を追ふた。總督ヴイノイも夜になつてから、兵隊と彈藥とを引き纏めて落ち延びた。

午後の四時頃、クレマン・トマといふ將官が一人、群集につかまつた。これは一八四八年の騷動の時、盛んに虐殺をやつた男なので、直ぐに町家の壁に押しつけられて、廿挺のシャスポ銃で滅茶々々に打ちぬかれた。それから前記の大將ルコントは國民兵の本部の一室に拘禁されてゐたが、そこに群集が怒鳴りこんで來ると、地べたに這ひつくばつてオイオイ泣きだし、家族の者がどうのこうのと云つて憐みを乞うた。自分が今朝發砲を命じた時、其の砲先に死ぬる筈であつた群集の家族の事を、彼が少しでも考へたであらうか。兎にかく彼は引きずりだされて、群集の處刑を受けた。勿論、ブルジョアの新聞紙は盛んに此の二人の處刑を批難した。

一體、此日の一揆は全く自然に爆發したので、何等の準備も計畫も組織もなかつた。國民兵中央委員會は餘ほど遲くなつてからヤツト開かれた。それから初めて政府の役所や軍事上の要所を占領する事にかゝつたが、其の時にはモウ政府の諸大臣も兵隊もすつかりヴェルサイユに引揚げてゐた。それがパリ・コンミユン一揆の第一の失策だつた。若しか全體の運動が今少し組織だつて、規律と訓練とが行屆いてゐたなら、早くから諸方面の大木戸を閉鎖して、目ぼしい敵を皆んな一纏めにからめとる事が出來た筈だ。これにつけても、組織のない一揆の爆發では、折角の仕事を肝腎の所で滅茶にするといふ事が分る。

## 五　パリ・コンミユンの成立

三月十九日には、オテル・ド・ヴイールにも、其他の公けの建物にも、皆な赤旗が飜つてゐた。革命は正に勝利を得てゐた。パリの政權は既に國民兵中央委員の手の中に握られてゐた。中央委員は此の突然の權力把握に依つて寧ろ自ら驚き呆れてゐた。直ちに進んで敵をヴェルサイユに攻めるといふ大事の方策を主張する者も無いではなかつたが、多數の委員は只まごまごして何事も手につかず、空虛な法律論に拘泥して、早く正式のコンミユン選擧を行ひ、自分等の權力をそれに讓り渡す事ばか

り考へてゐた。如何にもソダクシのない公明正大な心掛には相違ないが、此の危急の場合を切り拔けるに必要な、大膽と機敏と果斷とを缺いた態度であつた。

それでパリの代議士と、各區の區長とに對して交渉が始まつたが、クレマウソウ、ルイ・ブランなどいふ其の連中は固よりブルジョアの代表者で、君等は一揆暴動の團體ぢやないか、など中央委員の事を罵つたりして、オテル・ド・ヴイールを自分等の手に占領しようと掛つた。彼等は勿論內々でヴエルサイユと通じてゐた。そこで中央委員は彼等との交渉を打ち切り、次の水曜日（即ち廿二日）を以てコンミユンの選擧を行ふ旨を宣布した。

然し區長連、代議士連は此の選擧に對して抗議を試み、ブルジョアの新聞などがそれに加擔して騷ぎ立て、『中央委員を仆せ!』などゝ叫ぶ藁人形の示威行列もあつたりして、とう〳〵選擧は日曜日（即ち廿六日）まで延ばされた。さすが其の時には、國民議會のパリに對する態度が餘り露骨なので、穩和な區長連もパリ擁護の爲に反抗の鋒先を緩めて來た。

いよ〳〵日曜日に選擧が行はれ、廿八萬七千人の投票があつた。パリ・コンミユンが正式に成立した。其の議員の數がチョット分らないが、多分百人以上もあつたらう。其コンミユンなる者は、市會のようでもあり、國會のようでもあるが、前にもチョット說明して置いた通り、決して單なる立法機關ではなく、立法と行政との全權を總攬する、統一獨立な民政機關であつた。然らばロシヤのソウイエツトのような者かと云ふに、元來がブルジョア制度傳來の自治機關であつて、ソヴイエツトほど明白な勞働階級の權力機關ではなく、まだ餘ほど漠然とした所があつた。元來フランスには、市町村の獨立自治體（どんな小いさなのでも）が主權となり、それを聯合して國家を作らうといふ中世のブルジョアから傳はつた、中央集權排斥の思行思想があつて、それが又、プルードン、バクニン等の無政府主義學說の根本となつてゐた。從つてパリ・コンミユンにも此の傾向が顯著であり其の色彩が濃厚であつた。然し一方から見ると、パリ・コンミユンの實質は只だ勞働者の天下であり、勞働者の共和國であつて、昔しの大諸侯が王權を仆したのに對

し、今度は金權を仆すのが根本目的であつた。其の意味からすれば、コンミユンは卽ちソヴイエツトの前身であつた。

それは兎もあれ、三月廿七日はコンミユンの宣布でパリの全市が狂喜のどよめきを擧げた。祝砲が鳴り渡る、マルセーズの奏樂がある。赤旗が到る處に翻へる。國民兵はオテル・ド・ヴイールの前に整列する、人民は其の前に群集して歡呼の叫びを擧げる。新議員等は代る代るオテル・ド・ヴイールのバルコニイに現はれて挨拶をする。子供や女や若い男は皆はしやぎ、年寄は只だ嬉し泣きに泣くのもある。實に『偉大な日』『莊嚴な日』であつた。

所で、**選出された**コンミユンの大部分は勿論、革命主義者と社會主義者とであつたが、中にはブルジョアの自由主義者や急進主義者もあつた。議長に選ばれたベズレイは溫厚の長者で、ブルジョアではあるが最後までコンミユンの爲に働いた。執行委員はルフランセイ、チユヴアール、フエリス・ピヤ、ベルゲレー、トリドン、ユード、ヴアイヤンの七人、其他、軍事、財政、司法、保安（警察）、勞働、糧食、外交、救濟、敎育等の各委員會が作られた。

然し大體から見て、コンミユンの委員等は革命の政策について甚だ迂濶であつた。第一、革命コンミユンが新たに成立した以上、直ちに明晰な平易な宣言を發表して、今後着々實行しようといふ、諸種の新施設を具體的に說明して、一般人心に訴ふべき筈であるのに、彼等はそれを爲し得なかつた。ズツト後にて發表した宣言にも、例の潔癖な中央集權排斥論や、空虛なセンチメンタルな抽象論ばかりであつた。次に彼等は地方との連絡を取る事を怠つた。三月十八日以後、パリと自然に相呼應する頗る有望な運動が諸地方に起つた。卽ちリヨン、マルセイユ、サン・エチアンヌ、ナルボンヌ、ツルーズ其他の都市に續々としてコンミユンが發生した。けれども中央のパリから何等の援助もなく、奬勵もなく、通信すらもないので、物質上にも精神上にも皆な孤立の狀態に陷り、其の多數は僅に數日の中に沒落し、マルセイユとナルボンヌとだけが稍や長く持續したけれども、それでも二週間たゝない中に、地方に於けるコンミユン運動は全滅してしまつた。

之に反し、ヴエルサイユでは、國民議會もボルドウから移轉して來る、ドイツ軍に頼んで捕虜を釋放して貰つた爲に兵力も增大するといふ有樣で、氣勢が大いに揚り、地方のコンミユン運動はビシビシ叩きつぶす、パリへの貨物列車は遮斷する、パリ行の一切の郵便物は差し止める、其ほか種々な宣傳はやる、パリ壓伏の準備は手ぬかりなく遂行してゐた。

斯くて三月の末頃には、穩和派のコンミユン議員は（ペズレー老人の外）辭議し、パリの上流人士は續々相率ゐてヴエルサイユに引移つた。

## 六　第一戰の大敗北

四月一日、チエールは正式に宣戰を布告し、ヴエルサイユ軍は何等の豫告もなしにパリに向つて砲火を開いた。パリ人は周章狼狽した。まさかこんな事にならうとは、今の今まで思つてゐなかつたのである。

然しコンミユンの軍事委員は兎にかく進撃の決議をした。二日の夜、深更、第一隊（卽ち右軍）一萬五千人は二手に分れ、ベルゲレーとフルランとがそれを率ゐ、モン・ヴアレリーンの壘を包んで北方から進行し、其の壘の背後に於いて二手が更なつてヴエルサイユに向ふ。第二隊（卽ち中軍）一萬人はユードが率ゐて眞直にヴエルサイユに突進する。第三隊（卽ち左翼）三千人はチユアールが率ゐて南方から進み、ヴエルサイユの直ぐ手前で中央本隊に合する、といふ作戰であつた。若し此の作戰どほり實行されたなら、ヴエルサイユは多分不意を襲たれてコンミユンの手に歸したゞらうと云はれてゐる。

所が、コンミユンの國民兵も丸で規律がなく、三隊共に夜が明けてからヤツトのことで、パリの城壁を跡にしたといふ始末であつた。そして先づベルゲレーの北隊がモン・ヴアレリーンの北方に達すると、忽ち壘の中から砲彈を浴せられた。元來、この壘はパリとヴエルサイユとの間に於ける第一の要害で、最初國民兵が逸早くこれを占領しないのが、軍事上、最大の失策だと云はれてゐる。況んや其の後、ヴエルサイユ軍に占領されてゐる。今日、三月十八日の例に倣つて、正規兵が發砲しない約束をしたと云ふのを恃みにして、高を括つてやつて來たのが又大失策であつた。それにベルゲレーが勇敢な戰士ではあるにし

ても、一軍を統率するだけの知識と經驗とを缺いてゐたので、砲彈雨下の間にシヤニムに突貫の命令を發して、瞬く中に自分の隊の半分以上を殺してしまつた。此の急報に接して早速道を轉じて應援にやつて來たフーランの一手が、同じく眞正面から壘の砲彈を浴せられ、二手が一つに合した時、一萬五千人の一隊が僅かに三千人になつてゐた。そこを又ヴエルサイユからも砲擊されて、散々の體で退却した。フルーランは敵兵に捕へられて、虐殺された。フルーランは中產階級の出身であつたが、深く勞働階級に信頼された有名の革命家で、此の人の戰死は頗るパリ人の意氣を沮喪させた。

右軍の此の敗北に次いで、ユードの中軍は退却し、チユヴアールの左翼は降伏した。チユヴアール其他多數の將校は射殺された。悲しいかな、此の第一戰に於いてコンミユンの運命は既に死してゐたのである。そしてヴエルサイユの軍隊內では、少しでもパリに同情を寄せるような言葉を發した將校は、片つぱしから秘密の中に殺されてしまつた。

## 七　多數派と少數派

それから以後、コンミユンは只だ敵の來襲を防禦するばかりであつた。ポーランド人ドムブロウスキイ兄弟が、モン・ウアレリーンの砲火を浴びつゝメイロウの壘を死守した勇敢壯烈な物語などは殘つてゐるが、コンミユン全體としては殆んど何等の積極的施設もなかつた。

四月十六日にコンミユンの補缺選擧があつたが、選擧人は非常に少なく、コンミユンの無能と失態とが漸く人心を失つた事を示してゐた。そこでコンミユンは人心を新にする必要を感じて、此の選擧の後、漸く政綱を發表したが、其の起草者は主として新聞記者ピエル・デニスで、其の內容は前に云つた通り、徒らにコンミユンの獨立自治を力說したものであつた。其の說を喩へて云ふと、フランス國といふ大海の中にパリといふ大きな離れ島を一つ作りあげれば、他にも續々として無數の小島が自然に現はれ、それらが自由に聯合して大海の全面に群島の組織を出現させると云ふのだが、强敵を眼前に控へながら、そんな魔術のような美しい夢を見てゐたのは、餘りに迂濶な非實際的な考へだつた。過大な中央集權の行はれてゐる官僚國家は誰し

も御免を蒙りたいに相違ない。從つて各地方の獨立自治は結構に相違ないが、敵に包圍されたパリの運命が目前に迫つてゐる此の危急の場合に於いて、潔癖な分權論に拘泥して、革命擁護の實力を確立する必至の方策を忘れたのは、パリ・コンミユンとして誠に○しむべき不徹底であつた。

猶ほ其の時、コンミユン會議の內部に多數派と少數派が對立して、それに個人的の嫉視反目がからまつて、大事を前に控へながら下らぬ論爭と軋轢とに時間と精力を徒消したのは、どこの歷史にも有りがちの事とは云へ、如何にも情けない現象だつた。多數派と云ふのは重にブランキスト及び浪漫的共和主義者であり、少數派と云ふのは重に『インタナショナル』に屬する社會主義者であつた。ブランキストは卽ち豪傑社會主義者ブランキイの一派で、『勞働獨裁』の古い主張者だとも云はれてゐるが、其の『勞働獨裁』は『勞働階級の獨裁』といふ意義ではなく、寧ろ『少數豪傑の獨裁』であり、もひとつ手つ取り早く云へば『ブランキイの獨裁』であつたらしい。從つて彼れの幕下に集る者は、主義とか理解とか信念とか云ふ事よりも、只だ首領の命令に從つて動く豪傑の一群に過ぎなかつた。そこで一朝ブランキイが(前記の通り)敵の捕虜になつて見ると、首領なしには殆んど何等の纏まつた運動の出來ない連中ばかりであつた。それで彼等は一生懸命、首領取戾しの運動をやり、こちらの人質を皆んな返してもいゝからブランキイと交換しようと、ヴェルサイユに申込んだが、チエールは斷乎としてそれを刎ねつけた。

こんな譯でブランキストがふら〳〵してゐる間に、其他の大勢のコンミユン議員等は、浪漫的な、空想的な、舊式の共和主義を奉じてゐる、古い首領達にクツついて、取りとめもないカラ氣焰を擧げてゐた。フエリス・ピヤといふ人物などは、空言家の首領の標本であつた。一體、コンミユン議員は、何等の組織も準備も計畫もない運動の中から、あのドサクサの間に選出されたのであるから、隨分好い加減な、雜駁な分子を集めた事になつて、外國人もゐる、スパイも交つてゐる、ゴロツキも紛れこんでゐる、といふ有樣で、まじめな勞働者と云つても、必ずしも一番有力なシツカリした人物が精選されたわけではなかつた。それで彼等の多くは只だ無暗に昔しの大革命の記憶にあこ

がれワイ／＼騒ぐ事の熱情に驅られ過ぎて、革命擁護の實力を堅める事は、兎かく忘れがちの有樣であつた。『インタナショナル』の人々は、社會主義の空想家と云はれながら、右の人達に比べると餘ほど實際的であり、現實的であつたが、其の理想とする所は、資本家の産業者勞働者の自治國體に引渡すと云ふので、政治上には矢張り分權自治制の國家を主張してゐた。從つてこれも矢張り、軍事上の急要など眼中に入れる餘裕がなかつた。デレクリユーズ、ヴアルラン、フエレなどいふ人には頗る識見の高い、才幹の多い人物だつたと云ふ事だが、少數有能の人物があつても多數の大勢を動かすには足りなかつた。

其間にヴエルサイユでは益々ドイツ戻りの兵隊が增加して、四月の末には十三萬と云ふ多數に達してゐた。そしてビスマーク其他ドイツの軍事官憲は猶パリの北方に駐屯してゐながら、チエールとフランスの紳士閥とに有らゆる援助を與へて、其共同の敵たるパリの勞働階級を壓伏することに努めてゐた。

## 八　内政の各方面

一般政策に於いてコンミユンが齒がゆいほど拙劣であつた事は右に云ふ通りだが、内政上の施設については隨分愉快な事もあつた。尤も其の間にも矢張り大失策もあつた。そこで今度は、各方面の施設について少し話して見る。

コンミユンが初めて政權を握つた時、彼等は第一に、一八七〇年十月から一八七一年七月までの、家賃、地代等、總ての賃貸料を免除する法令を發布した。それで先づ多數の貧民勞働者が大變に助かつた。それから各種の委員(即ち諸役所の長官)が出來て、それぞれの施設に着手したが、こゝに一つ特筆すべき事がある。それらの委員(即ち長官達)は總て勞働者及び小事務員の出身であつて、其の給料には最高制限があり、最高の分でも普通の勞働者の賃金と似たものであつた。凡そ大變事の際には之が是非とも必要で、現にロシヤでも其の遣口である。

財政部はパリ・コンミユンの仕事の中で最もよく整理してゐたと云はれてゐる。委員はジユールド、ヴアルランの二人で、ジユールドは元どこかの會計係をしてゐた人、ヴアルランは製本職工であつた。此の二人が、諸種の公共事業費から、國民兵

の給料まで合せて、一日六十七萬五千フランといふ多額な支出をする爲に、總てに切りつめた節儉を行ひ、嚴密な記帳をしたのは、實に模範的の遣方だつたと云はれてゐる。

但し、フランス銀行に對する處置は一般に大失策と認められてゐる。尤も、それは右二人の失策ではなく、パリ・コンミユン全體の責任である。初め二人はフランス銀行に談判して百萬フランの金を引出したが、それは程なく使ひ盡したので、再び談判に出かけると、今度はにべもなく拒絶されてしまつた。當時フランス銀行には、約三十億フランの正金と紙幣とがあつた。今から五十年前の三十億フランは實に大した金で、それだけの金があれば、ヴエルサイユの政府員を皆な買收する事も出來るし、コンミユンの運動者を雨の如く全國各地に注ぎかける事も出來た筈である。然るにコンミユンは此フランス銀行に手をつける事を躊躇し、彼等の拒絶に會つて指をくわえてスゴスゴと引きさがつた。それは主として前記のベズレイ老人が、プルードン州の信用說を楯にして、コンミユン員の全體を威かしたからであつた。ベズレイは善良で正直な人物には相違なかつたが、ブルジョアの出身であるだけに、財政上の事になると矢張ブルジョアの偏見を持つてゐた。それにコンミユン員全體の思想も矢張り不徹底な所があつて、一面には正義人道の考へから財產の沒收を憚り、一面には所有權神聖のブルジョア思想に捕へられてゐたのであつた。

次に郵便電信の事務。これはチエールの政府員が態と滅茶々々にしておいて、切手類までスツカリ奪ひ取つて引揚げたのだが、テーズといふ銀細工の職人が委員となつて其の局に當り、從來の高級な役人は皆な追ひのけてしまひ、其あとに勞働者を入れて事務を取らせ、賃金を上げ、時間を短くし、そして暫くの間に一切の郵便事務を確定した。尤も電信の方は、チエール等に電線を切られてしまつたので、どうする事も出來なかつたが、郵便の方では秘密配達夫に戰線を横ぎらせて、パリの郵便物を近隣町村のポストに投入するといふ機敏な親切な遣方を爲し遂げてゐた。

造幣局にはカメリナといふ靑銅職工が委員になつたが、技術上に著るしい改善を加へたので、コンミユンの沒落後、ヴエル

サイユの政府が自分の造幣局長に其の改善の方法を敎へてくれと、彼に賴んだ程であつた。

救濟局にはトレーラールといふ古い革命家が委員になつたが、そこでは忽ちにして慈善といふ舊式の精神が亡びて、公けの救濟を受ける事は人民の權利だといふ思想が生じた。從來、貧乏人を馬鹿にしたり、虐待したりした、醫員や看護婦に對しては、トレーラールは特に嚴刻な態度を取つた。惜しいかな、トレーラールの改革を完成するには、コンミユンの壽命が餘りに短かかつた。

糧食委員は四月の末まで、パリ人民に食物を供給するのに別段困難を感じなかつた。チエールが貨物列車をとめてからでも、ドイツ軍の占領地とヴエルサイユとの間の中立地帶を通じて、糧食の輸送が續いてゐた。それにパリ市自身でも、まだまだ永く籠城が出來るだけの糧食の貯藏を持つてゐた。それで委員は只だ價格を下落させる事ばかり務めてゐた。

司法部にはプロボウが委員であつたが、人民を捕縛する事などについては、餘り神經質すぎると思はれるほど、人民の權利を尊重した。殊に所有權に對する用心は馬鹿々々しい程だつた。例へば、武器を密藏した瓦斯會社の家宅捜索をやつた時、そこで押收した金箱を態々返附したといふやうな事實がある。

敎育部の委員は後に有名な社會黨議員になつたヴアイヤンであつた。同じく有名な學者兼無政府主義者エリゼ・ルクリユなどは其の部内の博物館に働いてゐた。敎育部の主な改革事業は宗教敎育の禁止であつたが、或區に於いて小學生徒に衣服と食物とを無料で供給する事をやつたのは、最も著るしい進歩であつた。

外交部の委員グルーセは絶えず金の不足に苦しんでゐたが、若し銀行にうなつてゐたアノ金をグルーセに供給したなら、隨分有益な宣傳も出來たらう。それに今一つ殘念な事は、資本家政府の秘密文書を澤山握つてゐた筈だのに、ナゼそれを公表して彼等の罪惡を暴露しなかつたのか。

勞働部の委員はオーストリヤ人フランケルで、此人は『インタナショナル』に屬する勞働者であつた。こゝではさすがに社會主義的施設が可なり顯著に實現されてゐた。總ての貨物は其

の罷主に返された。八時間勞働は提案しただけで行はれなかつたが、パン燒の夜業は禁止された。勞働賃金に對して資本家が罰金を課したり、支拂差止をしたりする事も禁止された。そして目下使用されてゐない工場は悉く沒收されて、勞働者の組合に引渡された。此の最後の一事は、兎にかく歴史上に於ける資本家剝奪の第一着手であつた。猶フランケルは戰爭の爲に破壞された勞働組合を復活させる事に非常な努力を費し、僅かな日數の間に卅四個の有力な大組合を發達させた。

保安部の委員（即ち警視總監とも云ふべき役目）はブランキストの手に握られ、最初は廿五歳の青年熱情家リジョールが其の任に就き、後にクールネー、フエレの二人が順次それに代つたが、此リジョールとフエレとはコンミユンの人物中で、一番コワイ人と稱されてゐた。彼等は舊警視廳の文書を引張りだして、それに依つてコンミユンの中に交つてゐるスパイ共を摘發した。彼等は又、ヴエルサイユが無暗に捕虜を虐殺したのを憤つて、今後若し猶ほ捕虜を殺すなら、コンミユンは其の一人に對して三人づゝの人質を殺すと宣言して、パリにゐる敵方の人物を人質として拘禁した。其の人質の中にはパリの大僧正ダルボア、副僧正ラガルド、マドレーヌの小教正デユゲリ、控訴院長ボンジヤン、メキシコ戰爭の責任者たる資本家ジエツケルなどがあつた。然し此の宣言は無効であつた。ヴエルサイユでは暫くたつと、又盛んに捕虜の射殺をやりだしたのに、コンミユンの手では四月二日から五月廿三日までの籠城の間、一人の捕虜も、一人の武裝せぬ人も、殺されたタメシがなかつた。

軍事部の方では、最初リユリエーといふ飲みぬけの法螺吹が司令官になつて大味噌をつけ、次にアメリカ戰爭で大變な才能を現はしたといふクリユーズレーが委員になつたが、これが又サツパリ駄目で、イツシイの壘の撤退が報ぜられた時、其の處罰として捕縛された。其後に於ける軍事部の變化は追々に話して行くが要するに、パリ・コンミユンは初から終りまで、軍事上にはヘマばかりで、結局、悲慘な最期に到着した。

然しコンミユンの支配下に於けるパリ市の一般光景はどんなであつたかと云ふに、如何にも靜かで、平和で、而も犯罪らしいものが殆ど無かつたとは、敵も味方も一樣に認めてゐた所であ

る。從來ならば種々の兇行があつたり、賣淫婦が無數に出沒したりしてゐた場所に、コンミユン時代にはそんな者の影もなかつたと、或イギリスの旅行者は語つてゐる。そしてヴエルサイユの御用新聞が毎日、パリ人の大殺戮を要求してゐるのに、コンミユンの革命新聞には、一言でも血に渇いたような記事がなかつた。其の外教會の壇上には赤旗が掲げられて、キリストの福音の代りに社會主義の理想が說教され、チユイレリイの王宮は誰でも無料で聞きに行かれる音樂場に變つてゐた。

## 九　煙硝と火繩、柱塔の引仆し

四月三十日、國民兵がイツシイの壘を撤退したのはコンミユンの大打擊で、或る一青年の如きは、こゝを明け渡す程なら寧ろ自ら死ぬると云つて、煙硝と火繩とを兩手に持ちながら、最後まで其の入口に立止まつて居たほどだつた。

そこで今度は昔しの大革命の當時に倣つて『公安委員會』を設置するといふ說が起つて來た。それは舊式革命の狂信者なる多數派の首領フエリス・ピヤの發言で、偶像的な飾り言葉を好むフランス人の氣質を最も善く現はしたものである。尤も、其の時の執行委員は先達て改選されて、クリユーズレー、ジユールド、ヴイアール、グルーセー、フランケル、プロトウ、アンドリーン、ヴアイヤン、リジヨールの九名になつてゐたが、其の威令は少しも行はれないので、此際シツカリした中央權力が必要だといふ一般の感情が生じてゐたので、それが自然、公安委員會の設置を促がしたわけでもあつた。そこで公安委員設置案は二十三對四十五の多數で、多數派の勝利となり、少數派は憤慨して委員の選擧に加はらず、つまりランヴイエ、アルノウ、メイレー、ゼラルダン、ピヤの五名が多數派だけの選擧で當選した。

それからクリユーズレーに代つて軍事委員に擧げられたのはロツセルといふ若い士官で、俺は社會主義なんといふ事は少しも知らんと威張つて公言したほど無智な男であつたが、軍事上の知識は多少あつたものと見え、暫らく大ぶん調子がよかつた。先づ戰線を三方面に分つて、北軍をドンブロウスキイ、中軍をセシリヤ、南軍をウロブレウスキイの三大將に擔任させた。キイといふ語尾のある二人はいづれもポーランド人で、いづれ

も立派な大將であつた。セシリヤも可なり働ける軍人だつた。ロツセルは又、パリの三要害たるモンマトル、トロカテロ、パンテオンの三個所を連結するバリケード（築塞）の組織を計畫した。こんな事で一時防禦の見込が少し立ちかけたが、國民兵中央委員が兎かくロツセルの命令に服せず、それを又公安委員のピヤが突ツついたりするので、ロツセルはとう〳〵ヤケを起し國民兵のデモクラチツクな組織を變じてナポレオン式の軍隊にしようといふ案を出したり、五月九日いよ〳〵イツシイの壘が落ちた後には、コンミユンに向つてクーデターを試みたりして、つまり失敗して逃げだしてしまつた。

それからコンミユンは又、公安委員の改選をやつた。最初の選擧から僅かに八日の後だから隨分馬鹿々々しい。そして矢張り多數派ばかりで、ランヴイエ、ギヤンボン、デレクリユーズ、アルノウ、ユードの五名が當選した。そしてデレクリユーズが軍事委員になつた。そこで少數派はいよ〳〵憤慨して、少數獨裁政治に反對するといふ名義でコンミユン會議から脱退した。然し此の危急の際、獨裁政治に反對するなどゝいふ潔癖は話にならないので、二日の後のコンミユン會議には、彼等の多數はモウ跡戻つてゐた。

こゝに一つ非常に面白い事があつた。パリにあるチエールの家を打ちこわしたのもチヨツト面白かつたが　それよりも五月十六日、ナポレオン一世の勝利を紀念するヴアンドームの柱塔に三色旗を掲げて、此の國旗もろとも柱塔を引仆したのは、子供らしいと云へば子供らしいに相違ないが、見物の群集の大歡呼を博したのも無理はない。

## 十　バリケードの戰ひ

五月廿一日の日曜、シヤンゼリゼーの大通りや、チユイレリーの公園に、艶々とした木々の若葉が暖かい春の日に輝きわたつてゐた。此の日の午後、チユイレリーの公園で、國民兵の戰死者の寡婦や孤兒の爲にする、野外奏樂の大會が催され、何千といふパリ人が晴れ着を着飾つて集まつてゐた。そしてそれが終つた時、國民兵の士官がプラツトフオームに立つて、此の次の日曜にも又こゝで同樣の音樂會を催しますと案内した。あゝ其の次の日曜よ。これは眞暗い雨降りで、血の川と死骸の山と

がパリ市中に出現したのであつた。

丁度、右の案内をやつてゐた三時頃、ヴェルサイユの敵兵は、防備の薄いサンクラウドの木戸を破つて、パリの市中に侵入しかけてゐた。ドムブロウスキイは直ちに其の旨を公安委員會に報じた。公安委員會は更にそれをコンミユン會議に報じた。コンミユン會議は狼狽の餘り、三々五々の小群に分裂して、紛然紛然、取りとめもない論爭を續けた末、夜の八時ごろ不得要領の中に散會した。それがコンミユン會議の最後であつた。『銘々自分の持區を守れ』と云ふのが一般の叫びであつた。公安委員は此に至つて殆んど爲す所を知らなかつたが、只軍事委員のデレクリユーズが獨り沈着の態度を持し、市街戰はパリ人に取つて却つて有望だと數へてゐた。

夜の十一時頃になると、ヴェルサイユ軍はもうパリ市の中央に侵入してゐた。『これからバリケードの戰ひだ。』『銘々自分の持區に歸れ。』これでいよいよコンミユンの組織も統一も規律も亡びてしまつた。沈着なデレクリユーズすらも。握りこぶしで敵の整然たる軍隊に勝てるような、自殺的の掲示を出した。

廿一日の夜から廿二日の朝にかけて、陰鬱な沈默の（今はもう既に遲い）準備がはじまつた。往來の敷石を掘り起す鶴嘴の音が物凄く響いてゐた。男も女も子供も皆一緒に働いてゐた。そして廿二日の夕方までには到る處にバリケードが出現した。三要害の中、トロカデロは既に陷り、パンテオンも既に包圍されかけてゐた。殘るは只モンマルトルの高地であるが、これを中心に擁護するといふでもなく、組織もなく計畫もない、只だ紛然たる無數のバリケード、何百といふバリケードが到る處に出現した。『銘々自分の持場を守れ。』これより外に叫びは無かつた。分權主義、自治主義、獨立主義、離れ島主義、群島主義の理想が、悲慘に且つ壯烈に、こゝで實現されたわけであつた。

どうせモウ斯うなつた以上、いづれにしても滅亡の運命は免かれなかつたらうが、若し廿二日に、モンマルトルと、パンテオンとから、狙ひを定めた砲彈が發射されたなら、隨分敵を苦しめる事が出來たらうと云はれてゐる。然るにモンマルトルは沈默してゐた。そして夜の十時頃には、チユイレリー宮のうしろの財務局が敵彈の砲火を受けて炎々と燃えあがつた。これが

大火の初まりであつた。

廿三日の朝早く、ドイツ軍のビスマークは中立地帶を開放して、ヴエルサイユ軍のパリ侵入を援助した。こんな事實を見ても、階級的利益の前には『愛國心』といふ空虚な者が泡となつて消えてしまふ事が分る。愛國的なフランスのブルジョアは、フランスのプロレタリヤを亡ぼす爲に、平生から憎んでゐるプロシヤ兵の助を求め、甘んじて泥靴を甞めたわけである。

然るに一方では、コンミユンの人々は此の共同の危險の前に平生の憎みも悲みも忘れてしまつて、多數派も少數派も、只だ最後の努力を競つてゐた。けれども今となつてモウ何が出來よう。其の日の晝頃には、難攻不落のマンマルトルが脆くも敵軍に乘り取られた。そして其の時が卽ち『血みどろ週間』の大虐殺の幕あきであつた。四十二人の男、女、子供等が、ロジエー街に引きずりだされて、ルコントとクレマン・トマとの人身御供（ヒトミゴクウ）として、滅茶々々に虐殺された。其の時、敵の兵卒等は彼等に迫つて皆な一樣に膝づきかせようとしたが、中々一人の婦人は兩手に子供をかゝえたまゝ、どうしても膝まづく事を肯んじないで、『此の奴等に、我々の立派な死にざまを見せてやれ』と、仲間の人々に向つて叫んだ。そんな間に、ツイ二三日前まで大言壯語、悲憤慷慨をやつてゐたコンミユン會議の連中で、コソコソと隱れた奴も少なくなかつた。フエリス・ピヤも逸早く逃げだしてしまつた。

セイヌ川の南方にはコンミユンの兵力が猶ほ少しばかり殘つてゐた。そこでウロブレウスキイは、此の左岸に勢力を集中して、更に最後の一戰を試みようといふ計畫を立て、それをデレクリユーズに提案したが、武器も彈藥も糧食も既に缺乏した今日、モウどうする事も出來なかつた。公安委員と國民兵の中央委員とは、ヴエルサイユ兵に對して、パリの同胞に發砲するといふ張札をしたが、それも今では全く無效であつた。其の日の夜には、敵はもうパリ市の半分以上を占領してゐた。

## 十一　赤旗と三色旗

廿三日の夜には、百個所の大火事が至る處の血の池を照してゐた。パリ全市の半分は現實の修羅場と化してゐた。

其の夜、オテル・ド・ヴイールの屋根の上に一つの死體が横た

はつてゐた。其の頭のほとりには寂しげな蠟燭が一ツともれてゐた。人々は皆な其の前にカウベを垂れた。それはドンブロウスキイの遺骸であつた。明方になつて、それがペール・ラシエーズの墓地に運ばれる時、途中のバリケードでは、國民兵が皆な肅然として筒を捧げた。

チユイレリーの宮殿は夜どほし燒け續けてゐた。廿四日の朝にはパレイ・ロアヤル其他で最後の激戰があつた。午前九時、オテル・ド・ヴイールに集まつた數人のコンミユン議員が、もう此の本據を撤退するより外はあるまいと相談してゐる中、忽然として其の屋の棟が燃えだした。一時間の後には、オテル・ド・ヴイールの跡形もなかつた。コンミユンの本據は第十一區の役所に移された。

コンミユンの防備はいよ〱全く混亂に歸した。其の間には斯ういふ悲慘た滑稽もあつた。或る士官が火急の使命を帶びてバリケードのそばを通りかゝると『オイ、オイ。もう肩章なんど付けた士官ヅラは駄目だよ』『早くこゝにて來て土運びでもしろよ』などと皆がそれを引捕へて、バリケードを築く手傳をさせた。

人の好いパリの勞働者も、今では疑ひぶかくなつて、スパイといふ嫌疑が掛れば、證據があらうがあるまいが、直ぐに引ツつかまへて射殺したりした。然しそれも無理か、敵は男でも女でも子供でも、國民兵の親戚だとか、コワイと云つたとか氣の毒だと云つたとか、ほんの僅かの口實さへあれば、片つぱしからドシ〱と虐殺した。然し餘り多く女を殺したので、其の言ひわけには少し困つて、女が石油を持つて火をつけて歩いたといふ神話まで捏造した。

そこでコンミユンの生き殘つた人は最後に三百人の人質の事を思ひ出した。此の人質は、敵が何千人の男や女や子供を虐殺した今日まで、手もさへずに監獄に入れてあつたのだが、保安委員のフエレがとう〱意を決して、此の復讐に依つて少しでも敵の虐殺熱を冷まさせようと考へた。然し彼は僅かに其の三百人の中から六人の巨魁を選んだ。卽ち大僧正ダルボア、控訴院長ボンジヤン、外四名であつた。所が、いよ〱彼等が射殺される段になると、大僧正殿は餘り天國に行きたい樣子も見え

ず、控訴院長さんは腰を拔かしてしまひ、如何にも哀れな樣であつた。そこでフエレは發射を命ずる前に、コンミユンは彼等の死に對して責任がない、責任は總て虐殺を恣いまゝにした彼等の仲間に在る事を、篤と彼等に申し聞かせた。

兎かくする中に大火はいよ〳〵蔓延して、セイヌの岸の片側が一面の火の壁になつてしまつた。そして赤旗の見える處は段々に少なくなり、到る處に三色旗が飜つてゐた。二十六日の夕方、病み疲れてゐたデレクリユーズは、もう之までと見極みをつけ、第十一區の役所から歩みだして、杖を一本持つたまゝでシヤトウ・ドウのバリケードの上に登つた。一分間の後には彼は既に敵兵の彈丸に當つて仆れてゐた。彼は一八三〇年と一八四八年との二革命に參加した人である。それで今又この敗北を見てオメオメ生き延びるには忍びなかつたのである。

## 十二 「血みどろ週間」の最後

コンミユンの防禦がいよ〳〵弱くなると共に、敵の虐殺はいよ〳〵甚だしくなつた。有らゆる建物は捕虜で一パイになつてゐた。そして一たばねにして引張りだされては射殺された。時に依ると榴散彈で一齊に薙ぎ仆され、半分生きながら埋められた。

廿六日の夕べから防禦はベルヴイールに集中した。廿七日は砲火の結果として、雨と霧との暗い日になつた。第十一區は既に廿五日の夜半に撤退したのだが、ドイツ兵はヴエルサイユの依賴に應じて其の東北の退路を遮斷した。敵の暴虐無殘は時々刻々に報道された。醫者も看護婦も殺された。赦免の約束で降伏した者も欺された。コンミユンの生き殘つた勞働者はとうとう堪りかねて、更に人質の中四十八人を射殺した。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

廿八日の日曜、即ち「血みどろ週間」の最後の日、煙に包まれ

たショボショボ雨の中に、まだベルヴイールの一部分が持ちこたへてゐた。然し晝近くなつた頃、パリ街にあつた最後のバリケードがとう〱陷落してしまつた。そして其の最後の十五分間は生き殘つた只の一人が支へてゐた。而も其の一人が逃げのびたとは、驚くべき話である。其あとに殘つた、いよいよ最後の壘は、ヴアンサンヌの外營只ひとつであつたが、そこでも翌廿九日に赤旗が取りおろされた。

これでいよいよコンミユンが亡びた。無數の死骸は累々として燒け跡の煙の中に横たはつてゐた。セイヌ川の片側には赤い水が流れてゐた。下水には血が溢れ、道路は血に染まつてゐた。肉蠅は雪のように集まり、烏は屋根の棟に群れてゐた。そして此の大虐殺の責任が悉くコンミユンに塗りつけられた。

虐殺はまだ六月三日まで續いてゐた。屍體が餘り多く堆積して始末がつかないので、流行病でも起しては大變だと、彼等は只その恐れの爲に、此日で虐殺を思ひ止まつたのであつた。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

此の虐殺の最も多く行はれた場所は、『ミユール・デ・フエデレ』（國民兵の壁）と呼ばれ、世界中の社會主義者が尋ねて行く、〇〇〇〇名所になつてゐる。筆者が先年フランスの一同志から受取つた手紙の中に、一枚の枯れた木の葉が包みこんであつて、其の包み紙に面白い書體の走りがきで、『ミユール・デ・フエデレの木の葉』と書いてあつた。今でもそれは大事にして、抽出しの奥にしまつてある。

以上の話に名の出てゐる人々の中で、ブランキイは後に許されて代議士になつた。ヴアイヤンは近ごろまで社會黨の首領であつた。プロトウは今年の二月まで生きてゐた。カメリナは現にまだ生きてゐる。パリ・コンミユン五十年紀念の雑誌に其の肖像が載せられてゐる。



# 放浪俠客 竹川森太郎

宮嶋資夫

濃州郡上郡下田新田、百姓森右衛門の悴森太郎、十三歳の時に岐阜矢島町の早川彌太郎の身内となつて、竹川森太郎と名乘つた男でありますが、二十一歳の時ふとした事の間違ひから、城下に於て武家を殺しましたので國元にも居られず、長い草鞋をはく事となりました。

ところが此の男、劍術は當時の博徒仲間で古今の使手と謳はれる程の腕達者、度胸はよし、氣風もよくて金の切れ離れも好いところから、どこの親分の所に廻つて行つても、ぢきに兄貴と立てられるやうにもなれば、親分手合からも一目おいて取扱はれ、時には

『どうだ森、僅かなものだが、俺の繩張りを少し分けるから、こゝで松杉を植える氣になつて、一つ男を賣り出して見たらどんなものだ』

などゝ引止められる事もあるのでありましたが

『お志しは有難えが、俺のやうなやくざ者は、かうして旅から旅へうろついてゐる

方が、どうも性に合つてゐるやうだ。それに俺はどう云ふものか、カスリ取りになつて親分にならうつて氣はしねえ、早え話が主のやうに親分になると、懐手をして樂をしてゐるやうだけど、手前で一つの繩張を押へると云ふ事になりや、随分下らねえ事でも我慢して、いやな奴にも頭の一つも下げなきやならねえやうな事も多くなつて來るのだ。そんな事あどうも俺の性にや合はねえ、俺あやつぱり行き當りばつたりに、手前の勝手な月日が送りてえと思ふから、どうかまあ惡く思はねえでくれ』

と辭退して、相も變らず、旅から旅へ流浪の月日を續けてゐるのでありました。

さて森太郎はかうして國を出ましてから彼れ之れ十年、めぐりめぐつて駿州掛須賀の鐵五郎を尋ねようとやつて參りました掛須賀の並木道、冬の日の八つ刻過ぎの事でございます。白つぽけた砂道は、昨日も一昨日も歩いて來たやうに、行く手の方に果てもなく續いてをり、兩側の並木の松は、日照續きの埃を被つて白々と弱い夕日を受けて立つて居ります。

森太郎は、かうして毎日同じやうな田舎道を歩いて來ました故か、身も心も疲れはてたやうに思はれるのでありました。またもとより急ぐ旅と云ふでもなければ、どこへ行つてどうならうと云ふ的てのある身體でもありませんが、何か知らこの退屈に堪えかねてちり〳〵とした心持が、何となくその行く手を急がせるのでありました。

『國を出てからもう十年だ、早えものだ』

『どこへ行つてもつまらねえ、欲張野郎ばかりゐやがる世の中だ』と云つたやうなきれ〳〵な考へが頭の中に浮んで來るかと思ふと、『また旅人にいやな冬が來やがつた、どつか氣持の好いとこがあつたらもぐり込んで、しばらく足休めでもしてやらうか』などゝ考へながら、すた〳〵と歩いて來ましたが、並木外れの楢林のとこに來ると、足拵へを嚴重にした若い男が三人ほど、往來に立つてしきりとあたりに目をくばつて居ります。林の中からは壺皿の音にまぢつて、丁だ半だと云ふ人聲も時々もれてくる。

『はゝあ、さては之れがひよつとしたら、掛須賀一家の者かし

ら』と心に思いましたので、森太郎は若い者に向ひまして、
『ちよいとお尋ね致しますが、掛須賀の鐵五郎親分のお宅はどちらでございませう』と尋ねますと、
『鐵五郎の宅は、此の並木を外れますと、掛須賀の町に出ます、町の中程で右側の格子のはまつた家をお探しになれば、ちきわかります』と身内の者らしく叮嚀に敎へてくれました。
森太郎は、その日も暮れ合の頃、鐵五郎の家に着きましたが、かねて岐阜の彌太郎から手紙も廻つて居りましたので
『あゝ彌太郎さんからかね〴〵手紙のあつた森太郎と云いなさるか、さあ〳〵』と奥へ通され、挨拶も濟むと
『何にもないが有合せで』と酒肴も運ばれる。しばらくしてから出て來ましたのが鐵五郎の女房
『これはいらつしやいまし、私は鐵五郎の女房縫と申します、どうぞお見知りおき下さいまして』
と云はれましたので、森太郎、
『之れは姐さんでいらつしやいますか、森太郎と申しますもので、よろしく』と頭を下げたが、森太郎と云はれて、女はふいつと顔を上げる、つゞいて森太郎も顔を上げて、二人の眼と眼が出合つたとき、たゞならない驚きの色が、さつと流れたのでありました。しかし森太郎の眼の中には、
『何にも云ふな』と云ふ言葉が明らかに現はれる、とまた氣まづさうに、
『何分よろしく』と挨拶の仕直しをやるのでありました。
これを見てゐた掛須賀の鐵五郎、
『お縫、お前はこの男を知つてるか』といきなり尋ねました。
お縫はしばらく、何か思案に暮れてゐるようでありましたが、思ひ切つたと云ふように、
『ねえ森さん、かうなれば仕方がないから私は皆な親分に話をするよ、どうも飛んだ事でお前さん達二人に、氣まづい思ひをさせるような濟まない事になつてしまつたけれど、親分實はこの人は、私の先の亭主なんでございます。』と云はれて鐵五郎もはつと驚いた顔附を見て森太郎は、
『なんだお縫、お前のようにさうずば〳〵云つてしまつちや仕樣がねえぢやねえか』

『だつてお前さん、本當の事なら話してしまはなければ、却つて氣持が惡いだらうぢやないか、それにお前さんがこゝに來てから親分の眼を忍んで、惡い事でもしたと云ふなら云い惜い事もあるだらうけど、かうなつたら何も彼もお話しゝてしまつた方が好いぢやないか』

と云はれましたので森太郎も、

『なるほどお前の云ふとこにも理屈はある、實は親分この女は、八年ばかり前名古屋にゐた頃、つい出來合つて嬶に持つた奴でしたが、之れも三年と續かねえ中に、又あつちでも間違ひが出來て、土地にもゐられず捨てたまゝ、草鞋をはくようになつてしまつたような始末、お前さんも變な氣がしたらうけど、惡く思はねえでおくんなさい』と鐵五郎に話してから、

『なあお縫、お前も俺と別れてから、親分と一緒になるまでにや、隨分苦勞もした事だらう。俺も段々に苦勞をして來たが、そんな事を並べ合つても今更愚痴で下らねえこつた。それに俺はもう足弱を連れて歩けるような身體ぢやねえ、何しろ早旅の身の上だ。之れから先きだつて、とても二人で世帯を持つような時もねえ、緣あつてこちらのお世話にもなつた事だから、俺の事は夢と諦めて、親分を大切に御世話になつて暮してくれ』と涙も浮べず云ひ放つたのであります。

お縫は之れには何にも答へず、下を向いてぢつと默つてゐるばかり、座は何となく白けわたつて見えたのであります。その時に鐵五郎が、『森、つまらねえ義理立てはやめにしろ、お縫にして見ても、お前は若えし、又元木心、俺にして見た處で、かう云ふ話を聞いた上までお縫の世話もしちやゐられねえ、俺に少しも遠慮はいらねえから、もと／＼通りお縫と一緒に添いとげてくれ』と云つて立上ると、簞笥の抽斗から取り出した五十兩の金をお縫の前におしやつて、

『さあお縫、俺も長え事お前には厄介をかけたけれど、今日限り緣を切る。俺に遠慮氣兼はいらねえ事だから、森太郎の方に歸つて、仲よく一緒に添ひ遂げてくれ』

之れを聞くと森太郎、一膝乘り出して、『エ、親分、お前さんのお話も一應で尤もと思ひます。しかしさつきも女に話した通り、私は早旅の身體でございます。一人でさへ大手を振つて步

く事の出來ねえ程兇狀を背負つた身の上、それに昔は之れでも己惚れて、たとへ小さな繩張りでも一つ持つて親分だ貸元だ位は云はれて見てえと考へた事もありましたが、ちつと考へる事があつてからそれもすつかり諦めました。身體の利く限りはぶらついて、やくざで終る考へで居りますから、お縫の事は何分どうぞ、お前さんの方で御面倒を願います、なあお縫幾度話しても一つ事は同じ事だ。お前とは今日限りブッツリ緣を切つたから親分に御願ひして、よりを戻してお世話の願へるようお頼みしろ』

と懷ろに手を入れて取り出した五十兩の金、『之れは手切の印だ』、之れもお縫の前に押しやつたのであります。二人の話をちつと聞いて居りましたお縫はそのまゝしばらく首垂れて、考へに沈んで居りましたが、顏を上げると、

『成るほどね、男同志のお話でかうなつてしまつたら、どちらもどつちと云ふわけにもゆかないでせう。私も未練がましい事を云はないで、奇麗に手を切つて貰ひませう。』と云つて私も之れからすぐに、何處へ出て行くと云ふあてもない身體だから、しばらくの間は、いやでもありませうが、妹と思つて面倒を見て下さいな、』と云いましたが、お縫の眼には、涙のうるんだ跡が見えるのでありました。鐵五郎もかう云はれてはいやとも云へず、

『すると森とお前と三人で、兄弟になれと云ふのか、之れもよからうが森はどうだ』

『お前さんさへ御迷惑でなければどうぞ』

とこゝで三人は、有り合せの酒肴で、兄弟分の盃と云ふ事になりました。

一日二日はこの儘に打ち過ぎて、森太郎も久方振りでのら〳〵と旅の疲れを休めて居りますと、三日目になりましてお縫は二人の前に來て、

『ねえ二人の兄さん、私も若い時に身體を賣られて、中仙道から名古屋へ行つて、隨分旅はして來たけれど、まだ京大阪は知らないんですよ、之れで丁度お前さん方に貰つたお金のある中に、見物でもして來たいと思ふから、しばらくお暇を下さいた』と云ひ出しました。鐵五郎も森太郎も、お縫の心の中は這

むように判つて居りますので、鐵五郎
『そりや氣晴しにもなつて好いだらうからゆつくり遊んで來たが好い。途中で不自由な事があつたら、遠慮せずに云つて寄越せ』と云いますので、森太郎も、あゝ女に先手を打たれたか、と心の中では思いましたが、
『兄貴も好いつて云ふのだから、それぢやゆつくり行つて來ねえ』と云ひますので、
『それぢや今日を吉日にして、之からすぐに立ちませう』とお縫は暗い心を笑にまぎらして、上方を差して出立してしまいました。
後に殘された森太郎、お縫が上方見物に名を借りて、行衛を昏ました心の中が判つて居りますだけに、しまつた事になつたわい、と心の中に幾度か悔んだのでありました。もとより森太郎とてもお縫は、今まで數度も出逢つた女の中で、たとへ僅かの間でも世帶を持つ程氣に入つた女の事でありますが、一旦思い諦めたと口を切つたが最後、生涯無妻で終るまでも、別れた女の後を追つて行くような心の男ではありません。しかしさすがに何處か、心の底に殘る寂しさをまぎらす爲めに、直ぐに白分もこゝを立つたら、女の後を追ふとでも思はれはしまいかと考へると、立つにも立たれず、暗い心を押し隠して、心ならずも鐵五郎の許に、滞在致す事になりました。が、玆二三ケ月の間は、お話し致す程の事もなく、掛須賀の宿も至極靜かでありました。けれども森太郎にとつては、此の平穏無事と云ふ事は、命を捨てるよりもつらい位ゐ、時々三下相手に酒などを飲みました。
『兄貴なんかは腕つ節も強いし、旅先も廣いから、隨分面白え事もありましたらう』などゝ油をかけられても、
『なあに人間の世の中に、面白え事なんてありやしねえ、どこへ行つたつて、こすかれえ野郎が、上役人だ金持だ親分だつてなりやがつてよ、働く奴あひもじい思ひをしてる丈けの事よ、俺なんかたゞさう思つてる、人間の一生なんて、文なしで旅をしてるようなもんだつてな、朝方に宿を立つ時にや、今日は何か甘え事にでもぶつかりやしねえかと思つて出かけるんだ。そうして何とか彼んとか苦勞してよ、晩方に宿につく時にや、明

日は又何かあるだらうつて考へるのよ、明日の朝になると又同じ事つた。何處まで行つたつて同じ事つた。考へて見ると退屈なものよ」

と云ひながら、生欠伸でもして、ぢつと默つてしまうのでありました。が之れは、森太郎のやうに、血の湧き立つやうな事をのみ、探して歩いてをります者が、無爲安閑と暮して居りますと、かう云ふ考へを持ちますのも尤もな次第、處がこゝに、掛須賀の鐵五郎と、藤枝の宿の長樂寺淸兵衛と僅かな事から間違ひが起りまして、森太郎久々にて、腕と腕とを振ひまして、漸く鐵五郎の許を立ち退き、再び流浪の旅に上ります一條を續いてお話し致します。

さて森太郎が鐵五郎方に、心ならずも足を留めて居ります中に、名古屋の濱七と濱松の浪七なる者の間に、繩張爭ひの事から大きな間違ひが出來まして、已に大騷動にも及ばうと云ふ狀態に立ち到りました時に淸水の治郎長がこの仲人に入りました。誠にどうも此の俠客と申します者も、慾の深い親分共になりますと、常に此の繩張りの擴張計りを企てゝ居りまして、之れが爲めにその當時如何程の人が死にましたか知れないことでございます。今日俠客傳に殘つて居ります、天保水滸傳の如きも、飯岡の助五郎と、笹川の繁藏が數年に亘つて爭ひを續け、その有様は小さな國主同志の爭ひとも云ふべき程、この爭ひの爲めに無益の命を喪したものも夥い數ではございませんでした。斯くの如きは、眞に民衆、その頃で申す民百姓の唯一の味方ともなるべき、俠客の眞義を失つた道でありまして、たゞ〳〵彼等が男を賣ると稱する虛榮的權力慾に餓えあこがれた結果とでも申すより外に道はないのでございませう。然しながら何故せその頃は、世も開けて居りません時代の事でございますが、今日人智の斯くまで開けた世になりましても、世の大勢に逆行し、虐げられた民衆が解放の聲を叫ばんとするのを、權力者の手先になつて壓迫しようと企てゝ居るような、所謂俠客連も時として、そこゝに現はれるようでございますが、之れこそ繩張爭ひより以上に、俠客の道に背く事となりは致しませんでせうか、眞に男を賣ると申す事が、如何なる道に進むべきでありませうか、こゝに誤り長々と理屈を述べたてるのも如何と心得

ますから差し扣へますが、一寸この機會を利用してこれ等の諸君の再思と三考を煩はしたいと存ずるのであります。

余談はさておき、濱七、浪七の爭ひに、治郎長が仲人に入りまして、無事に手打の運びに至りましたが、治郎長が他に大きな用事が出來ました爲めに、その席上に出る事が出來なくなりまして、餘儀なく掛須賀の鐵五郎を名代として立たせて、その場は無事に濟みました。ところが治郎長が仲人に入ります前に、長樂寺の清兵衛と云ふ男が仲人に這入つて居りましたので、一應之に亘りを附けておかなければならなかつたのを、治郎長か鐵五郎に云ふのを忘れたばつかりに、長樂寺一家の中、鐵五郎に對して内々恨を含む者が出來て參りました。誠に昔の賭博打と申します者は、繁文縟禮を極めた上に、一寸の手落がありますと、直ちに刄に訴えると云ふ仲々むづかしく、厄介な規則を持つてゐた者でございます。

一方鐵五郎におきましては、親分治郎長の云ひ附けの儘、無事に濟ませた上でありますから、何の事とも知らずにをりましたが、長樂寺身内の者は事あれかしと待ち構へて、何かのきつかけを狙つてをりましたが、こゝに些細な男女のいきさつが導火線となりまして、一騒動起き上るやうな事となつたのでありました。

頃は丁度舊暦二月末の事でございました。梅にも遲く、櫻に早く、何となく慌しくもあればうつとりとしたやうな時節、女房のお雛に別れてからも、後添もなく、男手ばかりで暮して居りました鐵五郎、陽氣に誘はれたと云ふわけでもないが、朝からぶらりと家を出て近々の茶屋で飲み暮して、夕暮に我家へ戻つて參りますと、入り口の茶の間に火鉢をはさんで森太郎と、十八九になります田舍には珍らしい奇麗な娘と、何やらいそ〳〵話をして居ります樣子鐵五郎も心の中では、はゝ森の野郎もまだ三十を出た計りの男盛り、之れには何かいきさつのある事だらう。それにしても森が此の土地で、世帶を持つやうな事になつてでもくれたならば、など、考へながら奧の部屋へ通つてしまいました。しばらくすると、あとから入つて來た森太郎、

『これは親分お歸んなさい。今日はどちらへ』

『別に用事もなかつたが、たゞぶら〳〵ほつき步いて、一杯や

つて歸つたとこだ。どうだお前ももう一杯つき合はねえか』

『えゝ有難うございます、時に親分今日お前さんの留守中に、可笑なものが飛び込んで來たんでね、お前さんに話てからと思たけど、どうせ俺も何も彼も引被つてしまへば好いと思つたので、引張り込んでおきました。』

『可笑なもんて部屋にゐた、あの若い娘の事ぢやねえか、ありや森、お前の何かぢやねえのか』

『笑談云つちやいけません親分、俺はいつかも言つたやうに、からうしてぢつとしてゐた所で、いつ御用と來るか判らねえ身體だ。若い女とちゝくりやつてゐるやうな呑氣な事が出來ますかね』

『いや森、そいつはどうも俺が惡かつた、ところであの女がやつて來たわけと云ふのはどう云ふ事だ。』

『いや實は親分、今日お前さん留守中に、私があつちの部屋でごろ／＼やつてゐたとこへ、眞蒼な顏をした爺さんが飛び込んで來たんでさ』

『ふむ』

『爺さんは格子を明けて中へ這入ると、聲までぶる／＼振はせて、掛須賀の親分様のお宅はこちらでございますか、と尋ねるから、掛須賀の錢五郎の家はこゝですが、親分は只今居りませんつて云いますとね、はゝあ親分様はお留守ですか、そいつあ困つた事になつた、つてお前さん、落膽したやうに聲を込んでしまつたんでさ』

『ふん。それでどうした』

『それから私も何だか氣の毒になりましたからね、親分は留守だけど、私は留守を預つてる平吉と云ふものです、つて相手が何だか判らねえから、出鱈目な名前をいつてやりました。それで、お急ぎの御用事なら、私が伺つて親分に取次ぎませうし、私で取計らいの出來る事ならば、一存で何でも致します。御差支へがなきやお話し下さい、つて云いますとね、有難うございますつて、爺さんは嬉し泣きにわい／＼泣き出してしまつたんでさ』

『それで私も、まあお年寄そんな土間に立つてゐちやお話が出來ねえから、遠慮はいらねえ、こつちへお上んなさい、つて云

いますとね、いえどう致しまして勿體ないつて、上口に手をついてしやがんでゐるんでさ、それから私も、つまらねえ事を云ひなさんな、お前さん方は堅氣に米を作つてるお百姓、こつちらは無職渡世のいはゞならず者だ、お前さんにそんな事をされたんぢやどうにも出來ねえからつて、手を引つ張つても爺さん頑固でどうしても上らねえ、それから俺ぁ癪にさわつたから、お前さんがそんなに一克を云ふなら俺だつて土間に降つて飛び下りると、爺さんはこんだは、そんな事をされちや濟まねえつて、土間に手を突いてお辭儀をするんだ。俺も今日ばかりは、本當に弱つちまつた』

『それで仕方がねえから二人とも土間に坐つて、お爺さん、急ぎの用つてなんですかね、つて聞きますとね』

『實は私は、藤枝の在の百姓八右衛門と申す者でございます、家内や惣領にも早々亡なられて、たつた一人殘つたのが娘のお初と申します。所がこちらの親分さんのお身内となつて居ります、留吉と申しますのは私共とは遠い緣續きで時々、昔から時々に藤枝へ參ります序でには私の所を見舞つて呉れて居りましたが、その内に若い者同志の事でございますから、どこが好いのか好かつたのか、妙な仲になりまして、私もうすうす知つては居りましたが、留吉も商賣柄に似合はない、親切な優しい男の事でございますから、出來たものは仕方がない、その中に折を見て二人一しよにしてやらうと思つて居りました。とまあかう云ふんでさ』

『ふん』

『處が親分、藤枝の宿に目明しで與吉と云ふ奴がゐるさうですね、お前さんご存知かね』

『藤枝の與吉は俺ぁ知つてる、長樂寺身内の博勞の定五郎とは兄弟分になつてゐるとか聞いたつけが、性質のよくねえ惡い野郎だ』

『性質のよくねえ奴だつて、爺さんも云いましたよ、ところがその與吉の野郎がお初に首つたけ惚れやがつて、三日に揚げず爺さんのとこへやつて來ちやお初を口說く、爺さんには泣くように賴み込む、二人もほとほと弱つてゐたと云ふんでさ。それに與吉の野郎も今までは、留の事を薄々知つてるようではあつ

たけれど、口に出しては云ふやうな事はなかつたさうです、ところが昨夜遅くなつて、喰い醉つて八右衛門の所へやつて來て、「爺さん、あれ程頼んでも、娘はどうしても俺によこさねえのか」と嚴談づくで懸合を初めやがつた。そこで爺さんも仕方がねえから何しろ娘の一存にある事でございますから、私からは何とも申上げられませんと云ふとねお前さん、そうだらう、手前の娘は掛須賀身内の留吉とくつゝいてゐやがるから。俺の云ふ事は肯かねえのだらう。肯かなきや肯かねえでそれも好い、俺も俺だけの了見がある、無職渡世はお上の法度だ。留の一人位えは暗い處へ叩つ込まうと込むまいと、俺の胸一つで出來る事だ。先きに掛須賀の鐵位へくつゝいてゐてぐづ／＼云やがつた處で、長樂寺の身内の者は、仲人の直りがつかねえので皆な怒つてゐる矢先だ。掛須賀が何か云ひ出しや云い出す程、野郎の首も序でに飛んでしまふか恥洒しな事でも起るだけだ。それもお初の考へ一つにある事だから今夜一晩考へて、明日の暮までに返事をしろつて、たんかを切つて歸りやがつた。爺さんは驚いて、お初にすぐとこの事を話したら、私一人の爲めに、留さんが牢屋に入れられたり、掛須賀の親分に間違ひでもあつた日には申譯のない事だけれど、どうしてもあんな與吉なんて奴と一しよになるのはいやだから、死んでしまふつて泣いてばかりゐると云ふんです。それで爺さんも途方に暮れて、留に一應相談でもして見ようと、娘をつれて今朝起き抜けに留を尋ねて來たけれど、留は生憎家にゐなかつたと云ふんでさ。與吉には暮までの返事をすると云つた言葉があるし、どうしていゝか判らなくなつて、親分に御願ひでもして見たらと思つて伺ひました。老人一人と娘一人を助けると思つて、何とかお取計らいを願ひたいつて、またお前さん、土間に手を突いて頼むんぢやありませんか」

「ふゝん、與吉の野郎か性質の悪い野郎だと云ふ事は俺も薄々から知つてゐたが、そいつあ長樂寺身内に尻押をされて、やつた仕事に違いねえ」など鐵五郎もしばらく手を拱いて考へに沈んで居りました。

「ねえ親分、お前さんがゐない中に、あの親子二人を、私が勝手に止めておいたは濟まなかつたが、相手はたとへ木葉目明に

しろ何にしろ、お上の威光を笠に着て、長樂寺を後ろに背負つて、あんな爺さんや娘つ子を脅してまで自分の思ひを遂げようとする了見が俺は憎いと思います。また長樂寺の身内も身内だ。どんな間違ひがお前さんにあつたか知らねえが、悪けりや悪いでおほつぴらに、ちやんとかけ合つたが好いぢやねえか。それを何んだ、日暮し風情を焚きつけて、間が好きや役人づれでも抱き込まうつてえ魂膽だらう。お前さんは、何に百姓の親子二人位の事で、大きな間違ひにでもなつちやいけねえと考へなさるか知らねえが、俺あ一人でも半分でも、こんな事を我慢しちやゐられねえからよし俺が親分になり代つて、お前達二人は引受けた。俺の眼の黒い中はお前達に指一本でも指させやしねえから、安心してこゝにゐろと云ひました。それで親分、もしお前さんが此の事について不服がありなさるなら、どうかさう云つて貰ひてえと思ひます。どう世俺なんかはいつ、ふん捕つた所で、背負い切れねえ程兇状のある身體だ。俺のした事の爲めにお前さんの心にもなく、掛須賀一家に迷惑をかけちやあ何とも許さねえ事になる。日頃の與吉がどんなこすかれえ野郎か、長樂寺一家にどんな野郎が揃つてゐやがるか知らねえが、たかゞ役人風を笠に着たり、多勢を頼みに爺や娘をとりこめようつてけちな野郎だ、俺は俺一人で乗込んで片をつけてやらうと思つてゐる。然しこれも、お前さんのとこへ驅け込んで來た人間であつて見りや、一度はお前さんと相談して見てからの事と思つて、お前さんの歸りを待つてゐたような始末です。親分お前さんは何と思ひなさる』

と云はれました時に掛須賀の鐵五郎、

『いや森、お前の云ふ事はよく判つてる。俺が今考へたのは、自分の身内の留の事から、出入りにでもなつて間違ひが出つた日にや、清水の親分にも申譯がねえと思つたから、どうしたものだらうと思つただけに、何にかうなりや俺が一人で招た背負う。俺も掛須賀の何とか云はれて、同勝の者が驅け込んで來た時ばかりちやほやして、お百姓衆を袖にしたと云はれちや男がすたる。お前のした事にいざこざは決してねえ、爺さんも娘も話のつくまで、安心して家にゐろと云つてやつてくれ』

と云ひましたので森太郎も、

『お前さんもその氣になつて呉れりや俺も有難え、出過ぎた事は何うか悪く思はないでゐておくんなせえ、何れ長樂寺の奴等から、何とか文句をつけてくるかも知れねえが、その時は私も身體を張ります。何とでも好いからお前さんのやりたいようにやつておくんなさい』と話はこゝで極りまして、鐵五郎森太郎相談の上、八右衛門親子をかくまうように致しました。

　ところがその後、二日經つても三日經つても、長樂寺からも、與吉からも、何の音沙汰もありません。扨ては與吉奴、口では大きな事を云いながらも、八右衛門に掛須賀へ驅け込まれたので、手も足も出ずにゐるのか、それとも隙を見せて、何か企らんでゞも居るのかと油斷をせずに待構へて居りました。ところが間違ひの起る時と云ふものは仕方のないもので、これ程警戒して居りました鐵五郎も、止み難い用事の爲め、子分一人を連れて出掛けた歸り途、掛須賀の並木に於て、長樂寺の淸兵衛の若い者、三羽鳥と云はれて居ります者を初め、目明しの與吉も交り、悪口雜言をつかれた揚句、袋叩きにされまして、釣臺に乗せて、我が家へ送り歸されました。之れを見ると驚いて飛んで出た森太郎、

『親分、飛んでもねえ目に逢いなすつたな、本來ならば俺が向ふに紛れ込んで、命を取られるか話をつけるかする所だつたが、お前さんの男をすたらせちやいけねえと思つた許りにこんな目に逢はせて何とも濟まねえ』と傷手當を致しましたが鐵五郎は、

『なに、つまらねえ間違ひだ、森、決して家の若え者に云つて呉れるな、話がこじれて大きな間違を起す位なら、俺はぢつとかうして我慢はしてないから』と何處で何者にどうされたとも一口も云はずに、ぢつと默つて居りました。さて四五日經ちましてから、鐵五郎の身體の工合も、ほゞ大丈夫と見透のついた時、森太郎は枕元にやつて参りまして、『さて親分、お前さんも不思議な縁で、こうして兄弟の盃までした中だが、何かお前さんの役に立ちたいと思つてゐる中に、却つて迷惑をかけてしまつた。俺も長えこと一つとこにぢつとして、安閑として暮してゐると、氣が腐つて仕方がねえが、まあやつとこの土地を離れるような事になつて來た。ついては俺も行きがけの駄賃に、

藤枝身内の奴等の首を二つ三つ貰つて行かうと思ふ。甘く云つたらお前さんも、それで氣を晴らしておくんなさい。どちを踏んでも、お前さんの名にかゝるようなけちな、眞似はしないから、お前さんも身體を大切に、またどこかで逢ふ時もあるだらう』と云い出しましたので、鐵五郎も何うかして、引き留めておき度い男とは思つて居りましたが、どうせ落着いてはゐない氣性を知つておりますので、

『さうか森、お前がさう云い出したからには俺がいくら引き留めても、ゐついてゐちや貰えまい。ちやお前も丈夫で行くが好い、一人者は暢氣で好いな』と思はず羨ましさうに申します。

『苦勞も多いがこれがこつちの身上さ、お前さんのように多勢乾分子方を持つちまふと、ふだんは親分だ貸元だつて、威張つてゐられるとこは好いが、しまいにや手前の身體を手前で始末が出來なくなる。俺はあそんな事が大嫌いだ。どうせたまげる程嬉しい事だの面白い事だのつて俺たちにやありさうもねえ世の中だ。せめて打倒れるまでも窮屈な思ひをしねえで俺は歩きてえと思つてゐます。ぢやお前さんも大切にしなさい』と別れを告げて、掛須賀の家を立ちました。思いもかけず長い事一つ所にくすぶつてゐた森太郎は、再び流浪の旅に登る事と、すぐ眼の前に起らうとしてゐる、命をかけた出來事が、長い間くすんでゐた心を湧き立たせて、果しもない退屈から脱れたようにほつとしたのでありました。

さて森太郎は十分に支度をして、藤枝の宿に入つて參りまして、その日も暮れ際と云ふ頃になつてから、長樂寺の清兵衛の門口にやつて來て、

『ご免下さいまし』と訪れる。

『へえいらつしやいまし』

『私は名古屋の森道と申します半可打でございます。親分御在宿ならばお目にかゝりたく、當分御厄介になりたい考へで、何卒よろしく御取次を願いたう存じます』と、半素人の博奕打になつて、入りこんだのでありました。

こゝで長樂寺の清兵衛にも對面致すと。

『まあ心易々悠り遊んで行きなさい』と云つてくれる。年の頃六十五六到つて溫厚な人品でありますから、扨は矢張り時の遁

り、身内の若い者が悪いのだな、と心に問い心に答へて、しばらく厄介になる事になりました。

森太郎は清兵衛方に來ましてから、三羽烏と自ら名乘る三名の者に心をつけて居ります。此の三名と申すのは、一番年長が博勞の定五郎、之れが與吉と兄弟分の男でありまして、年頃は四十そこ〳〵、色の黒い背の高い、頑丈な男でございます。次が上傳馬の新助、これは三十二三位、色の淺黒いどこか精悍な氣の溢れたような男前、その次は一膳屋の兼吉と云ひまして、色の白い俳優のような男ではありますが、何となく凄味を帶びて居ります。森太郎は常に心して三人の様子を伺つて居りますが、さすが三羽烏と云はれるだけあつて、五分の油斷もありません。さしもの森太郎も手を下す事が仲々出來ません。殊に一人だけやつて、跡の二人をやり損なふような事があつては、切角の苦心も水の泡となつてしまふ。ので、何かと心を碎きたがら、此の三人を『兄い、兄い』と立てゝ取り込んで行く。日明の與吉も時折は定五郎の許に遊びに參りますので、之れまた如才なく、ほい〳〵と煽て上げる。人間と云ふものに可笑なもので、彼奴俺にお世辭を云つてやがる、いやな奴だと思ひさて目の前でちやほやされると、相手の無人格が面白く、心に輕蔑しながらも、それだけにだん〳〵心を許して行く。人間らしい心持のない奴等が金でも出來て、衣食住に不自由もなく、女も買い飽きると云ふ事になると骨董などゝ云ふものを集めて、彼等の沒個性を弄んで喜ぶと云ふ風になる、之れは金ばかりではない、隨分自覺したような人間にも、かう云ふ傾向はよく見えます。誠に淺間しい人間の弱點と申さなければなりません。

さて三名の者は、いやにおべつかる嫌な奴だと心に思いながらも、いつとはなく『森造、森造』と、からかひ半分に心を許して行くやうになりました。

處が一晩、清兵衛の宅では、何か心祝ひがあると見えまして、この三名の者を初め、二三人の乾分を集めて、内輪の酒盛が初まりました。森太郎は例の如く、

『さ親分、兄い、野郎のお酌ぢや面白くねえか知らねえが、お酌を一つ』と酌をする。唄を歌ふ、器用同樣に、一座の間を切

つて廻して居ります。これを見て清兵衞も、

『森つてえ奴あ、本當にひようきんな野郎だな』とくす〳〵笑つてゐる。その中に男同志の酒の坐と云ふものは兎角話が武張つて來て、喧嘩の話、勝負事などの話もそろ〳〵出て來る。すると何を考へたか森太郎、

『時に博勞の兄い、かうして野郎ばつかりで酒を呑んでると、話が固くなつて仕方がねえ、ついちや私が若え奇麗な娘を一人引張つて來ようと思ふのですが、どんなもんでせう』と云い出しました。

『何を又森の與太野郎が、つまらねえ事を云い出しやがつて、女が欲しけりや女郎買にでも行くが好いぢやねえか』

『なにそれがお前さん、是非今夜こゝへ引張つて來なきやならねえ女なんで』

『引張つて來なきやならねえ女だつて、そいつあ可笑な話だな、一體その女つて云ふなあ何者だい』

『兄いの前だけど、お前さん、お初つて娘を知つてるでせう』と云はれて定五郎、知らないとも云はれないから、

『うむ知つてゐる』と答へました。

『そいつにお前さん今日お清婆さんの茶店に行くと、そのお初と云ふ娘が來て、婆さんと色々と話をしてゐる。だん〳〵話を聞くつてえと、爺さんと二人で掛須賀の身内を頼つて逃げて行つたけど、此頃ぢやどうしたものかつらく當る、相手の留吉と云ふ男まで、根つから構つては呉れねえで、二言目には出て行けと云はれるが、長樂寺の定五郎さんや、與七さんにも申譯ない事がしてあるので、話をしない中は自分の土地にも歸つて來られない。それに自分はもうあんな薄情な留吉なんかの世話になるなら今では與吉さんに身を任せて、親にも安心をさせて暮したいが、何とか方法はないだらうかと、相談してる所でした。それに私が定兄いなら俺も本當の兄貴のように世話になつてゐる。折を見て話してやるから、婆さんの家へ隱れてろつて、あすこへしばらく忍ばせておいたんでさ。ところが今夜丁度かうして酒が始まつた好いとこだ、與吉兄いも呼んで來て、こゝで何とか話をつけてやらうぢやありませんか』

とまことしやかに云ひましたので、

『ふゝん、そいつあ面白え、掛須賀の奴等も何だか俺達が薄氣味惡くなつて來たんだらう。親分どんなものでせう』と清兵衞に尋ねます。清兵衞は何にも譯を知らないから、

『お前たちの好い事なら好いようにやつたら好いぢやないか』と年寄だけに何にも子分に任せて居ります。

『それぢや定兄いかうして下さい。お前さんが今夜親分のとこで一杯やつてるから、與吉兄いにちよと來てくれつて、手紙を書いておくんなさい。與吉兄いだつてお初の事を云はれたんぢや少し極りが惡いだらうからそいつを持つて私が兄いに屆けてから、お初をこゝへ引張つて來る。こゝで二人が出くわす。こいつは面白い事になつて來た』と森太郎は一人で浮れてゐる。計られるとは知らないから。

『そいつも面白え事かも知れねえ』と醉つたまぎれに定五郎は手紙を書きます。之れを受けると森太郎、部屋へ歸つて支度をして藤枝の宿外れ、與吉の家にやつて來て、

『今晩は、兄貴はお宅ですか、定五郎兄いから、手紙を持つて使ひに來ました』と件の手紙を渡す。與吉も兄貴分の定五郎からの手紙であり、持つて來たのが部屋で馴染の森造だから、

『やあ森ご苦勞だつたな、何か用事がありさうだつたか』と尋ねますと、

『なあに今日珍らしい客人があつたんで、兄いもお呼び申して來い、さうして手前お伴して來いと云はれましたんで』

『さうか、それぢや一緒に行かう、手前提灯を持つて先きに行け』と大きな顏をして我家を出る。畔道までやつて來ると、先きに立つた森太郎、はつとつまづいたふりをして提灯を投り出した。

『森、どうした。氣をつけろ、眞暗になるぢやねえか』と怒鳴つたところを

『なにを、』と橫なぐりに切りつけた。

『あつ、なにをしやがるんだ』と、云つたがばつたりそれへ倒れたところを押へ附け、

『やい與吉、うぬは女にふられたつて、けち臭え十手風を吹かせやがつて、年寄親子を殺した上、よくゝ俺の兄弟分掛須賀も

鐵五郎の面に泥をぬりやがつたな、己のやうな蛆虫は、かうしてやるんだ』と起き上ると同時に首を打つて落し、髷をつかんで戻つて來て淸兵衛の宅表ての方から

『たゞ今戻りました。森造でございます』と怒鳴つて格子を開けて中に這入つた。奥では森造が戻つて來たのだなと、氣をゆるして飮んでゐる、襖の外までやつて來た森太郎。

『えゝたゞ今』と云ひながら、氣合を計つてガラリと明けると、

『えいつ』と叫んで、與吉の首を叩きつけた、

『やゝ森、汝は』と定五郎が驚いて脇差を取つて立ち上らうとする所を、

『何をつ』と肩口へ割りつけた。

『うぬ、飛んでもねえ事を』と一軒屋の兼吉が、立向はふとする奴を、胸の當りに諸手突きをくれたので、兼吉もそれに倒れる。

『畜生、兄弟をやりやがつたな』と上傳馬の新助が脇差を拔いて斬つてかゝるを、

『何を洒落臭え』と、切り込んだ一刀に、新助は腕を切り落されてばつたり倒れる。

『これ森、何をするんだ』と年を取つても長樂寺の淸兵衛、重い身體で立ち上つて居るところを、

『邪魔しちやいけねえ』と足を上げて腰を蹴つたので、淸兵衛はそれに倒れたのを、帶をとつて縛り上げてしまつた。殘る子分の者共は、之れを見て驚いて逃げてしまふ。

森太郎はほつと息をつくと、それにあつた酬冷しを、二三杯ぐつと飮んで、まだびく／＼動いてる三名を後日にかけて、

『やいこの蛆虫奴等、引導代りに名乘つて聞かせるからよつく聞け、名古屋の森造などゝは出鱈目だ、眞の俺は濃州郡上郡下田新田百姓森右衛門の悴森太郎、當時竹川の森太郎と云ふのは俺の事だ。己等はよくも、日明風情の與吉の尻押をして、罪もねえ八右衛門親子を苦しめ、また、多勢を頼んでよくも掛須賀の鐵五郎を並木で袋叩きにしやがつたな鐵五郎と俺とは兄弟分だ。兄の鐵五郎は、事が大きくなると面倒だと云つて我慢をしてゐるか知らねえが、弟分の俺にや我慢が出來ねえ、汝等四

とまことしやかに云ひましたので、

『ふゝん、そいつあ面白え、掛須賀の奴等も何だか俺達が薄氣味惡くなつて來たんだらう。親分どんなものでせう』と淸兵衛に尋ねます。淸兵衛は何にも譯を知らないから、

『お前たちの好い事なら好いようにやつたら好いぢやないか』と年寄だけに何にも子分に任せて居ります。

『それぢや定兄いからして下さい。お前さんが今夜親分のとこで一杯やつてるから、與吉兄いにちよと來てくれつて、手紙を書いておくんなさい。與吉兄いだつてお初の事を云はれたんぢや少し極りが惡いだらうからそいつを持つて私が兄いに屆けてから、お初をこゝへ引張つて來る。こゝで二人が出くわす。こいつは面白い事になつて來た』と森太郎は一人で浮れてゐる。計られるとは知らないから。

『そいつも面白え事かも知れねえ』と醉つたまぎれに定五郎は手紙を書きます。之れを受けると森太郎、部屋へ歸つて支度をして藤枝の宿外れ、與吉の家にやつて來て、

『今晩は、兄貴はお宅ですか、定五郎兄いから、手紙を持つて使ひに來ました』と件の手紙を渡す。與吉も兄貴分の定五郎からの手紙であり、持つて來たのが部屋で馴染の森造だから、

『やあ森ご苦勞だつたな、何か用事がありさうだつたか』と尋ねますと、

『なあに今日珍らしい客人があつたんで、兄いもお呼び申して來い、そうして手前お伴して來いと云はれましたんで』

『さうか、それぢや一緒に行かう、手前提灯を持つて先きに行け』と大きな顏をして我家を出る。畔道までやつて來ると、先きに立つた森太郎、はつとつまづいたふりをして提灯を投り出した。

『森、どうした。氣をつけろ、眞暗になるぢやねえか』と怒鳴つたとこを

『なにを、』と横なぐりに切りつけた。

『あつ、なにをしやがるんだ』と、云つたがばつたりそれへ倒れたとこを抑へ附け、

『やい與吉、うぬは女にふられたつて、けち臭え十手風を吹かせやがつて、年寄親子を殺した上、よくも俺の兄弟分掛須賀も

鐵五郎の面に泥をぬりやがつたな、己のやうな蛆虫は、かうしてやるんだ』と起き上ると同時に首を打つて落し、髻をつかんで戻つて來て淸兵衞の宅表ての方から

『たゞ今戻りました。森造でございます』と怒鳴つて格子を開けて中に這入つた。奥では森造が戻つて來たのだなと、氣をゆるして飮んでゐる、襖の外までやつて來た森太郎、

『えゝたゞ今』と云ひながら、氣合を計つてガラりと明けると、

『えいつ』と叫んで、與吉の首を叩きつけた、

『やゝ森、汝は』と定五郎が驚いて脇差を取つて立ち上らうとする所を、

『何をつ』と肩口へ割りつけた。

『うぬ、飛んでもねえ事を』と一軒屋の兼吉が、立向はふとする奴を、胸の當りに諸手突きをくれたので、兼吉もそれに倒れる。

『畜生、兄弟をやりやがつたな』と上傳馬の新助が脇差を抜いて斬つてかゝるを、

『何を洒落臭え』と、切り込んだ一刀に、新助は腕を切り落されてばつたり倒れる。

『これ森、何をするんだ』と年を取つても長樂寺の淸兵衞、重い身體で立ち上つて居るところを、

『邪魔しちやいけねえ』と足を上げて腰を蹴つたので、淸兵衞はそれに倒れたのを、帶をとつて縛り上げてしまつた。殘る子分の者共は、之れを見て驚いて逃げてしまふ。

森太郎はほつと息をつくと、それにあつた燗冷しを、二三杯ぐつと飮んで、まだぴく／＼動いてる三名を後目にかけて、

『やいこの蛆虫奴等、引導代りに名乘つて聞かせるからよつく聞け、名古屋の森造などゝは出鱈目だ、眞の俺は濃州郡上郡下田新田百姓森右衞門の倅森太郎、當時竹川の森太郎と云ふのは俺の事だ。己等はよくも、日明風情の與吉の尻押をして、罪もねえ八右衞門親子を苦しめ、また、多勢を頼んでよくも掛須賀の鐵五郎を並木で袋叩きにしやがつたな鐵五郎と俺とは兄弟分だ。兄の鐵五郎は、事が大きくなると面倒だと云つて我慢をしてゐるか知らねえが、弟分の俺にや我慢が出來ねえ、汝等四

人の素首を捕えて貰はうと思ふから、今日まで我慢して、手前達を兄貴兄貴つて云つてやつたんだ。お初が藤枝に來てるなんて、そんな事は皆な嘘だ。與吉をおびき出す爲めに、俺が書いた狂言だ。己等も卑怯に似合はねえ、飛んだ間拔な野郎共だ。もうかうなつちや仕方がねえ、念佛でも題目でも勝手に唱へろと云ひながら。片つぱしより首を打ち落しましてから、清兵衛に向つて、

『さて長楽寺の親分、長い間御厄介になりました。今度の事はお前さんは知らねえだらうが、お前さんの子分定五郎始め三人は、目明與吉の尻押をして、罪もねえ親子を苦しめた、たゞでせえ目明は、こちとらの瘤つ玉だ。そいつにへつらふ計りでなく、一緒になつて百姓衆を苦しめるなんて無職者の風上にもおけねえ奴、それ計りぢやねえ、それやこれやを根に持つて、掛須賀の鐵五郎を袋叩きにした。つまりどいつも此奴も、ありもしねえお上の威光を笠に着たり、お前さんの名を後ろに背負つて仕事をするけちな野郎ばかりだから、俺が命を貰いました。これからもある事だ。子分にも旅人にも、よく氣をつけた方が好うごんすぜ。ではご免なせえ。その中に誰か來て[illegible]く でせう』と云ひ捨てゝ、清兵衛の家を出ました。

思ひを遂げた嬉しさと、再び自由な流浪身となれたのとで、森太郎の心は、輕々となつたように思はれるのでありました、

『あゝ、また的もねえ長旅か、その中にや又何かにぶつかるだらう』と呟きながら、同道坂道を行くでもたく、清水を落して森太郎は、悠々と歩いて參りました。

（完）

# 彫刻師ソクラテスの犯罪

生方敏郎

## 一

社會講談と云ふことが創められてから、はや一年に成る。「はや一年に成る」と云へば大變に光陰の早いのに驚いた心から出た言葉であるが、同じ一年でも「まだ一年にしか成らぬ」とも云へば云へる。偖、そこで、社會講談もまだ創められてから一年にしか成らないものだから、世間さまも何んな物であるか、その正體をよく御存知ない。それもその筈、執筆を依頼されてる當人の私さへも、一體全體社會講談とは何んなものかと云ふことを、よく知らない。講談にかこつけて自家の磊塊を吐くことなのやら、講談本を今風に書き代へて下手な現代小說家の眠氣を覺ましてやろうといふ茶目的老婆心なのやら、一寸見當がつかない。すると或人のいふには、そんな事は何うでも君の任意として置いて、兎に角やつてみたらよからう。とのことであるから、「いや、それはやつてもいゝが、若し出來そこねると人さまから笑はれるし、萬一うまく出來た日には、すつかり講談師に祭り上げられてしまふ、こいつは尙ほ堪へられないことだ」と苦笑すると、「いや、然うでない。上手にやれば美酒のやうに快く人を醉はせるし、拙かつた日には催眠劑に成り、短か夜の良い伽だ。何う轉んでも世の爲め人の爲めに成る」といふ。

世の爲め、人の爲めに成るのが、卽ち社會講談である。社會講談の社會講談たる所以である。さう說き付けられると、何んだか一つ演つてみようかといふ氣もする。だが、待てよ。昔から、「世の爲め人の爲め」を絕叫して騷いだ奴等は、何時の間

にやら、田地を買ひ込み銀行へ貯金が出來るが、本當にマジメで世の爲め人の爲めに働いた連中は、皆悉くひどい目に會はされてゐる。ソクラテスはその爲めに毒杯を仰ぎ、キリストはその爲めに十字架に懸けられ、孔子は何とかいふ野原で餓えに苦しんだ。芝居でやる佐倉宗五郎なんかも然うだ。人は知らないやうだが、私の國元の眞庭の茂左衞門なんかも百姓の爲めに惡大名と爭つて、月夜野河原に三族を誅された。さうして殺して置いてから、總て聖人だの哲人だのと讃めそやし、或は神樣に祭つたりする。殺した後で神樣に祭つてくれるのは。それこそ世に謂ふ後の祭りで何にも成らないが、それでもまだ我慢する。そして祠を建てゝ、鳥居を建てゝ、さうして然る後に賽錢箱を置くことを忘れない。神樣にするのはいゝが、早速それで以て飯の種にする。蠟燭を上げ、線香を立て、お米をバラ〱投げる。そして參詣人は何を祈るかと思へば、相場を當らせて大儲けをさせてくれ、金持のいゝ旦那がつくやうにしてくれ、亭主を往生させて色男と一所にしてくれ、徴兵檢査に免れさせてくれ、とそれは自分勝手なことばかり註文するが、生きてるときさにすら、貧乏で無智な民百姓の爲めに貴重なる生命を擲つ程のバカ者だから、神樣に祭り上げられて置いて頼まれたら、また〱何んな註文にも應じないものでなからう。といふので警察からは近頃流行神へ刑事が張り込み、神樣を監視するといふ話。ずいぶん突飛な話だけれども、それは拙者一人の作り話に非ず、東京の大新聞に出てゐたのだから、確かも確か、國務大臣の一諾位には確かな話。

だが實のところ、之は笑ふ話でなく、凡そ世の爲め人の爲めに働く位の甘い人間の運命は、正にこんなものである。生きては則ち縲絏の辱めを享け、死しては神樣に祭り上げられても尙ほ且つ刑事に監視せらる。それ故、萬一、この社會講談なるものも、世の爲め人の爲めに成るといふなら、淨つかり手を出すことは危險極まる。君子は危きに近寄らず。と云へば、說き付けら者、私を說き付けて曰く

「まあ〱、そんなに惚れ玉ふな。君の書く社會講談の公益位は多寡の知れたものである。いゝ意味に於いて誰も對手にしやしないから、安心し玉へ。それでも、まだ世の爲めに成り

はしないかといふ心配が有るなら惡人共の講釋でもすればいゝ」と。

## 二

惡人共の講釋なら、成程いかにも世の爲めに成るといふ危險は有るまい。すると、私も十字架に架けられる心配はいらぬ。だが、今日惡人といへば、まづ郵便局長、滿鐵社長、東京市會議員、××會代議士などと相場が極り、毎日〲新聞に連載せられてゐる。そんな卑俗な材料では折角書く張合が無い、苟も講釋でもしやうといふやうな物識り學者のやることではない。そこで、私は遠い西洋の歷史から、誰も知らぬ相な大惡人を探すことにした。

紀元前三百九十九年に、ギリシヤの國アゼンス市の、彫刻師ソクラテスと云ふ者が、時の僭王から死刑の宣告を受けて、毒盃を仰いだ。そして牢屋の中で死んだ。

この男は、頭も、もう大方つる〲に禿げてゐた。顏付は頗るまづく出來上り、凶惡と殘忍の魂の外は、こんな不出來な面構への肉體には宿り相にも見えなかつたが、その時彼の屍體に取り付いて泣いてゐたプラトー及びクリトーと呼ぶ二人の青年は「おゝ、アゼンスの最も尊い賢人は死んだ。」

「尤も偉大なる魂は、この世を去つた」

と云つて泣いた。

又、その細君のクサンチツペは、平素彼とは非常な仲惡だといふ評判を裏切つて、訃報に接するやさめ〲と嘆き悲しんだ。人々はこの有樣を見て「流石、夫婦の情合だ」と云つて感じた。

この彫刻師は、存命中、なか〲の學者で、殊に倫理道德の議論にかけては、誰にも負けた事がない。人を說き伏せるに妙を得てゐた。當時有名な詭辯家のプロタゴラスでさへも、彼には到底敵し得なかつた。そんな鹽梅だから、このソクラテスには、多く學問の弟子達があつた。ソクラテスが死んだので弟子達も皆悲んだ。

彼の罪名は、青年を煽動し、國教に反對する危險思想を抱いて、青年の間に、盛に害毒を流すといふのであつた。多くの人が彼を告發したので、こう云ふことになつてしまつたのだ。そ

れのみならず、この彫刻師は、家庭が治まらず、常に、夫婦喧嘩の絶間がなく、斯様に、告發されるに到つたのも、もとをたゞせば、その妻の口から出たソクラテスに對する惡罵が、不幸にも、反對黨の利用する處となつたのだ相である。

## 三

ソクラテスの母は産婆で、父は石工であつた。そして、父は、同時に彫刻術の心得があつたので、彼は父から教へられて、彫刻師となつたのだ。さういふ職業上の關係から、ソクラテスは、共産主義のシアソースと云ふ勞働組合に屬して、公共食堂に、出掛けて行き、そこで仲間の者に、友愛とか、親睦とか。福德合一論とか、勞働の神聖とか、物質的利益と精神的平和との調和とか、さういふ勞働階級に必要な道德を說き、彼等の德行を鼓舞督勵した。そして、何時も利己的な、或特權階級の御用學者等を大道の眞中で捕へて、議論を吹きかけ、へこませた。さういふ時、ソクラテスは、何時も跣足であつた。だから。跣足で步いてゐて、議論の達者な彫刻師と云へば、アゼンスの人々が、すぐに「あゝ、あのソクラテスか」と合點がいく位、全市によく知れ渡つてゐたのだ。

さて、この樣に、名物男となつた彼は、その友達も亦、天下一流をもつて許された人物ばかりであつた。政治家としては有名な、その時代の大統領、ペリクリース、彫刻家として一流なフィディアス、また、戲曲作家としては名聲嘖々たる、ユーリピディース、そしてまた弟子には、貴族の出である、プトラー、才氣橫溢たるアルシビアデス、その論敵としては、詭辯學派のプロタゴラス、そしてまた女の友達としては、當時、才色兼備し唯一人者であつたアスパシャがあつた。その連中が一緒になると、上は天文地文から、下は市政・工藝・風教・衞生に至るまで、議論百出で常に夜の更けるのも知らない位であつた。從つて彼は家にゐて、自分の本業たる彫刻などを、こつ〳〵とやつてゐる時間よりも、外でしやべつて、時を費す方が多いといふ有樣であつた。

ソクラテスは、この通り外へ出ては幸福であつたが、家庭にあつては、極めて不幸な男であつた。ギリシャ一不幸の男と云はうか。世界一不幸な男と云はうか。兎もお話にならない家庭

であつた。

## 四

そんな家を作つて、死ぬ迄苦しんだと云ふ事は、彼の不明の致すところか、或は彼の不徳の致すところか、それとも亦さういふ悪縁といふのか、兎も角も、そんな女と早く離婚しなかつたことは、全く彼の不明であつた。だが、彼の細君も、殆めからの悍婦ではなかつた。猫を被つてゐたと云ふのでもなからうが、花嫁時代には、何と云つても、まだ初々しいところがあつた。なる程、來ると間もなく、ソクラテスに、一寸小言を云はれだ時など、一つ位口答へをするやうな事もないでもなかつた。然し、その位の事に、ソクラテスは、驚きもしなかつた。何故なら、彼は、議論にかけては、並ぶものなき達者な男であつたから、細君の口答へ位、一言のもとに、云ひ伏せてしまつた。そんな事はあまりに容易な事であつた。若しその反對に、彼が、議論下手であつたとしたら、早くから、細君の口答を云ふ事を氣に病んで、別れてしまうなり、何とかきまりをつけたであらう。然し彼は、細君の口答へ位は記憶に殘らない位、小さな缺點として取扱つてゐた。のみならず彼は、誠意を以つてその妻を愛した。間もなく、愛の結晶たる子供が生れた。

子供が生れると、そこに夫婦の鎹が出來た。細君は、安心すると同時に、前よりも更に一段我儘になつた。これ迄慎んでゐた我儘をそろ〳〵出し初めて來た。少しの事にも、顏色を變へたり、ソクラテスの云ふ言葉尻を捕へて、やかましく、喚り立てたりした。然し、剛氣なソクラテスは、それをさまでの强敵とは感じなかつた。その中にまた第二番目の子供が生れた。細君クサンチツペの我儘は、更にまた增長した。然し、ソクラテスは智慧に於いて自分の方が、遥に優つてゐるから、何と云つても妻は自分に、内心推服してゐるものと、己惚れてゐた。ソクラテスの友人の中には、窃に、離婚を勸誘する者もあつたが、彼は取り上げなかつた。そればかりでなく、自分の様な者なればこそ、かういふ女を統御して行く事も出來るが、一旦自分が見放すならば、この女は、唯盲目的に突進するより外を知らない。そして盲馬の様に、崖から落ちて死ぬに決つてゐる。自分が見放したら、誰も、この悍馬を御するものがなく、ま

た、その、盲進を、遮り止める者もあるまい、その時には、クサンチッペは、亡びの淵へ落ち込む外はない。それを憐れだとも思つた。また、彼は我儘と無謀とは、或程度迄、女の通有性だとも考へてゐた。女と云ふものの數を細君以外に、餘り多く知らなかつた彼は、彼の細君を捨て、他の女と結婚したところで、五十歩百歩だと、考へてゐた。更にまた、彼は我儘と無謀とは、若い者の通有性だとも考へて、その若い細君を宥した。また彼は、無謀と我儘と、粗暴とは教養のないもの丶通有性だとも考へた。それ故、細君が、もつとだん〳〵年を取れば、その惡性は、その度を減じるに違ひないと考へた。更にもう一つ彼は、彼の啓發と教導とによつて、その細君の品性を、より良き方向へ引き上げて行く事が出來るとも考へた。そして其細君に對して絕望しなかつた。單に絕望しないのみならず、教育のい丶材料だとも考へた。或時はまた、さういふ難物を取扱つてみて、そこに初めて、自分の品性の鍛錬が出來るとも考へた。

彼の家庭を知つてゐる親しい友達は、彼の呑氣と、己惚れの強さとを、密に笑つてゐた。またその自信力を、冷笑しもした。そして、「何と云つても、夫婦の中だ。また人の知らない何處かい丶處があると見える。」

などと笑ひもした。けれども彼に、さまで近くない世間の普通の人達は、彼の家庭を、い丶家庭だと、買ひ被つてもゐた。ソクラテスに向つて、

「あなたの家庭の樣に、溫い家庭を持つ人は全く幸福ですなあ。」

と、云つた者もある。さういふ時、ソクラテスは、

「いや、僕の家庭は、溫いと云ふより寧ろ、熱いと云つた方が當つてゐるね」

と、笑つて答へた。然しその深い意味は、無論先方には分りはしなかつた。

溫い家庭には、駘蕩たる春風が吹く、花が開き、鳥が歌ふ。熱い家庭には。焦げ付く樣な夏の日が照り、夕立が降り注ぎ暴風が吹き、稻妻が光り、雷が轟く。ソクラテスは、その二つの全く違ふ家庭を胸に描いて、答へたのだ。

もう、三番目の子が生れてからは、ソクラテスも、かなり諦

觀し初めてゐた。然し、もと〳〵彼は意志が强く、剛腹で、そのくせ自分の瞑想やら他人との哲理談との間やらに、明るい、のび〳〵した氣持になつて、家庭のくさ〳〵などは、きれいに忘れるといふ樣な、根が樂天的に出來てゐる男で、惡く云へば極樂蜻蛉の方であつたから、悲觀と云ふ字を當て嵌める程悲觀してゐたわけではないが、然し兎角、家庭にゐ付かず、外をのそ〳〵遊び歩く樣な習慣がついた。そして、ヘミクリオンと呼ぶ半圓形の大理石の座席に、アゼンスの名士逹と、屢々會合して、夕日に輝くアクロポリスを遠く望んで、雜談に耽りもした。また、或時は、市場や辻に立つて、誰でも通りかゝりの人を捕へて哲理談を持ち出したり、または居酒屋や、妓樓に登つて、商人とも職人とも、テーブルを圍んで、飲み、大いに人生問題、社會問題を論じたり、またはピレアスで、船頭を相手に盃のやりとりをしたり。また、大統領のペリクレースと話すのでも、放蕩者のアルシビアデスと話すのでも、同じ調子で、さつくばらんにメートルを上げた。そして、奇人としてアゼンスの町に知れ渡つてしまつた。

## 五

ソクラテスの家は、もとより勞働組合に屬する位だから、豐ではなかつたが、然し、また、生活に迫はれる程貧乏でもなかつた。ソクラテスは、それだけの生活でも、物質的には滿足を得てゐたが、細君のクサンチツペは、その位の生活程度では、不平不滿に堪へなかつた。ギリシヤの文明は既に爛熟しきつてゐて、五年前と、五年後とでは、その贅澤の進み方は驚くべきものであつた。ソクラテスは、さういふ奢侈の進歩については、殆ど全く見逃してゐるのではないかと。思はれる程、着物も調度も、二十年も前の流行後れのものを用ひて平氣な顏ですまし込んでゐた。のみならず、彼は、美しい着物を着るよりも、裸でゐる事が最も好きであつた。細君のクサンチツペの目には、一年一年の流行と華美とを、見逃さなかつた。而も殆どそれを手に入れる事が出來なかつたのだ。美しいものや、新しい流行を見る度に、夫の意氣地なさが腹立たしかつた。かういふ、非常識な奇人に連れ添ふて、あたら若い半生を、空しく過すかと思へば、それだけでも、ソクラテスの、獅子鼻を削ぎ

むしつてやりたい様な氣がするのであつた。

流行ものづくめで、盛裝して、女王の様な心持になつた經驗などは夢に見たくてもない中に、もう五人の母になつてしまつた。子供一人產む每に、自分の容色が衰へて行くと云ふ事だけでも、クサンチツペには、隨分つらい事であるのに、さういふ事に、少しも同情のないソクラテスが、つく〴〵怨めしかつた。なる程、家の人は深切だといふ事は、彼の女にも分つてゐた。然し、ソクラテスの深切は、自分にばかり專門に注ぐ愛ではなくして、彼に近づく誰に對してでも、同じ様に、例へば、春の空の太陽の様に、平等に暖いのが、細君には物足りなかつた。彼の女は、夫の愛を自分一人で欲しかつた。然るに夫は、居酒屋で初めて出會つた船頭に對してですらも、惜氣もなくその溫情を傾けた。

「だから、家の人の愛情には價値がない」

と、クサンチツペは考へた。

六

アゼンスの郊外セラミカスの、柱廊もない質素な住宅の庭を、ソクラテスはあちこち、何か考へながら歩いてゐた。細君は、羊毛を搔きむしる様に、梳つてゐた。

「あなた何してゐるんです」

「さういふ質問に對しては、私は答へる義務は持たないけれど、特に厚意を以つて答へれば、私は考へてゐるのだ。然し、なるべく沈默を守つてゐて貰ひたい、わきから話しかけられると、折角立てかけた順序が、滅茶〳〵になつてしまふから」

と、

「おや、お氣の毒樣、あの人の事でも考へてゐるのでせう」

ソクラテスはそれには答へずに猶、ぶら〳〵と歩いてゐた。

「本當に話しかけたりして惡い事しましたのね。いろ〳〵面白い空想をしてゐるところを。さういふ勝手な眞似ばかりしてゐながら、世間へ出ると、やれ幸福と德行とは一致してゐるの、正義の神は、我が心に宿つてゐる良心であるなどと、態のいゝ事ばかり言つて、人さまがやれ、聖人だの、哲人だの、やれアゼンスの名士だのと、お追從を云へば、すつかりその氣になつてゐやがる、どう思はれたつて、かまふ事あないけれども、さういふことばかりで女房を踏み付けにして、他所の婦人なんか

考へ乍ら『私は答へる義務は持たないけれども、特に好意を以つて答へれば、私は考へてゐるのだ』とさ、聞いて呆れらあ、僞善者、畜生、獅子鼻の葬儀イ。」

「お前は、先刻から何を云つてゐるんだ。何かまた感違ひをしたな。若し、私の方に過失があるなら、どういふ過失であるか、それを正確に見とゞけた上で、私に忠告してくれたらそれが好意と云ふものだ。唯、頭から當て擦りと罵倒を浴せかけられては、どうしてみやうもない。お前の今の言葉から、推察すると、私がお前にかくれて、女でも拵へた樣に聞こえるが、お前はさういふ事實を、お前自身の肉眼を以つて見とゞけたのかね。それとも亦、何人か信ずるに足る程の人から、確實性のある具體的の話を聞かされたのかね――他人の妻に對して夫の僞を誹謗して聞かすと云ふ事は、實に不徳義千萬な事だが……」

「さうで御座いませうとも、あなたにとつちやあ、かなり迷惑ですからね。僞善者は秘密が知れゝば、化の皮が剝げるのですからね、」

「お前の云ふ言葉には一面の眞理がある。然しその言葉は私の場合には當て嵌らない。そこで私は前の話をつゞける。先づ、私の行爲に對して誰かがお前に告げたとした場合には、果してそれが事實か、否かを、たしかめなければならない。それからでなくては、人を批難する事は出來まい。いや、それからですらも、相手によつて、批難していゝ場合と、批難して悪い場合とある、また、批難の程度と云ふものもある。國家の刑法ですらも、微罪はこれを措いて問はない。また、その罪の輕重により、刑罰にも輕重がある。峻嚴なるべき國家の刑法ですらも、その通りである。かりに百歩を讓つて、私が若し、お前以外の女と關係したと云ふ事實が、あつたとしても、その關係と云ふものにも亦、度合がある。單に、二人きりのところで話したと云ふ場合、肉體が接觸したと云ふ場合、また、子供迄出來たと云ふ場合、それもいろ／＼ある。頭から何にもかまはず、先刻の樣に人を罵詈誹謗すると云ふ事は間違つてゐる。まして子供のゐる前で、殊に物心付いた子供の前で、兩親が爭ふと云ふ事は良くない事だ。さうはお前は思はないか」

「やかましい。子供のゐる前なら、亭主にどんな事をされても、

默つてゐるなんて事があるものか」

「たとひ私が惡いにせよ——事實に於て私は惡くはないけれども——かりに百歩讓つて私が惡いにしても、夫たるものに對して、『やかましい』と云ふ口の利き方はあるまい。無教育な、車夫馬丁の家庭に於てならいざ知らず、我々の樣な、アゼンスの知識階級の家庭に於て、さういふ言葉は夫婦の間に使ふべき言葉でなからう」

「えゝ、どうせさうです、私は無學です。無教育です、いくら私が、無學でも、無教育でも、自分の顔を踏み付けられて、だまつてゐなければならないなんて、そんな慘酷な道德がありますか?、人が從順にしてゐればいゝ氣になつて、女房なんて、どんな事をしてもよいと考へてゐる。いまに見やがれ、アントスが來たら、あなたの始終云つてる事を、話してお役所へ訴へさせてやるから、さうすれや、あなたなんか、すぐに、牢屋にほうり込まれるんだ」

「アントスつて、あの鞣皮の職工か、あんな男が何が物がわかるか?、はゝあ、あいつからお前くだらない事を聞かされたな。失業して、困つてゐるから可愛さうだと思つて、あんな者を世話をしてやつたのが、私の誤りだつた。私の留守と云へば來て、さういふ家庭の平和を紊す樣な事をする。うむ。昨日、丁度、アスパシヤの家を出る時、あの男と、表で一寸出會つたが、それから氣を廻したと見えるな。」

「アントスが、深切に私に話してくれたのが何が惡いんです。泥棒をする者が惡いか、泥棒を敎へてくれたものが惡いか、どつちです。アントスは泥棒を教へて呉れた人ですよ、そして泥棒をしたものはあなたです。」

と、クサンチツペはもう羊毛も何もほつたらかして、ソクラテスを睨め付けて云つた。この上激昂させれば飛びかゝつて來てむしりつくか、近所八方へ聞える樣な大聲を上げて、罵り喚くかに決つてゐる。それは、ソクラテスも前々の經驗から知つてゐるのだ。然し、泥棒とまで罵られては、一本氣の彼は、默つてはゐられなかつた。それに先程も何事か、アントスに告げて、自分を牢屋へぶち込んでやると迄罵るのを聞いては、いましめずに置く事は、後日の爲、却つて危險の樣にも思はれ

た。いづれにせよ、アントスを家庭へ入れる事は禁物だと思つた。

「泥棒などゝ、人聞きの悪い事を云ふものではない、私が若し泥棒だとなれば、お前は泥棒の妻である。子供達は泥棒の子供となるのだ。それを思つたら、さういふ極端な罵倒はするものでない。第一お前自身の爲にも不名譽な事になるぢやないか。」

「不名譽でも事實なら仕方がない」

「事實であつてさへも、妻とし又夫として云ふべき事ではない、まして、事實でも何でもない、ほんの言葉爭ひの機から出たものなのだから、尙更だ。だがこんな事は、議論するにも當らないが、アントスと云ふ男はお前も、もう、近づけてはいかんよ。あれは俺達の政敵クレオンと近頃非常に親しくなつてゐる。あれにお前が接近する事は非常に危險だ、どんな事を初めるか分らない。」

「あなたの敵かも知れませんが、アントスは私には敵ではありません。」

「私の敵ならお前にも敵ぢやないか。兎に角、お前はどうも私の敵になる樣な奴等を好んで、私の親友を皆悪く云ふが、困つたものだ」

クサンチッペは嘲笑つて、

「だつて、あなたのお友達は皆、悪い人達なんですもの。」

「馬鹿な、ペリクリースがアゼンスで最も大人物である位な事は、どんなバカにも分りさうなものだなあ。そして、フィディアスは最も善良で、ユーリピディースは、最も高潔な人物で、プラトーは最も賢明、アルシビヤデスは最も天才的、プロタゴラスは最も鋭利である事位は誰からでも許されてゐる」

「へえ、御尤づくしなのね。でも、私にはそんな事は道理だとは思はれないわ。それからアリストフアネースは?」

「あいつは、私の仇敵だ。何だか私の事を、喜劇に書いたとか云ふ評判だ。」

「さうですよ、私もアントスから聞きました。あなたも見ていらしつたでせう」

と、面白さうにクサンチッペは笑つた。先刻の不機嫌はその喜劇の事を想ひ出したので、何時しかとれてしまつたのらし

い。ソクラテスの方が今度は佛頂面をして吐き出すやうに言つた。

「昨日『雲』を見たが馬鹿々々しいものだ。」

クサンチッペは、ます〱笑つて、

「大變面白い相ぢやありませんか。よく出來てゐますね。あなたの非常識で我儘で、押しが强くつて、そのくせ間拔けなところが隨分よく、素破拔かれてゐますわね。」

ソクラテスはます〱いやな顏をして、

「私を諷刺した心算のものが、指的が外れてゐる。あゝいふ誠意のない作者は味方にしても頼母しくなし、敵にしても、穢らはしいだけだ。」

七

走馬燈のやうに世の中は變つて行つた。政治家のペリクリースは既に死んだ。アゼンスの平民政治家、煽動政治家等が内訌してゐる間に、軍國主義のスパルタが俄に攻めかゝつて、アゼンスは陷つた。久しくギリシヤの盟主であつた。アゼンスの榮華に、技巧、昔の夢となつた。プロタゴラスに國外に放逐された。フィディアスは、反對派の爲に誣ひられて、投獄せられ、牢屋の中で殺された。アリストフアネースは、喜劇の上場を禁じられた。ユーリピディースは、招かれてマケドニヤへ行く事になつた。そしてソクラテスは一人寂しく取り殘された。彼は今は後家さんであるアスパシヤの許へでも行つて、ヘミクリオンに坐して語り明した友人等の昔噺をするより外はなかつた。彼は足繁く通つた。もう、アスパシヤもかなり婆樣となつてゐた。

ソクラテスは

「先刻ユーリピディースと道で會つて、お別れをしたのですが彼も、いよ〱故鄕から別れてマケドニヤへ行くさうです」

アスパシヤは寂しさうに笑つて、

「長生をして、私達は、衰亡の跡を、あさ〱する樣見ましたのね。そして今の僭主等は、市民を殺すばかりですもの」

「それが、あの人達の職業です」

「それでも、私は不安になるでせう」

「セラミカスの[illegible]の中では」

「私は死にたくはありません。唯平安に生きてゐたいと思ひますわ」

「奥さん、生活は平安ではありません」

「えゝ、でも、幸福でしたら」

「その幸福と云ふ事が、むづかしい事です」

「えゝ、本當にあなたの様な不仕合せな結婚をなさいますとね」

　ソクラテスは歎息して、

「上には上がある。下には下があります。けれど、先づ〳〵私の妻などは、最も悪いところなのでせうね。あの人も、若し外の夫を持つたものなら、もうとつくに、殺すか、殺されるかしてゐますよ。なにしろ悪人と云ふのではありませんけれど、喧嘩好きと云ふ事がその血の中に流れてゐるのです。あの人の兄弟や親も兎角、人と争ひを好む性格です。無論美點もないのではないのですがね、喧嘩の相手にさへなつてやりさへすりや、毎日でも、喧嘩をしますよ。夫とでも、親族とでも、近所の人とでも、そして家事の事からでも、子供の教育の事からでも、自分の衣服の事からでも、娯楽の事からでも、嫉妬の事からでも、すべての方法に喧嘩の材料を求めてゐるものです。」

「かう云ふ時代になれば、全く奥さんが口をおつゝしみにならないと、あなたの身の上が危い様に思はれます。」

「えゝ、もうその懸念がないでもないです。あの女は、私を悪く云ふ事によつて、自分が正しいものとされる様に思ひ込んでゐるのです。世界を私と二人きりの世界の様に考へて、何でもかんでも私を負かしさへすれば、自分が世界の女王になれるとでも考へてゐるらしいのです。」

「随分、あなたを誤解してゐらつしやるやうですのね」

「誤解して悪く云ふ場合もあり、悪く云ふ爲に悪く云ふ場合もあり、いろ〳〵です。別れるにも子供があり、まあ不仕合せな結婚とでも云ふのでせうね」

「あなたの社會的位置と云ふものも、あなたの名譽と云ふものも、奥さんはちつとも考へてゐらつしやらないやうですのね」

「さうです。唯本能的に生きてるだけです。夫の社會的位置などゝ云ふものは、全く眼中にないのです。」

「然し、外に男を拵へて、主人の顔へ泥を塗ると云ふ人さへありますからね、それを思へば……」

「ですけれど、嫉妬深い事は、決して、貞女の證據にはなりません。却つて、浮氣な女の方が、自分の身に較べて、夫の操行を疑ふものです。」

## 八

彫刻師ソクラテスは、青年の間に危險思想を鼓吹して、國家の神々を冒瀆すると云ふ罪名のもとに、牢屋へ入れられた。その告發の中に、青年詩人、メリトス。鞣職人アントス及び雄辯家ライコンの名が見えた。

ソクラテスはそれに對して一通りの辯護をした。彼は常に神を信じ、良心の聲を聞いてゐたと云つた。けれども彼は、鴆毒を飲むべく宣告せられて牢に置かれた。細君のクサンチツペは、許されて、牢に會ひに來た。そしてさめ〴〵と泣いた。その時にソクラテスは何時もと少しも變つた樣子もなく平然として語つた。

「泣くな、これはお前の罪ではない」

さう云はれて細君はます〳〵泣いた。

「いゝえ〳〵、私の過でございます。それから子供も連れて參りませうか」

「いや〳〵、無用な暇乞ひなどして、あの軟い子供の心に、痛ましい、傷をつけるには當らない。裏の森へ遊びに連れ出して、面白く遊ばせてやつてくれ」

「あなたが死なうと云ふ時に、私達ばかり、樂んでいゝものでせうか」

「よろしい、私の苦痛が終る事を喜んでくれ。私が名譽の最期を遂げる事を喜んでくれ」

「もう何も望みはございませんか。」

「もうない、唯、お前の悲しい涙と溜息と、騒がしい罵から免かれて、平和を得ると云ふ事の外には何も望んではゐない。もう歸れ。ソクラテスは疲れてゐるから暫く眠りを求めてゐる。たが又再び活々した、幸福な、若やいだ心持になつて、彼の魂は目さめるだらう。さう思ふがいゝ」

「私はもう前に、何遍もその事は、あなたから教はりました」

「うむ、さうか。俺もお前から隨分學んだよ、忍耐と、克己心とを」

「私を宥して下さいますか」

「今更、宥す事は出來ない。もうすでに一度宥してしまつたのだから。私が旅に出ると思つて、さよなら……と云つて呉れ、だが、私がまた、直に歸つて來ると思つて、またお目にかゝりませうと云つてくれ。」

「では、さよなら、私の事はもう怒らないで下さい」

「怒るものか、私は一度もお前に對して心から怒つた事はないよ」

「では、あなた、これがもうお別れです」

と、クサンチツペは聲を上げて泣いた。ソクラテスは手を振つて、

「あゝこれ〳〵、泣くのではない。機嫌よく笑つて、御機嫌ようと云つてくれ」

「ご――き――げん――よ――う」

「よし〳〵、ではまた會ふな。さうして一緒に子供等を連れて森へ遊びに行かうよ」

クサンチツペはその時しみ〴〵後悔して云つた。

「あゝ、私は見損つてゐました。私の夫は、私が前に考へてゐた樣な人でなかつたのでした」

「もう行きなさい、私は眠りたい」

クサンチツペは出て行く時、戸口で、プラトーとクリトーとに出會つた。

ソクラテスは彼等を見て、懶さうに云つた。

「もう時間が來る。早く此方へお這入り」

「先生、そんなに平氣でゐられるのですか」

「眞實の事を云へば、私は全く平氣だ。私は嬉しいとは云はない。然し、私の良心は少しも私を煩はさない」

「先生、最期の時が……」

「最期の時が來ればと云ふのか?、我が愛する友、プラトーよ、私は今丁度、一眠りした。私は川の向側へ行つて來た、私は暫時、不滅の美の原形を見た。それに較べれば、地上のものは總て、その模寫に過ぎない……。私は人類の未來、運命を

見た。私は、力強く、高く、純潔なるものと語つた。私はこの世の大なる混沌を導くところの、賢き秩序を知つた。私は宇宙の底ひ知られぬ秘密の前に、おのゝいた。そして私は、自分の大いなる無智を耻ぢた。プラトーよ、お前は私が見て來たものを書いてくれ。お前は物の適當なる價値に於て、物を評價する樣に、畏敬の念を以つて、目に見えぬものを仰ぎ見、美を尊び、德を養ひ、そして克己、獻身の心を實踐窮行する事によつて、最期の救ひを望むべく、世の人の子等に教へなさい。」

こう云ひ終つてソクラテスは、褥の上に横たはつた。

「先生、おかげんが惡いですか」

と、額の廣いプラトーが聞いた。

「いや／＼、今はどこも惡くはない。」

プラトーは師の顏を覗き込むやうにして、

「先生は最早――」

「うむ、毒盃を仰いだ」

「世の最も賢い人が、今この世を去る」

「人間は誰も賢くはない、唯私はへりくだりと、良心とを私に與へた神々に感謝する」

牢の中には何の音もしなかつた。

ソクラテスは死んだ。

（完）





# 幡随院長兵衛

新居　格

　夜ふけて通るは何者ぞ加賀爪甲斐か
　泥棒か、さては坂部の三十か

こうした落書がそこここの塀や壁に書かれてあつた位寛永の頃には加賀爪甲斐守や坂部三十郎、水野十郎左衛門、近藤登之助なぞ云ふあばれものの手合が旗本の武士にはあつて道行く人に故意にわざと衝き當つては喧嘩をしたり、手向ふものがあると切捨てたりした。神祇組、白柄組、四谷六法組、公方の尻押組其他何々が彼等の徒黨の名であつた。が、そうした旗本の狂暴に張合ふ町奴と云ふのが一方にはあつた。そうして幡随院長兵衛は町奴の頭目として旗本武士から憎悪の瞳を投げかけられて居たのであつた。

その對峙は木挽町の芝居小屋での喧嘩となり、吉原仲之町での出遭ひにあらはれ、町奴の贔屓する櫻井五郎蔵と旗本庇護の黒鷲勘太夫との相撲一件でますます宿恨を深かめて行つたのである。

或日の午前十時頃、一人の馬に乗つた旗本武士が長兵衛の家を訪ねて水野十郎左衛門が近付きを得たいから明日屋敷に來て貰ひたいと傳えた。長兵衛はいよいよカタストロヒーが來たなと心の中では思つたが、さりとて男を賣る身として卑怯にもことわる事が出來ないので快く承諾した。所が、同じ日の夜ふけに仲間を伴れた六十近かい武士がまたも長兵衛の家の門扉を敲いた。それは等しく水野家の用人で曾野重兵衛だと名乗つた。

長兵衛は懇ろに座敷に招して來意を訊くとどう思つたのか重兵衛は立ち上がつていきなり長兵衛を上座に据え、脇差を鞘ぐ

るみ彼の前に投げ出すと共に頭を疊にすりつけける計りにしてこう云ふのである。

「さて元締、今朝の使で大方、樣子もお察しでせう。相撲の遺恨で元締を明日お招き申し大勢の手を借りてあなたを討たうと云ふ主人の魂膽。それを知つて私は主人に意見を致しましたが更にお聞入れにはなりません。それにお親類の近藤樣や鋏松樣は諫めて下さるどころか一緒になつてお遣りになゝうと云ふ量見。私は御先代の仰付けで主人の御幼少から今日まで始終お側について居りましたし、御先代がお病死にも不束な私を枕元に呼寄せられての呉々の御頼み、悴は短氣で事を逸まる。重兵衛お前は側に居て悴に心得違ひがあつたなら遠慮なく意見をして呉れろ。水野の家名は悴には遣らぬ。お前に預けるとの御遺言かしこまりました、重兵衛及ばずながら身に代えてお引受致しますと申上げたのでお座います。所が、子を見ること親に若かずと申す通り、主人の御氣象はあの通り、でも家來の御手討位なら内輪でも濟みませうが明日、元締をお招きしてお一命を絕つたと云ふ事にでもなりますと子分衆お江戸市中にどれ丈あるか分らぬ元締、それが頭立つた人達のお指圖で水野の屋敷に切込んで血で血を洗ふやうになりますとたとひ主人は其時は助かつても切腹は必定、次第によれば安城以來の水野家の家名が斷絕いたします。それでは私が御先代にも濟まない譯、夜中にお邪魔を致しましたは元締の義俠を見込んでの御願ひです。こゝの道理を聞分けられ水野の家名を不憫に思召してどうか一時の間、江戸表を立退いて居ては下さるまいか、そのうちに主人の怒りも自然に薄らぎ萬事がまるく納まりませう。元締のお氣象として一旦男が約束をしたからには水火も辭しない、行かなければならないとお思召すのもお無理ではございませんが、どうあつても行くと仰言るなら何卒かこの場で重兵衛の首を門出の血祭にして頂きたい」

長兵衛はこの老いたる用人が主家を思ふて涙ながらした長物語に誠意の輝きを見て心がほだされない譯にはゆかなかつた。そして卑怯だと笑らうなら笑つてもいゝ。自分は一先づその誠意を受け入れるより外はないと考えた。「よろしうございます。萬年生きるも三つ兒で死ぬも持つて生れた定業と明日は水野屋

のお屋敷で元より生命は捨てる覺悟と決めては居ましたが、何ぼわからぬ長兵衛でも事を分けてのお頼みをそれでも嫌だとは申し兼ねます。なあに、私が默つて笑はれて居さえすりや、それで濟む事、長兵衛しかと引受けました」

「それを承つて辛つと安堵が出來ました」

こう云つて重兵衛は心を明るくして歸つて行つた。

翌日、長兵衛は唐犬權兵衛、夢の市兵衛を初め頭立つた人達を招き事の成行を話し留守中の萬事を頼んだ。そして家重代の彦四郎貞宗の一刀を差し半合羽、菅の笠と云ふ旅裝をして海道筋の各所〳〵を樂みながら大阪へ行く事にしたのである。

大阪へ來た長兵衛は不圖した事の行き違ひから、土地の俠客朝日奈藤兵衛と果し合ひを初めたが、百年目長兵衛の仲裁で丸るく納まり却つて藤兵衛と親密な間柄となつた計りか、小喧嘩五郎吉、帆柱の伊之助、伊達の小六なぞと云ふ土地の親分株とも直ぐ懇意になり、そうした顔役達の世話で道頓堀河岸の九郎右衛門町に小體張した家を借りることになつた。

そして土地の俠客たちは毎日のやうに訪ねて來たり大阪の名所〳〵を案内したり雨の降る日なぞは賑やかな酒宴をして他郷に居る長兵衛の旅情を慰めて呉れるのを長兵衛は心から感謝して暮らしてゐた。時には大和巡りをして奈良や三笠山の風光に親しんだり、播磨路の方面へ出掛けては須磨や明石の海景を賞したりして氣散しな悠揚たる生活を過ごす事も出來た。

或日、長兵衛が九郎右エ門町の寓居で江戸の事取分け、自分の留守中は間違ひのないやうに輕擧を戒しめて置いたが、巧く遣つて居て呉れるかしら、なぞと考へつゝあつた時朝日奈藤兵衛が訪ねて來た。

「ねえ、江戸の兄貴、今日は兄貴に相談があつてやつて來たんだ。實はとつくから話そうと思つて居たんだ。話と云ふは外でもねえ。兄貴もこうして當分の間にしろこちらに居なさるからにや野郎計りぢや兎角お世話が行屆くめえ。それについてあの梅野だ、がとくから兄貴を慕つて居て江戸の親分〳〵と俺等にそれとなく謎をかける、あの女なら器量はよしそれに氣立も優

るみ彼の前に投げ出すと共に頭を疊にすりつけける計りにしてこう云ふのである。

「さて元締、今朝の使で大方、様子もお察しでせう。相撲の遺恨で元締を明日お招き申し大勢の手を借りてあなたを討たうと云ふ主人の魂膽。それを知つて私は主人に意見を致しましたが更にお聞入れにはなりません。それにお親類の近藤様や兼松様は諫めて下さるどころか一緒になつてお遣りにならうと云ふ量見。私は御先代の仰付けで主人の御幼少から今日まで始終お側について居りましたし、御先代がお病死にも不束な私を枕元に呼寄せられての呉々の御頼み、悴は短氣で事を逸まる。重兵衞お前は側に居て悴に心得違ひがあつたなら遠慮なく意見をして呉れろ。水野の家名は悴には遣らぬ。お前に預けるとの御遺言かしこまりました、重兵衞及ばずながら身に代えてお引受致しますと申上げたのでお座います。所が、子を見ること親に若かずと申す通り、主人の御氣象はあの通り、でも家來の御手討位なら内輪でも濟みませうが明日、元締をお招きしてお一命を絶つたと云ふ事にでもなりますと子分衆が江戸市中にどれ丈あるか分らぬ元締、それが頭立つた人達のお指圖で水野の屋敷にし込んで血で血を洗ふやうになりますとたとひ主人は其時は助かつても切腹は必定、次第によれば安城以來の水野家の家名が斷絶いたします。それでは私が御先代にも濟まない譯、夜中にお邪魔を致しましたは元締の義侠を見込んでの御願ひです。こゝの道理を聞分けられ水野の家名を不愍に思召してどうか一時の間、江戸表を立退いて居ては下さるまいか、そのうちに主人の怒りも自然に薄らぎ萬事がまるく納まりませう。元締のお氣象として一旦男が約束をしたからには水火も辭しない、行かなければならないとお思付すのもお無理ではございませんが、どうあつても行くと仰言るなら何卒(どう)かこの場で重兵衞の首を門出の血祭にして頂きたい」

長兵衞はこの老いたる用人が主家を思ふて涙ながらした長物語に誠意の輝きを見て心がほだされない譯にはゆかなかつた。そして卑怯だと笑らうなら笑つてもいゝ。自分は一先づその誠意を受け入れるより外はないと考えた。「よろしうございます。萬に生きるも三つ見で死ぬも持つて生れた定業と明日は水野様

のお屋敷で元より生命は捨てる覺悟と決めては居ましたが、何ぼわからぬ長兵衞でも事を分けてのお頼みをそれでも嫌だとは申し兼ねます。なあに、私が黙つて笑はれて居さえすりや、それで濟む事、長兵衞しかと引受けました」

「それを承つて辛つと安堵が出來ました」

こう云つて重兵衞は心を明るくして歸つて行つた。

翌日、長兵衞は唐犬權兵衞、夢の市兵衞を初め頭立つた人達を招き事の成行を話し留守中の萬事を頼んだ。そして家重代の彦四郎貞宗の一刀を差し半合羽、管の笠と云ふ旅装をして海道筋の各所〱を樂みながら大阪へ行く事にしたのである。

大阪へ來た長兵衞は不圖した事の行き違ひから、土地の俠客朝日奈藤兵衞と果し合ひを初めたが、百年目長兵衞の仲裁で丸るく納まり却つて藤兵衞と親密な間柄となつた計りか、小喧嘩五郎吉、帆柱の伊之助、伊達の小六なぞと云ふ土地の親分株とも直ぐ懇意になり、そうした顔役達の世話で道頓堀河岸の九郎右衞門町に小屋張した家を借りることになつた。

そして土地の俠客たちは毎日のやうに訪ねて來たり大阪の名所〱を案内したり雨の降る日なぞは賑やかな酒宴をして他郷に居る長兵衞の旅情を慰めて吳れるのを長兵衞は心から感謝して暮らしてゐた。時には大和巡りをして奈良や三笠山の風光に親しんだり、播磨路の方面へ出掛けては須磨や明石の海景を賞したりして氣散しな悠揚たる生活を過ごす事も出來た。

或日、長兵衞が九郎右工門町の寓居で江戸の事取分け、自分の留守中は間違ひのないやうに輕擧を戒しめて置いたが、巧く遣つて居て吳れるかしら、なぞと考えつゝあつた時朝日奈藤兵衞が訪ねて來た。

「ねえ、江戸の兄貴、今日は兄貴に相談があつてやつて來たんだ。實はとつくから話そうと思つて居たんだ。話と云ふは外でもねえ。兄貴もこうして當分の間にしろこちらに居なさるからにや野郎計りぢや兎角お世話が行屆くめえ。それについてあの梅野だ、がとくから兄貴を慕つて居て江戸の親分〱と俺等にそれとなく謎をかける、あの女なら器量はよしそれに[illegible]

しく親切だから兄貴の側へ置いてやつて面倒を見させてやつちや呉れないか」「そうさなあ、俺ぁこうし「皆さんが暇さえありや來て呉れてるし萬事に行屆いたお世話になつて居るのだから…藤兵衛どん、こんたの親切は有難いが別に梅野さんを……」「そうでもあらうが一時なりと兄貴の側に居てお世話をさせて貰らいてえ心から思ふ梅野の心根を察してやつちや呉れまいか」

長兵衛はそれでも情なくことわることは出來かねた。朝日奈との果し合ひが百年目の仲裁で仲直りもし兄弟分の盃も酌み交はしたが其頃聘ばれて來てゐた大勢の藝者の中ですつきりして居て色白で、顔なら姿なら一際目立つた梅野の美しい幻影は長兵衛の心に妙に絡はつて來るのを否定は出來なかつた。幡随院門前の口入稼業伊勢屋清兵衛の後を引受けて大名屋敷に出入りをするやうになつてから元のお主人櫻井庄右衛門殿の御贔屓もあつたにせよ、随分と忙がしい生活のうちに世間に顔が賣れ出すと兎角氣づかいは多過ぎた。法華長兵衛との喧嘩は益々長兵衛の噂を高めて行くと共に法華の身内の彫物の小平、石切の中七が乾分の杯を貰らひに來たり町奴として我も許し知られた唐犬權兵衛、夢の市郎兵衛、金神の長五郎、放駒四郎兵衛と云つた手合までが身内になつた。

大名屋敷に出入する稼業から備前岡山池田の家臣渡邊靫負を殺害して逃亡した河合又五郎が旗本屋敷にかくまわれて居ることを池田の家老池田式部殿が舊知の長五郎にお頼みになり、長兵衛の身内が旗本阿部四郎五郎の屋敷に居ることを探知して報告した所から大名を悪む旗本は同時にそのスパイのやうに看做して、長兵衛一派を悪むのも當然であることは幡随院長兵衛も知つてゐた。それから町奴と旗本が事毎に衝突せねばならぬ事となつたので長兵衛の配下は益々休みなきものとなつて行つた。彼の若き日は戀愛を空しくして過ごして來たと云ふ物足らなさがこうして大阪へ來て今迄にないのんびりした生活を享受するやうになつて三十五を過ぎた中年期に目覚める機會が與えられたのではないか、まして梅野は一度から二度、三度から四度と座敷へ呼ぶ度毎に長兵衛の浪俠の印象に深かめられこそすれ消えらない事實を見逃がすことに出來なかつた。大部の

熱はいくらかさめて行くにしも、それは一時の沈靜でこの後とも旗本との衝突は、この長兵衛の生き永らへてゐる間消えない計りか早晩再演される運命にあることは明かである。さすれば大阪滯在中はしばし目睡む甘美の夢として、自分に惠まれた又とない幸福ではあるまいか、こうした考えが電光よりも疾やく長兵衛の心を掠すめて行つた。

　藤兵衛の親切を辭退はしてみようとするのは本當は間違つてゐるのかも知れない。そうだ、それは慥かに間違つてゐると決心が出來たとき、彼は明るい氣持を感じながら云つた。

「それぢや、梅野の事は萬事こんたの御心任せに致しやせう」

　梅野がお座敷に出るを止して九郎右衛門町の長兵衛の住家に意氣な姿を見せたのはそれから多く日數を經てはゐなかつた。

　長兵衛の家には毎日のやうに大勢が遊びに來て江戸の話を聽いたり、浮世譚を仕合つたらするので、長兵衛は龍宮に行つた浦島太郎のやうに面白可笑しい日が送れたのである。

　春宵のまどろみは醒まされねばならなかつた。或る日のこと、丁度、朝比奈藤兵衛、帆柱の伊之助、喧嘩屋の五郎吉なぞが、例のやうに九郎右衛門町の家に集つて酒を酌交しながら、長兵衛を圍んで談笑して居た時、思ひがけずも施崎の小平がその玄關に姿を見せた。それは元締代理として長兵衛の留守居をして居た、杖の仁兵衛が飯田町に圍つてある妾お文の處から夜ふけての歸り路、俎橋の所へ來ると黑頭巾で覆面した水野組家來廿人計りに待伏せられて鮪のやうに慘殺されたと云ふ凶報を齎らしたのである。小平が一伍一什を話し終つた後に皆んなは直ぐにも水野の屋敷へ切り込まうと云つたのだが、阪本の夢の兄哥が相手の逃げる譯ではなし、大阪に居る親分の許へ早速知らせなきあならないと云ふのでこうしてわつちが遣つて參りましたと譯を話すのであつた。「それぢや斯うして居られない そんなら小平一緒に江戸に歸るとしやう」

　と長兵衛は云つた。居合はす面々もそのいきさつを聞いて是非江戸に同道したいと申出たが長兵衛はそれを斷つ、ていよいよ大阪に出立することとなり在阪中、交際つてゐた人達には少し面倒な用が起つて一度歸らねばならなくなつた、逗留中はい

ろ〳〵お厄介になりましたと其日のうち暇乞ひして、夜小平をつれて家に歸つたが梅野の事を思ふとさすがに見果てぬ夢を思ひ出さずには居られなかつた。けれども長兵衛は決心した。「旗本の連中はしつこくも自分の生命を欲しがるのだ。二つの階級は妥協の餘地のあるべきでない事を知つた。殘されたものは階級戰の開始のみだ。」とこう思つた。暴力に對する暴力の倫理を長兵衛は肯定しない譯には行かなかつた。水野の用人管野重兵衛が涙ながらの懇願故、一旦江戸を立退いては見たがそうした姑息の手段が少しも役立つものでない事がハツキリと分つて來た。もう敢然として驀進するより外はないのだ。疾くから生命は捨てる覺悟でゐたのだから、自分の生命は旗本の前に投捨てやう、しかしそうした生命が決して無駄にはならない事をも確信が出來るのであつた。いや、自分が死ぬるによつて町奴の階級意識は更に〳〵に深かめられやう。このことは水野の家が潰れる機縁を造るのであらねばならぬ。で、こうした感情を抱いた長兵衛は江戸に歸ると直ぐその由を唐犬を初め身内の人々に知らせたので彼等は何れも長兵衛の屋敷に集まつた。

一同が揃つたと思つた時彼は口を開いた。

「時に、長兵衛の留守中は唐犬を初め一同の骨折で稼業の方も滯りなくやつて呉れたことに對して御禮を云ふ。枝の仁兵衛の出來事も小平から詳しく聞いたがもうこの俺もこれ以上に我慢は出來ない。水野の屋敷に斬込む事にしやう」とキツパリした決意ある聲明をした。

一同は喜んだ。今迄割合に無抵抗主義を執つてゐた兵衛の事だから、何とか異見をするか若しかすると叱言でも云やしないかと迄思つてゐた一同の想像外に出て敢然として火蓋を切らうと斷言したのであるから、血氣の一同が小踊りする程喜んだのも無理はなかつた。

長兵衛は更に言葉を續けた。

「それにしちやお互にこれまで八百八町に顏を賣つて來た俠客だ。水野の屋敷を始めとして諸方の旗本屋敷へ斬込むと云ふからにや思ひ〳〵の支度ぢや氣がきかねえ、愈々切込むのは明後日の夜としてそれ迄に揃いの着物をこさえやう。其の揃衣も何うせ後へ殘る物、後で町奴が旗本屋敷へ斬込んだ時こうした文

度をしてゐたと人に笑はれたくはねえから、揃衣萬端はこの俺に任せて呉れ、俺はそうと大丸へ往つて見計つて大急ぎに誂えて來ようから」と一同に申渡した。そして明日の晩は最後の晩餐、明後日には斬込むとして明日の夕方來て貰いたい。俺は二三の友達に他所ながらの暇乞やら、歸つて來た禮廻りを今夜のうちにしやうと思ふと云ふので「尤もだ、それぢや何事も明日の晩と」その日はそれ〲家に歸つて行つた。

一同が歸つて行くと長兵衛は支度を直し貞宗の一刀を帶してこつそり外出した。それは丸の内に屋敷のある本多中務太夫の家來で同時に長兵衛の恩人である櫻井庄右衛門を訪ねるためであつた。

長兵衛は先代庄右衛門のために十二才の春、宇多川町の八百屋久兵衛の所から屋敷に引取られて同年生れの當主幼名庄太郎と一緒に可愛がれて養はれたのであつた。常平と云ふ名の下に仲間のやうになつて居たが、十六才の時から庄太郎に附いて白山御殿下れ道場のある石川軍刀齋巖流先生の許に通つたものであつた。後に口入稼業をやるやうになつても先代庄右衛門からどれ丈取持をされたかは長兵衛の感謝して居た所である。が當主は當主で何しろ同じ生れの十二の年から兄弟のやうに親しんで來た庄太郎、長兵衛が何處よりも眞先きに櫻井屋敷へ訪づれたのは當然であつた。

長兵衛の來訪を聞いた庄右衛門は心から喜んで云つた。

「おゝ、長兵衛歸つたか、長らく江戸表を立退いて上方へ行つて居たと云ふが、上方よりは何と云つても江戸に限ぎる、何うか江戸で花を咲かしてゐて貰ひたいものだ」

「有難うお坐います。何しろ永らくお無沙汰勝で居りました。やつと歸つて參りましたが、又遠國へ出かけなくちやなりません。で、密談があつて伺ひました」

庄右衛門は意外の言葉に只事でないと察し、近侍を遠ざけて長兵衛のみと對坐することにした。

「遠國とは中國か九州か‥」

「えゝずつと先きでございます。西方は西方です十萬億土の冥途の道に」

「何と申す、冥途へ行く……」
「はい、それでお暇乞に参つたのでございます」
こうして長兵衛は事の成行を詳しく物語るのである。

庄右衛門は兄弟のやうに思ふて居る長兵衛の悲痛な運命に胸を打たれた。そして若い頃黄昏の灯に親しんで吉原は仲之町三浦屋の花魁高窓大夫と馴染を重ねお互ひに惚れ合つた青春の美しい回想が急に蘇生つて来たと共にあの時、法華長兵衛に難題を持ちかけられて困惑してゐたのを救ふて呉れたのは幡随院兄貴、自分こそ長兵衛に恩があることを思ふた。これが最後の夜となるのかと思ふと、夜を徹してあくまで物語らねばならないと考えたのであつた。

「只今、酒の用意をさせるから盃を挙げて今宵は終夜話し明そう」
「私もそう存じまして家を出ました。では緩くりさせて頂きませう」

酒はあれど兄弟にしめやかになり勝になり、初夏の夜は明け易すかつた。

朝——最後の朝の太陽は鮮やかに晴れた空に輝やい[illegible]な朝風は若葉の上をさら〳〵と流れてゐた。

三十六年の生涯は短かいと云えば短かいかも知れないが、何時までぐうだらに生きてた所で詰らない。いま、犠牲になつて氣充満ちた壮年時代を玉と砕くのは男の中の男一匹、と人に立てられた長兵衛に取つて決して惜いものではないのだ。それ計りかこの一個の長兵衛の存在が長らくの間水野を初め旗本の一團の目の上の瘤となつたかと思ふてむしろ痛快な氣持がした。
「天地は新緑に燃えて居る。躑躅のやうな鮮紅の血を流すのにはいゝ時だ」と彼は思つた。

そこで庄右衛門が盃を遣はすと云つて手渡した冷水の満々とした水盃を氣持よく飲み、庄右衛門から秘蔵の水田國重の一刀を貰ひ受け甲斐〳〵しくいでたちして街に出た。先づ水野の用人管野直兵衛を訪ねて約束の取消を申出で。そこでも別れの盃をして午前十時水野の屋敷の玄関に立つた。そして
「お頼みします」
と案内を乞ふたのである。

（終り）



# 火つけ彦七

伊藤野枝

一

今から廿年ばかり前に、北九州の或村はづれに一人の年老つた乞食が、行き倒れてゐました。風雨に曝され垢にまみれたその皮膚は無氣味な、ひからびた色をして、肉が落ちてとがり切つた骨を覆ふてゐました。砂ぼこりにまみれたその白髮の蓬々としたひたいの下の奥の方に氣味の惡い眼がギョロリと光つてゐました。

行き倒れの傍を取り卷いた子供達はその氣味の惡い眼光に出遭ふと皆んな散り／＼に逃げてしまひました。が、子供達が、その日暮方の暫くの明るさの中を外で遊んでゐますと、其處にさつきの乞食が、長い竹杖にすがつてよろ／＼しながら歩いて來たのでした。子供等は、また氣味惡さうに一と處によりそつて乞食を通しましたが、やがてそのよぼ／＼した後姿を見ると、ぞろ／＼後へついてゆきました。

乞食は、村にはいつて街道を少し行くと左側にある森の中にはいつてゆきました。其處は此の村の鎭守なのです。子供等は其處までついてゆきますと、木立の暗いのと乞食が再び後をふり向いた恐ろしさに、一目散に逃げてかへりました。

次ぎの日、子供達は昨日の乞食の事などは忘れて、お宮の前の廣場で遊ばうとしていつものやうに、その森の中にはいつてゆきました。すると昨日の乞食がお宮の石段に腰を下ろしてそのやせた膝を抱いて白髮の下から例の氣味の惡い眼を光らして子供達を睨み据えました。子供等は思ひがけない邪魔にびつくりして外の遊び場所をさがすために、お宮から逃げ出しました。

しかし、夕方になると、彼れ等はあの乞食の事を忘れられませんでした。其處で皆んなは、若しも恐い事があつて、逃げるときに、逃げ後れるものがないやうに、めい／＼の帶をしつかりつかみあつて、お宮の森をのぞきに出かけました。

今度子供達の眼にまつさきに見えたのは、お宮の森で一番大きな楠の古木の根本に盛んに燃えてゐる火でした。そしてその

次ぎに見えたのは、その眞赤な火の色がうつつて何んとも云へない物凄い顏をしたあの乞食でした。

『ワツ！

子供達は今日は何うしたのか悲鳴をあげてめい／＼につかまへられてゐる帶際の友達の手を振りもぎつて、馳け出して來ました。

丁度、其處を通り合はせたのは、村の巡査でした。子供達が眞靑になつて、逃げ後れたのは泣きながらお宮を飛び出して來たので、巡査はいそいで、お宮にはいつて行つたのです。子供達は巡査がはいつて行くと、しばらく通りに一とかたまりになつて立つてゐましたが。やがて巡査が、お宮の隣の家の裏で働いてゐる男に聲をかけるのを聞きました。

『おうい、爲さん！水を持つて來てくれ、桶に一杯！』

巡査はさうどなりながら、爲さんの家の方へ近づいてゆきました。爲さんが水桶をさげてお宮にゆくのを見ると子供等はまたゾロ／＼暗くなつたお宮の境内にいつてゆきました。

『證もろくにきかん癖にから火を燃いて、あぶなくつて仕樣がない。』

などゝ、二人は話しながらシユウ／＼と音をさせて、火に水を注いで消しました。

『斯んな乞食は何をするか知れたもんぢやありませんよ、追つぱらつてしまひませう。爲さんは口を尖らして巡査を煽動します。

『何に、俺もさう思つたが、まるでグタ／＼で、動かないんだ、今からおつぱらつてもどうせ何處までも行きやしないから、今夜は勘辨しておいて、明日の朝追立てる事にしよう。』

巡査は仕方がなささうに笑ひながら、爲さんと一緒に引きかへしました。子供等もゾロ／＼家へかへりました。

其の晩、此の邊には滅多にあつた事もない火事がありました。老人達は二十年目だとか二十五年目だとか云つてさはぎました。火を出したのは、村の眞中頃にある雜物屋で、台所から火が出たらしいのです。大きな藁屋根ですから一とたまりもなく燒け落ち、その並びに隣り合つて建つてゐる三軒がまたゝく間に燒けてしまつたのです。そして四軒目に火がうつつたときに、やつと消防手の手で消されたのでした。

しかし、珍らしい火事沙汰で、その夜から翌日まで、村中がひつくり返るやうな騷ぎだつたのです。そして翌晩はさはぎつかれて皆んな寢てしまひました。

すると、續いて又、昨晩の火事の場所から一町半ばかり東よ

りの村で、一番賑かな通りにある居酒屋と隣りの床屋とが、同時に燒け出しました。

『火事だつ!』

バタ〳〵騷ぐので、起き出した方々の家ではびつくりしてしまつたのです。火事が大變だと云ふ事よりも昨夜と今夜が、まづ皆を驚かしたのです。今度は二軒とあと兩方にわかれて一軒づゝ燒けました。そして、その火が消えかけた時に、その火事場の向ふ裏にある百姓屋の納屋がどん〳〵燃えてゐたのです。

明かに放火だと云ふ事は分りました。しかし、あまり思ひがけない火事に、村の老人等は色を失つてしまつたのもあります。

翌朝、町の警察から五六人も巡査が來るやら、何かえらさうな人達が火事跡に來てウロ〳〵見まはつたりして、村中が何となく殺氣だつて來ました。

『つけ火だ、つけ火だ、』

と皆んな云ひながら、犯人の見當はまるでつかないのでした。巡査や刑事達は村人の誰彼を捉へてはいろんな事を尋ねました。しかしさうなると、皆んな自分の云つた言葉の結果がどんな事になるかしれないと云ふ、不安と恐怖で、だれも、巡査達とはか〳〵しい口をきく事はなかつたのでした。

二晩つゞけての火事におびえた村では、冬だけにする火の番をはじめました。そして二時間位に一度づゝ村中を見まはる事にしました。

## 二

三晩は何事もなくすぎました。村人達は、時はづれの火の番が馬鹿々々しくなつて來ました。

『二た晩つゞけて火事があつたからつて急に火の番をしたつて、さう幾度もつけ火をする奴もないだらうから、何だかつけた奴が見ると馬鹿氣てるに違ひないと俺は思ふよ。』

『さうさ、さうまたつゞけて燒かれてたまるものかい。』

四晩目にはそんな不平がましい口をきゝながらほんのお役目に通りを一とまはりして來たのだ。

處がどうでせう!彼等が、西の端の番小屋に歸つて一服してゐますと、急に騷々しくなつて來ました。番の人達がびつくりして外に出て見ますと、たつた今、自分達の見て來たばかりの、東の方に火の手が高くあがつて盛んに火の子を降らしてゐるのです。

『アーッ』

と云ふなり一人の老人は腰をぬかしてしまひました。

他の人々が、騷ぎ出して大勢で馳けつけた時には、燒けた床

屋の丁度向ふにある小さな駄菓子屋が燒けてゐるのでした。

しかし、此度は夜明前に、此の村を騒がせた放火の犯人はつかまつたのです。丁度其の夜、隣り村から或る家の不幸を知らせに村へ來た二人連れの人達が、村にはいらぬうちに火の手が見えるので、急いで來かゝる途中、村はづれの共同墓地の邊に來ると、影のような人間が、向ふから來かゝつたが、自分等の姿を見ると、急いで墓場の中へはいつた、と云ふ話をしたのです。集まつた消防手連中が早速墓場へ馳けつけて、さがして見たのですが一向分りませんでした。

東が白んで來る時分に、さがしあぐねた連中が、ボツ〳〵歸りかけて、フト氣がついたのは、墓場のそばの共同の葬式道具を入れておく小屋でした。

二三人で其の戸を引きあけて見ますと、案の定其處に痩せさばらつた一人の男がうづくまつてゐたのです。彼等はそれを見つけるとカツとなつて、ろくに腰もたゝないまゝの老爺を往來まで引きずり出して來ました。そして皆んなで顔を覗いて見ましたが、それは見知らない、汚い乞食でした。

彼れ等は、一度はガツカリしましたものゝ思ひ起して此の乞食を引き立てゝ來ました。そして其の乞食の姿を見た巡査はツカ〳〵傍によつて行きました。もううすら明るくなつてゐでしたが、さしつけられた提灯のあかりにその乞食の顔がハツキリ照らし出されました。彼れは三四日前に村にはいつて來た乞食でありました。

其頃になつて、その乞食が、三回に渉る放火犯人だと云ふ事と同時に、此の男や、其の生活を十分に驚かし得るような事の内容が、村の人達の間に傳はりました。

此の乞食は、此村の片隅にある特殊部落の××原と云ふ處に生れた彦七と云ふ男でした。彼は、其の生れた處からは何十年と云ふ間行衛不明になつてゐたのでした。それで、其の村でも彦七の家と關係のあるものか、年老連中でなければ彦七を記憶してゐる者はない位なのでした。

彼れの生れた部落でも、或時は、彼れがすばらしい金持になつて或る處に豪奢な暮らしをしてゐるのだ、と傳はり、或時は彼れは博徒の中にはいつて、すばらしい喧嘩をして監獄に行つてゐると傳はりました。しかし實際どうなつてゐるか確かな事は分らなかつたのです。

處が、三十年と云ふ長い月日が經つてから人々に忘れられた時、彼れは見る影もない乞食姿になつて瀕死の體を故郷に還

び、さうして放火犯人として捕へられたのでした。しかも彼れは、放火犯として、前科二犯も持つてゐる放火狂なのでした。しかもなを彼れは、息の根が絶えるまでは、此の火をもつての呪ひを止めないと云つてゐると云ふのです。

## 三

『穢多ん坊！穢多ん坊！』

彦七は小さい時からさう云つて村の子供等から、自分等部落の者が卑しめられるのが心外で仕方がありませんでした。

自分達には何處と云つてちがつてゐる處もなければ、村の奴等の世話になつて生きてゐる譯でもないのに、何故村の奴等は俺達を馬鹿にするのだらう、口惜しいな、と始終考へつめてゐました。そして彼れは其の友達と何時もその事ばかり話してゐました。

だん／＼大きくなるにつれて、彦七はさうして村人達に卑しめられるのが、譯もなく口惜しく、馬鹿々々しいと云ふ氣持がます／＼激しくなつて來ました。さうして、遂に或る時、自分の家をぬけ出して、城下町に行きました。其處でなら、誰にも卑しめられずに、愉快に働く事が出來るにちがひないと考へたからでした。

處が彼れは、町に一人の知るべもありませんので、仕事もなか／＼見つかりません。彼れは二三日足を棒にして仕事をさがしまはりましたが、奉公人を置きたいと云ふ家でも、誰れか、知人か親類の者でも一緒に頼まなければ、使はないと云ふのです。

それでも、數日してから、町はづれの瓦燒き場の火を燃す仕事にありつけました。其のとき、彼れは十六でした。生れてはじめて、彼れは其のときに普通の人間として他の職人達と交際が出來たのです。

彦七は、それは可なり激しい勞働だつたのですが一生懸命に働きました。彼れは湯にも他の人間と一緒にはいり、食事も一緒にし、他のどの人間とも區別なく、枕を並べて眠りました。彦七が自分の部落で話しに聞いたり見たりしたように、人間としては到底忍べないような侮辱を受ける事はありませんでした。彼れは村を出るときに考へたとほりに氣持よく一年ばかりを働くことが出來たのでした。

或る日、彦七は若い職人の一人に誘はれてお祭りを見に町の方へ出かけてゆきました。二人が、もう少しで、お祭りの雑踏の中にはいらうと云ふ處で二三人の若い男が向ふから來て、彦七の顔を見て何か頷き合ふと、一ぺんすれちがつたのを、またわざ／＼引きかへして、彦七のそばをすりぬけて前へ出るとそ

の中の一人が、彼れを呼びかけました。

『こら！彦七！誰も知つてるものがないと思つて、いやに生意氣な面をしてゐるな。穢多の分際で、あんまり大巾にこんな處を押しまはすと承知しないぞ。こんな處、貴樣みたいな畜生がウロ〳〵する處ぢやないや。』

彦七は自分の名前を呼ばれた時に、ハッとしました。その連れは、自分もよく顏を知つてゐる村の者達で、やはりその町に奉公に來てゐる連中でした。

穢多畜生、と云ふ言葉を聞くと彼れはカッとしてしまひました。彼れは物をも云はずにその連れに打つてかゝりました。相手はびつくりして身を引きましたが、然し彼れが自分等に反抗して來るのだと知ると彼等も一とかたまりになつて、彦七に立ち向いました。彦七は、何時の間にかぬいて手に持つた下駄で、相手の横ッ面を手ひどく打ちました。

『アッ』

相手が其處に手を當てゝ身をそらすと一緒にまたもう一と打ち續けて打たうとした時に彼れは足を拂はれて横ざまに倒れました。と同時に群中の、彼方も此方も用捨なくこぶしが當てられ下駄に踏みにぢられるのでした。彼れは、彼れ等を取り卷く群集のさはぐのを耳にしながら口惜し涙をながしてゐるのでした。そして彼れは起き上ると、砂まみれ、血まみれになつた顏を引きつらせて群集の中を突き拔けて、一刻も早く町外れの瓦屋の方へ歸つて行かうとしました。彼れが、漸くその家の近くまで行つた時に、まだ彼れを追つかけて來た一團がありました。

『かりにも友達が貴樣のやうな穢多に疵つけられたのを其儘にして置くことが出來るものか。』

彼れ等は、さう云つてよろ〳〵してゐる彼れをまた〳〵散々になぐり飛ばし、蹴とばして、彼れが虫の息になるまでいぢめぬいて引き上げて行きました。

彦七は這ふ事も出來ないで、瓦屋近くの藪のそばで、一と晩呻きとほしてゐたのでした。

あくる朝、近所の人がその慘めな姿を見つけて瓦屋へ知らせました。しかし瓦屋では彼れの穢多であることを知つたので、もう親切に扱はうとはしませんでした。昨日までは仲よくしてくれた二三人の職人が、一枚のムシロをもつて來て、何か汚い者をいぢるやうに、彦七の體をムシロの上にころがしのせて、三人でそのムシロを引きずつて、瓦屋の裏口の納屋の軒に置きつぱなしにして仕事場にはいつてしまひました。

彦七は、昨日までの友達が一と言も慰さめてもくれず、水一

杯持つて來てくれないのを恨むよりは、死にかけた犬つころのように納屋の前の大地に敷いたムシロの上にころがされた自分の身が情なさに、また新しい涙をボロ／＼と流しました。穢多と云ふものは斯んな犬猫のやうな扱ひをするのを他の者共は當り前にしてゐるのだ。俺が、あの部落にさへ生れて來なかつたら、昨夜のような目に遇ふ事もなし、またこんな扱ひを受ける事もないのだ。何故俺はあんな村に生れたのだ？だがあの村に何の因縁があれば、其處で生れた者が迫害されねばならないのだ。………、彦七はガン／＼鳴る頭の中で繰り返し繰り返しそんな事を考へてゐるのでした。

## 四

さうした慘めな彦七の體を、七月頃の暑い陽が、遠慮なく照りつけて、一層彦七の苦惱を增さすのでした。納屋の前を折々通りかゝる人達はみんな、其處にころがされてゐる彦七を汚いものでも見るように横目で睨んで通りながら『ペッ』と唾を吐いたり、わざわざ近づいて、その醜く腫れ上つた汚い顏を嘲り氣味に覗き込んでゆくばかりで誰一人聲をかけるものもないのでした。

彼れは耻と怒りでそのたびに體をピク／＼させながら、何うかしてこんな處からのがれようと思ひました。けれども彼れは昨夜から咽喉がピリ／＼する程かはいてゐるのに水のある處まで行くことはおろか、少し動かしてもたまらない程いたむ體をもてあつかつてその、のどかはきの苦しみと體のいたさとを我慢しなければならなかつたのです。

しかしひる頃になりますと、彦七はもう我慢がなりませんでした。

『死んでもいゝ、死んでもいゝから、こんな處は出かけよう。そして村へかへるのだ。そうして、今に見ろ、何かで仇うちをしないでおくものか。此の耻と苦しみをこれから出來るだけ貴樣達に脊負はしてやるぞ。』

彼れは、非常な決心で、その體を少しづつ起しました。しかし、起した體は激しい痛みの爲めに直ぐくづをれるようにべたりと落ちるのでした。それでも彼れは恐ろしい我慢でとう／＼起ちました。そうして、彼れは一足々々にこたへる痛さを堪える爲めに全精力を集中させたように物凄い上づつた眼を据えてソロ／＼と歩き出しました。

納屋の前から四五間歩きますと、井戸は右の方にまた五六間行つた處にあるのです。彦七は井戸端まで眞直に歩いて行きました。廣い瓦干場にも誰も人の影は見えませんでした。井戸端まで辿りつきますと、彦七はホッとして、痛む手をさしのべ

て、其處に据えた水がめにつけたひしやくをかはき切つた脣につけやうとした時でした。

『まあ汚い！お前なんかの脣つけられてたまるものかい。』

癇狂な聲を出して臺所から下女が飛び出して來て、其の太い手で、彦七の手からひしやくをもぎとりました。彦七の體は怒りの爲めにブル／＼震えました。彼れはそのカサ／＼にひからびた脣を嚙んで燃えるやうな眼で下女の眞赤にふくらんだ顔を睨みつけました。

『おう恐い。そんな眼をして、化けて出られちや大變だから、水くらいならタントおあがんなさいだ！ホラ、あすこにお前さんのお茶碗がありますからさ、あれでどつさりおあがんなさい！』

彼女は臺所の入口の敷居際の土の上に棄ててある、昨日まで彼れが使つた茶碗やお椀を指さして、憎々しくさう云ふと、此度は臺所のまどから顔を出してゐるもう一人の朋輩と顔を見合はせて笑ひながら、

『穢多ごろつてものは執念ぶかいつてから恨まれると大變だ。おむすびでも施してやるかねお松さん。』

『ふゝゝゝ』

彼れは棄てられた茶碗をぢつと見ました。こみ上げて來る涙をのみ込みながら脣をふるはせて、そろり／＼そのそばに行きました。そして生ぬるいかめの中の日向水を息もつかずに、續け樣に五六杯も飲んだのでした。

今の今まで、責めさいなんでゐた渇きが癒やされると、彦七はがつかりして其處に倒れようとしました。しかし、ボーツとしかけた意識を漸く取り直して、自分が一年間寢泊りした囚人の爲めの長屋の方に歩いて行きました。

彦七が漸々其の長屋の前まで歩いて來ました時に後ろから牢屋の隱居が聲をかけました。

『彦七、ひどい目に遇つたさうだな。まあそれもお前が先きに手を出すと云ふ法はないのだから仕方がない。家でも、お前の體が不自由なのを見かけて云ふようで濟まんが、お前の身分を知らなかつたからこそ、今日まで使つたようなものゝ分つて見れば、皆と一緒に置くわけにも行かず、殊にお前の仕事は火を焚くことで、これは一番清浄な者のやらねばならん仕事だし、體が動くなら、今日限りで家へ歸つて貰ひたい。昨日まで預りになつてゐる分の金は此處に置くから――』

隱居は自分の云ひたい事だけさつさと云つて、手に渡してやるのもけがらはしいと云ふやうに、持つてゐた紙包を入口の敷居の上に乘せて母屋の方に引き返して行つてしまひました。

彦七はその敷居の上の金包をぢつと見つめて立つてゐました。そしてその眼を屋内にやりますと、僅かばかしの彼れの持物が、職人等の下駄を片よせた土間の隅に放り出してあつたのです。

彼れは復讐心に燃えながら疵ついた體を故里に運びました。彼れの兩親や兄弟は彼れを大事にいたはつてやりました。彼れは引つつれたやうな顏をして、長い間ぢつとこれから先きの自分の生活を撰んでゐました。そして何んの罪もない自分を、死ぬ目に遇はした世間の奴等の仇になつて、どうすれば一番彼れ等を苦しめる事が出來るかを一生懸命に考へました。

やがて、健康の回復した彼れは、驚くばかりに働き出しました。彼れは一體あまり口數をきかぬ人間でしたが、それが輪をかけただまりやになつてしまひました。そして、一日中或は一年中のどの時間でも無駄に過ごす時間と云つてはありませんでした。

彦七の家は部落でも暮らし向きはいゝ方で六七反の田畑はみんな自分のものなのでした。彦七は兩親や兄弟をたすけて、激しい百姓仕事を二人前も働きました。そしてひま／＼にはわらじをつくる草履をつくる、繩をなふその外、何にかぎらず、金になる仕事ならば何んでもしたのです。盆だ正月だと、他人の休む日でも、彼れは一時間も怠けませんでした。たゞ默々として働きました。

## 五

彼れが廿歳の秋の收穫がすむと直ぐ、彼れは、兩親の家の傍に小さな掘立小屋を自分ひとりの手で建てました。それは普通の農家の馬小屋よりも小さく、見苦しいものでした。彼れはだまつてそれを建てて、だまつて自分ひとりだけ、其の大地の上に並べた板の上に蒲團を敷いて寢ました。勿論食事も自分ひとりでしました。他の家の者よりも、彼れ一家の者が此のだんまりの仕事に先づ驚きました。

いろいろな質問や反對に對しても彼はたゞ默つてゐました。部落では、彼れの變へだと云ふ事をば知つてゐますので、別に驚きはしませんでしたが、親の家を離れて一戸を構へたものが當然しなければならない、部落の交際を彼れが斷つたのに對しては非常な批難がありました。しかし、そんな事には耳も傾けずに、彼れは平氣で、どんな慣習でも禮儀でも容赦なく無視して、たゞ働くのに夢中でした。

たつた一つ、彼れの樂しみらしいのは、何處から連れて來たのか、一匹の小さな犬でした。彼れは、此の犬を少しも放した事はありませんでした。犬と一緒にだけ食べ、犬と一緒に寢、

そして犬と一緒に話し、犬と一緒に歩くのでした。

晝間は彼れ自分の借りた田に出て働くか、山に枯枝を集めにゆくか、畑に出るか、とにかくうすら明るくなつた早朝から眞暗に暮れてしまふまで外で働いてゐます。そして夜になつて晩飯をすますと、土器の中に少しばかりの種油を注いで細い燈心をかきたてながら、たゞ手許だけがボンヤリする位な明るさの中で、藁をうつて草履やわらじや、繩をつくるのでした。そして彼れは手をせはしなく動かしながら、何かボツ／＼一緒にうづくまつてゐる犬に話しかけてゐるのでした。

彦七が、どの位金を溜めたらうと云ふ事は部落中のものが始終氣にして話し合ふ事でした。しかし、誰れも見當のつくものはゐませんでした。

彼れは殆んど三人前の働きをして、その利益をみんなおさめてゐたのです。そして彼の食物は玄米でした。彼れは調味料として僅かばかりな鹽を父親の家から分けて貰つてゐました。畑のものもろくに彼れは口に入れてはゐない樣子でした。彼れは、決して自分で買物に出かけないのでした。そして他人に賴んで買つて貰ふのは僅かばかりの種油と燈心だけでした。

彼れは夜になると蒲團にはいつて寢ましたが晝間はどんな場合でも汚くよごれた仕事着を着てゐました。何年かの間盆が來ようが正月が來ようがそれで通しました。彼方此方から祝儀が出ても平氣なものでした。其處で、母親や兄弟が見兼ねて、別のものを着せると云ふ風にして、これにも金はかゝらないのでした。

かうして、彼れは四年間獨居生活をした後に或る夜其の住居を引き拂つたのです。彼れの姿は犬と共に見えなくなつてしまひました。

彼れの第一期の生活がそれでおしまひになつたのです。彼れに復讐心をあほつた町に、再び彼れは姿を現はしたのでした。

彦七は先づ一軒の家を借りました。そして彼れは家主に、自分が少々金を持つてゐる事を話して、それを貸し付けたいのだから、困つてゐる人があれば、世話をしてよこしてくれと賴んだのでした。賴まれた家主の爺さんは、若いのだか年老りだか分らないやうな干からびた貧相な顏をした此の男が金貸しをしたといふのを怪しむように、だまつて彦七の顏を見てゐました。

彦七は爺さんに賴んだだけでなく、いろいろな方法で、自分の商賣の廣告をしました。世間には僅かな金で困つてゐる人は隨分多いのですから、勿論彦七が金貸をしたいなどゝ云ふ本當

の眞意を知つてゐるものはありませんし、彦七の商賣は忽ちの間に繁盛しました。

それから彦七がどんな事をしたかは、讀者の想像にまかせます。彼れは世間の人間を出來るだけいぢめる爲めに金貸しをはじめたのですから、世間の非道な、たゞ金に目がくらんでする金貸の慘忍よりはもつと／＼ひどい慘忍を平氣で重ねました。そして一方には金をふやしてます／＼魔の手をのばすと同時に世間の人間を泣かせて思ふ存分樂しんでゐたのです。

勿論、彼れは十年十五年とするうちには、ずいぶんひどい迫害にも幾度も遇つたのですが、そんな事には決して屈しなかつたのです。金をつかんでゐれば、どんな者にもまける心配はないと云ふのが、彼れの築き上げた信條でありました。

## 六

彼れから金を借りた悲慘な貧乏人のうちで殊に悲慘な一家がありました。それはつい彼れの住んでゐる隣り町の鍛冶屋でした。鍛冶屋と云つても、その男は田舍の百姓の農具に用ひてゐる金物をつくる鍛冶屋の向ふ槌を振るより他に藝のない、殊に働きのない鍛冶屋でした。その代りに又、彼等夫婦は誰にも憎まれる事のない好人物なのでした。彼れ等の間には十一になる男の子と九つになる女の子二人の子供がありました。鍛冶屋の細い働きは到底此の二人の子供と女房を安穩に養つて行く樣にはゆかないのでした。其處で女房は一寸した洗濯物をしたり、彼方此方の使ひあるきをしたりして、暮しを助けてゐたのです。

此の一家の一番大切な役目をつけとめてゐる女房が或る時突然大熱を患つてしまひました。鍛冶屋は心配して、因業な奴とは聞いて知つてゐたのですが、彦七から多圓ばかりの金を借りて、女房の療治につとめました。そして、女房は漸々快方に向いて來ましたが。借りた金は、返すどころの沙汰ではなく、少々の利息もなか／＼拂へないやうになつて來ました。

約束の期限が切れると、カタのやうに彦七は矢の催促をはじめました。最初の間は尋常に手をついてあやまつてゐました鍛冶屋も、イロ／＼彦七が慘忍な金貸の態度を見せはじめますと、もう我慢が出來なくなつて、三度に一度は彦七の云ひ分に楯をつくようになつたのです。

處が、或る夕方鍛冶屋は仕事がへりの往來で、バッタリ彦七に出會ひました。

『オイ、寅さん、お前さんは一體何時あの方の埒をあけてくれるつもりだい。もう期限が切れてから一と月あまりになるのに、利子も鐚々拂つてくれないぢや、俺の方も商買だからな、

困るよ。僅か三圓かそこいらの金ぢやないか』

彦七はいきなり高聲に催促をはじめたのでした。鍛冶屋はムツとしたのでせうがそれでも下手に出て。

『それや、云はれなくつてもわかつてるがね、何しろ其の日稼の事だから、お前さんはたつた三圓と云ふけれど、此方にやなか／＼大變さ。もう少しまあ待つてお與んなさい。何んとか工夫するから。』

『工夫／＼つて此の間からお前さんはさういつてゐるけれど、工夫ぢやおつつかないよう』

『まあさ彦七さん、此處は往來ぢやないか。私も今仕事のかへりでくたびれてる。云ふ事があるなら、あとでうちへ出掛けて來たらどんなものだい、往來のまん中で、高聲で借金の催促はあんまり見つともない。』

『へん、見つともなきやお前さん、他人から金なぞ借りないがいゝや。此方は貸した金を返して貰はなくちやならんのだ。往來中で催促してはならんといふ理窟はないしさ。貧乏のくせに贅澤な事いひなさんな。催促されるのがいやなら、借りないが第一だ。借りたらさつさと返すがいゝや。』

『まあ何を云はれても仕方がないけれど、さうしたもんぢやないよ。まあ何にしろ往來では催促は御免を蒙むるよ。』

鍛冶屋はムシヤクシヤするのをおさへてさう云ひ放したまゝ行きかけました。

『これ／＼寅さん。さうお前さんの勝手にゆくものか。俺はさう閑人ぢやないから丁度此處で會つたが幸ひだから何んとか返事をして貰はう。何？家へ來ない？いけないよ。家へ來いとは何んだ。本來ならお前の方から出て來てこれ／＼だと斷るのがあたりまへなんぢやないか。それを何だつて！家へ來いだ？此處で埒をあけて貰ふのだよ。僅か三圓ばかりの金ぢやないか。逃げずと男らしく埒をつけな。』

彦七は憎々しく云ひつのりました。これが平生それ程借金を苦にしない貧乏人ならそれ程でもありますまいが、生憎と鍛冶屋は、これまで貧乏はしてゐても、借金をした事のない男ですから、氣にかゝて仕方がない處を往來で耻かしめたのだから堪りません。をとなしいけれど一徹な鍛冶屋はすつかり逆上してまひました。

『もう分つた！こん畜生！貴樣のような因業な奴は斯うしてやるんだ！』

彼れは夢中になつて、丁度持ち合はせてゐた大きなヤツトコでいきなり彼の頭をなぐりつけました。

彦七の横びんから夥だしい血が噴き出すのとその體が倒れる

のと殆んど一緒でした。鍛冶屋は夢中になつてヤツトコを振り上げて倒れた彦七の上にのつかゝりました。が直ぐに傍の見物人に抱きとめられました。そして初めて我に返つた鍛冶屋は其處に倒れてゐる彦七の顔を流れてゐる血を見ると、呆然として大地に座り込んでしまつたのでした。

鍛冶屋はそのまゝ歸りませんでした。彼れは警察の拘留場から監獄に放りこまれてしまつたのです。

半月ばかりすると、まだ繃帶をしたまゝ凄い顔をした彦七が、近所の人達にいたはられながら漸く其の日々々と悲しみながら暮らしてゐる鍛冶屋の家にはいつて來ました。彼れは、女房の嘆願には耳もかさず、何日も眼ぼしい物のない家の中をかきまはした後で子供達二人が縮こまつて眠つてゐる蒲團をヘギとつて子供達を疊の上にころがし、臺所のかまどから釜を持つて出てゆきました。

此の無情の仕打に、泣きぢやくる二人の子供を抱いて女房は齒ぎしりをして恨み泣いたのでした。そうして近所の女房が見兼ねて貸てくれた蒲團に子供達を寢かすと女房は自分の二人の兄弟に子供の行末を頼む書置きをして家を出て行つたのでした。

其の夜中過ぎ、彦七の家は三方から火をかけられて燃え上りました。彼れが目をさました時には、火はすつかりまはつてしまつてゐました。それでも、彼れは枕頭の手文庫をかゝへて走り出しましたが、入口でしたゝか足を拂はれて轉んだ拍子に、飛び出して來た人間にその文庫は奪はれてしまつたのでした。

彼が氣狂ひのやうになつて、その怪しい者の後を追はうとしました時には、文庫はもう火の中に投込まれてゐたのでした。鍛冶屋の女房は、とう〳〵彦七を素裸にしてしまつたのです。

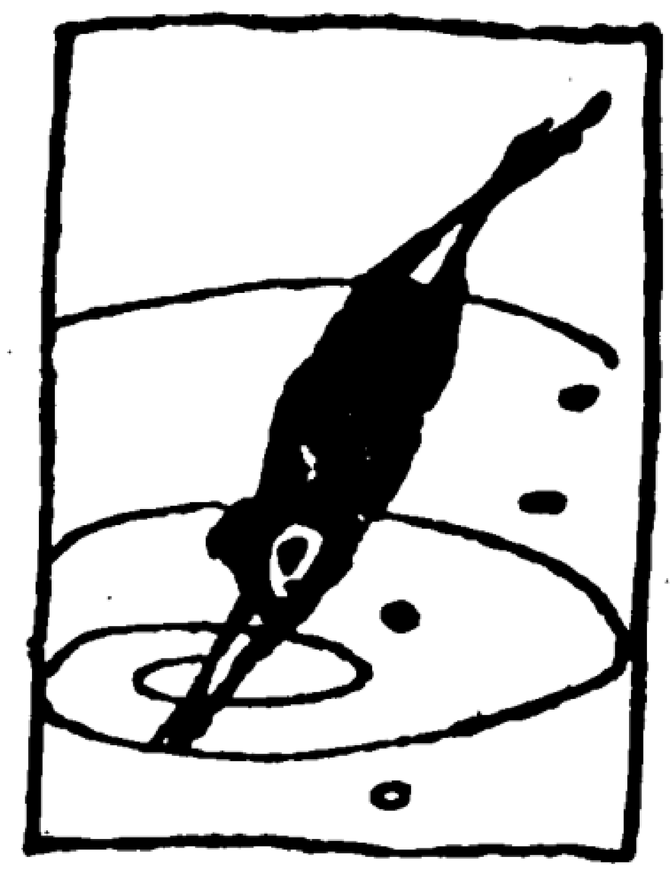
火は彦七の家から三軒目でとまりました。彦七は何一つ殘らぬ燒け跡に呆然と立つてその醜い顔を引きゆがめてゐました。

彼は火の爲めに、彼が命をけづるやうにして築き上げた彼の今までの生涯を跡かたなく失くしてしまつたのです。彼れは激しい落膽の爲めに、失神したやうになつて、二三日の間は、ただ燒けあとをうろ〳〵してゐたのです。

しかし、やがて、彼れの眼にあの盛んな何物をも一氣に燒きつくしてしまふ火焰が不斷にチラつくやうになりました。彼れは今までの金による復讐を、此度は魅力にとんだ火焔と取り換へました。そして、長い間、彼方此方を徘徊しながら、その呪ひを止めなかつたのです。

彼れが生れた村に歸つて來たのは、最後の思ひ出に、最初に彼れの呪ひ心を培つた土地に呪ひの火を逼はす爲めでした。


上高地。
明神池



# 豊田貢

馬場孤蝶

一

宗教といふものは、大抵前に存在して居た宗教を改作したり、補足したりしたものです。佛教もさうでありました。耶蘇教——即ち、猶太教もさうでありました。歐州諸國の耶蘇教の各宗派は殊にさうでありました。耶蘇教は偶像教で無いとか、多神教で無いなど丶云つて、耶蘇教の信者は威張つて居るのですが、歐洲の耶蘇教各派は、耶蘇教と耶蘇教移入り前にあつた古い宗教とが自然に結合して出來上がつたものでありますから、偶像崇拜的なところも、多神教的なところも、大分入つて居る譯であります。されば、後から出來た宗教が必らずしも、一番宜しいといふ譯のもので無いと共に、後から出來た宗派が必らずしも前々のものに劣つて居るとは云へ無い譯であります。更に又、面白い事には、後から出來た宗教の教理が必らずしも新しい合理的なものだといふ譯には參りません。まして、未だ宗派といふ程まで纏つて居らぬ信仰の如きに至りましては、前々の宗派の教理のうちの極く卑近なところばかりを集めて、專ら俗人の心に入り易いやうにしたものが少く無いのでありますが、さういふ點が反つて何だか新しい、深みのあるところのやうに思はれるとなどがありまして、所謂る知識階級のうちの心の修練の行きとゞいて居無い連中が、ふと其所へ迷ひ込んでしまつて、飛んだお利口になる例が少くない。中には又宗教道樂とでも云ふやうな人々がありまして、何か新しさうな宗派らしいものばかりをさがして歩いて居るやうなのがある。さういふ人々になると、何でも彼でも、後から出來たものであり

さへすれば、氣に入るのであつて、新しく出來る宗派をば片つぱしから渡り歩く。まるで、不人情な男がみずてんを取つかへ引きかへ買ふやうな風であります。さういふ風で、新しく出來た宗派といふやうなものには、存外流行的に信者が多く附くものであります。

然しながら、幾ら新しく出來た宗派だからといつて、その主宰者が不熱心では、信者の寄る譯のものでは無い。新しい宗派が繁昌しやうといふのには、その主唱者が熱狂的であることが、必要であります。所が、新たに宗派を編み出す者は大抵さういふ資格を具へるやうになるのであります。

一體何の道にしても、新しいことを考へだすのは、その道の素人が多い。發明だとか、改良だとかいふものは、存外學者の手にならぬことがある。これは、その道に深く入つて居ると、傳來の掟の有り難さが善く呑み込めるので、向ふ見ずに法外れの方へ踏み出すことができ無いからであります。宗教、宗派の場合も先づそれと同じ譯で、その宗教なり、宗派なりの傳來によく通じて居る人々は、無暗に改革とか、新派を開くとかいふ氣にはならぬ。また、古來からの大きい宗教になると、内外典の經文なども可なり澤山あり、それに關する書物も少く無いのであるから、それ等を十分に調べるのは、なかなかの仕事で、唯の熱狂的信仰だけではできることでは無い。で、宗門の大知識などゝいふやうな人々は――門閥その他の關係は別として――大抵は皆落着いた人々である。謂はゞ常識的な人々である。さういふ點で、お利口連は餘り寄りつか無い。いや、少くとも下級なお利口連は寄りつかない。

所が、古來の宗門に關する學問的素養の無い行者のやうな者だと、唯だ熱狂的な信仰で進むのがその生命であるのだし、また直きさうなれるのであるから、從つて、迷信的根據のもとに、新たな宗派を立てるといふやうな氣になり勝なものであります。

所で、お利口連や、宗教道樂の人々から見ると、さういふ熱狂的なところが有り難いのであつて、其所にすつかり引き附けられてしまうのであります。世の中は百千人といふ古い喩の如く、淺い物よりか、パッと派出やかな物が、世俗には氣に入る

のと同じ理であります。

所で、男と女とでは、何ちらが熱狂し易いでせうか。それは無論女です。耶蘇教の方で云ひ傳へられて居るマグダラのマリアなどは、定めし餘程熱狂的な信仰を持つて居た女であつたらうと想像せられます。佛蘭西のオルレアンの處女ジャンヌ・ダルクの如きも無論熱狂的信仰の女であつたのでありませう。彼の時代には、熱狂的な女行者のやうな者が多かつたやうに傳へられて居ります。我國に於ても、巫子のやうな者で隨分熱狂的な女は多かつたらうと考へられますが、明治になりましてからの、天理教の教祖と云はるゝみきといふ老女、大本教の教祖と稱せられる直といふ老女などは、明に熱狂的信仰の女であつたらしく思はれます。所謂る筆先といふやうなものが、正氣ではさう出來る譯はありません。此でも一つ申し上げて置かなければならんことは、女の熱狂的信仰は本氣なのが通例でありまして、大抵の場合、男の行者が時に虚の熱狂的信仰を裝ふやうなのとは、全く違ふといふ點であります。それで、女の行者の方が多く信者の信心を得ることができるのであります。

## 二

本題の豐田貢といふ老女が丁度さういふ女であつたと傳へられて居ります。

豐田貢が京都八坂上町に神殿を設けましたのは文政年中のことであります。肥前唐津の浪人水野軍記の弟子で、前身は、祇園の藝子であつたとも云ひますし、又、軍記の家へ時々雇れて働きに參つた八兵衛といふ者の妻でありましたが、夫の八兵衛がある時家出をして行衛知れずになつてから、軍記の弟子になり多少の學識を貯へ、軍記の歿後遂に右の八坂上町に、神殿を立て、稻荷大明神を祭つて、諸人の歸依を得る事に至つたといふ兩説があります。

前の説は、『大鹽の餘聞三津之白浪』といふ小説の作者の執つたもの、後の説の方は『今古實錄大鹽平八郎傳記』に載つて居るものであります。

それは何れであるか、唯今考證の方はありませんが、年はもう五十に近いのであつたに拘はらず、何處と無く垢拔のした、昔は嘸と思はれるやうな眼鼻立ちの調つた女であつたといふの

ですから、或は「大鹽の餘聞」の作者の說の方が正しいかも知れません。

何にしろ、さういふ少し凄い程眼鼻立ちの調つた、上品な好い年配の女が、出で立ちはといふと、白綾の重ね着に緋の袴を穿き、檜扇を持つて、神々しく飾り立てた神殿めいた座敷にキチンと坐つて、如何にも鷹揚に落着き拂つて、辯舌さはやかに應待するのでありますから、誰でも一寸と威かされずには居られません。吉凶の卜筮から、加持祈禱、何うせ常識でも判斷の付くやうなことまで卜ひにかけ、一寸とした精神作用で直つたり、有り來りの草根木皮で快くなるやうな輕い病氣まで、加持を賴み、祈禱を請うといふやうな者が多かつたのでありますから、卜ひの方は思案に餘つて居る無智な人々の相談相手になつてやるといふやうな親切ないき方でやり、加持祈禱の方は、勿體振つた神前の祈りをしてから神示と稱して何か處方のやうなものを敎へてやればよかつたのでありませう。勿論貢は、さうは意識せずに、總てさういふことは、神示によつてやつて居るやうに思つて居るやうに見えたのであります。

さア、直きに京中の評判は大變なものになりました。極く近邊の者は內心では、妬み心もあつて、貢のことを苦くは思は無かつたのですが、何にしろ、困るものなどに對しては、貢の家からはいろ〳〵と親切な世話が行きとゞくといふ風であつたのですから、表てだつて、惡くいふ譯に行きません。お利口連の取り沙汰は實にエライ騷ぎで盲の眼が明いたの、跛が起たなどは愚か死人が一祈禱で生き返つたなど〻、實際見たやうに觸れ廻る。從つて、本當の弟子といふやうなものも出來、自稱皆傳の弟子などゝいふものは幾何あるか分らん位にありました。そのうち大阪方面へも貢の名は鳴り響きまして、そちらにも大分信者が殖え、取り分け攝州西成郡川崎村の京屋傳助の母さよ、天滿龍田町播磨屋藤藏同居きぬなどは、貢の敎に深く歸依して、貢の敎の傳道者となつて、熱心に說き廻りました。

文政十年頃になると、貢の住居は最早立派な宗派の本部の觀をなすに至つて、月に幾度かの重立つた信者の定會日には、可なり身分のある町人や、浪人にしても生活の樂らしい帶刀の男などが寄り合ふのであるらしかつたのであります。

## 三

文政四年に大阪の東町奉行になつた高井山城守實德の知遇を得て、吟味方に擧げられた與力大鹽平八郎が、豐田貢に眼を着けだしたのは、正に此の時でありました、

その時分にはもう既に、後年物の見事に德川氏三百年の支配を破壞した勤王論が、勃興する氣運を表はしかけた時代でありました。高山彥九郎、林子平、蒲生君平、山縣大貳などの名が、當時の有識者の間には、餘程强い意味で記憶されて居ました。賴山陽の『日本外史』の起稿も大凡其の頃でありました。

やゝともすると、處士の集り來る傾のあつた京都に近い大阪の町奉行高井山城守は、老巧な有司だけに、さういふ處士横議の形勢の惡化し行くのを虞れて居ました。少くとも、當時の第三階級にまでさういふ反幕府的思想の波及するのは、防止し度いと思つたのです。

『學者が多少矯激な意見を吐くはせん方無いに致しても、馬[illegible]走卒までもが、恐れ氣も無く、柳營の權威をないがしろに致すやうになるのは、捨て置けん』

山城守はさういふ風に、思つて居ました。

高井實德は又、當時餘程形を纏めだして居た神道の宗教思想にも、餘程危險分子の含まれて居ることを認め無いでは居られませんでした。敬神の歸着點は自から皇祖の崇拜となり、それ窮極はやがて幕府の權威に對する服從の念に少からず動搖を及ぼすものだと看て取つたのであります。

山城守は更に又、當時の知識階級の一人として、且は又、牧民の職に在る者の責任上、當時の如き迷信の行はれ勝の世の中では、淫祠邪教と認め得べきものは、極力驅除し無ければならんと考へて居た。切支丹の教の如きは、勿論國禁のものであるから、これに歸依する者は嚴罰し無ければならんとは思つて居たのであるが、さういふ方の考は法を重んずるといふ方の、良吏としての考から出たものであつて、外教を忌むといふ念は、切支丹の存在が有るか無しになつて了まつた當時にあつては、單に因襲的な考になつて心の隅に殘つて居るのみで、山城守は、切支丹なるも單に淫祠の一つとして怖むやうな心持になつて居たのであつた。

さういふ奉行の心持を善く知つて居た大鹽平八郎は、八坂の老巫子豐田貢の教會に、監視の眼を向けた。

豐田貢の師匠と云ひ、或は貢の夫であつたとさへ云はれる水野軍記は、何うも所謂勤王的思想を持つて居た男のやうである。その教を受け傳へたといふ貢の宗門の根本思想は、何ういふものであらうか。貢は高が女のことであるから、それ程の感化力は無いにしても、宗門、信仰の力は人の心に染み入ることの深いものであるから、貢の傳へる教にして、若し反幕府的思想を明らさまに信者の心に吹き込むものであつたとしたら、決してさう輕視する譯には行かぬであらう。

貢の奉祭して居るといふ稲荷大明神なるものは、何であらうか。所謂神道の教理をば誇大に說くものであつて、幕府の權威を疑ふに至る道程をば信者にたどらすやうな性質のものなのであらうか。

此れまで、切支丹の信仰が、さま〴〵な日本の神の形を裝せられて、密に行はれて居た例は決して少く無い。貢の稲荷大明神が果してさういふ切支丹のデョウスの變形であるのだらうか。

平八郎は、山城守とは違つて、先年弓奉行となつて大阪に居た近藤重藏から此邊の話などをよく聞いて居たのであるから、外教の勢力をばもつと生きた問題として、可なり重大な響を生ずるものと考へて居た。

さうで無いにしても、貢の稲荷教なるものが、世間によくあるなみ〴〵の淫祠邪教的なものであつて、貢は唯漁利の目的でさういふ教を廣めて居るのであらうか。

理智の教を主とする陽明學の主唱者であつた大鹽平八郎はさういふ迷信によつて衆俗を蠱惑する者は決して捨て置けんと思つたのであります。

其所で、斷罪に關しては、何時も愼重な注意を拂ふのであつた大鹽は、部下の同心や、手先の中の最も心利たる者を豐田貢の門に入り込せて、十分に搜らせたのであるが、なみ〴〵の吟味方ならば、無理にこじつけて、貢を刑に處するであらうと思はれるやうな捉まへどころは無くは無いのであつたが、然し、積極的に動し難い證據といふのは一つも擧つて來て居無い。さ

ればと云つて、打ち捨てゝ置くべきかといふに、貢の教の精神には唯その儘にはして置け無いやうな何物かゞあることは、確に感じられた。法文の掟通りにしてしまうのが、公平であらうかそれとも精神的解釋から行つて、謂はゞ今日の行政的の斷罪をやつたものであらうか。

地下の一老婦の事ではあるが、決して輕々に處分すべきで無い事件であると思つた大鹽平八郎は、十分熟議を凝らした上でといふ考で或夜、奉行山城守の役宅へ行つた

山城守の役宅の書院で、主人と近々と向ひ合つて、大鹽平八郎は先づ部下が調べ上げて來た豐田貢に關する材料を悉く報告した。その報告を掻い抓んで云へば、豐田貢の祭つて居る稻荷大明神といふのは、土の神、即ち、國の神であるといふのであつて、人は食が無ければ生きて居られぬのであるが、その食の材料を産む土、即ち土地を支配するのが稻荷大明神であるのだと云つて居るといふのであつた。又、天候の順不順が穀物の收穫には大關係があるのだからして、穀物の出來高を左右することのできる稻荷大明神は又天を支配する力を持つて居るといふのであつた。更に又稻荷大明神は何の爲めに、天候を掌り、農産を支配するのかといふと、それは人間を生長させ、人間を繁榮させる爲めであるのだからして、稻荷大明神即ち人間を護る神である。であるから人間の病を醫する藥師、藥草の如きも勿論此の神の支配するところだと云ふのであつた。

貢の祭つて居る稻荷大明神は女體の神であつて、謂はば、日の大御神の權化であるやうに說かれて居るといふのであつて貢は信者に向つて、天に二神なく、地に二王無しといふことをよく云ふといふのであつた。大鹽の注目したのは、さういふ點ではあつたが、それに關する明確なる證據は摑むことがまだでき無かつた。それといふのは、信者のうちにいろ／＼の階級があつて、謂はば、初傳、中傳、奥傳といふやうな形になつて居る。本當の教理はその奥傳を受けた者で無くば知つて居無いらしいのであつたが、さういふ奥傳を受けた信者たちは、なか／＼用心深くつて、口數が少く、さういふ者どもからは、貢の稻荷教を罰するだけの確たる證據は得られ無いといふのであつた。

八坂の本部では、『邪神拂』といふ式を月に三度宛行ふことに

一（豈）　四　一（貢

なつて居る。それは新しい信者を合掌さして、坐らせて置いて、貢が例の緋の袴の出立ちで、檜扇を翳して、神前に現はれ、人間には各自邪心があつて、それが爲めに、人間の本心の鏡が曇らされて、神を見ることができ無い。だから、我宗門の信者とならうとする者は、先づ以つて、その邪心を拂は無ければならん、何れもは、心にまつはるさま〴〵な邪念、惡心を此所でよく考へ定める爲めに、一心に祈念を凝しなされいといふやうなことを、如何にも莊重な言葉附で、云つて聞かして、やがて、一齊に默禱を始めさする。そのうちに、信者のなかで熱病にでも罹つたやうにガタ〳〵慄えだし狂氣のやうになつて途方も無い懺悔の言葉を口走しるのもあり、甚しきは、自分の體には蛇の怨念が宿つて居ると云つて、蛇ののたくるやうに這ひ廻つたり、又、自分の心には狐が入つて居て自分を苦しめるのだと云つて、狐の如く飛び廻つたり、鳴き聲を出したりする者もあつて、その光景を見る者は、一見慄然とせさるを得無かつた。所で、さういふ點に就て、貢を詰るものがあるといふと、貢は平然として、あゝいふ風に、自分の心に蛇が宿つて居るの、狐が憑いて居るのと思ふのが、即ち邪心である。我が教には、一端さういふ邪心の存在を當人に口外させそれが邪心であることを次第に自ら認めさせ、それで澄み渡つた本心に至らせるのである。迷妄の雲をまことの神の道、まことの心の持ち主とならしめるには、いろ〳〵と方便のあるもので、隨分ともに愚しい、笑止な事も、苦々しい事も、耐へ忍ば無ければなるものでござるわよ、と答へるといふのであつた。

その外、熱鐵を掴むとか、刄を平氣で手で扱くとかいふやうなこともしたのであるが、此れも貢自身は、神を信じて、心を凝らせば、誰にもできることで、決して不思議なことでは無いと云つて居るといふのであつた。

で、大凡さういふやうな報告をしてから、平八郎は斯う云つたのであります。

『その外、夏の庭先へ雪を降らして見せたの、座敷を忽にして海に致したのといふやうな噂はあるのでござるが、貢自身は、聊でも物の道理の分かる者に問はれますると、人は自分の心の持ちやうで無い物までも見えるものでござる、自分に於ては、

まことの心を以つて、誠の神に仕へまつるのみで何の不思議をも致す譯ではござらぬ、信者どもはめい〳〵氣でさま〴〵なものを見るのでござると、一應は理に協つたことを申す由にござる。なれども、古來よりの由緒ある神佛とは事かはり、如何にも怪しげなる神を祭り、神社佛閣にもあらぬに、人を集めて、祈禱加持等を致すは、御法を恐れざる不屆きなる仕方ではござるものゝなべて宗門の始めと申すのは、先づあれ體のものゝやうにも存ぜられる。彼の老女が唯私慾の爲めにのみ、彼のやうなる敎を說いて居る體にも見えませぬ。一圖に御法の表によつてのみ斷じまするも如何ござらうか』

山城守も考へ込みながら『如何さまな、足下の遠慮もなさることぢやな。承はるところでは、怪しき節も少くは無いが、知らるゝ通り、神職、僧侶の行ひ、在家の者どもにはるかに劣る當世であつて見れば、その職に無き者にして敎を傳へるといふ箇條のみにて貫とやらを罰するも、聊苛酷の嫌もあらうな。なれども、その稻荷なるものゝ正體が心元無い確とした證左は握れんであらうか』

『御意のところ如何にも御尤。ではござるが、女體と申すが、切支丹の神像らしくも疑はるゝでござるが、これとても、實は、御國禁の邪敎もさま〴〵な形にて、皇國の敎と混り合うて居りまする有樣でござるによつて、貫の神像が一眼では怪しきものでござらんやうに見えるに致しても貫の敎が外來の邪敎に非ずと申す證左には相成らんでござらう』

『如何さまな。踏み込んで、神體を開き、正體を突き留めるは、いと易いことではあるが、その曉切支丹の像で無かつたと致したら、兎もあれ、衆人の渇仰致し居るものに對し、無體の取り扱ひを致したとやうに、衆庶に思はするも、有司としては好ましく無からうな。なれども貫の師であつたとか傳ふる水野軍記は、西國方の浪人ではある、柳營の權威を疑るやうなる言議を唱へた者のやうにも聞き込んで居る。その軍記の敎を受け傳へたる由であれば貫自身は無學の老女でも、決して油斷はなり難い。貫が人の心を本心に戾すなどゝ申して居るのが、存外に上を恐れぬ考に基いたものであるも知れ申さぬ』

『いや、恐れながら、柳營に對しまつり不屆な念を抱く者どもは、唯今では存外多く相成つて居りまするぞ』

『されば其所ぢや。此上、宗門類似のものによつて、此の際愚民を蠱惑し、煽動致す者があつては、その影響は重大ぢや』

さういふ風で山城守は、兎に角豊田貢の身分柄宗門を起さうとする行動は僭越至極であるのだから、其點で吟味を始めてみて其上で、所謂不屈な考がある宗門の教理の中に含まれて居る様であつたら、嚴刑に處したら宜しいでは無いかと主張した。

平八郎は、此の吟味は餘まり氣が乘ら無かつたけれども、自分を十分信任して呉れた長官たる高井山城守の熱心に主張することであつたので、遂に決心して、八坂の邸へ捕吏をやつて、豊田貢を捕へて、大阪へ護送して來て、奉行所で吟味を始めたのでありますが、この老女貢は、僞の世間有り觸れの巫子では無かつた。大鹽平八郎が極めて峻嚴な吟味方であることを聞き知つて居て、もうすつかり覺悟をきめて、殉教者になる決心をしたものと見えまして、少しも悪びれたところ無く、白洲に坐して、悠然として、自分の信仰を陳述しました。

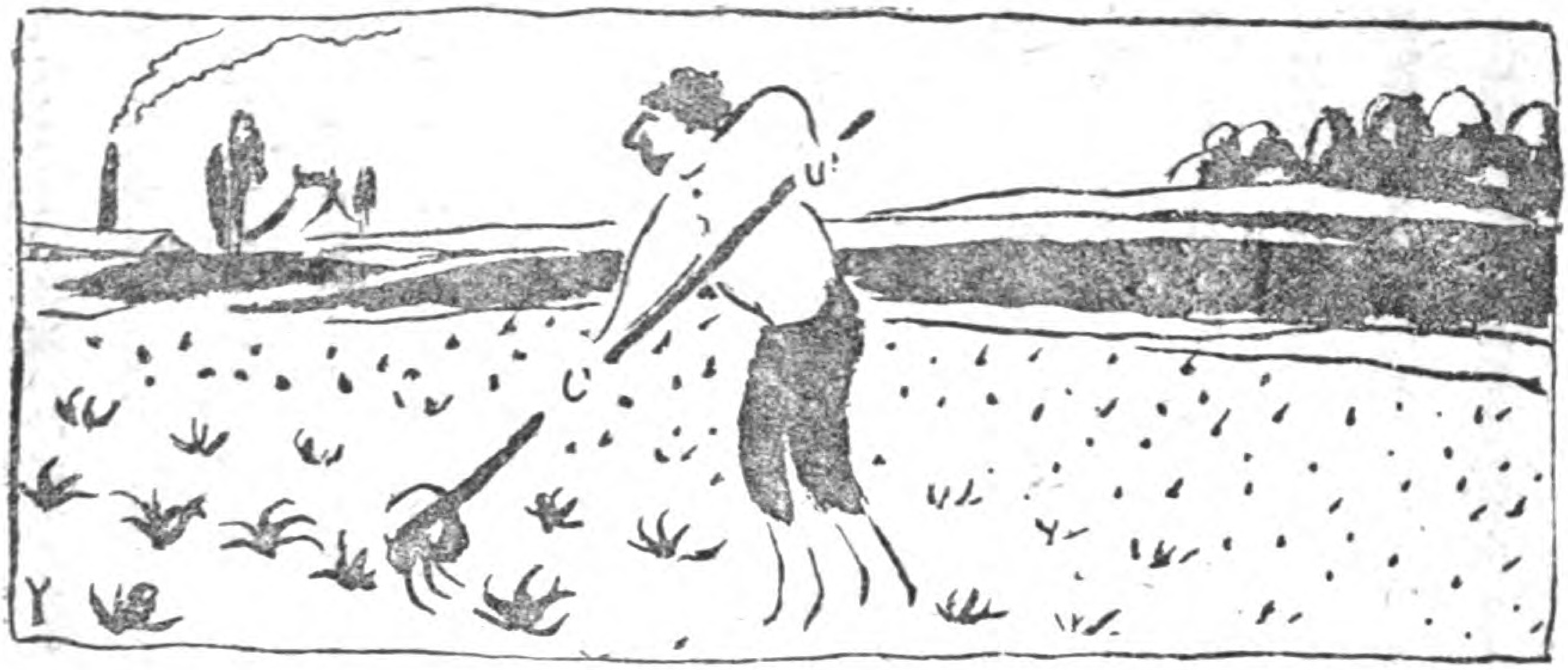
この老女貢は、救世濟民の道に就て餘程徹底した考を持つて居つた。當時もう餘程形をなしてゐた勤王論に對しても貢は餘程强い信念を持つた共鳴者であることが、分つて來ました。切支丹でさへ無くば、輕くて所拂ひ重くて遠島、決して死罪にかゝるやうな裁きにはし無い積りで居た大鹽も、何うしても貢の首を繋ぎ得る方を見出すことができ無くなつて了まつたのであります。けれども八坂の巫子と云はれて、隨分多くの歸依者を得て居た豊田貢が勤王論の熱烈な主張者であつたといふ事が、公になるのは面白く無いといふ高井山城守の考からして、貢は妖言を放つて衆庶を迷はしたといふ罪名の下に死罪に處せられて了まひました。それは文政十二年のことであります。

その時を去ること八年にして、當時隱居致して居つた大鹽中齋が、丙申の饑饉に苦しむ衆庶の慘然な有様を見るに忍びず當路の有司の冷淡無能に憤慨し、全くの青天霹靂的の暴動に出たことは人の知るとほりでありますが、之は大鹽が爲めに捕へられて刑死した豊田貢の亡魂の祟りだといふ俗說があります。

大鹽は豊田貢のことが、可なり深く氣になつて居つて、貢の就刑後時々は親近の人々などに、貢のことを話したのでありませう。亡魂說はさういふ處から起つたものとも考へられます。

が、大鹽の暴動が貢の亡魂にそゝのかされたといふ說には、他の意味で甚だ面白い暗示が含まれて居るものと、私は考へさるを得無いのであります。

（をはり）



# 白木屋お駒

村松梢風

## 一

白木屋お駒を一席辯じます。是れは淨瑠璃の方では「戀娘昔八丈」といふ外題で有名な物で御坐いますが、一寸掻い撮んで申上げますと、爰に白木屋の獨娘にお駒といふ者があり、行儀見習のため、さる大名の屋敷に奉公の砌、家中の侍で尾花才三郎と申す者と戀中に落ち、末は夫婦と固い契約を取交してお駒は我が家へ歸つてゐる、と、白木屋の番頭に丈八なる者が御坐いまして、此奴の計らひでお駒は喜藏といふ持參金附きの聟を取らねばならなくなる。一方才三郎は、主家の寶物の茶入が紛失致したところから其の詮儀のために浪人して、町家廻りの髮結ひと成り下つてゐるうちお駒と邂逅致しますが、お駒が聟を取ると聞いて大いに立腹致すので、お駒は泣きつ恨みつ眞情を吐露して必ず心變りでない事を誓ふ。愈々婚禮の當夜と相成る。聟の喜藏は正裝して白木屋へ乘込んで來る。是れを才三郎が物蔭から窺つて見ると、意外にも喜藏といふ奴こそ自分が豫々其の行方を尋ねてゐた茶入れの盜賊である事が知れた。其處で此の事をお駒に告げるとお駒は謀を以て喜藏を嬉しが

らせた上、油斷を見濟して一刀の下に刺殺した。が、番頭丈八の逐電によつて、證據の品が失くなり、お駒は夫殺しの罪に問はれ鈴ケ森の刑場で死罪に行はれることになる。代官堤彌平治お駒に向ひ「最前屋敷にて役人中申し渡されし如く――重き刑にも行はるべきをお上のお慈悲を以て死罪に仰せ付けらるる、有難く存じ奉れ」と云ふ。ちつとも有難くない。此の時お駒は少しも悪びれず見物の群衆に向つて「世上の娘御達、此駒がよい見せしめ忘れても親の許さぬ不義いたずら必ず必ず遊ばすなえ」と一場の教訓を試みる。娘義太夫は見臺から伸び上り、眼を細く致し、黄色い聲を絞つて聽者を恍惚たらしめる條で御坐います。お駒の一命アハヤ風前の燈火と見えた時、遙か彼方より「其の仕置暫く／＼」と呼ばはりながら馬を驅つて遣つて參りました戀人の才三郎、番頭丈八を召捕り其の白狀に依つて喜藏が盗賊である事逐一明細に相成つたり、然る上はお駒の人殺しも罪にはならぬと、赦免の狀を懷から取り出して讀み上げるので、見物も聽き手も始めてホツと胸を撫でおろし、目出度く事落着といふのが大體の筋で御坐います。此の淨瑠璃の作者は吉田角丸で安永四年の刊行で御座います。作者はそれより五十年程前にあつた社會の事實をとつて脚色を加へたものでしたが、餘程當時の人氣に投じたものと見え、一時は才三郎格子とかお駒染めなぞといふが流行致したといふくらゐ、白木屋お駒と云へば八百屋お七と相並んで江戸を代表する娘兩横綱の位置に上り、大層な人氣者になりました。處で實說の方はどうであるかと申しますと、淨瑠璃とは全然趣きを異にして居ります。馬文耕の「近世江都著聞集」の中に其の委曲が記されてあります。白木屋といふのは白子屋で、お駒の實名はお熊で御座います。大體を申すと、白子屋の娘お熊が夫のある身で手代忠七と密通して、剩へ其の夫を殺害致そうと企み數々の悪事が露見に及び一同大岡越前守の裁きを受け、お熊忠七の兩名は引廻しの上淺草に於て獄門、其の他關係者一同それ／＼處罰を受けたと云ふのでして、甚だ香ばしからぬ事件、當今ならば差し詰め夕刊新聞の三面を賑やかそうといふ種で御座います。だが併し、總て人間のする事は善でも悪でも皆それぞれ道理のありますもの、結果だけを見て一概に罵倒も出來ない。此の意味でお熊なども

頗る同情に價する點も御座います。偖、餘事は措きまして〳〵

享保年間の事、江戸は新材木町に白子屋といふ材木問屋があつた。家持角屋敷で大層な分限者、此の角屋敷の主となると年頭に營中へ出て將軍家に拜謁する事が出來た大層な家柄、當主の名前は庄三郎と云つて是れは恐く好人物、女房お常との間に出來た獨り娘のお熊、蝶よ花よと育てるうちに齡頃にも相成ると此のお熊が非常な美人になつた。庄三郎の女房といふのは至つて派手好きな性分、それに姥櫻ながら縹緻もなか〳〵佳かつた。が何しろ金があるに任かせて贅澤三昧、其の上亭主がお人好しなのですから何をしようと勝手です。ヤーレ芝居だ花見だ交際ひだと云つて、娘のお熊は勿論の事女中腰元まで着飾らせて明け暮れ家を外に致し、金錢を湯水の如く遣ひます。湯水の如く金を遣ふとはよく云ふ譬へですが、當節はなかなかどうして湯水だつて滿足には遣へない。ヤレ水道税だヤレ石炭の値上げだと吾れ吾れは脅やかされ通しだ。今に飲料水を瓶詰めで買ふやうになるに違ひない。先達て僕は古い雜誌に載てゐた堀の藝者の懐舊談を讀んだが、其の中に維新當時の名妓堀の小萬に關する話があつて、小萬といふ人は恐ろしい綺麗好きな人で、湯屋へ行つて鼻の穴を洗ふだけに留桶に六杯宛の湯を遣つたといふ事が云ふてあつた。是れ位フンダンに遣つてこそ初めて湯水の如くといふ言葉に實感が伴なつて來ると思つた。偖白子屋の内儀で御座いますが、何事に依らず人のしない事をして見度いといふ性質、其處で女だてらに腰へ印籠を提げて歩いた。後には是れが世間一般の婦女子にまで波及して一種の流行となりましたが、其の魁は全く白子屋のお常から始まつた事、當時の風俗として印籠は男子の持物と極まつてゐたので御座います。萬事が此の調子で押し廻るのですから江戸中で白子屋の内儀を知らぬ者はない。人呼んで印籠お常と云ふ。堅氣の商人の女房があざ名で呼ばれるやうになつてはお仕舞ひで御座います。が兎に角此の白子屋の身代は大したもの。角屋敷と云ふものは十字街なら四軒ありさうなものだが、江戸城から見て右に當る場所と限られてゐて、其の實十字街でも一軒しか無かつた。白子屋の屋敷は新材木町西萬河岸にあつて總土藏造りの大層立派な物だつた。現今では土藏造り位何んでもない、鐵筋コンクリー

らせた上、油斷を見濟して一刀の下に刺殺した。が、番頭丈八の逐電によつて、證據の品が失くなり、お駒は夫殺しの罪に問はれ鈴ケ森の刑場で死罪に行はれることになる。代官堤彌平治お駒に向ひ「最前屋敷にて役人中申し渡されし如く――重き刑にも行はるべきをお上のお慈悲を以て死罪に仰せ付けらるる、有難く存じ奉れ」と云ふ。ちつとも有難くない。此の時お駒は少しも惡びれず見物の群衆に向つて「世上の娘御達、此駒がよい見せしめ忘れても親の許さぬ不義いたずら必ず必ず遊ばすなえ」と一場の教訓を試みる。娘義太夫は見臺から伸び上り、眼を細く致し、黄色い聲を絞つて聽者を恍惚たらしめる條で御坐います。お駒の一命アハヤ風前の燈火と見えた時、遙か彼方より「其の仕置暫く〳〵」と呼ばはりながら馬を驅つて遣つて參りました戀人の才三郎、番頭丈八を召捕り其の白狀に依つて喜藏が盗賊である事迄一明細に相成つたり、然る上はお駒の人殺しも罪にはならぬと、赦免の狀を懐から取り出して讀み上げるので、見物も聽き手も始めてホツと胸を撫でおろし、目出度く事落着といふのが大團圓の幕で御坐います。此の淨瑠璃の作者は吉田角丸で安永四年の刊行で御座います。作者はそれより五十年程前にあつた社會の事實をとつて脚色を加へたものでしたが、餘程當時の人氣に投じたものと見え、一時は才三郎格子とかお駒染めなぞといふが流行致したといふくらゐ、白木屋お駒と云へば八百屋お七と相並んで江戸を代表する娘兩横綱の位置に上り、大層な人氣者になりました。處で實説の方はどうであるかと申しますと、淨瑠璃とは全然趣きを異にして居ります。馬文耕の「近世江都著聞集」の中に其の委曲が記されてあります。白木屋といふのは白子屋で、お駒の實名はお熊で御座います。大體を申すと、白子屋の娘お熊が夫のある身で手代忠七と密通して、剰へ其の夫を殺害致そうと企み數々の惡事が露見に及び一同大岡越前守の裁きを受け、お熊忠七の兩名は引廻しの上淺草に於て獄門、其の他關係者一同それ〳〵處罰を受けたと云ふのでして、甚だ香ばしからぬ事件、當今ならば差し詰め夕刊新聞の三面を賑やかそうといふ種で御座います。だが併し、總て人間のする事は善でも惡でも皆それぞれ道理のありますもの、結果だけを見て一概に罵倒も出來ない。此の意味でお熊なども

頗る同樹に價する點も御座います。偖、餘事は置きまして——

享保年間の事、江戸は新材木町に白子屋といふ材木問屋があつた。家持角屋敷で大層な分限者、此の角屋敷の主となると年頭に營中へ出て將軍家に拜謁する事が出來た大層な家柄、當主の名前は庄三郎と云つて是れは悉く好人物、女房お常との間に出來た獨り娘のお熊、蝶よ花よと育てるうちに齡頃にも相成ると此のお熊が非常な美人になつた。庄三郎の女房といふのは至つて派手好きな性分、それに姥櫻ながら縹緻もなか〳〵佳かつた。が何しろ金があるに任かせて贅澤三昧、其の上亭主がお人好しなのですから何をしようと勝手です。ヤレ芝居だ花見だ交際ひだと云つて、娘のお熊は勿論の事女中一腰元まで着飾らせて明け暮れ家を外に致し、金錢を湯水の如く遣ひます。湯水の如く金を遣ふとはよく云ふ譬へですが、當節はなかなかどうして湯水だつて滿足には遣へない。ヤレ水道税だヤレ石炭の値上げだと吾れ吾れは脅やかされ通しだ。今に飲料水を瓶詰めで買ふやうになるに違ひない。先達て僕は古い雜誌に載てゐた堀の藝者の懐舊談を讀んだが、其の中に維新當時の名妓堀の小萬に關する話があつて、小萬といふ人は恐ろしい綺麗好きな人で、湯屋へ行つて鼻の穴を洗ふだけに留桶に六杯宛の湯を遣つたといふ事が云づてあつた。是れ位フンダンに遣つてこそ初めて湯水の如くといふ言葉に實感が伴なつて來ると思つた。偖白子屋の内儀で御座いますが、何事に依らず人のしない事をして見度いといふ性質。其處で女だてらに腰へ印籠を提げて歩いた。後には是れが世間一般の婦女子にまで波及して一種の流行となりましたが、其の魁は全く白子屋のお常から始まつた事、當時の風俗として印籠は男子の持物と極まつてゐたので御座います。事が此の調子で押し廻るのですから江戸中で白子屋の内儀を知らぬ者はない。人呼んで印籠お常と云ふ。堅氣の商人の女房があざ名で呼ばれるやうになつてはお仕舞ひで御座います。が兎に角此の白子屋の身代は大したもの。角屋敷と云ふものは十字街なら四軒ありさうなものだが、江戸城から見て右に當る場所と限られてゐて、其の實十字街でも一軒しか無かつた。白子屋の屋敷は新材木町西萬河岸にあつて總土藏造りの大層立派な物だつた。現今では土藏造り位何んでもない、鐵筋コンクリート

なぞと云ふ建物が出來て來た、が、享保時代に土藏造りと云へば珍らしかつた。「享保世説」と云ふ隨筆に、此度町屋土藏作りに成候に付狂歌として「表屋は土藏こそ普請しませうが裏屋の者は藏しかねます」「雲の上は有し昔に瓦やね見し塗だれの內ぞかなしき」「見渡せばみな白妙に成に窓かきがら屋根の火事の明ぼの」「世の中は渡りかねたる小商人米の高さに腹はあけぼの」下層社會の生活難の叫び聲や、官僚だの資本家に對する無產階級の反抗的氣分に昔も今も變りはない。江戶時代の狂歌や川柳落首等の中には堺さんの隨筆以上に皮肉で辛辣なのが澤山ある米騷動なども舊幕時代の方が猛烈だつた。民衆運動が旺んになつて來たのに對して、社會主義の諸先生が、是れ偏に吾黨宣傳の効果などと自惚れて居られると、大きな御油斷であらう。

## 二

母親からして斯樣な有樣ですから、自然と娘のお熊も其の風に染みます。家にゐて燻ぶつて裁縫なぞしてゐるから見ると、綺麗な着物を着て外を出歩いて、芝居を看たり遊藝でも聽いたりしてパツパと金を遣つて遊んでゐる方が何處の娘さんだつて贊成だ。それにお熊は誰れより縹緻がよいから、何處へ行つても屹度大騷ぎをされる。嬉しくて面白くて溜まらない。親に競爭で贅澤を盡します。是れでは幾らあつても終ひには足りなくなる。主の庄三郎はお人好しだからそれを押へる力がない。のみならず店の取締りも十分に出來ない、商法で損をした上に奉公人共が各々蔭で惡い事を働く、と云つた工合でさしも大身代の白子屋も近頃では內幕がヒドク苦しくなつて來た。丁度其處へある世話好きな人があつて「お熊さんも年頃の事だから聟を貰つてはどうか」と云ふ咄。お常が云ふには「宅でも近頃では以前のやうにいかない場合ですから、持參金のある聟だつたら貰つてもいい」といつたやうな話から、それではと云ふので早速緣談が持ち上つた、當の相手といふのは、大傳馬町一丁目地主彌太郎通稱川喜田の番頭又四郎といふ人物、五百兩の持參金で白子屋へ聟養子に來ることになつた。愈々緣談が纏り好道吉日を選んで立派な祝言を舉げて、又四郎は目出度く此の評判娘の聟になつた。處で、又四郎といふ男はどんな人物かと申しますと生れは勢州松坂在の百姓の倅、幼少の時から川喜田へ奉公して

年季を叩き上げた上に十年のお禮奉公まで勤めた實直一方の男働く事なら人の三倍掛けも働くが遊ぶ事は大嫌ひ。年中澤庵と味噌汁と乾物と油揚を食つてゐれば一向痒せないといふ重寶な體、丈が低くてチンチクリンで、色が炭團のやうに黒く、若白髮がある上に禿げてゐる。獅子鼻で鰐口だ。言ふ事が下等で錢勘定以外に物の面白味といふ事は更に解しない。永年川喜田に奉公してゐても唯の一度も自腹で茶屋酒を飲んだ事もない。吉原の大門がどつちを向いて立つてゐるか卅五歳の今日まで未だに見當が付かない。其の又四郎がお熊を見染めたのだ。爪で火をともして貯めた命より大切な金もお熊のためなら惜しくはない了簡になつたのが恐ろしい。だから望みが叶つてお熊を女房にすることが出來た又四郎の歡喜と得意は非常なものだが。災難なのはお熊だ。お熊は無論最初から此の縁談は死ぬ程厭だつたけれど、家が潰れるか潰れないかの瀬戸際だからどうか我慢して承知してお呉れと生の親のお常から手を合せんばかりにして賴まれて見ると、そう我儘ばかりも云へないやうな氣がしてつい首を縱に振つて仕舞つたのだつた。が今となつて見るとそれは取り返しの付かない失策だつた。恁んな事ならいつそ勘當されるまでも強情を張り通すだつたのにと後悔しても後の祭りです、どう氣を取り直して見ても又四郎を愛する氣にはなれない。繼女を女房にした又四郎がしつこく附き纏へば附き纏ふほど、お熊は身顫ひが出るほど厭になる。「わたしは日本一の好い男を亭主に持つつもりでゐたのに」と思ふとお熊は現在の我が夫が死ぬ程情無くなる。男といふ男が誰れを見ても自分の亭主よりは好男子に見えます。雪駄直しでも肥取り百姓でも、眼つかちでも鼻つかけでも、まだしも又四郎に比べると遙かに增しな所かある「全體」とお熊は考へるので御座います「恁んなに厭で厭でならない夫に從つてゐなければならない理屈が何處にあるのだらう？わたしは五百兩の金で身を賣つたやうなものだ、花魁は身を賣る替りに勝手に好きな男をこしらへるそうだ、わたしだつて同じ事だ、わたしが好き勝手な事をしたからつて何が悪い事があらう？」と母親のお常が髮結ひの清三郎と内々でしてゐる事をお熊は思ひ浮かべました。それは内緒事には違ひない。が、此の實隨分大びらな場合もあるのでした。此の外にもお常

は、芝居茶屋の二階とか船宿とかいふ所でいろ〳〵な事をしてゐるのをお熊はチヤンと承知してゐた。此の事は今生みの親に對する不快な念を醸させる原因になつてゐたのだが、今となつて考へて見れば母親の行爲だつてそう大して惡い事のやうには思はれない。母には母で又同情すべき所もあるやうな氣持が致してまゐります。今日も今日とてお熊は獨りで考へたり、じれたり致して居ります處へ「御免下さい」と這入つて來ましたのは番頭の忠七で御座います。

「おや忠七、何か用なの？」

「否え、別に用事も御座いませんが、今日はお獨りでお淋しからうと存じまして、お部屋の前を通りましたからお邪魔を致しましたので、したがお孃樣、どうやらお顏の色が勝れぬやうですが、御氣分でもお惡いのでは御座いませんか」

「いいえ忠七、氣分なぞ惡い事はないけれど」お熊は多年同じ家にゐて氣心を知つた忠七の顏を見ると、此の胸のムシヤクシヤを聞いて貰ひ度くて仕方がなくなるので御座います。「まあ忠むもつとこちらへお寄り、今お茶でも上げるから――。本當に忠七聞いてお呉れ、妾アねえ、もう此の頃はつく〴〵情無くて仕樣がないんだよ、何んて妾ア因果な身の上なんだろうねえ、いつそ一と思ひに死んで仕舞ひ度いと思ふくらひなんだよ」

「ハテネ、判りませんなあ。私共の考へでは世の中にお熊樣ほど幸せなお方は二人とあるまいと存じますがなあ、お金は腐る程有り餘るお家にお生れ遊ばして、御兩親も滿足なら今度は又結構なお聟樣をお貰ひ遊ばし、お聟樣はあんなに堅いお方でお道樂をなさる心配はなし、先づ何一つ御不足の無い御身分ぢやあ御座いませんか」

「忠七、後生だから揶揄ふのは止してお呉れ、妾アね、あの人の事を云はれると脂がゾツとして來るの。本當にお可察してお呉れな、妾アお父樣やお母樣のお言ひ付けだから承知したやうなもの丶、考へると悲しくつて悲しくつてなりませんわ」と云ひながらお熊は情無さと口惜しさとで自然に涙が湧いて來るのを黄八丈の着物の袖で拭ひます。黒襦子の幅の廣い掛襟と色の配合の宜ろしいまだ元服前の娘風でゐる紅い半襟の中からスンナリと抜け出した首が、髮の重さに堪へられぬやうにうなだれ

て居ります。下ぶくれの頬、横から見た形に申し分の無い鼻、口許は齢の割りに少し仇ッぽ過ぎるやうで御座います。帯は上方風に兩端をダラリと下げて結んでゐるのが、圓いお尻の下から現はれてゐる透き通るやうな足の平の上に垂れ掛かつて居ります。本物の講釋師がよく申します沈魚落雁閉月羞花とか海棠の雨に惱める風情とか云ふのは正に是れで御座います。番頭の忠七は思はず恍惚として仕舞ひました。と同時に何んとも云へない嫉妬の情がムラ／＼と込み上げて參ります。白雲頭の小僧の時分から三十近い此の年迄主人大事と奉公して來たのも、洗つて見ればお熊といふ對照物があつたればこそ出來た永の辛抱併し乍ら相手は何を云ふにも主人の娘、それに贅澤で人一倍氣位の高い性分だから奉公人風情の身では浮つかりした事も云へないと餘計な遠慮をしてゐたばかりに、突然に飛び出して來たあのチンチクリンのヘナチョコ面の土百姓に横取りをされて仕舞つた、鳶に油揚を浚はれたとは全く此の事だ、何んたる莫迦げた事だらう——と思ふと忠七はムラムラ腹が立つて參ります。斯うなればもう破れかぶれだ、遲蒔きながら當つて碎けろといふ度胸も起きて來る。

「もしお孃樣、さう仰つしやれば此の忠七も、實は蔭ながらお察ししてゐない譯では御坐いません。廣い江戸中でも指を折られるお前樣の御縹緻なら、どんな立派な旦那樣でもお持ちになる事が出來ましたのに、恁う申しちやあ誠に失禮で御座いますが又四郎樣ではちと不釣合ひだと誰れでもお噂申して居りますやうな譯で、全くお氣の毒で御坐います」

「おや忠七、お前本當にさう思つてお呉れかへ？、妾ア實に厭で厭で、顏を見るのも聲を聞くのも厭——」

「御尤で御坐います。したがお熊樣、世の中といふものは妙な物で御坐いますなあ。早い咄が、唄の文句でも思ふ人とは添はれず思はぬ人と添ふのが浮世の慣ひだなぞと申してありますが貴女樣のためなら命も要らぬまで焦れてゐる男は世間に幾らも御坐いますのに、其の御當人の貴女樣はお心に染まぬ旦那樣をお持ち遊ばして御苦勞なさらねばならぬといふのは、出雲の神樣も飛んだ罪作りで御坐いますよ」

「お前は何時の間にか大層口が上手になつたね、何んで妾見た

やうな者に思ひを掛けて下さる方があるものかね」
「大有りで御坐います、確かに御坐います」
「有るなら其の人の名前を云つて御覧」
「お熊様、確かに爰にも一人居りますよ」
お熊は吃驚致した。全く忠七にそんな心があらうとは今が今迄夢にも氣が付かなかつた。是れが今より一と月か二た月前、婚禮前のお熊だつたら一も二もなく腹を立てゝ忠七を叱り飛ばした事かも知れないが、今のお熊の身になると奉公人に云ひ寄られた事でも餘り惡い氣持は致しません。夫に持つなら品格のあるお武家の若樣か、さもなければ芝居に出て來るやうな大家の若旦那と心に極め、愉しい空想を描いてゐた當時のお熊の眼には大ていの男が不足に見え、殊に子供の時分から同じ家の中で暮らして「忠七、忠七」と呼び付けてゐた人間なんか問題にして見る氣はテンデ起きた事もなかつたが、恁う云はれて今初めて相手の顏をしみじみと見るやうな氣が致すので御坐いましたさしたる男振りではないけれど、決して惡い方ではない。色の淺黑い、商人(あきんど)にしては一寸苦み走つた、江戸ッ兒だけに何處かあくぬけのした處が御坐います。木綿づくめでゐるけれど、紬の着物を着てゐる夫の又四郎に比べると餘つ程品もいい。此の男が眼の前に居りましたのにどうして今迄自分の眼には留まらなかつたのだらうとお熊は呆れながら不思議に思ふくらゐで御坐います。自分の事を思ひ詰めて今迄女房も持たずにゐたのかと思ふとそれも可哀相になつて參ります。お熊はグラグラと眩(めま)ひがするやうな氣持になりました。そして氣が付きますると、忠七の腕が緊(しつ)かりと我が身を捉へてゐるので御坐います。

## 三

阿漕ケ浦に曳く網も度重なれば露はれるとやらで、お熊と忠七の關係も自然人目に付くやうになる。又四郎は馬鹿でないから直きに氣が付きます。大體最初から、お熊の自分に對する態度といふものは甚だ物足りない。それが近頃では夫たる自分を全然度外視致して實に眼に餘る振舞ひをする。又四郎の身になれば是れ位面白くない事はない。が、併しどうとも致し方がない何故かと云ふと自分の方が弱味だらけだ。第一お熊に惚れてゐる。腹を立てて離緣するには未練があり過ぎる。それに入聟の

悲しさ、自分の方から離縁を取ろうと云ふ日になると、持參金の五百兩を此の家へ置いて出て行かなけりやならない。女房に嫌はれて惡い事をせられた上に、命と釣り替への五百兩をフイにして追ん出たのでは全く立ち場がない。又四郎も飛んだ處へ聟に來たもので御坐います。今では家內中誰れ一人知らない者もありませんが、唯一人主の庄三郎だけは一向それに氣が付かずアッケラカンと致してゐる。それも其の筈だ、自分の女房の不義をさへ知らずに居る男だ。お常は年甲斐もなく、廻り髪結ひの清三郎といふノッペリした男を家まで引き入れて、亭主が帳場へ坐つてゐる間は奥で勝手に巫山戯てゐる。肝心の母親が恁んな風だから娘の所業に意見の出來よう筈はない。又醜男の聟の顔を見ると、吾が身に引き較べて娘に同情する氣にもなつてくる。其處で親子競爭で不行跡をする。いやもう白子屋の家の中はお話にならない亂脉だ。家庭に締りのない家に店の締りがあろう筈はない。庄三郎がボンヤリしてゐるのに付け込んで奉公人が各々惡い事をする。聟の又四郎は漸々それに氣が付いてはゐるけれど部屋住みの身だから商賣の事に口に出す資格がない

そんな有様で、又四郎が持つて來た五百兩の金も僅か一二年の間に無くなつて仕舞つて、白子屋の財政は又もや運轉がとまり掛けて參りました。其處で、庄三郎夫婦と忠七とが額を集めて凝議の結果、祖先傳來の此の角屋敷を賣つてそれで負債を償却するのほかはないといふ事になりました。が世間體もあることゝだから極く內々で事を運び度いものだと考へまして、同じ町內に住んでゐる加賀屋長兵衛といふ人に來て貰つて譯を話し、屋敷を買つて貰ひ度いと云つて頼んだ。すると長兵衛が駭いて「それあ誠にお氣の毒な譯だ。併し御先祖から貰つた此の角屋敷を賣りなさるのは如何にも惜しい話だ、又、聟殿の又四郎さんとても家屋敷があればこそ五百兩といふ持參金も持つて養子に來なすつたといふもの、旁々屋敷を賣りなさるのは惡い分別だ金が御入用なら私が貸て上げませう」と、此の長兵衛といふ人が大層侠氣（をとこぎ）のある人で、三百兩といふ金を無抵當で貸して呉れた。是れで身上の繰り廻しは何やら凌ぎが付いたけれど、濟まないのは家庭の亂れで御坐います。加賀屋の長兵衛も是れを大層氣に掛けてたびたび白子屋へ來てはそれとなく意見を加へ

「やうな者に思ひを掛けて下さる方があるものかね」
「大有りで御坐います、確かに御坐いまず」
「有るなら其の人の名前を云つて御覧」
「お熊様、確かに爰にも一人居りますよ」
　お熊は吃驚致した。全く忠七にそんな心があらうとは今が今迄夢にも氣が付かなかつた。是れが今より一と月か二た月前、婚禮前のお熊だつたら一も二もなく腹を立てゝ忠七を叱り飛ばした事かも知れないが、今のお熊の身になると奉公人に云ひ寄られた事でも餘り惡い氣持は致しません。夫に持つなら品格のあるお武家の若様か、さもなければ芝居に出て來るやうな大家の若旦那と心に極め、愉しい空想を描いてゐた當時のお熊の眼には大ていの男が不足に見え、殊に子供の時分から同じ家の中で暮らして「忠七、忠七」と呼び付けてゐた人間なんか問題にして見る氣はテンデ起きた事もなかつたが、恁う云はれて今初めて相手の顔をしみじみと見るやうな氣が致すので御坐いましたさしたる男振りではないけれど、決して惡い方ではない。色の淺黑い、商人にしては一寸苦み走つた、江戸ッ兒だけに何處かあくぬけのした處が御坐います。木綿づくめでゐるけれども、紬の着物を着てゐる夫の又四郎に比べると餘つ程品もいい。此の男が眼の前に居りましたのにどうして今迄自分の眼には留まらなかつたのだろうとお熊は吾れながら不思議に思ふくらゐで御坐います。自分の事を思ひ詰めて今迄女房も持たずにゐたのかと思ふとそれも可哀相になつて參ります。お熊はグラグラと眩ひがするやうな氣持になりました。そして氣が付きますると、忠七の腕が緊かりと我が身を從へてゐるので御坐います。

## 三

　阿漕ケ浦に曳く網も度重なれば露はれるとやらで、お熊と忠七の關係も自然人目に付くやうになる。又四郎は馬鹿でないから直きに氣が付きます。大體最初から、お熊の自分に對する態度といふものは甚だ物足りない。それが近頃では夫たる自分を全然度外視致して實に眼に餘る振舞ひをする。又四郎の身になれば是れ位面白くない事はない。が、併しどうとも致し方がない何故かと云ふと自分の方が弱味だらけだ。第一お熊に惚れてゐる、腹を立てて離縁するには未練があり過ぎる。それに入聟の

悲しさ、自分の方から離縁を取ろうと云ふ日になると、持參金の五百兩を此の家へ置いて出て行かなけりやならない。女房に嫌はれて惡い事をせられた上に、命と釣り替への五百兩をフイにして追ん出たのでは全く立ち場がない。又四郎も飛んだ處へ聟に來たもので御坐います。今では家内中誰れ一人知らない者もありませんが、唯一人主の庄三郎だけは一向それに氣が付かずアッケラカンと致してゐる。それも其の筈だ、自分の女房の不義をさへ知らずに居る男だ。お常は年中髮もなく、廻り髮結ひの清三郎といふノッペリした男を家まで引き入れて、亭主が帳場へ坐つてゐる間は奥で勝手に巫山戯てゐる。肝心の母親が恁んな風だから娘の所業に意見の出來よう筈はない。又醜男の聟の顔を見ると、吾が身に引き較べて娘に同情する氣にもなつてくる。其處で親子競爭で不行跡をする。いやもう白子屋の家の中はお話にならない亂脉だ。家庭に締りのない家に店の締りがあろう筈はない。庄三郎がボンヤリしてゐるのに付け込んで奉公人が各々惡い事をする。聟の又四郎は薄々それに氣が付いてはゐるけれど部屋住みの身だから商賣の事に口に出す資格がない

そんな有様で、又四郎が持つて來た五百兩の金も僅か一二年の間に無くなつて仕舞つて、白子屋の財政は又もや運轉がとまり掛けて參りました。其處で、庄三郎夫婦と忠七とが額を集めて凝議の結果、祖先傳來の此の角屋敷を賣つてそれで負債を償却するのほかはないといふ事になりました。が世間體もあることだから極く内々で事を運び度いものだと考へまして、同じ町内に住んでゐる加賀屋長兵衛といふ人に來て貰つて譯を話し、屋敷を買つて貰ひ度いと云つて頼んだ。すると長兵衛が駭いて「それあ誠にお氣の毒な譯だ。併し御先祖から貰つた此の角屋敷を賣りなさるのは如何にも惜しい話だ、又、聟殿の又四郎さんとても家屋敷があればこそ五百兩といふ持參金も持つて養子に來なすつたといふもの、旁々屋敷を賣りなさるのは惡い分別だ金が御入用なら私が貸て上げませう」と、此の長兵衛といふ人が大層俠氣のある人で、三百兩といふ金を無抵當で貸して呉れた。是れで身上の繰り廻しは何やら凌ぎが付いたけれど、濟まないのは家庭の亂れで御坐います。加賀屋の長兵衛も是れ大屋敷に掛けてたびたび白子屋へ來てはそれとなく意見を

ます。が、どうも此方は何時になつても改まりそうにも見えません。さうから致すうちお熊は懐胎して月滿ちて男子を産み落しました。お熊は自分の生んだ兒も忠七の胤だとばかり信じてゐるので御坐います。忠七もお常も矢張りそう思つてゐるのでありました。が、忠七は、斯く迄お熊と深くなつて見ると、自分の不義の立ち場をも忘れて、お熊と自分との關係を日陰にばかり置かなければならないのが不滿になつて來る。又四郎を若旦那と仰ぎ、お熊の夫としての權利を認めなければならない場合に、忠七は反感と嫉妬を起さずにはゐられない。人間といふものは得手勝手なもので御座います。面白くない事があると忠七は店を飛び出して遊びにゆく。近頃忠七の廓通ひが激しくなつてまゐりました。然うなると心配なのはお熊だ、是れも畢竟又四郎といふ邪魔者が居るから愛しい男の心もぐれるのだと考へる。益々夫に對する當りは惡くなつて來る。お常は何時でも娘の味方だ。「忠七も困つたものだが、併し彼の身になれば面白くないのも無理はない」と飛んだ見當違ひの同情をする。そして親子で顔を合せると嫁の惡口ばかり、何んとかして追ひ出して仕舞ひ度いと思つても、こつちから出て行けと云ふからに參金を返して遣らなければならない、それは出來ない事だ。何かうまい工夫はあるまいかねえ」と母子は寄ると障ると評議を致して居る。伊勢つ子の又四郎流石に辛抱が宜い、かうなれば石の上でも針の上でも我慢して坐つてゐる。或る日のこと又四郎は眠らないので朝湯に出掛けた。丁度湯は空いてゐていい心持ちだ。「ああいい湯加減だ、どうも此の朝湯の氣持はなんとも云へないな――俺も白子屋へ來てから早いもので足掛け三年になるが、唯の一時でも暢んびりとした事はない、せめて此の朝湯に浸つてゐるやうな氣持で一日でも暮して見たいものだ――」なぞと詰まらぬ事を考へてゐる背後から、

「もし若旦那樣、お早う御座います」

「おゝ誰かと思つたら長介か、今日は大層早く湯に來たぢやないか、もう家の用事は濟んだのか」

「へい、悉皆片付けて參りました、好えあんばいにお天氣で御座えますな」

「そうだて、天氣が好いと氣が晴れ〳〵するな。――時に長介

お前はよく働いて與れて感心だな、私は知つちやあゐるが部屋住みの身分でどうにもならない。何時の事だか分らないが、時節の來る迄お前も家にゐて與れたら、何んとかして上げ度いと思つてゐるんだよ」

「どう致しまして、俺等あ此の通りの田舍者で何んにもお間に合ひましねえだ。――時に若旦那樣、異しな事を云ふやうでごがすが、お前樣今朝はお宅で御飯を召し上つちやあなりましねえだよ」

「えツ、それあ長介どういふ譯だ?」

「へい、實あ俺其の事をお耳に入れべいと思つたからお前樣の後からお湯に參りましただ。他ぢやあ御座えませんが、若旦那樣今朝お前樣に差上げる味噌汁には毒が這入つて居りますだよ」

「だ、誰れがそんな事をしたのだ!」

「それは俺の口からは云へましねえだ、お前樣お察しなすつてお與んなされ。俺らあ勝手の仕事をするのが自分の役目、落度になつちやあなんねえと思ふから密りお前樣だけにお知らせ申しますだよ、ほんにお前樣も並大抵な御苦勞ちやあ御座えましねえなあ」

「長介、よく知らして與れた、いづれ此の事については恩返は十分にするからなあ」

流石に我慢強い又四郎だが、此の時ばかりは勘忍袋の緒が切れた。さうで御坐いませう、幾ら惚れてゐる女にもしろ、毒薬を呑ませられちやあ溜まらない、どんなウンデレガンだつて眼が醒めます。又四郎は血相變へて湯屋を飛び出すと其の足で加賀屋長兵衛の處へ驅けつけて逐一事情を物語る。長兵衛も驚いた。早速白子屋へ遣つて參りまして親子の者に向つて、懇々と異見を加へた。確かな証人もある事なので一同グウの音も出來ない、重々詫びを入れて内濟にして貰ふ事になつた。が、加賀長の考へとしても、もう斯うなつた上は所詮離縁の外はないと思ふので、庄三郎を自宅へ呼んで又四郎を離縁する事を勸めた。「持参金の返濟に困るなら今度こそ止むを得ないから屋敷を賣りなさい、あの儘にしてゐると仕舞ひには取り返しの付かない事になり兼ないから」と云ひますと、庄三郎は好人物の事だから早速其の氣になつて、内々で長兵衛に屋敷を賣り渡して五

百兩の金を受取つた。白子屋の屋敷は加賀長の所有に移つて、實歴七年――と云ふと白子屋事件の結末から卅一年目に當りますが、馬文耕が「近世江都著聞集」を書いた當時は其の跡に和國餅といふ餅屋があつた。是れは當時の人氣角力の和國が其處へ店を出したので、なか〳〵評判で、其の前の橋を和國橋と呼ぶやうになつた。現在では萬橋と云つて居ります。現今京橋區新材木町西島河岸の北の角五十二號に土藏が三棟ある。橋詰の土藏が白子屋で建てたものださうだ。勿論度々火災に遇つて來てゐるが、其の都度修復を加へて保存されて來たのだと申されます。本宅のあつた處は此の土藏の向ひ側の間口十二間奥行二十五間の地面で、現今長壽庵といふ蕎麥屋と織物商の久須美といふ人の店のある所が全くの白子屋の舊蹟だと申すことで御坐います。

## 四

白子屋の離れ座敷では、お常とお熊と、それに忠七が加はつて何やらヒソヒソ密談を交して居りますが、どうも思はしい考へも無いと云つた樣子、すると忠七が不圖思ひ付いた體で申しますには、

「恁んな工夫はどうで御坐いませう？あの小間使のお菊さんてすが、あの子は餘り利口でもないやうですから欺したら多分承知するだらうと思ひますが――あの子に剃刀か何か持たせて若旦那のお寢間へ忍び込ませて突然に少しばかり斬り付けさせるんです。それから自分の體にも幾らか疵を付けさせるんですなそうすると無論大騷ぎになりますが、其處であの子に「若旦那と心中をする積りだ」と云はせるんです。若旦那が何んと言ひ譯をしたつて兩方の體に疵が付いてるのが何よりの證據、それにお菊さんは一寸顏も綺麗ですから人が聞いてもおかしく御坐いません。そこで否應なしに若旦那を離緣といふことになれあ、持參金も返さないで濟むぢや御坐いませんか」

「感心――ほんとに忠七お前は策者だよ」と直ぐ樣お常は贊成して「早速お菊を玆へ呼んで旨く欺くらかして言ひ付けることにしよう」

「でもお母樣、あのお菊がそんな難かしい芝居を旨く演れるでせうか？妾ア何んだか心配でなりませんよ、そんな危ない事を

するより默つて五百兩返して出て行つた貰つた方がいいぢやあないの。妾アどんなに貧乏になつたつて、乞食をしたつて、あの人と別れさへしたら本望なんですから」

「莫迦な事をお云ひでない、お前は乞食になつても本望か知らないが妾達あどうするんだえ。何、乾度旨くいくから心配しないで見ておいで」

と母の言葉にお熊も其の氣になつて同意致しました。早速小間使のお菊を側へ呼び、金や衣類を澤山に與へまして、偖此の仕事を仕了ふせた曉にはタンマリ褒美を遣るからと、少々智惠の足りないお菊を旨く欺して承知させてしまつた。そんな惡企みがあらうとは夢にも知らぬ又四郎、獨り寢の閨の內、最早此の白子屋の家に寢るのも僅かだと思ふと、さすがに感慨無量で眠られません。軈て眞夜半とおぼしき頃、ミシリ、ミシリツといふ足音。「ハテ今時分誰だらう？」と油斷無く薄眼を明けてゐるとも知らず、又四郎の寢所へ忍び込んで來たのは小間使のお菊で御座います。慾に眼が眩れてやつて來たやうなものの、お菊は恐ろしくて體中がガタ／＼慄へます。漸ら又四郎の側迄這寄つて盲突きに剃刀を以て又四郎の喉の邊へ斬り付けた途端ハツと跳ね起きた又四郎が矢庭にお菊の腕を促へて膝の下へ敷いて仕舞つた。「曲者だ、曲者だ」と又四郎は大聲で呶鳴りたてたので家中の者が起きて來る。お熊や忠七がマゴマゴしてゐるうちに又四郎は素早く下男の長介を走らせて町役人達を呼んで來させた。心中の言ひ立てどころの沙汰ではない「是れに就いては段々と仔細の有る事、委細は公儀へ出て申立てませう」と又四郎は役人に向つて斷乎として云ひ切りました。加賀屋長兵衞がいろ／＼云ひ宥めて內濟に扱はふと思つて骨を折つたが今度は其の甲斐がない。第一、又四郎の仲人と親元の川喜田が頭として承知しない。到頭表沙汰になり、大岡越前守の白洲へ白子屋の家內一同呼び出されることゝ相成りました。流石の名奉行も此の事件の調査を見た時には「八逆の者を數多く出さなければならない」と云ふて眉の間に皺を寄せた。事件が落着を告げたのは享保十二年十二月七日の事であつた。一同の罪科は次ぎの如く云ひ渡された。

又四郎妻　熊

此者儀、手代忠七と致二密通一不屆至極に付、町中引廻し、
於二淺草一獄門に行ふ者也

正三郎手代　忠七

此者儀、主人正三郎養子又四郎妻と致二密通一不屆至極に付
町中引廻し於二淺草一獄門に行ふ者也

正三郎下女　菊

此者儀、主人正三郎妻つね、何程申付候とも、主人の事に
候へば致方も可レ有レ之處、又四郎に疵付候段不屆至極に付
死罪に申付
但し引廻しには不レ及候

正三郎妻　常

右常儀、養子又四郎へ菊疵付候儀に付、常事母子之儀に候
へば、惡事露顯、依レ之遠流申付、但事濟候迄牢舍

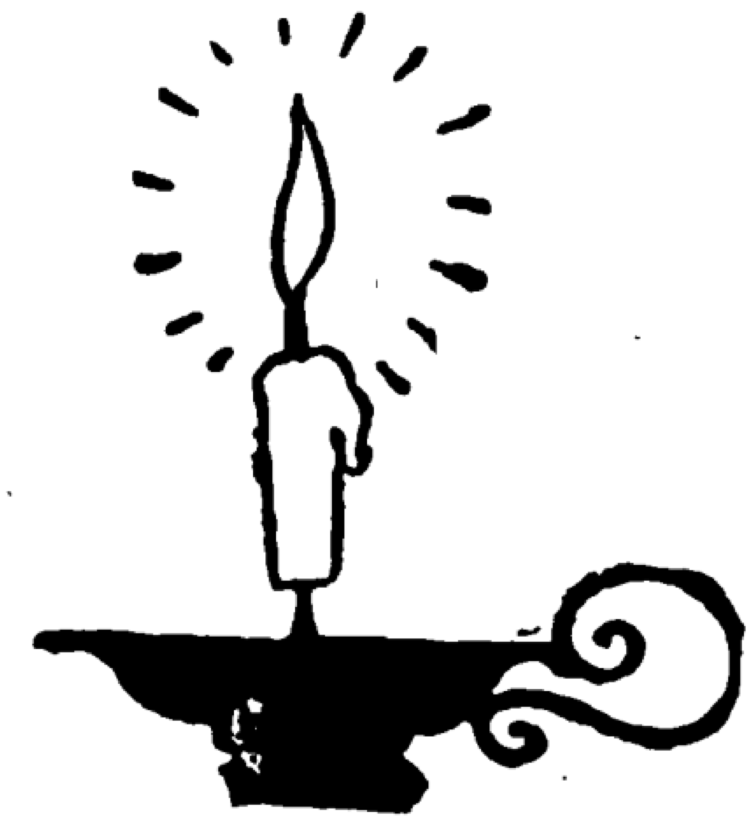
又四郎養父　正三郎

養子又四郎へ菊疵付候節、早速に樣子をも不二見屆一其上妻
娘並手代忠七儀一所に乍二罷在一不レ存段重々不埒成儀に付、
江戶追放申付

正三郎養子　又四郎
同人手代　清兵衞
同人下人　彥八
同　長介
同　權介
同　伊介

此者共御構無レ之候

お熊は引廻しの節、衣裝きよらかに出立ち、白無垢の下着に黃八丈の小袖を襲ね、襟には水晶の念珠を掛けてゐた。其の美しい姿を見ようとして、物見高い江戶の人達は辻から辻へと走るのでした。お熊は馬に乘せられながら、能滅諸有苦、假使興害意、推落大火坑、念彼觀音力……と法華經の普門品を讀誦してゐたと申します。「か〻る時觀音何としてか救ひ玉ふべきや」と、「近世江都著聞集」の著者は書き加へて罵つて居ります。併し乍ら僕は、お熊も必ず救はれたに違ひないと堅く信じてゐる人間で御座います。（完）



# 際物講談 ゲンコツ團長の失望

藤井眞澄

## 一回

「新社會講談」「大正新落語」といつてなか〱難物ですな。いくら原稿料になるかつて、おつちよこちよいの一夜作り、へんのへもなく、でつちあげられるものぢやありません。何事でも新しく生れさすていことは、相當の年月もかゝれば苦心も入る、況して堂々たる大正の御代の活講談・實落語を創造建設しようといふのですから、さう〱たやすく行くわけのものぢやありませんな。

そも〱ですな、講談落語なるものは元來文章や讀物ではないので、口舌は音聲の働きを以て耳にうつたへるものぢやありませんか。で若しそれを讀物にしたいとなれば、謂はゆる口演筆記となるのが本當でせう。然るに近頃の大流行、新講談と稱するもの如何と見れば、みんな申合せでもしたのでせうか、通俗はまがい小說、ローマンスは文章體の物語に墮してゐるぢやありませんか。その低腦と無責任な有様は、實以て言語道斷 至り――と憤慨したいほどですな。「講談」は讀んで字の如く講ずるものであり談ずるものにほかならない、斷じて文章や小說やローマンスぢやねエんだぞ。「イヤちよつと待て」「それは講談の進化ではあるまいか」と逆捩をする人があるかも知れませんが「イヤ決して進化ぢやない」と手前はお答へしたいのです。講談そのものゝ眞意義から見れば、今のこの文章體の講談なるものは德川は封建時代の講談がその內味の直打を失つて、まだ新しい時代の本物が生れて來ない、謂はゆる過渡の時期のチョンのまの間に合せにと、急いで飛び出たまがいもの、いかさま物

に過ぎませんね。これは恰度その技巧上の質から云つて、近頃大流行の勞働運動ブローカー乃至勞資協調主義ていやつと、同じ藝術的價値を有つものだ――と云はれても致方がありますまいて？全くですな、その材料と云へば資本家は德川時代の殘りもの貰ひ物で、姿形がまがりなりにも新しい大正の文章體…講談とさへ云へばチョン髷者の幡隨院の親方や大鹽の平八郎さん、落語とさへ云へば間拔者の熊さんハツさんがお出ましになるこれぢや遣りきれませんや。これはどうしても「猿六先生一代記」「大杉親方忍術の卷」とかね、それがあんまりぶつさうに過ぎるとなれば、せめては「作造教授はデモのクラシー」「賀川師出世譚」、さては「瓦斯喰ひ物語」「ジャリ齣り落語」くらゐのところは遣つて貰ひたヱもんですな。あまりに生々しくて、總ての人間の眞底にせまつて來る、或る人はムカツぱらを立て、或る人は大聲あげて泣きだし、或人はコブシをかためて飛び出とすいふやうな活きた講談を、どなたか拵へて手前共を、どうぞやどうぞびつくらさしておくんなさいまし。

これを要するにですな、その材料はと云へば今日只今の際物問題、その內味はと云へば抑へつけられ…………………………………………衆のいのちのあらはれ、その形はと云へば大正現代の一般民衆の言葉、若しそれを活字にしたいとなれば口演筆記體、その見本如何となれば、手前が現に喋りつゝある即ちこれこのもの――つまり斯ういふ具合にやつて貰ひたいものですな。

斯樣にひちむつかしい考から喋べり出す手前の講談なれば、とても完成を期するといふことは望めますまい。その不熟その未完成なところこそ、却つてその特長であり長所であるとごヒイキあつて、末永くお引立の程を願ひます次第ぢや。「よたはいゝかげんにしろー」「手前味噌はひつこめろー」成程々々よくおつしやつた、だがね、その「よた」その「手前味噌」なるものこそ、元來講談の講たり談たる特長なので、本脈なんか二の次ぎなのでありますぞ――と斯うまア一寸と御注意まで……

さて今晩喋べる手前の題目は、五月一日はメーデーで、感じたお話、「ゲンコツ閣長は失望の卷」てい頗るつきの新しいやつ。

天氣もからり氣候もいゝ、海近くだから空氣も綺麗ですな。たゞ悪いのは人間どもの顔色、その顔色を悪くした世の組立だけ——といふやうな三拍子揃ひも揃つた芝浦は埋立地！明治維新の際西郷と勝が出合つたといふ薩摩ツ原邊さへ、十時頃になりますいふと、なんとなく物あやしくソハ〳〵して來ますな。そこいらの電柱には「來れ勞働者諸君！今日は我等の日なり」なんちふビラが貼りつけられます、するとそれを脊の高い蒼黒い朝鮮の學生さんが二三人、物凄さうに立ちとまつて熱心に讀んでゐますのも、この場合なか〳〵見落すことの出來ない、喋り落すことの出來ない光景ですな。

ゲンコツ團長原岡君が顧問の谷君と一緒に、五反田の奥の方からテクで以て、ゲンコツ團の一隊七八十人を引率して會場へやつて來た時、もう芝浦のあの一角にはね、赤や白や黒の會旗が、或はタテに長く延びたり或は横に廣くひろがつたり或は四角になつたりして、ひるがへつてゐるのです。あちこちにかたまつてゐるバラ〳〵の勞働者を見た瞬間ですな、「案外少いな」と團長は呟かざるを得ないのでした。實際、群衆のかたまりが幾つもあつて何かふしよ〳〵囁き合つてゐる有様は、一面なんだかオツかない秘密な物凄さがあるとも云へますが、他面貧弱な感じを與へるものですな。團長はつく〳〵他の連中の様子を見たものです、洋服レインコート…筒ッぽう袷…さてはゾラリと垂れた袖つきの羽織に呑氣さうな下駄ばきまで其眼にうつつた時、ソツと自分の隊をふりかへつたものです。

「俺の組は谷顧問の紳士洋服姿のほか、みんな揃つて仕事着だ、黒ずんだ青服だ。その上どの他の組よりも一番人數が多いやうだぞ。而かもばくれつだんのやうに固く團結し、はぢきれるやうな元氣があるぢやないか。なんていすばらしいこつた……ウヌ今に見てゐろ！」

といふ自信がむく〳〵と團長の全身をおのゝかすのですな。

「僕等の組はあつちへ陣を取りませうね」

「さうだ、あすこがえゝ」

と團長と顧問のちよつと取りかはした斯ういふ言葉の端にも、自負と精氣のあふるゝものがあるのです。やがて「城西筋肉勞働者組合」といふ白い細長い會旗は、スックとばかり右手

の方におッ立てられました。それは恰度葬式の吊ひ旗のやうにも見えましたが、然しその周圍を取りまいてゐる團員が恐くヒン握つてゐる紙の小旗にこそ、物凄いゲンコツがあらはれてゐるのを見る時、みんなは、なんだか斯う物たのもしい、そしてこぎみよい感じを受けたものです。會場へ乘込んだ時のおもはゆさが次第にとけ、息づかひも靜かになり血管のふくらみも元に歸つた時でした。

「遣り出したら辨當食ふ時がねエかも知れねエ、今のうち食つてかうぢやねえか」

と誰か云ひ出しましたので、氣ばやな連中は、脊中や腰につけてゐた辨當を下ろして、踞んだり立つたり中には歩きながら、ぱくづき出しました。

「おいゲンコツ！」

と、今まで何處かへ行つてゐました原野團長は、ふと共の圓い姿をあらはして斯う怒鳴つたものです。

「なんだ？」「なんだ？」と仲間は一時にサッとその方を見ます。

「俺達は一番後から申込んだので、行列では殿りをつとめることに決まつてるんだが、それでえゝか？」

今日の行軍がどんなものであるかよく知らなかつたものと見えまして、また團長が「殿りをつとめる」と云つた巧妙な言葉にもよりまして、別になんとも不平を云ふ者もありません。それに其の時恰度谷顧問が「いゝでせう」と云つたので、いつ[illegible]い承諾された形です。

「だがね……だがね、みんな、その代り演說の時は俺達の代表者野田君を一番最初に遣らすやうに、これから談判しようと思ふのだ。サア贊成なら皆んな俺について來い！」

と團長は全身からほとばしり出る聲を一層大きく怒鳴つたものです。

「さうだ〳〵！」

「いけ〳〵！」

と仲間は大いに應じます。團長はその眉をピリ〳〵うごかしたかと思ふと、左肩を右肩より一尺も上へあげて、その元氣のカタマリである身體を躍らしながら、

「ゲンコツ前へ！」

と突進したものです。半分食ひかけてゐた辨當迄も、其のまゝ飛び上つて行きますな。

その猛烈さのせいでもあつたのでせうか、間もなくゲンコツ團は十分その目的を達した――滿足したやうな顔をして元の處へ引退つて來たものです。辨當はまたばくつかれ出されます。

「原岡先生……原岡先生……」

と云ひながら一人の若い婦人が、後の方から群衆を押分けて、團長の前へとせか〳〵やつて來るのです。服裝のきたなさに較べるとなか〳〵の美人――その脊中には四つぐらゐの子供をおんぶしてゐます。

「おやお鶴さんですね！」

「しばらくでございました」

「しばらくでしたね」

「私今日是非先生にお目にかゝれると思つて、さつきから待つてゐたんです――あゝ會へてよかつた……」

婦人はその疲れてはゐるがなか〳〵根強い賢こさうな額から、にじみ出る汗をふきながら、息づまるやうに云ふのでした。

「其の後僕はあちこち飛歩いて御無沙汰してますが、岩崎君いかゞですか！」

「先生にはほんとうに色々御厄介になりましたが……とうたういけなくなりました……」

「え？」

「先々月の末――二十七日の朝でございました……」

未亡人は涙を飲んでうつむいてしまひました。その脊におんぶされたといふより寧ろくゝりつけられたといふやうな男の子は、何處を見るともなく不思議なその蒼い眼を、ぢつと見はつてゐるのです。團長の肩はぶる〳〵とふるへて、其の睫毛の長い目の中から、大きな涙の玉が落ちて來ますな。

「そいつは……そいつは……僕ちつとも知らないかつた！」

「先生にはぜひ一度お目にかゝりたいと申しますので、方々お探ししましたが、さつぱりお行方が分らないものですから……それに……」

「殘念だつた！いかにも殘念だ！」

「それにちつとも私手がはなされませんのでね――この子もゐますし」

「僕あれから神戸から九州の方へ行つてたものですからね」

「死ぬる迄にはたつた一度でもお目にかゝりたいと、どの位い思つてゐました事か……しよつちう云ひつめてゐました……」

「さうでしたか、さうでしたか。それで奥さん、やはりあの會社で受けた傷が元でしたか？」

「え、さうです」

「ウヌ……」と團長は唸つたかと思ふと、やけくそに涙をはらつて「人殺し會社め！」と呟きました。暫らくして團長は「坊ちやん！」とその兩手の太い指を差出して、子供の兩肩をおさへるやうにします。

「正夫や、原岡先生ですよ。お父ちやんの云つてらつした原岡先生ですよ」

不思議な子供の視線は、ハツと團長の顏へうつります。

「加減でも惡いのですか？」

「え、父がなくなりますとそれからといふものは、不思議に何

處がわるいといふこともなしに弱つてしまひました」

「そいつはいかん！」

この時です！子供がふと聲を出しました――それは全く奇妙な聲です、細いやうな凄いやうな、喉の奥底から洩れ出るやうな、かすれ聲。

「かたきをとつてくんろよ！」

二人の大人はドキリとしました。

「よし正夫君！」

團長はその兩手を子供の兩脇に入れて、靜かに抱き取りました。子供はなほもぢつと團長の顏を見つめます。

「かたきうちしてくんろよ！」

また奇妙な聲が響きました。

「よし／＼ぜひともお父ちやんのかたきうつてやるぞ！正夫君、安心しろ、しつかりしろ」と固く正夫君の五體を抱きしめます。

「だがね、若し僕が遣りそこなつて返討ちにでもなつたら、正夫君、お前が早く大きくなつて遣らなくちやいけねえんだぞ！

さアどうだ？分つたかね……」

と團長は正夫の蒼白いその頬へ眞赤な自分の頬をすりつけました。

「坊や先生にだつこされていゝことと」

「お鶴さん、よかつたら僕この正夫君を抱いて、行列と一緒に上野まで行きたいと思ひますがね」

「けど勿體なうございますわ」

「なーに、つまりこの行軍僕に取つては岩崎君の葬式であり亦弔合戰といふわけですな、それから正夫君に取つてはかたきうちの初陣ぢやないですか。」

「全くさうでございますわね！」

「で、貴女は今何處にゐらつしやるのですか？」

「岩崎の弟の宅にゐますの」

「あゝ讓治君の宅ですね」

「え、ついそこの新網町ですの。山崎もそこで息をひき取りました」

「さうでしたか、で讓治君足尾でやられたといふことでしたが、どうなりましたか？」

「詳しいことは知りませんが、なんだが今日あたり出て來るのぢやないかと思つてます」

「ぢや岩崎君のなくなつたこと、まだ知らないのでせう？」

「さア……知つてはゐるやうですが……」

婦人はなんだかこの話を避けるやうに、口をつぐんだのでした。この時分から會はそろ／＼開かれます。

## 二　回

白い布のきれを片腕に卷いた世話人は、中央へと集ります。そこに丈高い頑丈な一つの机が持ち出されます。各團隊はそれを中心に集つた形となります。

一頻り群衆の移動が起つて、押されおされて團長と婦人は、お互の兩肩をくつつけねばならぬやうになりました。子供を中にして二人の呼吸は、同じ調子を取ります。兩人の血液は同じリズムに流れます。そしてお互の暖か味を感じながらたゞちつと默つて、演說のはじまるのを待つのです。

この時全場の光景如何にと見れば、先づ中央には大日本勞働

組合總同盟と稱する友情會の會旗及び其の夫々支部の會旗がひるがへり、左手には最も急進だとせられてゐます印刷工組合の信進會の赤旗と正友會の黑と赤の旗が見え、右手少し退つてゲンコツ團の一隊が控へてゐるのです。

その主義色彩に於て夫々異つてゐる此の三つの流を見ました時、此の會の順序が果して無事に進むか何うか、頗る疑はしいなアと、心ある者は感じたものです。其の上最近足尾銅山の事件で以て、謂はゆる勞働運動指導者と社會主義者との間に、全然正反對の意見があらはれつゝあるのを知つてゐる人々に取りましては、まるで社會劇でも見るやうな興味を有つて、この場の成行を待ち受けたものです。この度の足尾の勞働爭議は、勞働運動指導側からすれば模範的成功で、社會主義派より見れば模範的不成功だとせられてゐるのですから、たまらないわけですな。本國の學者、思想家、評論家、新聞雜誌記者の殆ど九分九リンまでが、即ち謂はゆる智識階級を擧つて、勞働運動者側にくつつきその大成功をほめたゝへたのは、云ふまでもないことですな。この場合ゲンコツ團はどうかと云ふに、これは足尾の成功を誇る友情會系でもなく、それかと云つて勿論社會主義派でもありません、一個獨立した團隊ですから、さア、まさかの時どつちの味方をするかといふことが、ナカ〳〵おもしろい問題ですな。

世話人諸君の白い腕に押されて、司會者の某君は机の上に登らうとします、と、それ御覽なさい、もうその時から赤と黑の旗の下から、鋭い神經的な聲が叫ばれるぢやありませんか。

「演說なんかやめろ！」

「勞働運動ブローカーの演說なんか聞くのは、俺はいやだ！」

「理屈はおいとけ、實行々々！」

「ブローカーを排斥しろ！」

司會者は机の上にその半身をあらはしまして、その四角な顏の筋肉を複雜にうごかし、高等學校は雄辯會の手振り身振りそのまゝで、

「ろーどーしやーしよーくーン」

と口を開いたのもです。とそれに應じて「いやだ！」「やめろ！」といふ反對の聲は、一層激しくなつて來ますな。はては

××××××××」といふ歌さへ起つて來るのです。司會者君は流石に温順しく、にが笑ひながら

「どうか靜かにして下さい、どうか……」と懇願するやうに手を延ばすのでした。兎に角「開會の辭」は簡單に終りますと、次ぎに一人の小さい辯士が上がりますな。この一番最初の辯士こそ、つまりゲンコツ團から選出された野田君なのです。さア事ですな、破れ背服を着た小柄な野田君は、その痩せた賢こさうな頭をふつて何か云ひ出したのですが、この時防害運動は最も極點に達しまして、何にがなんだかちつとも聞えないといふ仕末――このまゝだと會の順序はめちやくになるのではないかとさへ思はれますな。司會者君は早速机に飛上つて、頻りとなだめるやうな願ふやうな身振りさへしてゐます。

「なにがなんだつて演說の防害はひどいや」

「兎に角演說丈けやらしたらいゝぢやないか」

「なんだつてじやまするんだらう」

などいふ聲さへ見物人の中から聞えます。この時ゲンコツ團長に抱かれてゐた正夫君はぐつたり眠つたので、未亡人の脊中に移しておんぶさしてゐたものです、そして演說の方はたゞ喧しいだけで、どういふ風になつてゐるか分らなかつたものです、と、そこへゲンコツ團の幹部の一人である野田君での兄さんが、その大きな身體を飛ばして來ましたな。

「演說を邪魔するやつは勞働運動の敵だ！メーデーの敵だ防害者をやつけろ！」

と野田君の兄さんは、弟の一大事、團隊の一大事は此時也とばかりに、火のやうな顏をしてわめいたものです。最初から、はじきれる元氣をもてあましてゐたゲンコツ團のことですから、さアたまつたものぢやありません。

「やつつけろ！」

「毆れ！」

ウハーツと叫び出したものです。團長もハツと武者振ひをして、この團隊の勢力を示すは此の時にありといふ心持と、お君さんに自分の威力を見せようといふ本能とが、思はずも一緒になつたのでせうな。

「ゲンコツ突貫！」

と叫んだものです。

さア大變！右手の眞黑い靑服の大きな流れは、堤を破つた洪水のやうに、正面の野次馬の間を無理彌理つききつて、左手の赤い小さいひとかたまりへと、なだれかゝつたものです。もみあひへしあひ毆り合ひ、旗の奪ひ合ひの一瞬間の光景は、とても喋りつくせるものぢやありませんな。白い腕卷の世話人が飛んで行く、警部らしい者さへその渦卷の中へはいつて引分けようとしてゐるのが、パツ〳〵と活動のフイルムのやうに見える赤い組は印刷工で躰格なんかみんな弱さうで、主たる者は僅か二三十人もあつたでせうか、これにひきかへ靑い團隊は器械工で頑丈で强健な七八十人、それに野次や他の組の連中も加はつて優に百人以上！とても喧嘩になるわけのものぢやありませんな。見る〳〵間に赤い組は後へ引退き、ゲンコツは勇ましく凱歌をあげて元の陣へと引上げまして、騷ぎは忽ちのうちにおさまつた形となります。

原岡團長は意氣揚々と、女王の前へ凱旋して來る戰勝王のやうに、お鶴さんの前へと歸つて來たものです。まアどうなることかと心配してゐましたお鶴さんは、この團長のい[illegible]事な姿を見ました時、ほつと安心の吐息をついて、につこり笑んだものです。團員みんなは相手が案外に弱かつたので、なんだかまでもぬけたやうに、今や盛んに雄辯をふるつてる弟野田君の演說を、聞くでもなく聞かぬでもなく、ぼんやりとつゝ立つたものです。

思はぬ敵に、不意に襲擊された赤旗の連中は、元氣の鋒先を折られた姿で、それからといふものはそれといふ纏つた妨害はしませんでした。

「君どこをやられた？」

「俺は腕だつたよ」

「俺は喉よ」

「俺は一番先きにうんとやられたよ、痛快にやられたよ、アヘゝゝゝゞ」

と毆られたのを却つて面白く思つてゐるのでせうか、頻りと自分の毆られたことを吹聽してゐる、氣のよささうな印刷工君さへ見受けます。

「貧乏人同志のこつた、なんでもねえや」
「巡査にまで引分けられるなんて、少々はづかしいなア」
といふせりふも聞えますな。

さてみなさん、冷靜にこの騷ぎを觀察しますると、そこに樣々な現象が感ぜられますな。先づこれは野田君兄弟の私的問題とも思へますし、ゲンコツ團長の一つの示威運動乃至雌雄運動とも見えますし、ゲンコツ團の友情會に對する忠義振りとも思へますし、同時に友情會幹部の巧妙なる政略の一表現とも考へられますし、更らに大きく云つて、急進黨と保守黨の爭ひ、身體が一番弱いくせに頭と神經の秀れてゐる印刷工と、團體だけ大きくて少々低腦な器械工との衝突とも、云はれませうな。そのいづれが眞であるか、恐らくそれのいづれでもあるだらうと思へますな。

翌日の新聞を見ますいふと、この間のこまかい消息を、ちつとも觀察出來なかつたと見えまして、單なるがや／＼騷ぎとしか、どの新聞もこの新聞も、報道してゐませんでしたね。

ちよつとした殴合ひにでも重大な意義が存し、わずかな押合ひにでも深重な意味が含まれてゐるのを、世の新聞記者諸君よ、決して忘れてはいけませんぞ。――今時の一般の新聞といふものが、いくらえらさうなことを云つたて、どゝのつまりはお金持ちの提燈持に終るといふことは云ふまでもなく、あたりに決まりきつたことではありますが、また紙面の狹いなんていふわけにもよつてはゐませうが、其の觀察の間拔さかげん、にぶさかげん、なまくらさかげん、お話にもならないぢやげせんか。一つの事件が起る、先つ報道の事實が間違つとる、それから報道する態度が間違つとる、觀察がにぶい、行きとゞかない、肝心のことが缺げてる……實際困つたものですな。本當の新しいゝ新聞が出來るまで皆さんは、べそをかいて諦めて、ご辛抱しなさるつもりでげすかね？いやはやご辛抱づよいこつですな、感心――寒心！

第一の騷ぎが靜つてから、演說の順序は先づまア無事に進んで行きます。指導者らしい人の辯舌はナカ／＼巧みではありますが、どうも底力と實感がない、純勞働らしい人のは下手くそではありますが、眞實の力が感ぜられますな。ふと、また何處

からかもう一つの机が持ち出されて、右手の方でも別に演説がはじめられました。あらゆる團際の代表者が一通り終りますと、有志飛び入りがはじまりました。

こゝで一つ總ての演説の主意を見ますると、大體に於て——或る辯士が現に云つたやうに——「我々の運動は只單に時間の制限や賃金の増加を目的とするものではありません。實に、勞働自治の新社會を建設しようとするのであります」といふのに、一致してるやうに思はれます。が、その言葉はたとへ同じやうでも、その言葉の中に含まれてる內容、それを如何に本質的に握つてゐるかといふ理解の程度、如何に生命的に感謝してるかといふ眞面目さ、などから見ますると、こゝに三つの傾向があるやうに思はれますな。第一は、此のメーデを秩序よく無事に終らせようといふもの、第二はひたすらに勞働者の威力を天下に示さうとするもの、第三は機會さへあれば少しでも猛烈な運動に移さうとするもの、即ちこれですな。第一のは友情會系であるやうで、第二のは友情會以外のもの、例へばゲンコツ團のやうなもので、第三のは旗の下にゐる連中、といふわけてせうよ。

## 三四

正午にもなつた時分でしたらうか、「上野へ！」「上野へ！」といふ呼び聲と共に、何時の間にか列は作られ行軍ははじまりますと見れば、眞先きに白い長旗があつて、その次ぎに信進正久の赤と黒が、勢よくついてゐるぢやありませんか。

「殴られても眞先きに行つてゐる！」

民衆の或ものは或一つのショックを感じたものです。演説の進行を無事におさめた、開會第一の殊勳者ゲンコツ團如何？と見れば、例の大旗小旗をオッ立て一番隊伍正々堂々と、殿軍として控へてゐます。

「殴つてもいつとどんじりだ！」

民衆の或者は呟いたものです。

先頭の長旗の下には、白い腕の世話人諸君——お上品な學生のやうなのや、學生の雄辯家そつくりのや、鼈甲緣の眼鏡は政黨の壯士のやうなのが五六名、お互に仲よく腕を組合はして、なるべくゆつくりゆつたりと、進軍させやうとしてゐますな。其後

の赤と黒とは、その白い腕の線を突き破らう突き破らうと、してるやうに見られます。「こゝに危險あり」と見てかどうか、和服のお廻さんが野次馬にまじつて、野次馬顔をして、その旗をぬすみとらう〳〵としたものです。電車道へ出てから幾度、この怪しい××が襲撃して來たことでせう！お廻さんもいさましい勇者ですが、最後までその旗を守りおほせた信進・正友の孤軍奮闘の努力は、此の國の××運動史上に、永久に輝くことでせうね！旗をぬすみに來る、それを騒ぐる、世話人がその中へはいつて來る、世話人まで騒ぐる、砂煙がパーツ〳〵絶えず捲上る、その砂煙の中を、おとなしい善良な勞働者諸君はそれ〳〵其組のリーダー先生にひきいられて、何事もないやうに平穏無事に、テク〳〵進んだものです。恐らく後の方の團隊には、先頭でのこの毆り合ひ摑み合ひが、砂煙の爲めに見られなかつたのでせうな。或はたとへ見えましても、賢明なるリーダーさんが、それを救ひに行くことをお引きとめになつたのでせうな――行列が亂れてはいけませんでね。だが、行軍としては、さうあんまり立派でも綺麗でも、美しくも見事でもありませんでした。

片側道にそふて行く。北海道の端てからポツと出の青年新聞記者が、その色白い頬を熱情的にそめて申しました。

「こんなに混雑するなんて、ナンちふだらしのない勞働運動だ！僕はモツト隊伍整々堂々進行することゝ思つてゐたのに！呆れてものが云へない、實に憤慨にたへん……」

オゝ正しく美しき善良なる勞働運動――正々堂々なる勞働運動――模範的勞働運動！

正しいと云つても美しいと云つても善良だと云つても、なた模範的だとほめましても、それはみんなそれ〳〵の立場によつて違つて來るものぢやありますまいか。お金持階級に取つては、元來メーデーなんて厄介なものがない方が、どのくらゐメデたいことか。たとへあるにしましても、勞働者の隊が弱いせいか、お上の干渉がお上手なせいで以て、お流れになつてしまふ方が、頗る模範でげせうよ。中産階級――學者文士新聞雑誌のお先生がたに取つては、藝術的なきれいな旗を澤山オツ立て、名隊の先頭には樂隊をつけてブーカドン〳〵、そのはでやかなこ

とは早稲田、一高の運動會に於ける假裝行列のやうなのが、さては女學校や幼稚園のお遊戲のやうなのが、一番正しく美しく善良でがせうよ。だが、だが、だが、勞働者自身の爲めには、果してそれが模範的でせうかね？貧乏人の眞底から云つて、果してそれが本當でせうかね？血を吸はれ腕をとられ肺を犯され、親兄弟先祖代々つぎ〱に、不合理にめちや〱に、殺されて來つゝある被害常習犯のこちとらに取つて、それは全くいゝことでせうかね？

古い講談ですと、こゝいらで詳しく細かにその疑ひを說くのでせうが、新しい手前の此際物講談では、こゝいらでチョンぎつてお茶をにごすのが、その最も特色として恥かしながら誇りとするところなのでございます。

帝大は赤門の正帽をかぶつた大學生さんが一人、この行列につかずはなれず片側路にそふて？謂はゆる嚴肅は悲痛な表情で以て、テクつて行くを見受けました。まことに末たのもしい學生さんですな！こんなのが全く「改造」の愛讀者でせうね、どうもさうに違ひありませんよ。斯かる學生さんは、あの暑岡や燕樂軒で正宗やビールに醉つぱらつて、衆をたのみ柔道を誇りにして、婦人を連れた若者を抑へつけようとしたおまけに、處もあらうに大事な自分の横つぱらへ空氣ヌキをあけられるやうな、あんなヘマは決してすることぢやありますまい。田舍の父兄諸君もどうか「改造」を讀んでくれる我が子弟には安心あつて、そのお小使をふんだんに送つてあげておくんなさえ。

さて、此の奇妙キテレツな行列は、芝口から本道を無理に避けさせられ、横道をまがらされましたが、其のちよつと手前の家と家の狹い路次の間に、若い美しい婦人が三四十人もあつたでせうか、まるで伏勢のやうに、或はかくれんぼうでもしてるやうに、「今か今か」と隱れて控へてゐられたものです。これこそ皆さん、當日の萬綠叢中紅一點、赤瀾會の團員だつたのです。羽織はぬいで風呂敷に入れ、足は輕い雪駄といふいでたちは、眞にいさましいことですな。特にその長い兩袖を帶にさしはさんだけなげさには、若い男共の眼を射り頭を打ち、とことはに共の印象を殘したさうです、いかにも尤だと思ひます。

恰度日比谷公園前まで來た時です、砂塵をかぶりながら頻り

と行列を整へてゐたゲンコツ團長は、ふと思ひ出したやうに後へさがつて、お鶴さんの側へ行つたものです。未亡人はこの暑さと砂煙にもめげず、細い紐で正夫君を固く背中にくゝりつけて、ぐんぐん遣つて來ます。

「重いでせう、僕代つてあげませう」

「いゝえなんでもないんですよ」

「疲れが出ても困りますよ」

「このくらゐ平氣ですわ、今日のことですもの、たとへなんだつて構ひませんとも」

「よく眠むつてゐるやうですね」

「え、それやもう死んだやうですの、それが先生、私不思議なんですがね」

「正夫君が？」

「正夫は岩崎がなくなりましてから、ほんの一度もぐつすり眠むつたことはなかつたのです、何時でも眠むつてるやうに起きてるやうな、へんな風だつたのですのに、さつき先生にお會ひしてから、ふいとこんなに眠つてしまひましたの」

「成程ね……」

「私御幣をかつぐやうですが、なんだか斯う父親がついてゞもゐたのではないでせうか？」

「さうかも知れない……さうだ、つまりそれは正夫君のいとけない心の中へね、お父ちやんの臨終のあの言葉が非常に強くしみこんだのでせうね、そして早く僕に會つてお父ちやんの意思を傳へたいといふ意識だけが、子供ながらも強く働いてゐてねぼんやりと謂はゆる半無意識の狀態になつてゐたといふわけでせうか。そこへ僕が出て來たものですから、あんなへんな眠つきをして、あんな聲を出して、あの「かたきをとつてくれろ」と云つたんでせう。あの聲岩崎君そのまゝぢやなかつたですか……」

「えゝさうでした、私あれを聞いてどきつとしましたの」

「それで正夫君、もう十分傳へてしまつたものだから、はじめて安心してね、今までの疲れが出て、こんなにねこんだのでせうね」

「あゝきつとさうですわ」

行列はこの時二重橋前まで來てゐます。日比谷の停留場から電車が、幾台も止まりまして、いかめしい警視廳やなまめかしい帝劇をば、堀にそふて行くきたならしい勞働者には、恰かも見せないやうですな。

「先生私喉がかはいて苦しうございますが、この邊に水なんか飲む處はないでせうか？」

「さア…ざうだ、東京驛へ行けばありますよ。僕もひからびて困つてるところですから、一緒に行きませう」

二人はコソ〳〵と電車路を横切り、肩をならべて驛の方へと、あのひろつぱを急ぐのでした。

「行列はあんなに遲く行つてますから、ゆつくり休めますよ」

驛へ着くと手洗所へはいつて、水もどつさり飲み、便所もつかひ、顏まで洗つたものです。女が用事をする間、團長は正夫君を抱いて、待合室で待つてゐたのです。あのふつくらした腰掛へ體を休めて顏を見合しました時、二人ははじめて落付いた氣になりました。そしてもう其の時には、勞働運動の事もメーデーの事も、「敵討」のことも忘れてしまひまして、なんだか斯う何處かの名も知れない土地へ、旅行でもしてるやうな、[illegible]も新婚旅行でもしてるやうな、親しい氣分になつてゐたものです。――男はしみ〴〵女の顏を眺めました。造作はいゝといふ程ではないが、その口の大きさと眼のまるさにその目尻に、云ひ知れぬ愛嬌のあるのが、今更ながら心につき、顏の色の赤黑いのさへ、却つて嬉しい感じを起させるのです。特にその亂れた髮をかきあげた襟頸の白く細いのが、やさしい、いぢらしい、くすぐつたいやうな氣持を起こさしたものです。

「どうも有難うございました、さア出かけませう」

「なアにまだゆつくりしてゝ十分ですよ、これから近路をして行けますからね、それに上野へ着くまで別にこれといふ用事もないんですから」

十分も休んだでせうか、二人は近路を通つて、ゆつくり〳〵話しながら、須田町へと出て來ました。

「どうしたのでせうかね？」

「さア遲れたかな…後になるやうな氣づかいはない筈だが」

二人はやゝ不安になつて萬世橋の方へと向ひます。

「あゝあすこへ！」

と見ると向ふから、異樣な行列が來るのです。

「あれは普選勞働黨のだ――御用黨のね」

眞先きに自動車があり、ついで半纏着の職人らしいのが僅か、その周圍にお廻りさんの多數が、處々によぼ〳〵の立ちん坊らしい爺が白い細長い弔旗を、かついでゐるのです。その旗の中には「○○代議士」などゝ筆太に書かれてるナンカ、頗るふるつてますな。自動車が萬世橋へ差かゝると、中の洋服紳士連は急に立ち上がつて「萬歲！」「萬歲！」「勞働者萬歲!!」と、川上に向つて叫び出します。何事かと見ると、松住町の通りを人間の大きな長いカタマリが、やはり此方を見ながら、手をふり旗をひらめかして、「ワーツ！」「ワーツ！」と、わめきながら逼るのです。

「あゝ僕等の組はあれだ！」

二人はこの奇々怪々なる御用黨の行列と入違つて橋を渡り、向ふへと急ぎます、と間もなく左の横道から、自分達の行列は見物人の頭を越へてあふれ出るのでした。ですが、――これはまアどうした事だ？別れる時までは確かに、先頭には俺達の擔つてやつた信進・正友の旗だけが威張つてゐたのに、これはまアなんといふことだ――

「社會主義合同」！「新勞働運動社」！「M. L」！「黒瓢會」、！「赤蘭會」！オ、「南郊ソヴエット」!!…………

團長はすつかりどきもをぬかれた形です。もの〳〵しい、物凄い、ぶつさうな、いさましい、これ等の旗は、天から降つたか地から湧いたか、いつたい何處から何時の間に？團長はまるでどたまをどやされたやうに、荒膽をひしがれたやうに、ひよんでしよげてしまつたのです。されば元氣のカタマリのやうだつたあの敏捷な五體も、ぐつたりまゐつてしまひ、マツカに燃えた顏さへ、蒼くなつて來たものです。

「まア先生どうかなさつて？」

「…………」

「ほんとにお顏色が……」

「な、な……なんでもないんです」

「それ先生、今ゲンコツが通つてゐますのよ！」
　群衆の垣の直ぐ向ふを、今まで自分が指揮してゐた仲間のゲンコツが、相變らず砂をあびしよげ返りながら、どんじりから、のろ／＼と、ひきずられて行くのでした。
「さア先生行きませう」
「僕もうあの行列の中へはいることやめにしませう――なんだか氣分がわるいものですから。そして後から貴女と一緒に行きませう」
　ふぬけのぬけがらのやうに、夢遊病患者のやうに、團長は却つてお鶴さんに、引張られでもするやうに、兎に角上野までは行つたものです。

## 四回

　マツ先では、あの途中からふつてわいた不思議な援勢によつて、信進・正友の孤軍奮闘連は全く勇氣百倍！ペトグラードの街上でなくては見られないやうなあの旗を狂的に振りながら、不忍池にそふてねつて行きます。
　宮殿のやうに立派な或る料理店の二階から、會社の株主か重役らしい旦那様やその奥様や、若様お嬢様が、おも下を覗いてゐますな。アルコールで赤化してゐる旦那様のお顔には、極度の冷笑と最高の皮肉がうかんでゐます。――「なんといふ汚ないげびたけだもの共だ、はぢさらしめ！キ様どもが一生懸命になつて我輩等を持ち上げてくれゝばこそ、我輩等は致方なくお金持になつて、お金持の苦しみをしなくちやならないのだぞ！そしてそのお金持の苦しみを遁がれる爲めに、これ斯んなに酒を呑んでるのだぞ、ゲープ：：」と、まさか云つてゐるのでもありますまいがな。
　そこから少し離れて列んだ、風雅なお金持介の或お二階では、右手に牛玉を左手に一本かゝえた小說成金らしい若旦那が、昨夕から流連の疲れた悲痛な主觀の小さい眼をしばたゝいて、柳と櫻の若葉の間から、池向ふの騷ぎを見てゐますな。
「ふゝん勞働運動か！へん社會主義か！僕はあれが大きらいだつて。まアなんといふ一時的の、物質的のげびた仕事だ。それにひきかへ此の自分の、唯一無二最高微妙な藝術！永遠な人類愛に和さす、眞に尊いものだ。有難い、有難い、あゝ有難くて

涙がこぼれる!」と云つてるやうですな。

この時、押しおして行つた赤と黒の先頭は、東照宮へ登る石段の下で、お廻りさんの警戒線にぶつかりました。東照宮と云へば例の權現樣家康といふ××の祠ですな、人間よりは國家國家よりは德川幕府が有難い、といふ思想で以て、日本人種の生命の中から、反抗と創造の種子をぬき取つて狸おやぢを祭つてゐる××だ――德川三百年の實に巧妙極まる施政で以て、見事に日本人を去勢し盡した、封建武斷の大神樣!自分一家の卑俗的功利主義の爲めに、日本人みんなから、本當に物を見眞を考へる意識をなくしてしまつて、「泣く子と地頭には勝たれない」といふ諦めと、センチメンタルな他力本願の傳統を、呆きれる程上手にうえつけた、えらいおやぢ、超人、權現樣のお祠の石段の前で、此の反抗と創造に目覺めかけたメーデーの行列が、ぴつたり止められたといふことは頗る妙ですな。これは偶然のやうで決して偶然ではありませんぞ――おやく斯んなお説教をやつてゐた日にや、此の講談を喋べり終へないうちに、夜があけてしまひますよ、また日が暮れてしまひますよ。

さア、お廻りさんは此の神聖な官僚の權現樣へ、一歩も足をふみこませまいとします、權現樣の催眠術からやつと目覺めかけたこちとらは、どうかして登らうとしますな。たとへ上へ登つたところで、別にこれといふ儲けもないのですが、それを登らうとする。そこに深い意味があるのです、實際その登らうとする要求こそ、永い間抑へられてた民百姓の魂の叫び、民衆の本能、プロレタリアの感激、新しい理智に生き完全な人間に還らうとする、生命の革命創造ですな。

押し返されたり押し詰めたり、將に突破が成功しようとした刹那!西洋軒の方からかけつけて來たお廻りさんの一隊は、その柔道と劍術にねりかためた、腕力を振つて、こゝに毆り蹴り、ひつぱたき引きづりの、一大活劇は起つたものです。そしあそれと共に、善良にして模範的なる知識階級出の指導者は、美しく正しく、權現樣の讓りの例の狸攻略を以て、それとなくあれとなく、燃えんとする民衆の本能の薪木に向つて、あきらめの水をそゝいだものです。間もなく司會者君の姿は、石段の一番下の小高い石の上へ、世話人諸君とお廻りさんに取卷れて、

ぬつと現はれます。
「ろーどうーしやーしよーくん‥‥」
例の雄辯は呼ばれます。
「メーデー芽出度終りました‥‥」
と云ひかけますと――
「馬鹿!」
「まだ終りやしねえぞ!」
「なにが芽出たいんだ!」
といふ怒號が起つて來ます。司會者君はそれにおかまひなしに――
「諸君!メーデーと勞働者の萬歲を絕叫して、解散しようぢやありませんか!」
「戲談ぢやねえ!」
「萬歲いやだ!」
「ブローカーめ!」
「勞働運動の敵!」
「はじを知れ!」

だゝ子のやうな聲は呼ばれます。司會者君はぐすん〳〵してゐましたが、ふと半身をかゞけて世話人諸君と相談して後、また勢に兩手を高くあげました。
「諸君!さア‥‥メーデばんさーいー!」
と大聲に呼びしました。わずかの聲がそれに應じられます。
「ろーどーしーやーばーんーざーイ――」
いくらかの聲が遠くの方から泣くやうに應じました。なんていセンチメンタルな淋しい大團圓でせう。猶暫時の押し合せり合の末、群衆は次第々々に退いて行きます。と見れば、どうしたことか、赤瀾會の若き女性は、砂埃に顏を埋めて眼ばかりひからして、一人‥‥二人と、たくましいお廻さんにひつぱられて行きます。――これが今日の模範的笑劇を、やさしく惡化して社會劇にした最後の幕切れですな。群衆は此の若き女性の最後の妙技がげせぬらしく、呆れたやうに、面白さうに眺めたものです。開會最初にどえらい元氣でゲンコツを振ったゲンコツ團も、なにがなんだかぼんやりと、これを見たや見ぬのやら‥‥
人間は次第々々に去り、夕暗はだん〳〵上野の若葉の森にたむ

ゝつて來ます。本講談の主人公原岡團長は、岩崎未亡人お鶴さんとたつた二人、大きな櫻のほの暗い並木の下の、冷たい白い石の上に、悄然とその疲れた腰をおろしてゐます。

「……先生どこかおわるいのぢやありませんか？」

「…………………」

「だいぶ暗くなつて來ました、もう何時でせうね……」

「さア……」

「私ちよつと此の邊で用事して歸らうと思ひますが、先生はこれから？」

「さうですか、僕もそろ〳〵……」

と團長はヒョロ〳〵と立ち上がつたと思ふと、なんだか妙にもじ〳〵しながら、女の側へよつて行きました。

「お鶴さん！」

「え？」

と今までにない朦朧なかすれ聲を出したものです。

「お鶴さん！僕と……ほんとうに僕と……一緒になつてくれませんか！」

「まア！」

團長は急に一生懸命になつて、辯解でもするやうに早口に云ひ出します。

「僕實に今日は非常な感激を受けたのです、それはなんであるか今の僕にははつきりしませんが、兎に角非常な今までにない感じです。その爲めにね、僕世の中がみんな厭になつたのです、人間みんながいやになつたのです──といふやうな氣持がするんです」

とこゝまで云つて少時ぢつとした後──

「……なんにもかんにもつまらなくなつたのです、いつさい奪ひ取られたやうな氣です……ですが……ですが……たつた一つ最後に殘るものは、僕を根強くひつぱるものは、何時までも刺戟するものは、僕を救ひ、僕に光明を與へるものは、お鶴さん、たゞ貴女です！貴女の戀だけです！……」

團長は斯う一氣に云ひ終ると同時に、その兩手を長く戀人の方へ差延べたかと思ひますと、狂ひぢみた表情で「あゝー」とうぬが頭をつかんだものです。そしてぶつ倒れるやうに跪ます

いて、石の上へ肘をのつけ、たまらなく顏をおほふひます。繼人は心配したやうに急いで其の側へよりましたが、どうしたらよいものやらと、困つたやうに迷ふやうに、ツヽ立つたのです、暫時は暗い沈默──とその闇の中から

「お鶴さんだね！」

といふ聲と一緒に、一つの黒い影があらはれます。

「讓治さんですね！」

「さうです」

女の前には痩せて脊の高い男がツヽ立ちました。

「遲くなつて濟みません」

「いーえ」

「兄キはとうたういけなくなつたさうですな」

「え……で讓治さんはそれをどうーして？」

「僕一昨日栃木の別莊からもどつて來ると直ぐ、兄キのこと或人から詳しく聞きました、それで早速あの手紙をあげたんですよ」

「まアさうでしたの、でもなぜ宅へお歸りにならないの？」

「ちよつとわけがあつてね──後で話しませう」と團長の方をいぶかしく見て「誰ですか？」

「原岡先生ですの」

讓治君はツカ〳〵と寄つて團長の肩をたゝきます。

「オイ原岡君！」

團長は恰かも病んだ猛獸のやうにむつくりと起き上がります。

「讓治君だね……君いつたい……」

團長が斯う何か尋ね出すのを、讓治君は振り切るやうに、トンキヨウ聲を出します。

「君！君の連中だね、信進會や正友會の連中を毆たつたのは？」

「僕の組はね、お上品な理屈は大きらいなんだ、ゲンコツ一點ばかりさ」

團長はぢつい皮肉に落付いたものです。

「そいつはすばらしい、が、そのゲンコツがお互同志に向ふのぢや……」

「演說のじやましたもんぢやからね──僕等は空想家ぢやないんだよ」

こゝで少時一默といふところ三人の息づかひが不安さうに聞えますな。

「君は相變らず理屈屋か」

それで團長が上から抑へつけたといふ形――相手は一歩退つたといふ形。

「さア…僕から見れば、君等の方がどうも理屈屋に近いやうに思へるぞ」

「これはおかしい」

「事實、組合運動が新社會の創造に、一度でも役に立たかね？」

問答はトン／＼調子に進みます。

「英國の三角同盟の事を、君は新聞で見ないのか？」

これも亦讓治君が、さかねじを喰つた形。さア どう返事をしますかな？

「それを見てゐればこそ、組合主義がダメな事を思ふんだよ。あれまでに行つてなんにもならない、結句ロイド・ジーヨージ一派の政治屋にうまい儲けをさすのが、まアをちたらうよ。」

「…たが」

「まアよく考へて見たまへ、今日のメーデー、あのみすぼらしさ！あれで以て英や米や佛のやうな、あんな大きな組合に、いつたい何時までたつたらなれると思ふのかね？また假令早くなれるにしたつて、…………にはなんの役にも立たないのぢやあるまいか？」

「いーや役にもたつんだ！一番役にたつんだ！それなればこそ、僕等は身を忘れ家を捨てゝ一生懸命やつてんるぢやないか！」

「一生懸命？頗るけつから！だが、どういふ具合に役に立つのだ？」

「……を現出するについては、ちつぼけな小ぜり合や小勇氣ではダメなんで、どうしても強い忍從と大きい固い團結が必要なんだ――それがつまり僕等の立場だ」

「成程、それ全くだ。だがね、大きい固い團結は何時でも、各人の十分の共通の利益といふ二つのものがなくてはとても出來るものぢやないのだよ」

「それは云ふまでもないことさ」

そこで、こんなみすぼらしい日本の民衆の多數が、何時本當の自覺に達すると思ふ？英や米のあれではないと來たんぢやないよ。まア日本なんかそれを待つたら、我々の死んでしまつた後の後だらうよ。だが僕等は生きてるうちに本當の、世を見たいんだよ、今直ぐ本然の生活がしたいんだよ」

「それはさうさ、然し……」

「まア待ちたまへ。それでね、たとへ大多數が自覺するにしたつて現實に各人の共通利益といふ條件が揃はなかつたら、君の謂ふ固い大きい團結は出來るものぢやないよ、それは何かの煽動で以て一時的にセンチメンタルな結合は出來ようさ。然しそれもまさかの處へ行くつていと、煙のやうに屁のやうに消えてなくならうよ。英國なんかあんな處まで押しててゐるのぢやから、何時でもしてやられるのは、即ちそこだよ」

「勞働者はみんな相互に共通利害を持つてるさ」

「それが嘘なんだ」

「いや嘘ぢやない！」

「永久的な理論から云へば、それこそ本當の本當さ。然し今日只今の現實からすれば、嘘になるぢやないか──例へば、の坑夫がストライキをすれば、石炭が出て來ないから一般に工業が衰へる、工業が衰れば工場勞働者は減給か失職だらうぢやないか。また同じ石炭山でも、甲の山でストライキをすれば乙の山の石炭が直打よくなり、從つて賃金も上つて來るといふ具合に、早い話が利害相互に反對してるのだ。もつと分かりよい例をとればね、電車の從業員がストライキをするといふと、困るのは自動車や馬車や人力に乘れない、貧乏人だけといふことになるぢやないか。そして肝心な資本階級全體に取つては、儲けこそすれちつとも損はしないといふのが、今日の現實ぢやないかね。一事が萬事いつさいがつさい、斯くも痛切に利害が矛盾してゐて、たまつたものかい、大きい固い團結！……とても：：とても……。組合運動を商買にするものは別として、これが××××の役に立つと信ずる者こそ、理屈屋であり空想家であるぢやないかね？」

「それは間違ひだ、それは間違つとる」

「現に君は器械工のお先棒になつて、利害と感情の衝突してる印刷工の頭の上にその。お得意のゲンコツをまいらしたぢやな

いか、それが當り前なんだ、それが自然なんだ」

「いや、さういふ意味でやつたのぢやないよ」

「いかにも君等はさういふ自覺の元にやつたのぢやあるまい、然しその無意識にやつたことに、間違のない道理があらはれてるのだ。これからだつてそんなこと度々あらうかと思ふ。悲しいかな、それが本當なんだからね」

「君の議論にも一理ある。然し、然しながら僕等は、さういふ一時的の唯物的の現實をつきやぶつて、さういふ外形的の自然を解脱して、人間性の本然、人間愛の根本に生きたいんだよ」

「よし。それなら賛成してもいゝ。それにつけてはどうか、せめては其のゲンコツをね、あの身體の弱い同志の上に加へないで、強い惡い敵の方へ、ふりむけてくれたまへ」

「ム、、、、、」

「ぢやこれでさようなら――僕は急ぐからね」

と讓治君は、今まで大きな眼を瞪しさうに見張つて二人の男の議論を熱心に聞いてゐた、女の方へとふり向きます。

「お鶴さん坊やを僕にだつこさしておくんなさい」

正夫君は何時の間にか眼を醒まして、暗の中にもはつきりした顏で、讓治君の方を見てゐます。

「正ちやん、目が醒めて、それ叔父さんですよ」

正夫は可愛い元氣な聲を張上げました。

「叔父さん!」

「おー正ちやん!」

讓治君は正夫君をだつこしました。

「さア行かう」

「さようなら、先生」

忽ちのうちに三人の姿は、暗の中に消えて、大地をぢつと見詰めてゐる團長の小さい姿だけが、葉影を通して來る電燈の光に、淋しく殘つたのでした。暫らくして團長は頭を少し上げたかと思ふと、「はアーッ、、……」と長い吐息をつきました。そして

「おー俺はいつさい失望だ!」

と唸つたのでした。

えー――お喋べりしたいことは、山程も海ほどもございまするが、お後には……ローマンスは物語先生をはじめと致しまして、通俗小説師匠、それにシンウチの歴史小説翁などが、どつさり樂屋へつめかけてゐられる樣子でございますから、手前の未熟な際物講談はこれまで……。



# 紀伊國屋文左衞門

荒畑寒村

## はしがき

いつぞや本誌に、社會講談『鼠小僧次郎吉』を書いたところ、さる御贔負の方から忠告を受けました。あの鼠小僧の拙さ加減は何だい、君は一體、社會講談のコツを心得てないから駄目だ。アンなこつぢやいけない、何でも構はないから精々理窟ツポクやるに限ると。

そこで今度は大に心を入れ替へ、精々理窟ツポイところを御覽に入れて、社會講談の社會講談たる所以を明らかにしたいと、いろ〳〵苦心の結果、『紀伊國屋文左衞門』と云ふ題を選びました。古きを溫ねて新しく、どんな理窟を並べますか末永く御愛讀の程を願つて置きます。

一

紀伊國屋文左衞門と申せば、『沖の暗いのに白帆が見へる、アレは紀伊の國蜜柑船』といふ俗謠で、誰方も御承知の一代分限まづ日本に於ける成金の總大將とも云ふべき男で、今日の社會に生れさせたら、差し詰め政黨の領袖に珍品の五つや六つは貰つて問題を惹起して居るかも知れません。

偖て、今さら文左衞門が紀州和歌の浦の生れだの、先祖が平清盛の家臣五十嵐小文治だの、貧乏で美男だつたから貧乏業平乞食光氏と綽名されたの、玉津島明神の神主藤浪河内の娘、お貞と云ふ美人に想はれて夫婦になつたのと云ふ事を並べて居ると、また理窟ツポクないと云ふお叱言が出ますから、ソンな事は一切抜きにいたします。何しろ業平の再來か光氏の權化かと云はれた美男の文左衞門が、小町娘と評判の高いお貞を女房にしたのですから、まるでお雛さまを並べたやう。二人とも老母の妙林尼に仕へて至孝、『それでノシ』とか何とか、紀州訛りの夜半のかね言も睦まじく、樂しい月日を送つて居りました。

が、此の文左衞門、一代に百萬分限になつた程の傑物ですから、スヰート・ホーム位を理想にして納まつて居る人間ではない。何かなして乾坤一擲の壯業を企て、衰へてゐる家業を挽

回して五十嵐の家名を揚げたいと、日夜その機會を覗つて居りました。時なる哉、正保の四年十月、名産の蜜柑が大當りなのに反して、紀州路一帶に大時化で、三千六百峰を押し包む黑雲は晴るゝ時なく、熊野灘は狂瀾怒濤澎湃として、雨は天地を縫ふが如くに降り續き　晝夜を別たず寸刻を措かず、轟々鏗鏘たる山鳴海鳴の音もの凄き有樣でございます。

これには蜜柑問屋がすつかり弱つてしまつた。御承知の通り昔は蜜柑の出る處は紀州に限つたもので、當今のやうに靜岡縣にも出來れば、アメリカからも輸入する、海が荒れて居たら汽車で積み出すと云ふやうな譯には參りません。從つて紀州から蜜柑が來なかつたら、江戸市民は蜜柑を見る事さへも出來ない恐らく將軍の尊背を以てしても、味はへなかつたでありませう所が、毎年十一月八日は江戸年中行事の鞴祭で、此の時には有くも鞴を用ふる商賣をして居る者は、祝宴を開いて蜜柑を撒くのが慣例だから、是非とも蜜柑が無くてはならない。また紀州の蜜柑問屋に取つても之れが附け目で、鞴祭りが過ぎてしまへば、相場がすつかり下つてもう大した利益を見ることは出來ない。それがかう云ふ大荒れで、蜜柑船を出すことが出來ず、山から切出した蜜柑は問屋の倉に山を築き、だん／＼色が黄熟し始めて下積の方はソロソロ腐り出して來たのですから、問屋の主人連が蒼くなるのも無理はありません。

## 二

これを見て、吾が時來れりとばかり心私かに喜こんだのは、別人ならぬ文左衛門であります。彼はこゝで一つ、乘るか反るかの大ヤマを張つて、船が熊野灘か伊勢路邊りで難破すればそれ迄、萬が一にも巧く品川に入つたら、其時こそは一擧に何萬兩と云ふ大儲けをして、再び家道を往昔の繁昌に戻す事が出來やう。成功か死か、運賦、賦の大賭博をうつて見やうと、玆に決心の臍を固めました。

それにしても先立つものは蜜柑や船舶、新しい言葉で申せば資本です。いくら蜜柑問屋がハケロの無い貨物を持て餘して居ると云つても、マサカ何萬籠と云ふ蜜柑を無代で與れる筈はありません。よしんば蜜柑は無代で貰つたにした所が、之れを江戸に積み出すには船といふ輸送機關が無ければならない。蜜柑や船はとゝのふとしても、最後に船頭といふ勞働が缺けて居たならば、切角の寶も持ち腐れの外はない。卽ち蜜柑といふ資本と、船といふ機械と、船頭といふ勞働とがあつて、初めて文左衛門の望むやうな萬金の富が獲られる事になるのであります。

文左衛門は貧乏菜平、乞食光氏などと、良いやうな惡いやうな綽名を取つて居る位ゐですから、固より金はない。家は廻船

問屋ですから船はあるが、先代の時に失敗つゞきから皆な賣つてしまつて、殘つた一隻の明神丸も今では片田屋惣兵衛と云ふ家に五十兩の抵當（かた）に入つてゐる。此の船を請出して相當の修繕を加へ、蜜柑を買ひ込み、上乘りの船頭を傭ひ入れるには、少なからぬ金、即ち流動資本が要りますが、其の肝心要めの物が無いのだから、之れには流石の文左衛門も當惑しました。

そこで思ひついたのは、舅の藤浪河内です。文左衛門は此の河内から、一攫萬金の冒險事業に必要な資金を借り受けやうと思ひました。で、或る日、文左衛門は河内を訪ねて計劃を打ち明け、金一千兩の借財を申し込みました。

『成る程、イヤよく解りました。其の位の度胸が無くつちやア人間、成功するものぢやない。普通ならお止しなさいと云つて止める可き所だらうが、私は止めない。折角思ひ立つた事だからおやんなさるが宜い。もし萬一の事があつた節は、御老母とお貞の身の上は及ばずながら私が引受けます。たゞ然し困つた事には、その資本ですナ。これが百兩とか二百兩とか云ふのだつたら、造作なくお貸し出來るのだが、千兩と云つては却々の大金。尤も、私は玉津島明神の積立金三千五百兩と云ふものを預かつてゐる。これが平生だつたら、其中から千兩だけお貸し出來ない事も無いが、實は今、それに就て大事件がもち上つて居る所で……』

と云つて、藤浪河内が文左衛門に物語つたところに由ると、此の三千五百兩の內、千五百兩を河内の手許に置き、後の二千兩は大阪に貸出してあつた。それが今度、神殿の普請をするに就て金が必要となつたので、別當の神泉院と云ふ者を大阪に遣はして貸金を集める事になりました。所が神泉院が、大阪の新町や難波新地で放蕩をしたので七十兩の食込が出來、それを取返さうと思つて堂島の米相場に手を出した爲に、到頭千兩以上の不足を生じてしまつた。別當の失策は神主の責任、さあ千兩の償ひが出來なければ河内が講中に對して申譯が立たなくなつた。文左衛門に貸す所ではない、河内の方が借りたい位になつて、穴埋に苦勞してゐる最中だつたのであります。

始終の樣子を聞いた文左衛門、深く心に決する所あるらし一と膝押しすゝめて、

『お舅御、それでは其の殘りの積立金の中から、千兩だけ私に貸して下さい。運よく私が成功すれば、拜借の千兩に千兩の利子を附けてお返しします。さすれば、別當殿の使ひ込みも穴埋が出來ると云ふものですし、また運惡く途中で難船して、文左衛門の身が海底の水屑と消えたとしても、其上で處決されても遲くはありますまい。此の仕事は私に取つては運賦天賦ですか

貴方も乗りかゝつた舟と思つて、一つ乗るか反るか一生の運試しをなさつたら如何です。」

から云はれて、藤浪河内もそれならと云ふ氣になり、千兩の金を文左衛門に貸し與へる事になりました。文左衛門が後年、百萬の大財産に作り上げたのは、固より自分の膽氣才略にも由りますし、番頭長五郎の機智才能にも由りますが、其の根底は實に此の千兩と云ふ資金に在つたに違ひありません。若し此時文左衛門が千兩といふ資金を手にする事が出來なかつたならば、文左衛門が如何に不世出の英傑であつても、到底アレだけの立身出世は出來なかつたでありませう。

早く申せば、紀文一代の暴富は、此の千兩といふ資本が生み出したやうなもので、現代の紳士閥經濟學者の言を藉りて申しますならば、『富を生むものは資本』なのであります。然し、そんなら此の千兩といふ資本は誰が作り、何が生み出したのか、藤浪河内が文左衛門に貸し與へた千兩の金は、玉津嶋明神の講中の積立金の一部であります。それは天から降つた物でもなければ地から湧いた物でもなく、畢竟、講中が粒々辛苦の末に積み立てたもので、現代の言で申せば所謂『勞働の結果』であります。さすれば、紀文が後年百萬長者となるに至つた原動力とも云ふ如き此の千兩は、數百人若くは數千人の、玉津島明神講中の勞働の結晶に外ならない譯で、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

## 三

閑話休題、望む資金の千兩を手に入れた文左衛門は、すぐさま五十兩の元利を拂つて、片田屋惣兵衛から明神丸といふ五百石積の船を請出し、七十兩でその修繕を船大工に請負せました。

今度は蜜柑です、何しろこれが無くちやア船ばかりが百艘あつたつて、一文の儲けにもなりはしない。工場と機械とが揃つても、原料が無かつたら何一つの生産されないやうたものですから、文左衛門、今度は蜜柑問屋へやつて參りました。

『偖て御主人、和歌の浦の五十嵐文左衛門と申せば、少しは知られた廻船問屋ですが、先代の失敗で今は見る影もない貧乏暮し、そこで私も男と生れた甲斐には、もう一度家業を昔の繁昌に戻したいと思つて、風の變るのを待つて大浪大風を乗切り、江戸へ蜜柑船を出すつもりで、酷工面の資本を拵えて來ました。此の浪風でどちらの問屋さんも、皆な蜜柑をもて餘してお出の御様子。どうでせう、生命を資本の商賣始めに、餞別だと思つて一つ安く見切つて下さいませんか。」

『イヤ、御先代とはお交際をして頂いた私だ、そう云ふお話には元帳をお見せ申しませう。此の通り、私の所には一番藏から四番藏までの蜜柑が三萬八千三百籠、これが山方から仕入れる元値が一籠一匁一分、それに籠締繩の入費が二分で、都合一匁三分かゝつて居ます。然しかう言ふ時ですから、口錢の利益のと、面倒くさい文句は云ひません。一籠一匁四分なら手を打ちませう。』

『成る程、平生だつたら殆んど値にならない程お安い相場です然し、私のやうな生命知らずの大山師が無かつたら、三萬八千籠の蜜柑は一匁四分どころか、一分にもならずに皆な腐つてしまはなければなゝません。腐つた蜜柑を海へ捨てるにも、それ相當の費用は要りませう。どうです御主人、今年は蜜柑問屋の飢饉年だと諦らめ、腐り蜜柑を海へ捨てるのだと思つて、一籠一匁で私に讓つては下さいませんか。』

『それア然し五十嵐さん、余まりアコギ過ぎる。それじやあ宛然、こつちの脚下を見ると云ふもの……。』

『勿論です。この大時化で一隻の蜜柑船を出す者がなく、問屋さんが山のやうな蜜柑をもて餘して居るのが、固より私の附目なのです。其代り、私は生命といふ錢金に替へられない資本を注ぎ込むのです。イヤ、お見切が附かなければ宜しい、數の多い問屋さんの中には、案外話の解る人もありませうから……他さまを當つて見ます。』

『マ、マ、マ、五十嵐さん待つて下さい。解つた、解つた、お前さんの話はよく解つた。ナーニ、蜜柑問屋に來年といふ年の無いじやなし、宜しい一匁で手を打ちませう。』

文左衞門はとう／＼蜜柑問屋を口說き落して、江戸へ積み出すに必要な蜜柑を買ひ占めました。これでもう後に殘る問題は、上乘りの船頭、卽ち勞働の供給を得るだけです。文左衞門が考へたのは、此の大時化の中をボロ船で江戸まで乘切らうと云ふのは、生命知らずの暴れ者でなくちやならぬと。そこで出掛けて往つたのは、和歌の浦で名代の土左衞門仙八と云ふ船頭の家であります。

門口から家内の樣子を覗ふと、居る、居る、霖雨で商賣が出來ない所から、仙八を始めとして、同じ仲間の唐人の源八、大名の九郎兵衞、舵の庄之助生死の喜代藏、名不知の市平、こんな連中が集まつて丁半の爭ひに夢中になつて居ります。仙八は一度難船して死んだのを助かつた所から土左衞門、源八は朝鮮に吹流されて戻つた所から唐人、九郎兵衞は錢使ひの荒い所から大名、それから舵取の名人なので舵の庄之助、喧嘩が好きで生傷の絶間がないので生死の喜代藏、自分の名前を忘れるので

名不知の市平なんて云ふ綽名が肩書になつて居ります。

一同は文左衛門の這入つて來たのを見て、大慌てに慌てゝ盃皿や蓋を押し隠しましたが、文左衛門から金儲けの話をしに來たのだと聞いて、やつと安心しました。

『金儲けたア耳寄りな話だが、旦那そりア一體何です。金にさへなりや、海坊主とでも取組みますぜ。』

『外じやア無いが、此の逆風もいまに江戸行の順風に變るだらうと思ふが……』

『それア知れてまさア。だが此の模樣じやア、海は容易に穩やかにやなりませんぜ。』

『そこだ、風が江戸行にさへ變つたら、海荒れを厭はずに船を一隻仕立てゝ、蜜柑を江戸に積み出さうと思う。どうだ、片道で一人五十兩の給金を出すが、乘組む了見はないか。』

『ヘエ、其奴ア大層も無え話だが、船は新造ですか。』

『ナーニ、明神丸を積出して手入を加へたんだ。』

『それは御免蒙むりませう、貴方の前じやア云ひ惡いが、アレは私共は厄介船と呼んで居る位です。新造の船だつて、此の大時化を乘切るにや、生命がけの仕事です。況してあの厄介船じや乘出したが最後ブツ壊れて了ひまさア。』

さあ文左衛門が之には又困つた。資金は調つたし、船の手入れもかゝつて居るし、蜜柑の相談も出來て居る。機械も原料も既に備はつて、今は只だ勞働の供給さへ得れば、富が生産されるばかりになつて居る。然るに、其の肝心な勞働が手に入らないのだから。これは困るのも當然です。

若し文左衛門が、此の際、所要の勞働を雇ひ得られなかつたとしたら如何でせうか。クレオパトラの鼻がもう些し低かつたら、世界の地圖がもつと變つて居る筈だとか云ふ事ですが、文左衛門が仙八始め五名の船頭を雇ひ得なかつたとしたら、恐らく紀文一代の豪富は積めなかつたでありませう。古河が足尾銅山を何百もつて居たつて、住友が別子銅山を何千もつて居たつて、若し勞働者が無かつたならば、一文半錢の富と雖も生み出されはしないのです。資本は決して富を生産する上の主因ではありません。それは單に副因たるに過ぎないので、謂はゞ補助機關であります。否、資本そのものが既に勞働の結果なのでありまして、文左衛門が數萬の富を獲得する事の出來た資本、即ち千兩といふ資本と、何萬籠といふ蜜柑も、又は明神丸といふ船も、孰れか勞働の成果でないものがありませうか。そして亦資本そのものは、富を生産すべき原因で無いのみならず、絕へず勞働に依つて維持修築せられない限り、直ちに滅亡してしまはなければならぬ性質のものでありまして、假令ば明神丸

にしろ、蜜柑にしろ、若し其儘に抛たらかして置いて、毫も勞働に依て維持修築を加へなかつたならば、忽ちに物の役には立たなくなるのであります。

是に由て之を觀れば、勞働こそは、〇〇〇、〇〇〇〇、富を生產すべき主動力なのでありまして、且つ資本と雖も、勞働に依つて始めて作らるゝものであり、勞働にして存しなかつたならば、一日と雖も存在する事の出來ないものであります。故に、文左衞門が一攫萬金の冒險事業に成功して、一躍して成金となつたのも、歸するところ仙八始め五人の船頭、即ち勞働の結果であつたと云ふべきでありませう。

## 四

文左衞門は何思ひけん、突然百兩包みを抛り出して、

『さあ仙八、俺が百兩包みを一と張る。負けたら俺の運の無いのだ、よしんば船が出やうたつて、途中で難船して鮫の餌食になるに定つてゐる。だが、六つある賽の目の中から一が出れば運が俺に向いて居るのだ。此の仕事は必ず成功するに違ひないたとへ海が荒れて居やうが、船がぶつ毀れかけて居やうが、天道さまが無事に俺達を品川沖へ入れて下さるだらうと思ふ。どうだ、俺に負けたらお前達六人、俺の云ふ事をきいて明神丸に乘組んで與れないか。』

こう云ふ彼等は、こんな場合には流石に解りが早い者が異口同音、

『面白い、宜しうがす。これはチョボ一と云つて、一個の賽でやる賭博ですから、旦那が一に張れア五つの目が此方に居る譯で、こんな強い話やアありやアしねえ。それで居て、旦那に目が出る位ゐだつたら、旦那に運勢が向いて居るのだから、こりア話に乘らねえなア嘘だ。』

と、茲で一同の者が承諾をしたから、大名の五郎兵衞が賽をふつて壺皿を明けると、文左衞門が百兩の金を張つた一の目が出た。文左衞門は吾が事成れりとばかり、滿面に快心の笑を漲らす、六人はアツと云つた儘しばらくし開いた口が塞がりませんでしたが、こうなると諦らめのいゝ連中ですから、今さら愚痴めいた事は云ひません。潔ぎよ 文左衞門と行を供にすることを約束いたしました。

そこで江戸行片道が一人當り五十兩、半金の廿五兩は即坐に手附に打ち、殘りの廿五兩は品川へ乘込んだ時に渡すと云ふ勞働契約が成り立ちました。そして上乘の船頭六人の外に、更に六人の水夫楫取の雇ひ入れを托し、風が江戸行に變り次第、老朽せる明神丸に十三人の身を托し、難風激浪を冒して和歌の浦を出帆することに定めました。

茲でもう一つ、理窟を云はなければならないのは、此の船頭に對する報酬、即ち勞働賃銀の問題であります。一切の富は勞働の所産であると云ふことは、既に述べた所でありますが、文左衛門が六人の船頭に支拂つた報酬は、僅かに三百兩に過ぎませぬ。そして文左衛門自身は、社會的勞働の結果たる蜜柑と、船と、並びに六人の船頭の勞働とに依て、一擧にして數萬の暴富を成したのであります。文左衛門がその才智と、機略と、膽力とに依て、此の富を作る上に寄與貢獻して居る點に就ては、誰しも異存の無い所でありますし、從つて亦、彼が此の富の分配に與かるべき權利を存ずる點に就ても、異議を申し立つる者は無い筈であります。

然しながら、富を作る上に直接にして主要な働らきを作して居る六人の船頭が、僅か三百兩の賃銀しか拂はれない場合に文左衛門一人のみが數萬兩を獨占したと云ふことは、明らかに○○○○○○○○る事實と云はざるを得ません。けれ共、此の怪しからぬ事實こそは、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

今日、米國で最新の機械を用ひ一日に靴を製造して居る職工は、一日に十足の靴を作るそうでありますが、其の勞働者が得る賃銀は、僅かに二足分の靴を購ひ得るに過ぎません。して見ると八足分の富と云ふものは、悉く資本家の懷中に入つてしまつて居る譯で、斯の如く資本家が、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、文左衛門が社會的勞働の綜合的結果に依て、數萬金を獲得したるにも拘はらず、六人の船頭は僅かに往復五十兩づゝの報酬しか得られなかつたのも、理窟は同じことでございます。

## 五

いや、あまり理窟に身が入り過ぎて、肝心の本文がお留守になつて了ひました。

偖て、水夫楫取の雇入もすみ、船脚を重くする爲に紀州石を積み込み、川意萬端が整ひましたので、此上は只だ吹き荒れてゐる逆風が、江戸行の順風に變るのを俟つばかりであります。其中に、廿五日の朝に至つて漸やく江戸行の順風となりましたが、然し相變らずの暴風で、海若荒るゝことと天地を翻轉するかと疑はるゝばかりでございます。然しどんなに風浪が激しいからと云つて、十一月八日の鞴祭り迄に江戸に入らなかつたら、蜜柑の相場は夥しい下落を來します。どうぞ生命を賭けた一六勝負、風の變つたのを幸ひに乘り出せと、茲に十月廿六日の未明を以て愈々和歌の浦解纜といふ事に一決いたしました。

そこで明日が解纜といふ前夜、文左衛門は自分の家に六人の船頭と、六人の水夫楫取を集めて、初船出の祝宴を開きました船頭が見て驚いた、此の霖雨といふのに會席膳の上りは、源平、作り分の刺身、鰻の蒲燒、吸物椀などが並んでゐる。

「どうでえ、貧乏蜜柑だなんて惡口を云ふが、こゝいらが商家の威勢だ。見や、此の霖雨で諸方は上つたりだつてえのに、よく此の刺身が間に合つたじやねえか。久しく魚に餓ゑてゐるんだ、此の赤え奴を見ちや堪らねえ。」

土左衛門の仙八が唾を垂らさんばかりにして、刺身一片口に入れたが妙な顔をして居る。生死の喜代藏、蛇の庄之助なども やはり一片口に入れて變な顔をする。一同がどうも妙な味のする魚だ、この刺身は一體なんだらうと思つて文左衛門に尋ねると、變なのも妙なのも道理、魚ではなくて赤いのは色づけの寒天、白いのは蒟蒻、酢味噌で食ふ精進の膾でした。それから吸物椀の蓋を取つて見ると、これも雁もどきに菜つ葉の身で、鰻の蒲燒と見えたのが、實は湯婆を串に刺して燒いたものです。

さあ船頭達が承知しない、板子一枚下は地獄と云ふやうな生活をして居る者は、平生から非常に御幣をかつぐものですが、況して今日は目出たい船出の前祝ひ。何も縁起ものゝ事ゆゑ、干物でも目刺でもいゝ、尾頭つきの魚が付けて貰ひたかつたのにこれじや宛然法事のお逮夜のやうな精進料理だ、と云つて苦情を並べました。

文左衛門は莞爾笑つて、

「いや其の苦情は尤もだが、然しまあ考へて見て呉れ。今度の船出は十に八九は難かしいと見なけりやならねが、難船は何處の沖、何處の浦でするか解らない。自分の家で往生すれば、何は無くとも一家親類が集まつて、それ相當の追善供養はして呉

れるが。風向の變り易い熊野灘。大山のやうな浪の打ち寄せる遠州灘、黑瀬の烈しい相模灘で難船をし、底の水屑となつたが最後、訪ひ弔ひをして貰ふ譯には行かぬ。だから、明神丸も今は幽靈丸と名を改め、今夜は俺たちの法事の逮夜のつもりで、わざと精進料理を出したのだ。』

『成る程、理由を聞けばソンなものかネ。マア〱仕方がねえ今更變代ると云ふ譯にも往かず、人間一度は死なければアならねえんだ。さあ兄弟、酒だけは灘の生一本だ、どうせ死ぬと覺悟を定めて今夜飲み明かさうぜ。』

と、一同の船頭は自棄半分で、頻りに大きな物で酒をあほつて居ります、文左衛門はやがて妾のお貞を呼んで。呉服屋から屆いた仕着の包みを取寄せさせ、それを自分を始め十二人に割當てました。所が、これが普通の袢纏と違つて經帷子に頭陀袋白の甲掛脚袢といふ、すつかり冥土行の死人の扮裝でございます。十二人が呆氣に取られて居る所へ、菩提寺の和尚が小坊主を連れてやつて來た。小坊主が白木の机を据え、その上へ十二人の位牌を並べ、和尚が珠數つまぐつて引導を渡します。さあ生きながら引導を渡された、これでもう思ひ殘すところは無え浪でも風でも持つて來いと、十二人の意氣天を衝くが如く、痛飲淋漓として夜を徹して居ります。文左衛門は一夜のうちで母の妙林尼妾のお貞と別れの盃を酌み交し、母親は傳家の寶刀鞘一文字を贈つて、最初の一子が首途の餞けとする。海には狂濤怒濤の相搏ち相嚙む響き凄まじく、陸には暴風砂礫を飛し猛雨樹枝を碎いて、天と地と暗黑晦冥の裡に戰つて居ります。一室には母子夫妻が生別死別を兼ぬるしめやかな物語、前室には生命知らずの荒くれ男が、今生の思ひ出の鯨飲亂舞、その間に秋の長夜も更けて徃き、いつか東の空がほの白く明け初めました。

## 六

翌くればいよ〱正保四年十月二十六日、文左衛門を先頭に十二人が例の死裝束で、和歌の浦の濱邊を指してやつて參ります。濱邊には既に一行の親類縁者、知己友人を始め、見物の群集が黑山のやうになつて、別れを惜み行を壯んにいたします。

『旦那お目出たう存じます。結構なお日和で。』

『旦那、お目出たうございます。いゝ風で結構でございます、』

『ウム、いゝ風で目出たい。これなら江戸入は樂だらう。』

『ヤイ、どうだ聞いたか。此の氷時化が結構な日和で、此の大浪がいゝ風だとよ。』

『いゝ風に違えねえヤ、沖はまつ闇だし、浪は大山が押し寄せてるやうだ。見や、此の風の酷いこと、こんな大きな礫が面にブッカリやがらア。』

『其代り、巧く船が江戸に入りや、小判小粒の雨が降らア。』
『若し途中で難船と來りやア、六文もつて十萬億土へ旅立だ。』
『そうしたら、三途の河で渡舟の船頭よ。食ふにや困らねえから心配するな。』
『五十嵐の旦那、どうぞ御無事に江戸入を。』
『皆さん、目出たく江戸入を。』

彼方此方に挨拶が交されて居ましたが、いつ迄名殘を惜んで居ても果しがないので、一行十三人は船に乗り移り、沖に繋いである幽靈丸を指して漕ぎ出しました。風は荒れに荒れ、濤は狂ひに狂ひ、折柄雨は篠つくやうに降り出して、艀は九天に打ち上げられ、奈落に捲き込まれるばかり。其の中を漸やく漕ぎ抜けて本船に乗り込みますと、文左衛門は船頭、舵は庄之助、親爺は九郎兵衛、炊(かしき)は喜代藏、市平は檣、仙八は水先、源八は舳、其の他の者は手の足りぬ所を助けると、それ〴〵役割を定めました。それから愈々碇を巻き上げて船を出すことになりましたが、文左衛門は何思ひけん、船首に立つて母が讓りの菊一文字、抜くより早く二條の碇綱を丁と切り拂つた。

『やあ一同驚くな、文左衛門、狂氣したのでも無ければ亂心したのでもない。一同が碇ぐらゐを賴みにして居たのでは、到底も此の難風激浪を押し切つて、江戸に乗込むやうな大事は仕遂げられぬ船が生命と頼む碇綱を切つたのは、取も直さ陣、さあ一同、固より生命を賭けた仕事だ、未練を出さずに死身になれ。』
『いや判りました、船の名は幽靈丸、乗組は死裝束、引導はもう受けて來た。生命を捨てる覺悟でシツカリやれ。』

土左衛門の仙八が激勵まして指圖をする、水夫(かこ)楫取(かんどり)は聲はり上げて『めでた、めでたの若松さまよ、枝も榮えて葉も繁る』と、勇ましい船唄と共に大鵬が垂天の翼の如き帆を捲き上げると、忽ち烈風を膨んで船は弦を離れた征矢(そや)の如く、澎湃たる怒濤を突切り、沛然たる猛雨を衝き、東を望んで駛り出しました。

文左衛門は帆柱の下にドツカリ座を占め、心に住吉大明神を念じつゝ、大磁石を振つて東西南北の針路を圖り、六人の船頭は持場々々に就いて、水夫楫取を指揮して命の限り風浪と戰つて居ります名も恐ろしき熊野灘を辛くゝ切り抜けて、鳥羽の沖に差かゝつた頃は風いよ〳〵強く、浪ます〳〵荒く、漆の如き天地の闇に怒れる白象の群のやうな大浪が、頽れては起り、起つては頽れ、五百石積の巨船もさながら木の葉のやうに翻弄されて、乗組の十三人は精も根も盡きんとする位ゐ疲れ果てゝしまひました。

文左衛門は傳家の寶刀を鞘拂ひして額に押し當て、聲高らかに住吉大明神を念じ、『吹けや難風、狂へや荒浪。帆柱を折れ、船を碎け。』と呼ばはり〳〵、一行の勇氣を鼓舞して居ります。やがて熊野灘の險を過ぎ、鳥羽の浦の難所を越え、左手に伊良子岬を望んで渥美半嶋の沖を轉ぶやうに駛り、差かゝつたのは遠洲灘七十五里の大難所。三州吉田の沖合に到つた時には、東西南北より逆捲き返す狂瀾は、怒號咆哮して帆柱を呑み、車輪を流すが如き大雨は舷を打ち碎く。暴風は帆柱を折り、怒濤は舵を捲き、黑白(あやめ)も分さぬ大海原の眞只中で、幽靈丸は茲に進退の自由を失つてしまひました。

此時は既に水夫梶取は奔命に疲れて胴の間にゴロ〳〵轉がり荒海を棲家のやうにして「幾度かの難船にも出會つたことのある六人の船頭も、遂に堪り兼ねてそこへ倒れてしまひました。」流石に氣丈の文左衛門も今は身神惱亂して、

『アゝもう駄目だ、俺ぃ運もこれ限り、一同の生命もいまが最後だ。覺悟を定めて船と一緒に沈んで呉れ。』

と、一聲高く叫んだが、後はもう無我夢中、死んだのだか生きて居るのか人事不省に陷つてしまひました。

紀文の成功は紀文の努力奮鬪に由ると云ふ人があります。カアネギーは自分の致富は努力奮鬪の結果だと申しました。成る程、紀文もカアネギーも、努力奮鬪したに違ひはありますまい然し努力奮鬪だけが尊い譯でも無ければ、努力奮鬪だけで富の積まれる譯でもありません。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○の○○○。つい先頃、日本の郵便事業が五十年に達したと云ふので、功勞者が表彰されなどいたしましたが、其中には四十年間も郵便配達をして居る者もありました。カアネギーが如何に努力奮鬪しても、單に賃銀勞働者として努力奮鬪したに止まつたならば、彼は終生、郵便配達か何かで終つたでありませう。卽ち紀文にしろ、カアネギーにしろ、或は其他の如何なる資本家にしろ、その暴富を積み、成金となり、ミリオネヤア若くはビリオネヤアとなる事を得たのは、悉く他人の努力を賃銀で買ひ他人に働らかせて其の剩餘價値を掠奪するのでありまして、賃銀を得て他の爲に働らいて居る限り、努力奮鬪は決して所謂成功致富の階段となるものでは無いのであります。

## 七

十三人を乘せた幽靈丸は、風浪に揉まれ〳〵て、海中に漂つて居りましたが、幸ひにして難破もいたしません。其中に浪風もやゝ靜まり、雨も晴れたので、一同やつと人心地が着いて見ると、船は依然として矢のやうに流されて居ます。

『ヤア、有難い、まだ生きて居る。然し、こゝは一體どこだらう、日本の内だらうか、それとも天竺だらうか。』

『さあ何處だか分らねえが、それよりも和歌の浦を出帆してから、今日は幾日目になるのかなア。』

『何しろ、天も海もまつ暗闇だつたし、それからは人心地が無かつたから、幾日流されて居たのか、全然譯が分らねえ。誰か船櫓へ上つて見ろ、陸が見へるかも知れねえぞ。』

そこで大名の九郎兵衛が船櫓へ上つて、四方を眺めて居ると左手の方に微かに見へたのが見馴れた下田の高燈籠です。

『オヤ〳〵、あれア確かに下田の高燈籠らしいが、それとも俺の眼の迷ひかしら。庄之助、チョツと來て見て呉れやい。』

『ヨシ來た。俺が見りや間違ひつこはねえ。』

今度は舵の庄之助が上つて來て、暫らく見て居りましたが、歡極まつて覺えず泣き出しました。』

『イヤー、確かに下田へ入つた。あれア下田の高燈籠に違ひねえ。旦那ア、お喜びなせえ、皆なも安心しねえ、船はいつの間にか伊豆の沖へきたゾ――。』

さあ之れを聞いたので、今まで夢中でウン〳〵呻つて居た連中も、急に元氣が出ました。文左衛門はこれも偏へに住吉大明神の加護の在るところと、天を拝し地を拝して幸運を喜びました。

『さあ一同、こゝが下田の沖なら、品川まではもう一と息だ、疲れたらうが奮發してやつて呉れ。』

『エー宜うございます、どうも運勢の向いて居る人にや叶はねえアレ程の荒れに會ひながら、破船もしねえでよく此處まで來切つたものだ。』

一同は夢に夢みる心地で、互ひの幸運を祝し合ひ、初めて蘇生の思ひをいたしました。かうなると乘組の一行は勇氣百倍、一たん下田港へ入つて飲料水を汲み取り、相模沖も難無く越して夜の白々あけに品川に入りました。和歌の浦を出帆して以來滿二晝夜十月廿八日の朝はじめて江戸に入る事が出來ました。それから直ぐに、見本の蜜柑を艀に積んで品川の船宿港屋七兵衛方に參り、主人に面會して來意を告げました。

『それはどうも偉いことで、何しろ此の時化は近年にない事で多町や四日市の問屋方は、もう目の前に鞴祭りが近づいて居るのに、紀州から一隻も蜜柑船が入らぬと云ふので、落膽して居りました。其處へアナタ方がお出になつたと云ふのは、問屋に取つてはまるで救ひの神さま見たいなもの、早速通知を出しませう。』

港屋七兵衛は、初めは一行の異様な風體に驚き、後には一行

の冒險と冒險とに感嘆し、すぐさま使ひを出して、神田の須田町、多町、日本橋の四日市と、問屋仲間へすつかり此事を觸れさせました。何しろ江戸中の問屋連は、十一月八日の鞴祭りと云ふ年中行事が目の前に迫つて居るのに、肝腎要めの蜜柑が一と籠も入つて來ない、と云つて何年の得意先や、出入の屋敷へは是非とも納めなければならぬ。こんな時にや、手に入りさへすればいくらでも出すのだがと、毎日天ばかり仰いでは嘆息を吐き合つて居た場合ですから、一同渡りに船と早速金を懷中にして、駕籠を飛ばして乘込んで參りました。

偖て一同の挨拶がすみますと、文左衛門は問屋仲間に向ひまし、

『皆さんに申し上げます。私は五十嵐文左衛門、父の代までは度々江戸へ蜜柑を積み込んで參つて、皆さんとお取引を致した事があるそうですが、私は今度初めて入船たしました。どうぞ之れからは先代同樣、引立の程を願ひます。』

『いや五十嵐さん、此の大時化の中をよくまあお乘込みなすつた。何しろ此の通り沖が惡いものですから、黄色い蜜柑の色と云つては、江戸八百八街に一粒でも見ることは出來ず、實は問屋が變つて毎日青息吐息で居たのです。時に今年は、海は近年に無い時化だが、蜜柑は大當りだと云ふことですが如何です。』

『どう致しまして、近年に[illegible]と云ふもの、こんな蜜柑の出來の惡い年は覺えません　蜜柑らしい蜜柑は、私が積んで參つた品物だけで、後にはもう腐つたのが少しばかり殘つて居るだけです。』

『へエー、そうですと、定めし仕切は高いでせうナ。』

『左樣です、何しろ私共は生命がけで參つたのですから、少しはお高うございます。一と籠銀三十匁で宜しかつたら。蜜柑は三萬八千籠ございますから、どうかいゝだけお引取下さい。』

文左衛門にかう云はれて、問屋連中はアットばかりに呆れ返り、しばらくは開いた口が塞がりませんでした。

## 八

それはそうでせう。銀三十匁と云へば金二分です。何しろ其頃は、二朱の米を買ふと持てない位ゐあつたと云ふのですからこれには流石の問屋仲間が驚いたのも無理はありません。

『へエ、一と籠三十匁！而タッタ一と籠ですか。いや五十嵐さん、アナタの仰有ることを決して無理とは思ひませんが、然し例年は大概一と籠十匁、それを三十匁とはどうもチト高過ぎるやうに思はれますが、もうそれよりは引けませんか。』

『これはアナタ方のお言葉とも覺えません。本日程、平生の相場から見たら、一と籠三十匁は仰せ迄もなく高いに相違ありま

『ヤア、有難い、まだ生きて居る。然し、こゝは一體どこだらう、日本の内だらうか、それとも天竺だらうか。』

『さあ何處だか分らねえが、それよりも和歌の浦を出帆してから、今日は幾日目になるのかなア。』

『何しろ、天も海もまつ暗闇だつたし、それからは人心地が無かつたから、幾日流されてゐたのか、全然譯が分らねえ。誰か船櫓へ上つて見ろ、陸が見へるかも知れねえぞ。』

そこで大名の九郎兵衛が船櫓へ上つて、四方を眺めて居ると左手の方に微かに見へたのが見馴れた下田の高燈籠です。

『オヤ〳〵、あれア確かに下田の高燈籠らしいが、それとも俺の眼の迷ひかしら。庄之助、チョツと來て見て呉れやい。』

『ヨシ來た。俺が見りや間違ひつこはねえ。』

今度は舵の庄之助が上つて來て、暫らく見て居りましたが、歡極まつて覺えず泣き出しました。』

『イヤー、確かに下田へ入つた。あれア下田の高燈籠に違ひねえ。旦那ア、お喜びなせえ、皆なも安心しねえ、船はいつの間にか伊豆の沖へきたゾ――。』

さあ之れを聞いたので、今まで夢中でウン〳〵呻つて居た連中も、急に元氣が出ました。文左衛門はこれも偏へに住吉大明神の加護の在るところと、天を拜し地を拜して幸運を喜びました。

『さあ一同、こゝが下田の沖なら、品川まではもう一と息だ、疲れたらうが奮發してやつて呉れ。』

『エー宜うごぜえます、どうも運勢の向いて居る人にや叶はねえアレ程の荒れに會ひながら、難船もしねえでよく此處まで乘切つたものだ。』

一同は夢に夢みる心地で、互ひの幸運を祝し會ひ、初めて蘇生の思ひをいたしました。かうなると乘組の一行は勇氣百倍、一たん下田港へ入つて飲料水を汲み取り、相模沖も難無く越して夜の白々あけに品川に入りました。和歌の浦を出帆して以來滿二晝夜十月廿八日の朝はじめて江戸に入る事が出來ました。それから直ぐに、見本の蜜柑を艀に積んで品川の船宿港屋七兵衛方に參り、主人に面會して來意を告げました。

『それはどうも偉いことで、何しろ此の時化は多町や四日市の問屋方は、もう目の前に鞴祭りのに、紀州から一隻も蜜柑船が入らぬと騒[illegible]の[illegible]りました。其處へアナタ方がお出になつた[illegible]と[illegible]取つてはまるで救ひの神さま見たい[illegible]せう。』

港屋七兵衛は、初めは一行の[illegible]

の豪膽と冒險とに感嘆し、すぐさま使ひを出して、神田の須田町、多町、日本橋の四日市と、問屋仲間へすつかり此事を觸れさせました。何しろ江戸中の問屋連は、十一月八日の鞴祭りと云ふ年中行事が目の前に迫つて居るのに、肝腎要めの蜜柑が一と籠も入つて來ない、と云つて何年の得意先や、出入の屋敷へは是非とも納めなければならぬ。こんな時にや、手に入りさへすればいくらでも出すのだがと、毎日天ばかり仰いでは嘆息を吐き合つて居た場合ですから、一同渡りに船と早速金を懷中にして、駕籠を飛ばして乘込んで參りました。

偖て一同の挨拶がすみますと、文左衛門は問屋仲間に向ひまし、

『皆さんに申し上げます。私は五十嵐文左衛門、父の代までは度々江戸へ蜜柑を積み込んで參つて、皆さんとお取引を致した事があるそうですが、私は今度初めて入船いたしました。どうぞ之れからは先代同樣、引立の程を願ひます。』

『いや五十嵐さん、此の大時化の中をよくまあお乘込みなすつた。何しろ此の通り沖が惡いものですから、黄色い蜜柑の色と云つては、江戸八百八街に一粒でも見ることは出來ず、實は問屋が變つて毎日青息吐息で居たのです。時に今年は、海は近年に無い時化だが、蜜柑は大當りだと云ふことですが如何です。』

『どう致しまして、近年に無い大外れで、私の物心ついてからと云ふもの、こんな蜜柑の出來の惡い年は覺えません　蜜柑らしい蜜柑は、私が積んで參つた品物だけで、後にはもう腐つたのが些しばかり殘つて居るだけです。』

『へエー、そうですと、定めし仕切は高いでせうナ。』

『左樣です、何しろ私共は生命がけで參つたのですから、些しはお高うございます。一と籠銀三十匁で宜しかつたら。蜜柑は三萬八千籠ございますから、どうかいゝだけお引取下さい。』

文左衛門にかう云はれて、問屋連中はアツトばかりに呆れ返り、しばらくは開いた口が塞がりませんでした。

## 八

それはそうでせう。銀三十匁と云へば金二分です。何しろ其頃は、二朱の米を買ふと持てない位ゐあつたと云ふのですからこれには流石の問屋仲間が驚いたのも無理はありません。

『へエ、一と籠三十匁！　兩タツタ二た籠ですか。いや五十嵐さん、アナタの仰有ることを決して無理とは思ひませんが、然し例年は大概一と籠十匁、それを三十匁とはどうもチト高過ぎるやうに思はれますが、もうそれよりは引けませんか。』

『これはアナタ方のお言葉とも覺えません。本日程、平生の相場から見たら、一と籠三十匁は御世辭もなく高いに相違ありま

せんが、マア私共の扮裝から考へてみて下さい。これが凪日和の航海でしたら、誰れが醉狂ナ、こんな死神みたいな裝束をつけ、幽靈丸なんて云ふ船印しを立てゝ、生命がけで此の難風を乘切つて來るものですか。江戸は畏れ多くも將軍さまのお膝元、金にさへ飽かせば日本は愚か、唐天竺の食物だつて口に入れられる。その土一升金一升とさへ云はれる繁昌な都に、如何に海が時化て居るとは云ふ條、千籠や二千籠の蜜柑は馬の背に附けてたつて持つて來られさうなもの、鞴祭りには是非とも無くてはならぬ品物が、この廣い八百八街に一と粒も無いとなつたら青物問屋をして在つしやるアナタ方のお顏にもかゝはりませう。そう思へばこそ、生死を眼中に置かず、生命を的に乘出して參つたので、何も私一人が儲けやうと云ふじやありません。アナタ方にも儲けて頂きたいからなのです。』

『イヤ、アナタのお話はよく判りました。判りましたが、然し兩に二た籠では、如何とも手が出せません。到底も吾々共では御相談に乘り切れません。』

『そうですか、相場が高いから相場にならぬと仰在られゝばそれ迄、固より賣物買物ですから、何方へ苦情をもち込む譯にも參りません。三萬八千籠の蜜柑は殘らず品川沖へ抛り込んで、私が皆さんの脚下を見込んで、懸引をするやうな吝な男でないと云ふ證據を御覽に入れます。イヤ相模屋さん、ど手數をかけました。アヽア、江戸つ子つて者は、義に勇む任俠な肌合だと聞いて居たが、見ると聞くとは大した違ひだ。かう申したら、定めし愚痴と思し召すかも知れませんが、私共十三人が此の荒浪を乘り切つて參るには固より生命も捨てる覺悟、親兄弟や妻子と水盃を酌み交し、生きながらの死裝束、船の名さへも幽靈丸と改めて、引導まで受けて來たのも、一つには昔からの得意先、江戸の問屋さんに恥をかゝせない爲からでございます。成る程、蜜柑一と籠が銀三十匁と申し上げたら、高いと吃驚なさるのも尤もですが、一と籠々々に十三人の生命が籠つて居ると考へたら、もしや一と粒百兩だつて安い物じやありませんか。然しまあ、こんな事は云ふだけ野暮だ。さあ、仙八、庄之助、船へ戻るとしやう。』

文左衞門は氣焔萬丈、紀州訛りの啖呵に江戸つ子の荒膽を取挫いて、上乘の船頭六人を從へ、席を蹴立てゝ立ち歸らうといたします。流石の問屋連もグウの音も出ず、默然としてさし俯向いて居りましたが、此時、一隅に聲があつて、立ちかゝつた文左衞門を呼び止めました。

『アヽ、もし／＼、五十嵐さんとか云ひなすつたネ。いや失禮ながら、お若いに似はないゝ御氣象だ。私は神田多町の青物問

屋、丁字屋惣兵衛と云ふ者だか、今アナタのお話を承はつて實の所、江戸つ子グウの音も出ません。成る程、蜜柑が兩に二た籠と云つたら馬鹿な相場だが、アナタ方の生命を買ふと思へば、こんな安い買物はありやしない。此儘アナタ方を歸しちやア、今後他國の方に對して江戸つ子が幅つたい口が利けない。宜うがす、私が千籠引取りませう。さあこゝへ百兩手付を打つ、後金の四百兩は荷が多町へ入ると、同時にお渡ししますから。』

かう云つたのは、年頃六十格好の皮肉そうな親爺、百兩包みを抛り出し、ヘンどんな物だいと云つたやうな顔をして、煙管を脂下りにくはへながら、問屋仲間をヂロ〳〵眺めて居ります。

『ヘエ、有難う存じます。私も一旦かう云つたからには、一と籠千兩でも賣るまいと云ひましたが、今のやうに仰有つて頂くと、私もまことに賣り榮がいたします。それではすぐに、荷を積み出すことにいたします。』

『アゝ、五十嵐さん、一寸お待ち下さい。私は神田多町の青物問屋で、西田金兵衛と申しますが、實は先程、相場を聞き洩らしましたが、一と籠おいくらと仰有いましたかナ。』

『エゝ、一と籠銀三十匁で、兩で二た籠……。』

『ナーンだ、一と籠タッた二分ですかえ。宜しうございます、何も丁字屋ばかりが多町の問屋と云ふ譯じやありせません、私は三百兩だけお買ひ申しますから、六百籠積みをして下さい。』

『ヘエ、有難う存じます。』

『もし〳〵五十嵐さん、私は西田屋與八で、一と籠いくらでしたつけナ。……何だ篦棒ナ、たつた二分ですかい。そりア安いナ、私はまた一と籠千兩と云つたのかと思つた。』

鼻つ張の強い江戸つ子が揃つたのですから、外に負けちやア家の睨態にかゝはると、吾も五百籠、俺も三百籠と、三萬八千籠の蜜柑が忽ちのうちに、綺麗にハケてしまひました。

## 九

文左衛門が蜜柑問屋から買ひ込んだ時には、一と籠が一匁、それを江戸の青物問屋に賣り込んだのは、一と籠三十匁。恰ど三十倍の高値に賣れたのですから、まるで小判小粒の雨が降るやうなもので、文左衛門は文字通りに一攫萬金の暴富を積むことが出來ました。

かやうに、紀文が後代百萬兩の大分限者となつた抑々の根底は、實に此の蜜柑船の成功に依て築かれたものでありますが、これは決して紀文一人の努力奮闘に依て作られた物では無く、實に數萬人の社會的勞働の結果に外ならぬのであります。

一顆の蜜柑が賣るにも、そこには數代に亘れる人類の勞苦と、智慧と、技術とが含まれて居ります。只一隻の船舶の構造の中にも、そこには有史前からの人類の社會的遺産が蓄積されて居るのであります。

また若しその存在の痕跡すらも、深奥なる人類學と、考古學と、地質學との知識を藉り來るに非ざれば、夢想だもされないやうな吾人の未開曚昧な祖先が、湖沼河海に沿ふてその不格好な、粗雜な獨木舟を操つたので無かつたならば、和歌の浦の船頭と雖も巨船大船を操縱して、萬里の波濤を乘切ることは到底不可能であつたでありませう。

若し更に、日本に當時來た鞴を使用する工業が發達して居らず、或は鞴を使用する職人が、鞴祭りに蜜柑を撒いて祝ふと云ふ社會的習慣を有して居なかつたならば、紀文一代の大冒險事業も畢竟無駄骨折に終つたかも知れません。少くとも、一擲萬金の巨富を積むことは出來なかつたでありませう。

即ち、すべての富は、社會全體の綜合的協力に依て成るものであつて、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

紀文が暴富を積んだのは、當に此の社會的の富を壟斷獨占したからのみではありません、彼はまた、需要供給の……に利用して、蜜柑の城も必要な場合に、蜜柑が絶無なので困り抜いて居る江戸へ蜜柑船を乘り入れ、此方の云ひなり次第の價で賣り付けたからこそ、あのやうな奇利をも收められたのであります。即ち彼は江戸の青物問屋が、如何に脚下を見られても抗ふことの出來ぬ立場に在ることを附け込んだので、その三十倍の奇利を博したのも、畢竟、彼が相手の商賣上の生殺與奪の權を握つて居たからに外ありません。

然し、紀文の此のやり口は、之を當代の資本家のやり口に比すれば、まだ〲罪の輕い方であります。紀文の方は、暴風難船と云ふやうな不可抗力の爲めに、物資の欠乏を告げて居る狀勢を利用したので、供給が需要よりも少なければ相場が上るのは自然ですから、之はまだ是認すべき餘地もあります。然るに當今の資本家は故意に供給を需要よりも減して、人爲的に相場を釣上げて居ります。

昔、佛蘭西にフウリエーと云ふ人がありました。或る時、不作が續いて小麥の値が、暴騰し、多くの人々は、パンを食ふことが出來ないで馬鈴薯で餓を凌いで居りましたが、其時、マルセイユ港の穀物商の倉庫には小麥が一杯積み上げてあつたのみか、外國から輸入した澤山の小麥は、ワザ〲海水をブツ掛け

て腐敗させられて居りました。フウリエーは恰ど此の腐つた小麥を海中に捨てる役目を命ぜられ、社會の多數人類が食ふべき小麥が無くて餓えて居る時、却つて其の相場を釣上げる爲に澤山の小麥を海中に捨てると云ふ、兇悪奇怪なる現象を見て大に發憤し、遂にその一生を社會主義運動の爲に献げたと云ふ事でございます。

## 一〇

然し、これは何も當時の佛蘭西の穀物商の奸策ばかりでは無く、また獨りフウリエーのみの慷慨には止まりません。方今、彼の資本家と稱する者、何者かこの佛蘭西穀物商の奸策を繰返さゞらん。また憂國慨世の志を有する古手、誰かこのフウリエーの慷慨を抱かざらんやであります。

曾て〇〇〇〇が、朝鮮人參の相場を人爲的に釣上げんが爲に數十萬斤の人參を朝鮮で燒却したと云ふ話は事古りたり。昨春來、經濟的恐慌の大浪が日本を襲ひまするや、紡績業の各會社は一齊に操業短縮を斷行して、綿絲の生産を制限いたしたではありませんか。然らば、社會の多數民衆は織物に有り餘つて居るか、安い綿布にさへも有り餘つて居るかと申せば、決してそうでない。多くの人は、一枚の着更にさへも事を缺いて居るのであります。

然し實のところ、資本家どもに取つては、社會の多數者が困らうと困るまいと、そんな事はどうでも宜いのであります。彼等はたゞ自分達が儲けさへすれば宜いので、物資を多く生產して供給が需要を超過するになれば、從つて相場が下落する、さすれば儲けが薄くなると云ふところから、故意に生産を制限する。さうして、人爲的に、不自然に相場を釣上げて、自分等の懷中を肥すことに努めて居るのであります。

世間では、勞働者のサボタアヂュをば、ヤレ怪しからぬとかヤレ不道德だとか云つて非難いたします。然し、此の資本家の社會全體に對して、絕えず加へて居るところの組織的な大サボタアヂュに對して、曾て一言の非難の聲の物だけよりないのは何故でありませうか。また曾て斯の如き資本家の組織的な、大仕掛な奸策を目擊して、尙且つ現代の經濟組織、社會制度に疑惑を抱き、彼のフウリエーの如く身を挺して、社會改革の事に當らんとする相手の輩出せざるは、抑々何故でありませうか。

イヤ、これは亦、つい議論に身が入り過ぎて、話が横道へ逸れてしまひました。偖て、文左衞門は當初の希望どほり、一獲萬金の奇利を博しました上、積んで參つた紀州石を賣つた所がこれでまた二百兩の儲けがありました。そこで、約束通り船頭に後金の廿五兩を支拂つた上、此の石の賣上二百兩と云ふも

は酒手(さかて)として悉皆(すつかり)船頭に分配し、それから一行を率ゐて吉原へ繰り込み、底抜け騷ぎを演じました。此時、幇間が作つて座興を添へたのが、彼の有名な『沖の暗いのに白帆が見える、アレは紀伊の國蜜柑船』と云ふ俗謠だと申します。

かうして、文左衞門は大に社會政策を施して勞働者をゴマ化し、巨額の剩餘價値を掠奪いたしましたが、何處までも拔け目の無い彼は、歸航(かへ)りは更に江戸で買ひ込んだ鹽鮭を、大阪へも ち込んで賣つたので再び巨利を占め、めでたく故郷の和歌の浦へ歸着いたしました。

これから文左衞門が江戸に出て、家號を紀伊の國屋と稱し、奇才長五郎を得て龍に翼を添へたるが如く、廣告術を利用して冠下香を賣擴め、天明の振袖火事に際しては材木の買占めを行ひ、遂に一代にして百萬長者となるお話でございますが、それはまた追つて申し上げると致します。何しろ近世的資本家の先驅者たる紀文の一代記が、今日でも講釋席で平民階級に歡迎せられ、○○者の軍歌とも云ふべき『沖の暗いのに』の俗謠が、勞働階級の酒宴に唄はれるのですから、日本の資本家制度は當分泰平無事でございませう。





# 鰯屋の嫁

白柳秀湖

## （一）若旦那の失踪

享保十七年の春、日本橋本町三丁目の藥種問屋、鰯屋七兵衞は天にも地にも一粒種の伜七三郎を勘當といふことにして親戚一統に披露してから、とかく氣分がすぐれず、店のことは、すべて大番頭の藤兵衞に任せて、自分は奥の一間に引籠り、ボンヤリとして深き吐息に暮れるばかりであつた。時々は氣をかへて、書棚から好きな俳諧の本を取出して見ることもあるが、心は何時の間にか伜七三郎の身の上に飛んで、想像の絲はそれからそれへと限りなく、明日にも忌はしい知らせがあつて、何處その淵川にあさましい姿を見せられるのではないかと、思ふにつけ、案じるにつけ、當年二十一歳といふ立派な若ものの姿は眼に映らず、客間の壁に悪戯を書いたと云つては呼付けて叱り、丁稚にせがんで隣家の屋根の雀の巣を取らせたと云つては呼付けてたしなめた頑是のない七三郎の、フトした後姿や、横顔ばかりが眼にチラ付いて、初めから恁んなことになると知れて居たら、あの時もアンナにひどく叱るのではなかつた、あの事もアンナにやかましく咎立てするではなかつたと、世間への手前、數多ある奉公人へのみせしめに、平常(ふだん)うはべに平氣を装つて居るだけ、只一人居て物思ふ時は意地も張りもなく、心ゆくばかり親の愚にかへつて、不覺の涙にくれるのであつた。

七兵衞の心を汲んで、七三郎の出奔を我ことのやうに歎き悲しむのは、番頭の藤兵衞であつた。七三郎が出店の鰯屋市兵衞方から屆いた二百兩の現金を引出して吉原に走り、此春の初會から深く思ひ思はれた若葉屋の九重といふ花魁を請出して、姿

を喰ましたのは正月廿七日のことであつた。二百両といへば鍋屋の店にとつて、別に取立てていふほどの大金でもない。又、番頭の藤兵衛は今が分別盛り、働き盛り、浮世の酸いも甘いも噛み分けて恁うした事件の解決には、打つてつけたやうな男である。若し七三郎の行方が分つて居さへすれば、もとより人並み優れて聰明な天性ではあり、よそながら監視をして、急がず、焦らず、徐かに事件を解決するにさしたる困難があるとも思はれぬ。七兵衛とてもそれほどに心を痛める必要はないのである。處が何うしたものか七三郎は九重を請出して、駕籠で吉原を出たまゝ行方が知れない。尤も此若菜屋といふ店へは藤兵衛も正月の九日に一度七三郎を迎へに出向いたことがあり、樓主喜兵衛とはその折、顔を合せたこともあるので、七三郎の失踪後は、藤兵衛自身の計らひで二三度喜兵衛を訪ね、兩人の行方について心あたりを尋ね、其後の消息について聽きもしたが、一向に様子が分らない。それかと云つて喜兵衛といふのは商賣柄に似ぬ感心な心がけの男で、七三郎を本町三丁目鍋屋の若旦那と承知しながら、九重を僅か六十五両で手放して居る。段々様子をきいて見ると、此九重といふ女は、享保十六年の甲州屋伊兵衛といふ女衒の手から一年の奉公を得心で、七年の年期に陥め込まれたもの、その時喜兵衛が悪漢の手に渡したのが六十五両、ツマリ原價で七三郎の手に渡したのである。尤も之については九重といふ女が、恁ういふつとめをさせるには餘りにシツカリしすぎて居て底氣味の悪いといふ筋もないではなかつた。年はその時に十七、氣質もよく、容貌は吉原五丁町にも多くあるまいといふほどの美人、若菜屋ぐらゐの中籬に置くのは惜しいと云はれたほどのものであるが、如何にも人間が聰明でハツキリしすぎて居る。それが一年の奉公といふのを、得心づくで賣られて來た。處が喜兵衛と女衒との約束は七年六十五両といふことになつて居た。初めは親といふ觸出しであつたのが段々きいて見ると親でも何でもない。女は豐後島元濱町の大工源兵衛の娘たみといふものであるが、源兵衛夫婦は死に、弟の源次郎は、仔細あつて目下行方不明といふことである。して見ると此賣買には親の判がなく、當人も七年の奉公といふのは得心の上でない。ツマリ悪漢が、おたみと喜兵衛との間に這入

つて、巧く騙つたのである。之が普通の場合なれば、おたみの方が樓主の厭迫で泣寢入りになつて了ふのであるが、最初の掛合がひどく鮮やかで、シッカリして居たので喜兵衞も舌を捲いて驚き、之は容易ならぬ女である。恁んな女を無理に引とめて置いても、番所沙汰にでもなれば、規則違犯で結局此方が損をしなければならぬ。好い客があつて、請けさうといふことになれば、何でも損をせぬ限り早く手放して了ふ方がよいと思つて居た矢先、不思議な縁で初見世の日に鍋屋の七三郎と出會ひ、互に思ひ思はれて、いよ〳〵根引といふ相談になつたのである。之が普通の場合なれば代物はよし、鍋屋の若旦那といふのでウンと吹かけるのであるが、喜兵衞は至極の好人物であるから、六十五兩一文も吹かけずにおたみを七三郎の手に渡したとのことである。その邊から考へて見ても、若菜屋が七三郎の行方を知つて隠立てして居るものとは何うしても思はれない。

二百兩持出した金の中、六十五兩で九重のおたみを身請けし、三十五兩をその身祝ひとして、家中の者に振り撒いたといへば、殘る所は何ほどもない。百兩足らずの金を懷中して足弱を連れ、七三郎は今頃何處をうろ付いて居るか。道中で惡ものの手にかゝり、女を奪られた上に、自分は斬殺されても了つたのではないかとは、七兵衞も藤兵衞もひとしく心に案じ煩ふ所であつた。

## （二）大江戸の夜

鍋屋には大阪に親類がある。七三郎が江戸に居ないとすれば、一時大阪に身をよせて、此處から詫言を持込んで來るのに相違ないと、藤兵衞は先廻りをして大阪の親類に赤紙の飛脚を立てたけれども、大阪からの返事には、七三郎は未だ此地に入込んだ樣子もない。若し何處からかたよりでもあつたら直に知らせるといふ返事が屆いてから、十一月の末までに、耳よりなたよりと云つては一度もなかつた。よもや〳〵と我と我想像の綱を斷ち切つて七三郎の無事を信じようとした七兵衞の心は暗くつなた。何も知らぬ丁稚小僧の眼にも此頃の七兵衞はメッキリ老込んで見えた。藤兵衞は時折、音もなく奥の間に吸込まれてゆく七兵衞のさみしいうしろ姿を見送つては、帳場のかげにソッと顔をそむけるのであつた。

十一月の末、乾き切つた西風が、夜の大路に白い砂埃をたてて軒の看板をキイ〳〵と鳴らす時、店の向ふ前に家を持つて居る藤兵衛の女房が、潜戸をガラ〳〵とあけて這入つて來た。店は今蔀を下したばかりで今日の勘定の最中である。

『御免下さい。』

『オヤ、御支配人の御内儀さん、何うぞ此方へ御上り下さいまし。』

『イエ一寸宿に用事がありまして……』

藤兵衛は帳場から此樣子を見て、

『今一寸手が離されませんよ。用なら此方へ上るが好い。』

『アノ急用が出來ましたから恐入りましたが一寸此處まで御顏を……』

『ナニ、急用だと、此勘定の最中を見かけて困るぢやないか。』

『それがアノ一寸大變な用事で……』

『ナニ大變!』

藤兵衛は起つて店頭まで出て來る。女房は藤兵衛の耳に口を寄せるやうにして小聲になり、

『一寸大變で御座いますよ。アノ若旦那がボロボロの打扮をしてお歸りになりましたよ。』

『エ! 歸つた! 女も一緒か。』

『一緒處ではありませんよ。女は道中で惡漢に攫はれて了ひ、若旦那は身ぐるみ脫がされて命から〳〵、ヤツト江戸へ著いたんださうですよ。』

『ウーム、大方そんなことだらうと思つて居た。オイおまつ! 今が大切だ。決して甘い顏を見せてはならんぞ。今勘定を仕舞ふと己れが行つて樣子を見た上で、ミツチリ御意見を申上げるから……』

『宜しう御座います。』

『奧の間へ通して行燈を暗くして置いて與れ。涙を見せては御意見が利かねえ。』

藤兵衛は指圖をして女房をかへす。おまつは一足先にかへつて、

『若旦那、只今お店へ參りましたら、藤兵衛は一寸魚河岸まで參りましたさうで、追付け歸りませうから、マア奧の間でお待

ち下さいまし。其處に御出でになつて、ヒヨット知つたものでも參るといけません。』

　おまつはいそ〳〵として行燈を奥の間に運び、心を搔き立てるやうな振りをして、態と燈心を一本にした。間もなく藤兵衛は歸つて來た。

『オヽ大分寒くなつて來た。又、そろ〳〵半鐘の音で起されるかナ……おまつ！　門口はモウ閉めても好いかエ。』

『アノ貴方一寸お待ち下さいまし。今お客様がお見えになりますから……』

『お客様つて何誰だエ。』

　藤兵衛は平氣な顔をして奥の間に這入つて來た。七三郎は悄然として行燈のかげにうなだれて居たが、藤兵衛の姿を見ると、ピッタリ疊に手をついて、

『御免下さいまし。』

『何誰ですか、大分晩いではありませんか。』

『ハイ、七三郎で御座います。』

『エッ！　若旦那ですか。マア今頃何しに御出でなすつた。見れば此寒空に襤褸一枚で顫へて御出でなさるぢやありませんか。』

　忠義な藤兵衛には是だけいふのが精一ぱいであつた。

『今もおまつに精しい話をしましたが、今年の一月、フトした心得ちがひから、帳場に個いた金を持つて吉原へ行き、女を身受けして上方へ行かうと、追手のかゝるのを恐れて態と中仙道にかゝりますと、途中惡漢どもに見込まれて、女も取られ、金も取られ、既に命も危い所をヤツとのことで或る人に助けられましたものゝ面目なさに江戸へはかへられず、恁んな淺猿しい姿になつて旅から旅へと門乞ひをして今日が日まで命を繋いで居ました。併し恁うして段々寒くなるにつけ、家のことが思出され、御父さんがなつかしくなつては矢も楯もたまらず、お前にモウ一度御詫をして貰ひ度いと、恥を忍んでこゝまでやつて來ました。今度といふ今度は身にしみて不孝の罪が恐ろしくなりました。モウ決して心得違ひはしませんから、何うか今一度お父様へお詫をして下さい。藤兵衛！　これ、このやうに賴みます。』

七三郎は芝居でするやうに掌を合はせて藤兵衛を拝んだ。藤兵衛は此處ぞと。

『コレ若旦那！　誰が貴方に上方くんだりまで行つて呉れと頼みました。鍋屋の若旦那ともあらうものが恁んな御姿に御成りなさるといふのも、元はといへばミンな貴方の御心柄です。縦令金は二百両でも、數多の奉公人を召使つて居るお店で、若旦那が先に立つて持逃げの手本を御見せになり、それを親御が知らぬ顔で御出でになりましたのでは、一日も取締がつきませぬ。コレ若旦那！　よく物を考へて御覧なされ、親旦那がア、してまだ老朽ちたといふ御年でもないのに、四方八方からうるさく勧められる後妻をお持ちなされず、不自由を忍んで御出でなさるといふも、ミンナ貴方が可愛いからではありませんか。その可愛い貴方を勘當して、芝の御親類から和三郎様といふ赤の他人を御養子に迎へようとまで御決心をなされたといふのは、ヨク〳〵のことではありませんか。それほどまでに御立腹のはげしい親旦那へ、私風情が何を申上げたとて、何で御取上げ御座いませう。私はもう存じません。貴方を此處へ御上げ申したといふことが知れましたら、それだけでもどんなめをうけるか知れません。サア人目にかゝらぬ中、サッサと御歸りなさい。そんな見すぼらしい打扮(みなり)をして、鍋屋の暖簾にもかゝります。モウ〳〵貴方のやうな方は首を縊らうと、身を投げて……』

女房のおまつは餘りのことに聽きかねて藤兵衛の袖を引いた。

『モシ貴方！　それではアンマリ……』

『エ、入らぬことだ。打捨つて置きなさい。……ネエ若旦那！　貴方のやうな方はモウ首を縊らうと、身を投げて死なうと勝手になさるが好い。私は存じません。』

藤兵衛の聲は次第に顫へを帶びて、トウトウ涙聲になつてしまつた。

『藤兵衛！　お前それは本心でいふのかエ。』

『本心とも〳〵貴方のやうなそんな打扮(みなり)をして、よくも〳〵此町内までやつて來られたものと思へば、腹が立つて腹が立つて口惜し涙がこぼれます。』

『お前までがそれほどまでに私のことを悪むで居るのたら、私

はモウ死んで了ふより外に途はない。今日で三日御飯を食べないのだから、併し私の死んだ後は、御父様のことを何分頼むよ。』

『貴方がそんなことを御指圖にならんでも私にとつては大切な御主人、忠義を盡すのは番頭の役目で御座います。』

突放されて七三郎は何か口答へでもするかと思ひの外、泣く泣く表の潜戸をあけ、破れ草履を引かけて悄々と出て行く姿は、旅で惡摺れしたものゝやうにも思はれない。藤兵衛はモウ胸が一ぱいになつて了つた。

（三）貞操論

外は星あかりに大路が白く兩側の大店は一軒殘らず蔀を下し、大戸を閉めてしまつて潜りの障子戸だけが、所々に淡暗い行燈の火を投げて居る。七三郎は藤兵衛の家を出て圓城の天水桶の下に佇み、しばらくは向ふ側のくゞり戸に映る『いはしや』の文字を見つめて居たが、やがて思入つたやうに、蹈まつて我家の方を伏し拜み、圓城の天水桶を足場にして庇の梁へ細帶かけ、アハヤ首を縊つて死なうといふ刹那、物蔭から此樣子を見で居た藤兵衛夫婦に[illegible]

る。

『若旦那！マア暫くお待ち下さい。』

『私はモウ死んで了ふ。』

『イヱ、私が惡う御座いました。何うぞ御勘辨をなすつて下さいまし。番頭の役目として一通りは氣強いことを申上げましたが、貴方の御心底の判りました上はモウ大丈夫で御座います。私が身に引受けて貴方の勘當のゆりるやうに致します。其の代り何卒是からは心を入れかへて親旦那に御心配をかけないやうにして下さいまし。』

『さういふ譯であつたかヱ。まことに色々心配をかけて濟みません。それでは何分よろしく御詫を申上げてお與れ。』

藤兵衛はそれから三七郎を家に入れて、沸いて居た鐵瓶の湯で顏を洗はせ、襤褸を脫がせて藤兵衛の着かへをきせると、根が大家の坊ちゃん育ちだけに、見ちがへるほど綺麗なものになつた。二月から十一月の末まで十ヶ月近くも乞食をして居たといふに何うして恁んな小ザッパリと美しくなるものかと、おま

七三郎は芝居でするやうに掌を合はせて藤兵衛を拝んだ。藤兵衛は此處ぞと。

『コレ若旦那！　誰が貴方に上方くんだりまで行つて呉れと頼みました。鰯屋の若旦那ともあらうものが恁んな御姿に御成りなさるといふのも、元はといへばミンな貴方の御心柄です。縦令金は二百兩でも、數多の奉公人を召使つて居るお店で、若旦那が先に立つて持逃げの手本を御見せになり、それを親御が知らぬ顔で御出でになりましたのでは、一日も取締がつきませぬ。コレ若旦那！　よく物を考へて御覧なされ、親旦那がア、してまだ老朽ちたといふ御年でもないのに、四方八方からうるさく勧められる後妻をお持ちなされず、不自由を忍んで御出でなさるといふも、ミンナ貴方が可愛いからではありませんか。その可愛い貴方を勘當して、芝の御親類から和三郎様といふ赤の他人を御養子に迎へようとまで御決心をなされたといふのは、ヨタ〳〵のことで厶りませんか。それほどまでに御立腹のはげしい親旦那へ、私風情が何を申上げたとて、何で御取上げださ御座いませう。私はもう存じません。貴方を此處へ御上げ申したといふことが知れましたら、それだけでもどんなに御咎めをうけるか知れません。サア人目にかゝらぬ中、サツサと御歸りなさい。そんな見すぼらしい打扮（みなり）をして、鰯屋の暖簾にもかゝります。モウ〳〵貴方のやうな方は首を縊らうと、身を投げて……』

女房のおまつは餘りのことに聴きかねて藤兵衛の袖を引いた。

『モシ貴方！　それではアンマリ……』

『エ、入らぬことだ。打捨つて置きなさい。……ネエ若旦那！　貴方のやうな方はモウ首を縊らうと、身を投げて死なうと勝手になさるが好い。私は存じません。』

藤兵衛の聲は次第に顫へを帯びて、トウトウ涙聲になつてしまつた。

『藤兵衛！　お前それは本心でいふのかエ。』

『本心とも〳〵貴方のやうなそんな打扮（みなり）をしてよくも〳〵此町内までやつて來られたものと思へば、腹が立つて腹が立つて口惜し涙がこぼれます。』

『お前までがそれほどまでに私のことを思むで居るのたら、私

はモウ死んで了ふより外に途はない。今日で三日御飯を食へないのだから、併し私の死んだ後は、御父様のことを何分頼むよ。』

『貴方がそんなことを御指圖にならんでも私にとつては大切な御主人、忠義を盡すのは番頭の役目で御座います。』

突放されて七三郎は何か口答へでもするかと思ひの外、泣く泣く表の潛戸をあけ、破れ草履を引かけて悄々と出て行く姿は、旅で惡摺れしたものゝやうにも思はれない。藤兵衞はモウ胸が一ぱいになつて了つた。

## （三）貞操論

外は星あかりに大路が白く兩側の大店は一軒残らず蔀を下し、大戸を閉めてしまつて潜りの障子戸だけが、所々に淡暗い行燈の火を投げて居る。七三郎は藤兵衞の家を出て圓城の天水桶の下に佇み、しばらくは〻ふ側のくゞり戸に映る『いはしや』の文字を見つめて居たが、やがて思入つたやうに、踊まつて我家の方を伏し拜み、圓城の天水桶を足場にして庇の梁へ細帶かけ、アハヤ首を縊つて死なうといふ刹那、物蔭から此樣子を見[illegible]姿で七三郎を支へる。

『若旦那！ マア暫くお待ち下さい。』

『私はモウ死んで了ふ。』

『イヱ、私が惡う御座いました。何うぞ御勘辨をなすつて下さいまし。番頭の役目として一通りは氣強いことを申上げましたが、貴方の御心底の判りました上はモウ大丈夫で御座います。私が身に引受けて貴方の勘當のゆりるやうに致します。その代り何卒是からは心を入れかへて親旦那に御心配をかけないやうにして下さいまし。』

『さういふ譯であつたかヱ。まことに色々心配をかけて濟みません。それでは何分よろしく御詫を申上げてお呉れ。』

藤兵衞はそれから三七郎を家に入れて、沸いて居た鐵瓶の湯で顏を洗はせ、襤褸を脱がせて藤兵衞の着かへをきせると、根が大家の坊ちゃん育ちだけに、見ちがへるほど綺麗なものになつた。二月から十一月の末まで十ケ月近くも乞食をして居たといふに何うして恁んな小ザッパリと美しくなるものかと、富

七三郎は芝居でするやうに掌を合はせて藤兵衛を拜んだ。藤兵衛は此處ぞと。

『コレ若旦那！　誰が貴方に上方くんだりまで行つて呉れと頼みました。鍋屋の若旦那ともあらうものが恁んな御姿に御成りなさるといふのも、元はといへばミンな貴方の御心柄です。縦令金は二百兩でも、數多の奉公人を召使つて居るお店で、若旦那が先に立つて持逃げの手本を御見せになり、それを親御が知らぬ顔で御出でになりましたのでは、一日も取締がつきませぬ。コレ若旦那！　よく物を考へて御覧なされ、親旦那がア、してまだ老朽ちたといふ御年でもないのに、四方八方からうるさく勸められる後妻をお持ちなされず、不自由を忍んで御出でなさるといふも、ミンナ貴方が可愛いからではありませんか。その可愛い貴方を勘當して、芝の御親類から和三郎樣といふ赤の他人を御養子に迎へようとまで御決心をなされたといふのは、ヨタ〳〵のことではありませんか。それほどまでに御立腹のはげしい親旦那へ、私風情が何を申上げたとて、何で御取上げが御座いませう。私はもう存じません。貴方を此處へ御上げ申したといふことが知れましたら、それだけでもどんなにめをうけるか知れません。サア人目にかゝらぬ中、サツサと御歸りなさい。そんな見すぼらしい打扮をして、鍋屋の暖簾にもかゝります。モウ〳〵貴方のやうな方は首を縊らうと、身を投げて……』

女房のおまつは餘りのことに聽きかねて藤兵衛の袖を引いた。

『モシ貴方！　それではアンマリ……』

『エ、入らぬことだ。打捨つて置きなさい。……ネエ若旦那！　貴方のやうな方はモウ首を縊らうと、身を投げて死なうと勝手になさるが好い。私は存じません。』

藤兵衛の聲は次第に顫へを帶びて、トウトウ涙聲になつてしまつた。

『藤兵衛！　お前それは本心でいふのかエ。』

『本心とも〳〵貴方のやうなそんな打扮をしてよく〳〵此町内までやつて來られたものと思へば、腹が立つて腹が立つて口惜し涙がこぼれます。』

『お前までがそれほどまでに私のことを怨むで居るのたら、私

はモウ死んで了ふより外に途はない。今日で三日御飯を食べないのだから、併し私の死んだ後は、御父様のことを何分頼むよ。』

『貴方がそんなことを御指圖にならんでも私にとつては大切な御主人、忠義を盡すのは番頭の役目で御座います。』

突放されて七三郎は何か口答へでもするかと思ひの外、泣く泣く表の潜戸をあけ、破れ草履を引かけて悄々と出て行く姿は、旅で悪摺れしたものゝやうにも思はれない。藤兵衛はモウ胸が一ぱいになつて了つた。

## （三）貞操論

外は星あかりに大路が白く兩側の大店は一軒殘らず蔀を下し、大戸を閉めてしまつて潜りの障子戸だけが、所々に淡暗い行燈の火を投げて居る。七三郎は藤兵衛の家を出て圓城の天水桶の下に佇み、しばらくは向ふ側のくゞり戸に映る『いはしや』の文字を見つめて居たが、やがて思入つたやうに、踞まつて我家の方を伏し拜み、圓城の天水桶を足場にして庇の梁へ細帶かけ、アハヤ首を縊つて死なうといふ刹那、物蔭から此樣子を見て居た藤兵衛夫婦は、ソレとばかり飛出して來て七三郎を支へる。

『若旦那！　マア暫くお待ち下さい。』

『私はモウ死んで了ふ。』

『イヱ、私が悪う御座いました。何うぞ御勘辨をなすつて下さいまし。番頭の役目として一通りは氣強いことを申上げましたが、貴方の御心底の判りました上はモウ大丈夫で御座います。私が身に引受けて貴方の勘當のゆりるやうに致します。其の代り何卒是からは心を入れかへて親旦那に御心配をかけないやうにして下さいまし。』

『さういふ譯であつたかヱ。まことに色々心配をかけて濟みません。それでは何分よろしく御詫を申上げてお呉れ。』

藤兵衛はそれから三七郎を家に入れて、沸いて居た鐵瓶の湯で顔を洗はせ、襤褸を脱がせて藤兵衛の着かへをきせると、根が大家の坊ちゃん育ちだけに、見ちがへるほど綺麗なものになつた。二月から十一月の末まで十ケ月近くも乞食をして居たといふに何うして恁んな小ザッパリと美しくなるものかと、おま

つは一寸不思議に思つたが、その時自分が臺所から持つて來た惣菜の殘りで、さもうまそうにガツ／＼と飯を食べて居る七三郎の姿を見ると、もとより生一本のおまつであるから、ア、勿體ない、可愛い子には旅をさせろといふのは玆のことだと譯もなく涙が流れて、何も考へる暇がなかつた。

藤兵衛は一刻も早く七兵衛に安心をさせようといふので、其夜の中に本店へ行つて、主人に會ひ、コツソりと今夜あつた事の一部始終を話す。七兵衛は涙を流して喜び、心の底までも打あけて、尚ほ行末のことなどいろ／＼と賴み入るのであつた。藤兵衛はそれから尚ほ七兵衛と明日の手筈まで洩れなく打合せて、其後はおそく家にかへつた。

翌る朝になると、七兵衛は親戚から店の重立つたものまで立會はせ、自分の面前で罰く將來を誓はせた上で豫定の如く勘當を宥した。鰯屋の店は急に春が來たやうな賑やかさにかへつた。

その年は事なく暮れて翌れば享保十八年の春となつた。七兵衛は藤兵衛と膝合せてそれとなく七三郎の素振りに注意して見るが、旅の辛さは餘程身にしみたものと見えて、その後は少しも浮々とした樣子がなく、身を入れて店の仕事を見習へる。ちやうど正月の七日の事である。支配人に一寸大旦那の部屋までといふので、藤兵衛が奥に通ると、七兵衛は殊に機嫌よく、手づから茶を點れて、

『藤兵衛や今日はマア目出度い日だから店も暇ではあり、ユツクリ話すが好いよ。』

『ヘエ難有う存じます。』

『早いもので、七三郎がアノ髮結ひの磯吉に唆かされて初めて惡所通ひを覺えてからちやうど今日で一年に成るではないか。』

『ホンにさう御仰られて見れば、若旦那が初めて吉原へ連れて行かれたのが去年の今日で床屋の磯吉がそれを白狀をしたのが、忘れもせぬ正月の十日、アノ晩は私がお迎へに參りまして、エライ惡まれ役になりましたよ。』

『ハヽヽヽヽ、時に藤兵衛や何時かお前に一度きいて見ようと思つて、ツヒ忘れて居たが、アノ晩お前は七三郎が身受けをして道行までしたといふ女を見たのかエ。』

『それがです、アノ晩は初めから苦勞を濟したやうな顏をし

て、店のものとばかり拇合つて居ましたのでウヒその女といふのを見ないで了ひましたが、後でアヽいふことになり、惜しいことをしたと思ひました。』

『その九重といふ女は今何處に何うして居るだらう。』

『悪漢が大勢して連れて行つたと申しますから、大かた山の中かなんぞで散々弄みものにした上、何處かの宿場女郎にでも陷し込んで了つたもので御座いませう。』

『考へて見れば氣の毒なものだ。七三郎はモウその女の事は思つて居ないだらうかのウ。』

『モウ諦めて御出でなさるでせう。』

『何故?』

『如何に對手が思ひ思はれた女でも、鬼のやうな雲助どもに誘拐され、寄つて集つて弄みものにされた上、宿場女郎にまで賣飛ばされたものを、鍋屋の若旦那ともあらうものが、マサカ何時までも思つては居なさりますまい。』

『さうだらうか。氣の故か知らぬが、私の眼には、七三郎が未だ時々何か考へて思案に暮れて居るやうに見えますが……』

『若しさうで御座いましたら、[illegible]の御改心なすつたといふのも怪しいもので御座います。』

『改心はしたと云つても、あれほど苦労をした仲なら時々思ひ出すだらう。』

『時々思出すやうでは、女に未練のある證據、如何に苦労をなすつた仲にもせよ、道中の雲助風情にまで穢されて、オメ〳〵生きながらへて居るやうな女が何うなりませう。』

『若し其女の居所が分つて、伜からお前にそれでも好いから嫁にといふタッテの望みでありましたら……』

『成りません、そんな穢らはしいものを一歩でも此鍋屋の閾の内に入れることは出來ません。憚りながら此藤兵衛の眼の黒い中は、縱令親旦那が御承知でも、そんな疵ものを若旦那に……飛んでもないことで御座います。』

『ハヽヽヽ藤兵衛、私は未だその女を伜の嫁に直してやれといふのではないからそんなにムキになりなさるな。併し、伜が一旦あれほどまでに思込んだ女であれば、此後とも何ういふ事が起らうとも知れぬ。お前は疵もの疵ものと云ひなさるが……

つは一寸不思議に思つたが、その時自分が臺所から持つて來た惣菜の殘りで、さもうまそうにガツ〱と飯を食べて居る七三郎の姿を見ると、もとより生一本のおまつであるから、ア、勿體ない、可愛い子には旅をさせろといふのは玆のことだと譯もなく涙が流れて、何も考へる暇がなかつた。

藤兵衞は一刻も早く七兵衞に安心をさせようといふので、其夜の中に本店へ行つて、主人に會ひ、コッソリと今夜あつた事の一部始終を話す。七兵衞は涙を流して喜び、心の底までも打あけて、尙ほ行末のことなどいろ〱と賴み入るのであつた。藤兵衞はそれから尙ほ七兵衞と明日の手筈まで洩れなく打合せて、其後はおそく家にかへつた。

翌る朝になると、七兵衞は親戚から店の重立つたものまで立會はせ、自分の面前で固く將來を誓はせた上で豫定の如く勘當を宥した。鰯屋の店は急に春が來たやうな賑やかさにかへつた。

その年は事なく暮れて翌れば享保十八年の春となつた。七兵衞は藤兵衞と課合せてそれとなく七三郎の素振りに注意して見るが、旅の辛さは餘ほど身にしみたものと見えて、その後は少しも浮々とした樣子がなく、身を入れて店の仕事を勵る。ちやうど正月の七日の事である。支配人に一寸大旦那の部屋までといふので、藤兵衞が奥に通ると、七兵衞は殊に機嫌よく、手づから茶を點れて、

『藤兵衞や今日はマア目出度い日だから店も暇ではあり、ユツクリ話すが好いよ。』

『ヘエ難有う存じます。』

『早いもので、七三郎がアノ髮結ひの磯吉に唆かされて初めて惡所通ひを覺えてからちやうど今日で一年に成るではないか。』

『ホンにさう御仰られて見れば、若旦那が初めて吉原へ連れて行かれたのが去年の今日で床屋の磯吉がそれを白狀をしたが、忘れもせぬ正月の十日、アノ晩は私がお迎へに參りましてエライ惡まれ役になりましたよ。』

『ハ丶丶丶丶、時に藤兵衞や何時かお前に一度きいて見ようと思つて、ツヒ忘れて居たが、アノ晩お前は七三郎が身受けをして道行までしたといふ女を見たのかエ。』

『それがです、アノ晩は初めから苦蟲を潰したやうな顏をし

て、店のものとばかり掛合つて居ましたので、ツヒその女といふのを見ないで了ひましたが、後でア、いふことになり、惜しいことをしたと思ひました。』

『その九重といふ女は今何處に何うして居るだらう。』

『悪漢が大勢して連れて行つたと申しますから、大かた山の中かなんぞで散々弄みものにした上、何處かの宿場女郎にでも陷込んで了つたもので御座いませう。』

『考へて見れば氣の毒なものだ。七三郎はモウその女の事は思つて居ないだらうかのウ。』

『モウ諦めて御出でなさるでせう。』

『何故？』

『如何に對手が思ひ思はれた女でも、鬼のやうな雲助どもに誘拐され、寄つて集つて弄みものにされた上、宿場女郎にまで賣飛ばされたものを、鍋屋の若旦那ともあらうものが、マサカ何時までも思つては居なさりますまい。』

『さうだらうか。氣の故か知らぬが、私の眼には、七三郎が未だ時々何か考へて思案に暮れて居るやうに見えますが……』

『若しさうで御座いましたなら、飛んでもないことで、若旦那の御改心なすつたといふのも怪しいもので御座います。』

『改心はしたと云つても、あれほど苦勞をした仲なら時々思ひ出すだらう。』

『時々思出すやうでは、女に未練のある證據、如何に苦勞をなすつた仲にもせよ、道中の雲助風情にまで穢されて、オメ／＼生きながらへて居るやうな女が何うなりませう。』

『若し其女の居所が分つて、伜からお前にそれでも好いから嫁にといふタツテの望みでありましたら……』

『成りません、そんな穢らはしいものを一歩でも此鍋屋の閾の内に入れることは出來ません。憚りながら此藤兵衛の眼の黒い中は、縦令親旦那が御承知でも、そんな疵ものを若旦那に……飛んでもないことで御座います。』

『ハヽヽヽ藤兵衛、私は未だその女を伜の嫁に直してやれといふのではないからそんなにムキになりなさるな。併し、伜が一旦あれほどまでに思込んだ女であれば、此後とも何ういふ事が起らうとも知れぬ。お前は疵もの疵ものと云ひなさるが、そ

れは吉原から直ぐ連れて來ても疵ものに違ひないではないか。早い話が町内では小西の嫁も、根を洗つて見れば一度は苦界の勤めをしたものだそうな。それでもアゝして嫁に直して見れば、奉公人の氣受けはよし、内も外も一人で仕切つて世間の評判は大したものだ。それに引かへ圓城の嫁は立派な堅氣の家から來たが、舅姑との折り合も惡く、奉公人にもうとまれて居たたまれず、ツヒ此頃離縁になつたばかりではないか。世帶持ちから云へば疵ものだから惡いとは限らぬ。ツマリは當人の心次第でありませう。』

『それは疵ものでも疵ものが違ひます。吉原は町方でも、又、御屋敷方でも隨分立派な御身分の方が御出入りをなさる場所、日毎夜毎にかはる枕と申しますけれども、其質は誰でもといふ譯には參りませぬ。それに吉原の花魁なれば、隨分好い人の養女にして、立派な家の嫁に直した例も世間にないではありませぬ。親なり、夫なりが得心の上で、一時苦界に身を沈めた女と、人とも鬼とも云ひやうのない惡漢どもの手に攫はれて、散々弄みものにされた上、宿場女郎にまで陷込まれて、人足や馬方の機嫌氣褄を取つたものと一緒になるといふのはチト理窟て、御家の爲を思はぬことになりはしませぬでせうか。』

『成る程、親なり夫なりが得心の上で、一時苦界に身を沈めたといへば、力づくで汚されたのとは違ひます。併し吉原に數ある花魁の中、何ほどの女が、得心づくで賣られて居ませう。根を洗つて見たら、大抵は惡もの共の手にかゝり、騙されたり、脅されたりして泥水に陷り込んだものでありませう。吉原は身分の高い人の遊び場所、宿場女郎は身分の低いものの弄みものといへば云ふものの、疵物といふ段になれば同じことです。此頃流行る忠臣藏の淨瑠璃でも、お輕は勘平に斷りなく祇園に身賣りしようとする。身賣りするなら夫に斷りなしに行つても貞女の途が立つといふに、若し山崎街道で見知らぬ男に汚されたら、自害して申譯けせねばなるまい。考へて見れば女の操ほど分らぬものはない。男に都合のよいことは何んな猥らなことでも疵にならず、男に都合の惡いことは何んなに苦しい譯があつても疵になる。』

『旦那樣！　それは當り前のことではありませぬか。女は男の

持もので御座いますもの……』

『だから私とて何も好んで嫉ものを伜の嫁にもたいといふのではない。たゞ伜の嫁が未だきまらぬにつけ、いろ〳〵餘計なことも氣にかゝるやうな譯サ。お前に恁ういふ話をするのも面目ないが、七八年前家内を亡くした時も、親類から後妻を持てといろ〳〵にすゝめて與れましたが、知つての通りタツタ一人の七三郎が可愛いばつかりに、トウ〳〵不自由を我慢して獨身で暮して來ました。何うか一日も早く伜の身の固まるやう、何でも好いからアレの氣に入るやうな女を探しあてて、初孫の顔でも見られるやうにして下さい。今日はそれを頼んで置かうとお前に來て貰つたのが、話の機みで飛んだ理窟がましいことを云ひました。』

七兵衛は何事かを見透して居るやうに、それとなく藤兵衛に云ひ含めた。併し生一本の藤兵衛には七兵衛の話の意味が何うしても呑込めなかつた。

## （四）下谷一番の花嫁

『時に旦那様、若旦那もア、して毎日帳場に坐つてばかり御出でなすつては氣も詰りますし、モウ大丈夫御改心の様子ですから、一つ御心を試す爲にお金のお使をさせて御覽なすつては如何で御座いませう。』

『ア、それは好い所へ氣が付いて與れた。今日はちやうど日も好いし、淺草の幸龍寺様へ納める筈の御普請金、アレを持たしてやることに致しませう。』

『成るほど淺草といへば御心を試すにはちやうど方角も宜しう御座います。』

其處で藤兵衛は二十五兩包みを二つ縦に封じて、金五十兩、御普請金と書き、本町三丁目餡屋七兵衛といふ判をポンと押して七兵衛に渡す。七兵衛はやがて七三郎を呼び、何喰はぬ顔で淺草への使を命じた。

『お前今日は久しぶりで淺草の幸龍寺様へ御普請金を納めに行つて來て貰ひ度いが……』

『ハイ、承知仕りました。』

『今日は供など連れないで、一人でブラ〳〵行つて來るがよい。天氣も好いし、日柄も好いし、觀音様へもお參りをして御

出でなさい。併し、途中で間違ひのないやうに氣をつけて行きなさい。』

『ハイ、成るたけ早く歸つて參ります。』

七兵衛は愈七三郎を出してやることになると急に不安を感じたが、今更止めることもならず、とつおいつして居る中に、七三郎は仕度をしてサッサと出て行つてしまつた。ちやうど其日の午少し過ぎ、七兵衛がいろ〳〵に案じ煩つて居る所へ、七三郎がイソ〳〵と歸つて來た。

『御父樣、何うも申譯のない事を致しました。』

『何うしたエ。』

『私は何うもお金といふと間違ひを起して濟みません。ちやうど駒形まで參りますと、彼處に喧嘩が御座いまして、ワツワツと黒山のやうな人が雪崩れて參ります。間違ひがあつては成らぬと思ひ、人波を避けやうとして揉まれて居る中に、ウツカリお預りの大金を落して了ひました。何うぞ御勘辨を願ひます。』

何事かと思つて胸をとゞろかした七兵衛は金を落したのだときいて、實はホツと安堵の胸を撫で下した。殊に七三郎が金を落したと云つて直ぐ家へ託言に戻つて來るといふのでス安心して了つた。藤兵衛は未だに氣が付かんで居るが、七兵衛には夙から七三郎のあやしい節々が眼について居た。今日出してやつたらヒヨツト何んな間違ひが起るかも知れぬと私かに案じて居た處へ、七三郎が五十兩の金を落したと云つて顏色をかへて戻つて來たのでホツト安心をした。さうして七三郎の訴る前後の事情については何事も考へる餘地がなかつた。

『それは飛んだことをして呉れたナ。併し別に何處も怪我はしなかつたか。』

『ハイ、何處も痛めは致しません。』

『それなら今日はモウ宜しい。店へ行つて坐つて居なさい。』

跡で七兵衛は藤兵衛を呼んでモウあれならば伜も大丈夫であらうと喜んで居る。八ツ少し過ぎた時分、編屋の店先へ、女中を一人供につれた文金高島田の上品なお嬢さんがやつて來て、何うやら、這入り惡くそうにモヂ〳〵して居たが、やがて供の女中が先に立つて、

『御免下さいまし。』

『入らつしやい。』

『アノ本町三丁目の鯛屋さんといふのは此方様で御座いますか。』

『左様で御座います。』

今度はお嬢さんが代つて前に出た。

『アノ私は下谷黒門町の木屋利右衛門の娘で御座いますが、今日観音様へ御まゐりをいたしまして、南傳馬町から親類へ廻らうと、駒形の通りまで參りますと、道傍で財布を拾ひました。中をあけて見ますと此方様の判の押した御普請金が入つて居ります。ちやうど通りかゝりで御座いますから、一寸御屆けいたします。』



『アー！ 左様で御座いましたか。それは〳〵アノ一寸番頭さん！』

七三郎も藤兵衛も、凡そ店に居るほどのものは皆一齊に娘のうつくしさとあざやかな口のきゝ振りとに見惚れて居た。藤兵衛は取次の小僧に呼ばれて、ハツト氣が付いた位、急いで店先へ出て來て、

『是は〳〵御親切さまに何うも難有う御座いました。今朝若主人が淺草の菩提所へ參ります途中取落しましたものだそうで、確に御受取りいたしました。』

『アノそれでは洵に恐入りましたが、一寸御請取を……』

『ヘイ宜しう御座います。』

藤兵衛はサラ〳〵と受取をかいて渡す。お嬢さんはニツコリ笑つてその受取りを懷中に疊み込む。そのあでやかさ、しとやかさは何うしても三千石以上の旗本のお嬢様としか思はれない。奥の一間から出て來て始終の様子を窺つて居た七兵衛はスツカリ惚込んでしまつて、倅七三郎の嫁はあれより外にないといふことになつてしまつた。番頭の藤兵衛がその熱心な贊成者であつたことはいふまでもない。

『コレ七三郎！』

『ハイ。』

『何うだ今のは？』

『何で御座います。』

『何だではない、今の上品なお嬢さんが眼につかぬか。』

『へー。』

七三郎は道楽などまるで知らぬ男のやうに耳朶まで真赤にしてしまつた。七兵衛も藤兵衛も大きに喜んで、翌日は藤兵衛が溜山の土産物を持つて木屋利右衛門方へ禮に行く。木屋といへばその頃下谷切つての金持ちで、質両替を渡世にして居る。藤兵衛が行つて厚く昨日の禮を述べると、利右衛門も江戸で有名な鍋屋の支配人といふので下へも置かぬ持てなし振り、奥の離座敷に通して茶が出る。菓子が出る。之を御縁に両家は幾久しく親類の交際をといふので、昨日のお嬢さんが出て接待をする。その立居振舞のしとやかで見事なこと、流石に頑固な番頭藤兵衛も、ホト／＼感心して了つた。歸つて七兵衛にその報告をする。七兵衛も大に喜び、段々様子を探つて見ると女は木屋の姉娘で名をおたみといひ、近頃まで仔細あつて母の實家に預けられて居たが、最近に引取られ、妹のお花と一緒に琴三味線茶道生花謡曲仕舞俳諧など女の道は一通り何でも仕込んであるといふので、愈七三郎の心を確めて見ることになつた。

七兵衛の眼には、旅から歸つて来た後の七三郎の様子に、何か深い秘密があるやうに思はれてならなかつた。或は九重といふ女が、何処かに生きて居て、コッソリ消息を通じて居るのではないかとまで疑つて見ることもあつたので、今度の縁談も愈となつたら、七三郎が或は不承知をいふのではないかと、ひとりで心に案じて居た處が案ずるよりは生むが安く、七三郎の返事は思ひの外に素直であつた。『お父さんや、藤兵衛の御目鏡に叶つた女なら』といふ紋切型の挨拶に、話は埒もなくスラスラと運んだ。木屋の方でも、長女が二十三で外聞もきまつて居るので、本町の鍋屋さんならばと直に話が纏まり、二月の中頃には吉日を選んで盛大な婚姻の式が擧げられた。

藤兵衛の鑑識に誤らなかつた。鍋屋さんでは好い嫁を貰ひ當てたとお民の評判は三丁界隈に鳴り渡るほどであつた。七三郎との夫婦仲はいふまでもなく、他の見る眼もうらやましいほどであつた。

程なく享保の江戸に春が来た。花は上野、向島と咲き揃つて、きらびやかな江都の子女は踊るが如く歓楽の夢を追つて都大路を流れた。

## （五）店頭のゆすり

鰯屋の若夫婦が向島の花見に行つて二三日すると、本町の店先へブラリと懐手をしてやつて來た風體の惡い男、

『眞平御免なすつてお吳んなせえ。』

『ヘイ、入らつしやいまし。』

『私は神田小柳町の甲州屋伊兵衛と申すもので御座えやすが、此方樣の御嫁さんに御目にかゝつて少々お話し申度いことがあつて參りやした。』

藤兵衛は此奴何か因縁をつけに來たなと思ふから自身それへ出て、

『私が當家の番頭藤兵衛で……シテ、御用の筋と申しますのは』

『ナニおたみさんに御目にかゝりさへすりや直ぐ分ることなんですよ。實はネ、私は恁う見えても昔、おたみさんと一つ鍋の雜炊をつゝき合つた仲なんで……』

『エ！ 一つ鍋の雜炊とは？』

『そんなにビツクリなさらんでも、此方樣の若旦那は何もかも御承知の上のことで御座えやす。嫁のおたみさんはもと吉原で九重といひ、私が請判をした女で、云はゞ私はおたみさんの義理ある親にも當るもので御座えやすよ。』

甲州屋伊兵衛と呼ぶ男はクルリと尻をまくつて店頭に胡床をかく。大きい聲をするので往來はワイ／＼といふ人だかり、藤兵衛は餘りの事にビツクリ仰天して奥へ飛んで來て七兵衛にそれと告げる。七兵衛には豫て思ひ當る節があるので扨ては伜の七三郎に一ぱい喰はされたかと眞青になつて立すくんだ儘、物をも言はず顫へて居る。

七三郎は扨てこそ露見、之はモウ何うあつても父親七兵衛に合す顏はないと女房のおたみに眼くばせして二人とも足袋はだしの儘で裏木戶から飛出し、辻駕籠に乘つて根岸御行の松の料理店、鶴川樓に走る。鰯屋は上を下への騷動で、誰一人出て兵衛を退拂はうといふものがない。強請としては少々藥が利き過ぎた形だ。

『サア番頭！ 何うして吳れるんだい。奥へ引込んだ儘、何時までも抛つて置きやがつて、恁う見えても此家の嫁が以前吉原へ身賣りをする時の請判だア。請判と云やア親も同然、その口

れを疎外しやがつて勝手に嫁入りさする奴も親御知らずなら、親元へ一言のことわりもなしに身受けする奴もする奴だ。サア親元は親元らしく扱つて貰ひ度えもんだ』

大きい聲で呶鳴つて居るが、家内の騒ぎが餘りにはげしいので、誰も構ふものがない。其處へ群衆を掻き分けて這入つて來たのが當時江戸で名高い南の町奉行、大岡越前守の與力同心、吉澤藤十郎、今町々の自身番を巡廻して本町三丁目までやつて來ると、鰯屋の前が黒山のやうな人だかり、

『コレ／＼退け／＼』

ヒヨイと見ると豫ての注意人物、何かの廉で一度懲しめてやらうと思つて居る女衒の甲州屋伊兵衛であるから『ソレ召捕れ！』といふ聲がかかる。組下のものがバラ／＼と礫のやうにブツ突かつたと思ふと、尻をまくつて大の字形に寢て居た伊兵衛に忽ち縄がかかつてしまつた。

伊兵衛の申立てで事件が漸次に擴大し、鰯屋の倅七三郎、女房おたみ、滿月樓の主人茂兵衛、下谷黒門町の大屋利右衛門、鰯[illegible]、[illegible]、吉原江戸町二丁目若菜屋、主人喜兵衛など關係者が續々白洲に召喚されるに至り、遂には江戸の町々に『鰯屋騒動』と謳はれるほどの大事件となつた。元來甲州屋伊兵衛の[illegible]請といふ極めて小さい事件から始まつて、享保十八年八月三日、一件の落着までに六十三人といふ證人、參考人が白洲に召喚されたのは、大岡越前守一代の裁判中にも多く例がない。

越前守の取調べによつて、新吉原江戸町若菜屋の抱へ九重が下谷黒門町の[illegible]渡世木屋利右衛門の長女といふ觸で、鰯屋方に嫁入したのは、概略次の様な經緯であつた事が判明した。

七三郎は享保十七年一月二十七日の夜、九重を身受けして直に上方に走る積りであつたが、親切な若菜屋の喜兵衛がその道中を氣遣ひ、自分の兄弟分で、任俠心に富んだ根岸御行の松の料理茶屋、滿月樓の主人茂兵衛に宛てて手紙を書き、駕籠で兩人を滿月樓に送り込んだ。滿月樓の茂兵衛は二月から十一月まで七三郎夫婦を近所にある自分の住居に匿つて置いたが、十一月の末に及んで七三郎にその計畫を授け、七兵衛が十分に後悔して居る様子を見込んで、[illegible]を種に、ボロ／＼の衣服を着

せて、夜おそく番頭藤兵衛の住居を訪ね、父親七兵衛へ勘當の詫をさせると同時に、自分の後楯である下谷車門町の金持木屋利右衛門に事情を打あけて九重のおたみに鍋屋の嫁として恥しくない女一通りの教育を頼んだ。利右衛門は豫て茂兵衛の氣象に惚れ込んで、今の普請も自分が一切引うけてしてやつたほどの間柄とて二つ返事でおたみの教育を引受け、自分の娘のお花と一處に諸藝の稽古に通はせた。

一月七日の朝、七三郎は菩提寺の普請金を懐にすると、直に根岸の滿月樓に走つて、茂兵衛にせがみ、おたみを連れて大阪の親類へ走らうとした。茂兵衛は七三郎の持つて居る普請金を見て一計を案じ、それを途中で落したことにして、うまくおたみを鍋屋の嫁にして了つた。處が三月に入つて七三郎夫婦が向島へ花見に行つたかへりを、チラリと見たのが、以前おたみと若菜屋喜兵衛との中に立つて巧みに規則をくゞつた女衒の伊兵衛である。尤も此奴は久しい以前から吉原の若菜屋へ掛合つて、おたみの行方を知らうとして居たが、喜兵衛も失るもの好い加減にあしらつて容易に實を明かさなかつたので彼は内々おたみの行方を探つて、又、おたみを種に一儲けしようとして居る所であつた。彼は金の成る蔓を見出したやうに喜んでソツとおたみの跡をつけた。さうしてそれが江戸中に隠れのない鍋屋の嫁になつて幸福な日を送つて居ることを知り躍上つて喜んだ。

## （六）貧乏を生む親

七兵衛は中仙道を乞食のやうにして江戸にたどり着いたといふ七三郎の姿が餘り小ザッパリとして少しも日に焦けた様子がなく、目に立つほど面やつれもして居ないので、之は怪しい。誰かの仕組んだ芝居であらうと初めから氣が付いて居た。されば九重が何處から何うして現はれて來るか、何れにしてもそれまでに物堅い藤兵衛を説破して置く必要があると、親は親だけに先廻りをして、藤兵衛に餘計な理窟をきかせたりして居るのであつた。併し流石の藤兵衛も幸龍寺普請金の一件にはマンマと一杯喰はされた。それにはおたみが餘りに美しく、しとやかであつた故もある。

一件の暴露した時、七兵衛は事の意外に驚いて呆然自失したものゝ、嫁のおたみが若菜屋の九重であつたといふことに

しも失望しなかつた。併し、七三郎の家出を幸に次男の和三郎を鐚屋の跡に直さうとした分家の和兵衛や、出店の佐兵衛は、親戚一統の意見を纏めて頑強におたみの離縁を主張した。中には茂兵衛と利右衛門の義俠心を惡く推量して、鐚屋の財産を自由にしようといふ陰謀ではあるまいかなど疑ふものさへあつた。

大岡越前守は八月一日に鐚屋の當主七兵衛、倅七三郎、女房おたみ、番頭藤兵衛、出店の主人佐兵衛、芝の分家和兵衛、その他親戚一統を白洲に喚出して、諄々と噛んで含めるやうに申渡された。

『コリヤ一同の者、三月以來其方の嫁たみの儀に就いて段々と取調べ遣はせし處豫て行方不明と相成り居たるたみの弟源次郎の在所も相分り一件も愈落着に近づいた。併し承はれば何か其方の親類ども打寄りたみの素性が氣に入らぬとか申して離縁の沙汰もあるやうに聞及ぶ。併し奉行の見る所では、たみは世にも稀らしい感心な心ざまの女である。鐚屋の嫁として決して恥かしからぬものに思ふ。何うぢや、此越前が口を利いて取らせる。七三郎も望む所なり、茂兵衛利右衛門の計りこ……には申せ、他意あつて致した譯ではない。親類どもに兎や角申さず、たみを元の鞘に納めるやうに致して遣はせ。何うぢや、七兵衛！』

『ハイ。』

『先づ其方から意見を申せ。』

『恐れながら申上げます。若菜屋喜兵衛、滿月樓茂兵衛、木屋利右兵衛門此三人の計ひ却々もちまして容易ならざる義俠心と心得決して疎かには存じませぬ。若し此三人の計らひなくば倅七三郎は道中にて悪漢の手にかゝり、無殘の最期を遂げましたかも知れませぬ。それを思へばかく世間を騒がせました所だけでも、一家の都合ばかり申しては居られませぬ。七兵衛は夙からその心で居りまする。殊に御奉行樣の難有い御言葉もあり、何の異存が御座いませうや。只親戚一統のものへよろしく御理解……を乞』

『ウム、神妙である。番頭藤兵衛、其方の考へを申せ。』

『ヘエ、私はモウ、商賣上の事なれば兎も角悠ういふことはす

べて主人の心任せで、何の意見も御座いませぬ。』
『オヽさうあらう。佐兵衛！　其方は如何思ふ。』
『畏れながら私は親戚一統の意見を纏めて申上げます。鋸屋の家憲と致しましてたみのやうな卑しい素性のものを嫁に致すことは構へて相成らぬことになつて居りまする。たみは元々木屋利右衛門の眞の娘と思込み、一統承知の上で目出度嫁に迎へました處、此度、その詐りが露顯いたしました上は、當主七兵衛如何やうに申上げましても、吾々一統先祖の位牌へ對し、たみをその儘に直すことは出來ませぬ。』
『それも一應尤もな次第である。併し先祖は家を大切と思へばこそ家憲も遺して置いたやうなものぢや、その家を大切に思ふ先祖の心に此越前がなつて考へても、たみはよい嫁ぢやと思ふが何うか。』
『御尤もには御座りまするが、たみのやうに一旦賤しい勤めをいたしましたものを、伜の望みであるからと申して大切な嫁に直しましては、大勢の奉公人の示しが付かず、堅氣の家は一日も家風が相立ちませぬ。』
『今日堅氣を誇る其方の家でも、明日貧苦に迫れば我子を浮川竹の流れに沈めぬものでもない。勝敗は時の運、貧富は世の常ぢや。たみが賤しい勤めを致したといふも、元はと云へば貧故ぢや、富貴に誇ることを知つて、貧苦を憐むことを知らぬは眞の人間ではないぞ。』
『恐れながら申し上げます。貧乏をして我子を苦界に沈めねばならぬといふのも、是れ皆富人の心掛けが悪い故かと存じます。今日私共が申合せて先祖の教を守り、鋸屋の家風を相立て度いと存じますのも、貧の苦しみを恐れるからで御座ります。』
『ホヽウ佐兵衛！　其方は却々辯者ぢやの。併し越前はさやうに心得ぬ。世に貧すりや鈍すると申すことがある。貧すればこそ鈍もする。鈍すればこそ酒も飲む、博奕も打つ、女も買ふ。貧乏を恐れぬほどの愚鈍は是れ皆貧乏の生んだ子ぢや。貧乏の親は未だ外にある。』
『恐れながら、貧乏の生みの親と申しまするは？』
『貧乏の生みの親は佐兵衛其方の店にも、本町の店にも土藏の中に多く買占めてある筈ぢや。』

『私共の店には恐れながら藥種の外に何も買占めたものは御座りませぬ。』

『佐兵衞其方は辯者に似ぬ案外にうつけものぢやの、コリヤ一同の者、藥を買占めるほど無慈悲なことが世にあるか。貧乏の生みの親は病氣ぢや。病氣に罹つては稼ぐにも稼がれぬ。病んで醫藥の給せざるは此世の地獄ぢや。その方どもは堅氣々々と申して毎日此世に地獄を作つて居ることに心が付かぬか。今其方共の眼の前に活きた地獄の證を見せて遣はさう。トクと拜見せよ。コリヤ、それなる源次郎を曳け！』

聲に應じて一人の若者が腰繩のまゝ白洲に引かれた。七兵衞の背後に小さくなつて控へて居たおたみは、若者の姿を見るとワッと白洲に泣き伏した。囚人はおたみの弟で久しく行方不明であつた源次郎であつた。佐兵衞も、和兵衞も顏を見合せて、怪訝の眉を顰めた。この時越前守は豫て次に控へさせて置いた鰯屋本店の手代新助を呼入れさせた。

『鰯屋七兵衞方召使新助！』

『ヘイ』

『面を上げてトクと之なる囚人を見よ。見覺えがあらう』

新助は恐る〳〵面を上げて源次郎の顏を見つめて居たが、

『アッ！ 御奉行樣、之が一昨年お店から大枚の人蔘を騙つた盗賊で御座います。』

『オヽさうあらう。之に就いて憐れな物語りがある。一同よつく承はれ！』

## （七）人蔘の騙取

享保十六年の秋、當時江戸中に聞えた柳橋の大村樸庵といふ漢法醫の玄關へ小ザッパリとした十五ばかりの若い衆がやつて來て、日本橋の鰯屋から來たが病人の事で先生に御目にかゝり度いと申入れた。鰯屋といへば名高い分限者であるから樸庵先生も何んな用事かと直ぐに面會をした。若い衆は主人からの申傳へであるが唯今、商賣のことで少し逆上をした手代を連れて來るから、診察をして癒る見込があるものなら癒してやつて下さいと鮮やかに通ずる。樸庵がその病人は何んな容態かと尋ねると、その手代は昨日お店で悪い奴に人蔘を、五匁五十兩ばかり騙取られ、大枚のお金をアヽ申譯がないと思つて居る處へ、番

頭さんからひどく叱られたので、何うやら逆上の氣味で、人の顔さへ見れ人參五匁代金五十兩と口走つて大きに困らせるとのことである。棋庵はさうか、それはよくあることだ。兎も角も連れて來い。一應診察してやるといふと、若い衆は喜んで辭し去つたが、やがて鰯屋の店頭に現はれて、手前は兩國の大村棋庵から參りましたが手前と同道で人參五匁ほど御持參を願ひたい。代金は品物と引換へに兩國の宅で御拂ひ申しますと申入れた。番頭は有名な棋庵先生の使ひであるから粗略に扱はず、それは御丁寧なことで御座います。直ぐに持參致させませうと手代に人參を持たせて同道させた。若い衆は棋庵の玄關で人參を請取り、只今先生に御目にかけて代を頂いて參りますから、暫くお待ち下さいと待たせて置いて奥に這入り、それでは先刻御願ひして置いた手代を連れて參りましたから宜しく御診察を願ひ度いと申入れ、引かへして手代に向ひ、先生が直に奥で御渡しするそうですからと、手代を案内して先生の部室に押込み、何喰はぬ顔をして玄關に出ると、イキナリ飛下りて雲を霞と逃去つた。此若い衆が今腰縄で白洲に引出されて居るおたみの弟の源次郎である。

おたみの父は源兵衛といつて、實直な大工であつた。腕が達者である上に氣前もよく、仕事に骨惜みをしなかつたので、彼方でも源兵衛、此方でも源兵衛と大層重寶がられ、少し良い作でもあると、源兵衛でなければならぬとまで云はれたものである。似たもの夫婦といふ通り、女房のおあきも至つておとなしい、心ざまの好い女で、源兵衛との間にはおたみ、源次郎の二人の子をまうけ、自分も人仕事などをして子達の成長を樂しみに一家睦じく好い日を送つて居た。

處が源兵衛は享保十一年の夏、或る仕事場で手鉞削りをし居たが、何うした機みか手鉞がそれて足の踵を下へかけてしゝか打切つた。源兵衛はそれから仕事を休んで床に就き、疵はは好い鹽梅に一旦癒つたが、それから餘病が起つて枕も上らず、少しばかりの貯へも藥代だ何だと瞬く間に遣ひ果し、今は女房おあきと娘おたみとの細い内職に待つより外に途はなかつた。處が源兵衛の家主は鎧屋嶋元濱町の近江屋七左衛門と云つて、世にも怖らしい因業た[illegible]い源兵衛が長の患ひで、

一家困り抜いて居ることはよく知り抜いて居ながら、家賃は一ケ月分でも猶豫せぬ。時折近所合壁のものが親切に寄越して呉れる少しばかりの見舞金でも、見付け次第、家賃のかたに遠慮なくブツ奪つて行くといふ鬼とも蛇とも云ひやうのない奴であつた。それも初めの中は近所のものや、仲間のものが氣にして、時々少しづゝでも惠んでくれたからよかつたやうなものの、病氣が永引いて三年四年と經つては忘れるとしもなく忘れて了ふのが人情である。おあきは源次郎を十歳の時から、或る呉服屋の丁稚奉公に出して先づ口を減らし、おたみと二人一生懸命に稼いだけれども、藥禮と家賃とに追はれて、三度の食事も滿足には過されず、親子互に顏を見合せて只泣くより外はなかつた。處が此憐れな家族の困窮に乘じて、おたみの美貌を種に一儲けしようとかゝつたのが、甲州屋伊兵衛といふ悪漢であつた。伊兵衛は豫ておたみの容色に目をつけて居たが、日頃母子のものが口癖のやうに何とぞ五十兩の金子を手に入れて朝鮮人蔘が求め度い、若し朝鮮人蔘さへ手に入つたら源兵衛の病氣も忘れたやうに癒り、昔の躰で貧乏神を追拂ふことも譯はないであらうに、何とも殘念なことであると歎いて居るのを〔聞〕、巧く母子のものを丸め込み、おたみには一年六十五兩の積りで承知をさせ、なほ自分が親となつて吉原に乘込むについていろ〳〵と細かにバツを合せた上、トウ〳〵おたみを江戸町三丁目の若菜屋喜兵衛方に陥込んでしまつた。

姉のおたみが吉原に身賣りしようとして居ることを奉公先で洩れきいた兄弟思ひの源次郎は、身も世もあられぬほどに歎き悲しみ、何でも其人蔘さへ手に入れれば、姉を此ものにせずと〔も〕濟む譯であると一心不亂に思ひつめ、遂に子供ながらも驚くべき詐欺の手段を思立つたのである。

處が源次郎の苦心は全く無駄であつた。源次郎が大枚五十兩に當る人蔘を懐にして一目散に靈岸島の元宿町に駈付けた時には源兵衛はモウ此世のものでなかつた。おたみの身賣りからいろ〳〵の事で心を痛めた源兵衛は急に病が重つて、享保十六年永代橋に引く秋の夜潮の音もなしに此世を去つた。源次郎は父の死骸に取ついて前後不覺に泣き悲しんで居たが、長屋中の騒ぎに紛れて何處ともなく姿をかくして了つた。源兵衛の葬式に形ば

かりの葬送を濟まして三日目の朝、おあきは梁に細紐をかけて縊れ死んで居た。おあきの死は家主が無慈悲に立退きを迫つたからだと傳へられ長屋中の若いものが七左衛門の宅に暴込んで片端から家財道具を打毀した。さうして反對に七左衛門から謝り證文を取つた上、おあきの弔慰金として十兩の金まで出させた。奉行所の調べに連れてこれらの事情がすべて明白となつた。

『何うぢや佐兵衛！　其方は自ら堅氣の町人と誇つて居るが、商賣といふものの裏には斯樣な暗い影もある。たみの苦界に身を沈めたは親のために其方一家の土藏に封じ込んである人蔘の靈藥を得んが爲であつたぞ。此活きた地獄の畫を見ても未だ貧乏は當人の心柄だと申すか。』

『恐入りました。』

『而も御上は飽くまでも公平であるぞよ。私情を以て天下の御法は枉げぬ。此度、源次郎が三年以前七兵衛方より五十兩に當る人蔘を騙取つたことを自首致したによつて、不憫ながら、斯く入牢申付け置いた。』

『段々との御理解よく合點が參りました。只今まで失禮を申上げました罪は何卒御許し下さいますやう。更めてたみを本家の嫁に直しますことに親戚一統何の異存も御座りませぬ。』

越前守の骨折りでおたみは目出度く元の鞘に納まり、○屋も雨降つて地固まることとなつた。七兵衛は直に書面を以て源次郎の赦免を歎願に及んだ。八月三日に六十三人の關係者に對してそれ〳〵申渡しがあつた中に、靈岸島元濱町の質屋渡世近江屋七兵衛が四千兩の財産を缺所に、伊豆の八丈島へ遠島となつたことは、江戸ツ子のヤンヤといふ喝采を博したと同時に、滿都の分限者の膽を寒からしめた。



# 編輯を了へて

◇麦稈帽が――パラソルが――東京驛へ――新橋へ――上野へ――両國へ威勢よく雪崩れ込む、一年の間の衙門で背縮めた連が――それでもお陀佛にはならないで――涼しく歸る人、見送る人の山々。

◇何處へ行く――故郷へ――日本アルプスへ――阿寒湖へ――西伯利へ――亜米利加へ――近くば銀沼か金所へ――それも懐中物と相談づくの上で――九十日の休暇があれば米國の物もお易いこと――跡に取殘された無産階級は夕顔棚の下蔭で――或は公園のベンチにて一服の涼をとる。

◇臺灣でも新高の峯頂は五月まで雪がある、その頂きから見渡した景色は實に雄大で一萬尺内外の峯々が脚下に幾つともなくゴロ〳〵蟠伏しておるさまは壯觀だ。そしてその日月潭の晩涼と來てはそこに南國特有の情調が漂ふて何とも云へやうもない趣がある。

南九州では霧島三千尺の山頂に、幾通りもの温泉が湧出し、それに一瞬の下に櫻島や薩摩富士が指呼されて淡き器給を現出する。

◇四國路や長曾我部の血の匂ひ、この殺風景な豪傑を弔ふべく池田から高知長岡までの山越へは平家の落人の棲家とも思はれるやうな淋しい、そして都びた丘陵が起伏し、谿々の清冽た水は全く輪まで延びるやう。

◇日本アルプスも古いし、飛驒路の旅は今年の夏には昔人れだらう、社同人等は「碎花」氏の紹介の跡を訪ねたいと云ふものもあつた。

◇だが、大部分の同人は有島吉田、水島、中戸川氏等の乘遊した北海道の夏を味はいたいと云つていた、S生はヒマラヤの峯頂、Y生は西伯利バラボーエ湖畔へ行きたいと。しかし、それは單なる希望たけだ、我等はこの修見に諸君を避暑地へ送るべき對策にのみ腐心して居いこと太に慚した。しかし留守後の江戸の晩夏は酷く涼しい。

◇朝がたの「苗賣り」の聲は涼しく、金魚賣りの聲は噴水の淋しさへと續ふ、隅田川月夜の情景はまた江戸名物として、捨てがたい。

◇武者小路氏の新しき村、吉野氏の理想郷、賀川氏の貧民窟それ〳〵異つた方面でその發展を祈つてゐる、その視察も有益なる結果を齎らし得るだらう。

◇そして一葉の水の小島や、八丈、小笠原島などの視察は趣味深いものゝ一つだと思ふ、旭の輝く島の朝ぼらけ、夕陽の沒せんとする孤島の旅愁、それに島々の昔ながらの風俗などは經驗して損はない。

◇その他、探勝に値する十和田湖、洞爺湖、猪苗代湖、阿武隈、北上の河畔、石狩、十勝川の流域等さま〳〵の變つた趣がある――北の國――幾多の不便はあるがそのかはり生活は極く簡單であろう。


改造定價

| 冊數 | 定價 | 郵稅 |
|---|---|---|
| 壹冊 | 八十錢 | 二錢 |
| 半ケ年 | 四圓八十錢 | 不要 |
| 壹ケ年 | 九圓六十錢 | 不要 |

註文の注意

▲御注文は凡て前金に申受く前金切れの時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金不足の時は御拂込を待つて發送す

▲日本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正十年七月四日印刷納本
大正十年七月拾五日發行

本號特價 金壹圓

編輯兼發行人 東京府下中目黑七七〇 横關愛造
印刷人 東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷所 秀英舍

發行所 東京芝區櫻田久保町七 改造社
電話銀座二九五四
振替東京八四〇二